

---

# Is <インフィニット・ストラトス> アナザーストーリー

村人 a

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Is <インフィニット・ストラトス> アナザーストーリー

### 【Nコード】

N4564W

### 【作者名】

村人a

### 【あらすじ】

どうも村人aです。初投稿なので厳しくお願いします。一度でも見ていって下さい。感想は批判バッチこいです。ヒロインsはハーレムor個人はアンケート中あらずじ：少年と少女は昔、一つの約束をする。そして、6年後二人はとある場所で再開し、仲間を作り楽しく平穏に過ごす。

だが、世界の裏は二人を狙い…

ISのもう一つの物語ここに解禁！！  
現在第1部「序章」 『裏編』 です。

## 第0話 「約束」

「おれも強くなる、だからおまえも強くなれ。そして必ず会おう。」

少年は少女にそう言った。これは『約束』少女は『とある出来事』のせいで少年を愛すること以外の欲を失ってしまった。

少年は言葉を続けた。

「その間こいつがおまえを守ってくれる。」

そう少年は言ってペンギンの人形を少女に渡した。少女はうれしかった自分のことを大切に思ってくれてこれをくれたことがそして少女は

「ぷつ。」 笑った

「何だよ！人がせつかく渡してやったのによ！」

少年は顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「いや、違うんだそういう意味で笑ったんじゃないんだ。」

「じゃあどどういう意味なんだよ。」

少年はぷつぷつと小さな声で言った。

プ

トラックの音が鳴り響いたまるで別れを告げる船の汽笛のように

「じゃあ、行ってくる。」

「ああ、行って来い。」

『さよなら』は言わない何故ならまた会えるから

「ああ、そうだ『筭』。」

「なんだ、『一夏』。」

「おれ達の強さの『意味』は？」

屈託のない笑みでそう言った。ああ、なんだそのことかこれの答えは一つしかない一夏に教えてもらった『意味』。

「『罪を憎んで人を憎まず（だ。）（だろ。）』」

この言葉と一夏に何度も救われた『あの人』も許せた。

そうして少年と少女は別れた。

…だがまさか6年後、『あんな場所』で再会するとは両方夢にも思わなかつたが…。

## 第0話 「約束」(後書き)

いかがでしょうか？ 意見、感想などあれば  
よろしく願います。 m ( - - ) m

## 第1話 クラスメイトは全員女子！？（前書き）

組合長さん感想ありがとうございます。今回はオリ設定をちらほら  
いれています。 9月6日 各所、変更有り

## 第1話 クラスメイトは全員女子！？

全員そろってますね〜ではSHRをはじめますよ〜。  
「ショートホームルーム」

…どうしてこうなった。いきなり何言ってるのこいつと思うかもしれない、普通に先生が挨拶してるだけじゃんと思うかもしれない。では自分以外がこのクラス、いやこの学校が全員『女』という状況ならどうだそして自分がそんなクラスのだ真ん中にいたらどうだろうか好きな人はいいかもしれない、でも俺はそこまで女が好きなわけではない。

「それでは、皆さんこれから一年間よろしくお願いしますね。」

シーーーーー

沈黙&謎のプレシャー、その2つでダブルノックアウト寸前の副担任、名前は『山田真耶』やまだまやという緑の髪で童顔でメガネで巨…ゲフン、ゲフン

山田（以下、山）「で、では自己紹介しましょう 主席番号順で。」

涙声でそう言った。

（誰でもいいこの状況から助けてくれ。）そう思っているのは俺、『織斑一夏』だ。え？何故に今言ったって？気にするな。

そうして俺は希望を持って6年ぶりに再会した幼馴染『篠ノ乃箒』  
今も昔も変わらないポニーテールで剣道をしている娘だ、雰囲気は凜、としていているんなところが成長していた（とくとある部分）に目をむけたら返ってきた視線は『大丈夫だ。一夏なら絶対にいける！』うん、違うんだ箒そういう意味じゃないんだ。



山「・・・くん、織斑一夏君。」

一夏「は、はい！」

山「ご、ごめんね織斑君でもね、今は『あ』から始まって『お』なの自己紹介してくれるかな？」

一夏「いえ、分かりましたからそんなに謝らないでください。」

一夏「えゝ織斑一夏です趣味は剣道です、よろしくお願いします。」  
全員（篤は除く）「……………」

なんだろう篤以外全員『もつとしゃべって！』みたいな雰囲気、篤はうれしそうだけど（何故だ？）

は、殺気！！　そう判断した俺はいつきに防御の姿勢をとりつつ後ろからくるであろう攻撃を避けるために右へ飛んだ。ふうゝ危な、  
「くぺえ！？」

そんな奇声を上げつつ俺は自己分析をしていた攻撃の位置を急激にかえ、その上で俺の防御をやぶるなんて俺が知っている内には『二人』しかないそしてここは『IS学園』女の園で『IS』、だったらその人は・・・

一夏「ち…げえプら？！」　酷い！まだ一言しか言っていないのに！！

「学校では織斑先生と呼べ、この馬鹿者。それになんだ？貴様は自己紹介もろくにできないのか？」

一夏「でも千冬姉！俺はちゃんと・・・」ほう、あれでか。「いえ、すいませんでした。」

このさつきから俺をばんばん叩いている人ちは俺の姉『織斑千冬』すらりとした身長、よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。組んだ手。狼を思わせる鋭い吊り目まさしく完璧な大魔・・・バシン！！

千冬（以下千）「ほう、貴様そんなにも叩かれたいようだな。」  
一夏「いえ、勘弁してください、織斑先生。」

なんでこの人心が読めるの？

山「あ、織斑先生もう会議のほうは。」

千「ああ、山田君。クラスへの挨拶押しつけてすまなかった。」  
え？なんでそんな優しいボイス？

千「諸君、私が織斑千冬だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。逆らってもいいが、私の言うことを聞け。いいな。」

うん。やっぱり魔王だ。だがそんな俺の心とは裏腹に回りは黄色声を上げ始めた。

「キヤー本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「お姉さまのために死ねます。」

千「やれやれどうしてこう私のクラスはいつもこの種のバカが集まってくるんだ？」

ほんとにうつとうしそうですね。千冬姉。

「きやあああああ！千冬お姉さまよ！もっと叱って、罵って！」

「でも時には優しくして〜！」

「そしてつけ上がらないように（ベッドの上でも）躑して！」

よし、最後は聞かなくなつたことにしよう。

千「で、貴様は学習という言葉を知らんのか。」

一夏「いや千冬姉・・・」

バシンッ！！x3

千「織斑先生だ。何度言えば分かる。」

一夏「すいません・・・」

「え？織斑君って、千冬様の弟？」

「じゃあISが動かせるのもそれが原因？」

「いいな～変わってほしいなあ～」

あゝあばれたか。

千「さあ、SHRは終わりださっそく授業を始めるちなみに授業の進め方はプリント通りだ。」

もう完全に鬼教官だね。ドイツに講師に行つて以来こんな感じだな。

一時間目終了と同時に箒に声をかけようと思ったそうしたら、

箒「…ちよつといいか。」

一夏「あ、箒ちょうどよかった。今、話しかけようと思った所だったんだ屋上に行こうぜ。」

そう言つて俺は箒の手をひっぱていた。

箒「うん、あ、その・・・だな、廊下でいい。」

一夏「うん？そうかまあ、お前がいいってんならいいけどさ。」

そついや、箒、顔真つ赤だな熱でもあんのか？

箒「そういえば、一夏、去年、剣道全国大会優勝したそうだなおめでとう。」

一夏「そついう箒こそ去年、優勝したじゃないかおめでとう。」

その時、箒に会おうとしたけど結局、箒が黒い服装の人達にすぐにつれていかれたけどな。

箒「一夏知っていたのか私が、優勝していたのを。」

一夏「そりやそつだ箒のことだもんな、6年ぶりだけど箒つてすぐ分かったぞ、それにリボン、まだつけてくれたんだな、うれしかったぞ。」

箒「一夏その、覚えてくれていてあの、ああ、あり、ありが

キンコーン、キンコーン

やっべ、チャイムだ、急がないと、

一夏「やっべ、箒行くぞ。」

箒「あ、ああ。」

箒少し残念そうだったな。まあ、放課後ゆつくりはなせばいいか。

山「であるからにして、ISのコアは2種類に分けられ、『オリジン・コア』、『ノーマル・コア』と呼ばれています。しかし、『オリジン・コア』別名00（ゼロゼロ）シリーズともいいますね、現在はそのコア『9個』中の『1個』しか残っておらず残りは現在でも行方はわかっていません。はい、ここまでで分からない人はいますか？」

と山田先生は言っているが、ジ　何故に俺をロックオンしている？男だからか？男だからなのか？

山「織斑君は分からないところがあるなら聞いてくださいね、なんせ私先生ですから！」えっへん！と自信満々に言っているが

一夏「すいません、先生、全部覚えています。」

正直に言おう全部覚えてるんだなこれが

山「え、全部？」

一夏「はい、全部です。」

山田先生泣きそうやべ、ものすごく罪悪感がでてきた。俺、悪いことしてないよな。

と、そこで山田先生を助けるために教室で悠然と座っていた千冬姉の援護射撃！！

千「織斑、『オリジン・コア』について説明しろ。30秒だ。」

相も変わらず厳しすぎます。そんなんだから貰い手がないんだよな。

織斑千冬による出席簿シュート！

織斑一夏は1000ダメージ！ 効果は絶大だ！！

千「余計なことは考えなくていい。さっさと説明しろ。」

一夏「了解です。」

ものすごくドスのきいた声で言ってきた。出席簿、全然見えなかった。しかも効果音が「ドゲシャー！！」だぜ、あの人はほんとに人間か？あ、筈が目線で「大丈夫か？」と聞いてくれている。

今、その気持ちありがたい。

一夏「えー『オリジン・コア』はすべてのコアの基盤となり、能力も数段上、更に深層意識が強く、篠ノ之博士曰く、『ISに気に入

れられたら男でも扱える。』とのこと。」

千「よしもういい、座れ。」

はあく〜なんかあった。まったく、千冬姉も横暴だけど『せんせい師匠』も横暴だよな。なんてたつてこれ（参考書）を覚えさせるためにまさか修行場の一番暗い所にいれられて、「明日、早朝にまたくる。それまでに全部覚えろ。」だぜ？しかもできなかったら地獄だし。やつべ、思い出したら笑えてー。」千「貴様、途中から声にでているぞ。」  
はっ！！

千「はあく〜、いいかISはその機動性、攻撃力、制圧力を過去の兵器を遥かに凌ぐ『兵器』だ。実際、君たちも『B・M・B事件』を見て、深く知らずに扱えば事故にあう事を知っただろう。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解できなくても、覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ。」

はい、正論です。

でも一つ言わせてもらうと別に好きでここにきたわけじゃない。まあ、試験会場の前に、飾ってあった、『打鉄』を盛大にすっ転んで触って動かせたのが原因何だろうけど、

まあ、やるしかないか。千冬姉の御面も汚したくない、それに簞との『約束』もあるしな。  
俺は大切な家族や仲間を守る。      あんな両親や『奴ら』とは違ってな。

t o b e c o n t i n u e d

## 第1話 クラスメイトは全員女子！？（後書き）

やばい、切る場所がわからんからだいぶ長くなった。感想、意見お願ひします。

## 第2話 決闘宣言（前書き）

といあえずある程度出来たので投稿。それと組合長さん細かい指摘  
ありがとうございます。



## 第2話 決闘宣言

「ちょっと、よろしくて？」

一夏「ん？」

二時間目の休み時間、地毛の金髪が鮮やかな女性が俺に話しかけてきた。白人特有のブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺をみている。わずかにロールがかった髪はいかにも高貴なオーラをだしている。その女性の雰囲気も『今の女性』という感じがした。

『ISは女性にしか扱えない。』そのせいで、女性はかなり優遇……いや、もはや『女性』偉い』という状態にまでなっている。今じやそれが原因ですれ違った男の人をパシらせたりする。つまりそういう、現代の女子がいた。

「訊いてます？お返事は？」

一夏「あ、ああ。どういう用件だ？」

「まあ！なんですよ、そのお返事？わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるでしょう？」

一夏「……………」

正直、この手の輩は苦手、もとい嫌いだ。

強力な力を使って我が物顔でその力を振りかざす。こういうのを見ると、『とある出来事』を思い出してしまふ。あと、『ですわ。』とか使う人いたんだ。

一夏「悪いな、俺、君がだれか知らないし。」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

へー、セシリア・オルコットというのか。でも、なんというか。

一夏「…笑ったほうが可愛いと思うのにな。」ボソ  
セシリア（以下、セ）「い、いいいいきなり何をおしゃってるんですの!？」

キンコーン、キンコーン

あ、チャイムが鳴った。それにしても、オルコットさん。顔が真っ赤だな。  
何故だ？

セ「と、とにかくまた来ますわ!!」

千「では、授業を始める前に再来週行われるクラス対抗戦の代表者を決める。」

3時間目は千冬姉が教卓に立っている。よっぽど大事なのか山田先生までノートを取ろうとしている。それにしても、クラス対抗戦と代表者ってなんだ？

千「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席、まあ、行ってしまうえばクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。自薦他薦は問わん。一度決まると変更はないからな、いいな。」

ああ、なるほど。でも、俺は面倒そうだからパス・・・

「はい！私は織斑君を推薦します！」

OK、推薦されてしまった。

「私も、それがいいと思います。」 「私もっ！」 「私も！」

やばい！このままじゃ俺になっってしまう！何とかして止めないと！

一夏「まってくれ！このまま決めるのはちょっと・・・」

千「どうしたんだ？織斑、中学の時は剣道の部長をしていただろ。それにアレだ。この対抗戦でカツコよくすれば、夢のハーレムができるぞ。」

爆弾発言投下 みんな俺を一心にみているぞ。何この視線、俺はなにもわるくないぞ。

『一夏がそう思っているなら別にそれはそれで。それに私のことを少しでも思ってくれるなら・・・』ゴニョ、ゴニョ

ええい！俺はどこぞのツンツン頭か、はたまたエロゲの主人公か！と、そんな時、バンッと机を叩いた音が響いた。

セ「待つてください！納得がいきませんわ！」

そう言ったのは、オルコットさんだった。 おお、何か知らんが助かったぞ。

セ「そのような選出は認められません！こんな軽い男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにこのような屈辱を１年間味わえとおしやられるのですか！？実力からいけばこの私が代表になるのは必然。それをその辺の野蛮な極東の猿どもに・・・おい。」 なっなんですか？」

一夏「今の、発言取り消せ。俺をバカにするのは結構だが、自分の国や他人をバカにするのは許さねえ。そんな奴にクラス代表を務め

させらんねえ。だったら俺がやった方がましだ。」

セ「なんですって！？わたくしを侮辱して！いいですわ。『決闘』ですわ！」

一夏「いいぜ。四の五の言うよりそっちの方がいい。」

セ「もし、わざと負けたら小間使い…いえ、奴隷にしますわ！」

一夏「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くなんて失礼なことはいらない。で、俺はどのくらいハンデをつければいいんだ？」

と、俺が言った瞬間。クラスがドツと笑いに包まれた。箒は俺が笑われたことで嫌そうな顔していたので俺は目線で『気にするな。』と送った。

「お、織斑君、それ本気でいつてるの？」

「男が強かったのは昔の話だよ？」

「織斑君は確かにISが使えるけど、それは言いすぎだよ。」

一夏「じゃあ、ハンデはいい。」

セ「ええ、そうでしょう。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのかまようくらいですわ。」

完全にオルコットは俺のこと嘲笑している。

「ねー、織斑君。今からでも遅くないよ？オルコットさんにハンデ付けてもらったら？」

一夏「俺にはそんな物、必要ない。」

「さすがに代表候補生を舐めすぎだよ。それとも知らない？」

確かに俺にはISの戦闘経験が無い。でも、代わりに、生身での戦闘経験と『戦い』ということに関しては、この学園の中で1番であると、自負している。

千「さて、話はまとまったな。それでは来週の月曜日に第3アリーナで行う。各自それぞれ用意するように、以上。」

パン、パンと音ともにこの話は終わった。

放課後、俺はさっそく、帰る用意をしていたら。山田先生が来て「事情が事情なので、織斑君。寮に入っちゃってください。あ、ちなみに一時的とはいえ、女の子と同室です。」と言われ、鍵をもらい、現在その部屋の前に来ている。ていうか、端折り過ぎたな、俺。あと、女の子と同室って問題にならないか？

一夏「えーと、ここが1025室か。」

そう言っつて、鍵を差し込むと、

一夏「あれ、開いてんじゃん。」

っつて、ちょっと待て！ということとはさっき言っていた。「女の子」がいるってことか！？

…とにかく注意して入ろう。

そうして、ドアを開け部屋に入ると。まず、目に入ったのは大きくて高そうなベッドが2つあり、最新の長めな勉強机（デスクットツプって奴か？）その奥には台所がある。おお、なんというか色々凄いぞ。と、思っていたら突然、

「誰かいるのか？」

と、不意にそんな声が聞こえた。なんか、聞いたことある声・・・

まさか！

「ああ、同室になった者か。これから一年間よろしく頼むぞ、こんな恰好ですまないな。シャワーを私は篠ノ之」

一夏「 篇」

シャワー室から出てきたのは、今日再会を果たした幼馴染だった。何というかバスタオル一枚だけで、その姿はものすごくエロいその上、出る所はしっかり出ていてしっかりと引き締まっている。あ、今は髪、括ってないんだな。

篇「……………」

キョトンとした顔の篇。そして俺は鼻の奥からドロツと赤い何かが出てきた。

それに気づいた篇は

篇「きゃあああああああ！！」

と叫びながら、俺の顔面に強力な拳を叩きこんだ、あ、おっぱいの先っちょ、見えてしまった。

篇「って！しまった！大丈夫が一夏！？」

そこで俺の意識は飛んだ。

## 第2話 決闘宣言（後書き）

誰かタイピングを早く打てる方法を教えてくれ。

### 第3話 決闘準備（上）！！（前書き）

初の戦闘シーン、反応が怖い・・・  
それと組合長さん毎度毎度の指摘ありがとうございます！



### 第3話 決闘準備（上）！！

目を覚ますとベッドの上に寝かされ額の上と殴られた部分に何か冷たいものが乗せられていた。

箒「あ、起きたか。一夏。」

と、そこには寝巻浴衣になった、箒がいった。あ、ポニーテールに戻ってる。

箒「さつきはすまなかった。つい、気が動転してしまってたな。」

一夏「いや、こっちこそごめん。あ、俺どれくらい気を失ってたんだ？」

箒「10分弱だ。それにしても一夏、私のパンチを受けてよくこれだけ早く起き上がったな。『約束』どうり強くなったな。」

箒さん、それって一般人が受けたらどうなるんですか。

一夏「そっちこそ『約束』、覚えてくれたんだな。そうだ、箒、2つほど頼みたいことがあるんだけど、いいか。」

箒「ああ、いいぞ。その代わり明日の放課後、打ちあいをしたい。どれくらい強くなったか、見てみたいからな。それで本当に『約束』どおり強くなったか、見てみたいからな。それまで、『ただいま』は無しだ。」

あ、頼みたいことの1つだ。今日は出来なかったけど、オルコットとの試合のためにも剣を握っていないといけないしな。

一夏「そうだな、いいぞ。あとISのことを教えてくらないか。」

第「え！あ、その．．なんだ、私はISのことは．．でも、座学ぐらいなら。というかやはりオルコットとの決闘のことか。本当に大丈夫か代表候補生はISの稼働時間は最低でも300時間はあるぞ。」

うーん。なんというかいまいち凄いかどうか分からん。

第「要はお前は素人の剣士で、代表候補生はある程度訓練された剣士ということだ。」

どうやらその事を察してくれたのか第は自分なりに分かりやすく解説してくれた。

何というかありがたい。え？ていうかヤバいかも知れんぞ。

一夏「なるほど。今がどういう状況なのか分かった。でも、それでも勝ちたいんだ。お願いだ、第座学でもいい、教えてくれ。」

そう、これが今の本心、どんな小さな情報でもいいそれを得て学んで勝ちたい。今のあいつは間違っているそれを分からせるためにもまっすぐな目で第を見た。

第「わ、分かった。私は教えるのが下手だがそれでもいいか？」

一夏「ああ、十分だ。」

それにしてもなんで顔真っ赤なんだ、第？

その後、シャワーの時間やベッドの場所を決めた。あれ、そういえば。

一夏「第そういえばここは個室トイレないんだよな。」

第「ああ、両端に二か所．．あ．．」

そう俺の疑問。ここに男子トイレあんの？

第「……………」

一夏「最悪、それを使うしか…」

第「いゝちゝか」。何を馬鹿なこと言っている。6年も見ない内に  
なんとういうことを、何故男と女のトイレが別々になっていると思  
っている。そもそもだな」

「第さんによる馬鹿（一夏）に常識を問う説教中しばらくおまちく  
ださい。」

「という訳だ分かったな、一夏。」

一夏「はい．．スミマセンデシタ。」

何というか精神的にきた。結構きつい。なんたってさっきのは俺が  
全面的に悪かったからな。

第「そうか。分かったならいい。では、寝るぞ。」

と、いいながら第はペンギンの人形をしっかりと抱きしめながら寝  
ようとしている。ん？もしかして、その人形．．．

一夏「第その人形もしかして…」

そうだ、6年前引越しの時渡したペンギンの人形だ。

第「ふえ！いや、そのだな『ペン太』があったらちゃんと眠れてだ  
から、その．．．」

一夏「ぷっ。」

第「ううう、わ、笑うな〜！」

一夏「違う、違う。そういう意味じゃなくて何とか可愛いかつたからな。」

第「／／／／」

どうしたんだ、顔がリンゴみたいに真っ赤だぞ。熱でもあるんじゃないか？

一夏「じゃあ、寝るか。」

第「うん．．．。」

こうして、初日の夜はふけていった。

3時間目、山田先生は俺たちにISの基礎知識を教えていた。

山「というわけで、ISは宇宙での作業が想定されて作られており、操縦者を特殊なシールドで包んでいます。また、操縦者の生体機能を管理したりもします。例えば操縦者を最も自分を効率よく動かせるように設定します。とくに一番うれしい所はほぼ永久にその若さを保ち続けることができます。あ、これは余談ですけどそれが確認できたのは『第7位』の『マール・デ・フィウ』さんが、急激に若返ったことによって分かったんです。」

キンコーンカーンコーン

山「あつ。えっと、次の時間では空中におけるISの基本制動をやりますからね。」

千「織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる。」

と、休み時間に入った時、千冬姉がその声を掛けてきた。

一夏「へ？」

千「予備機が無い。だから少し待て。学園が専用機を用意するよう  
だ。」

そう言った瞬間、教室が騒然とし、

「せ、専用機！？一年の、この時期で！？」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで……」

「ああ、いいな。私も専用機欲しいな。」

と、いう声が聞こえた。

一夏「ま、マジですか？」

千「ああ、そうだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。」

一夏「分かりました。」

つまり俺は特別待遇だけどモルモットってことかよ。はあ、まあでも全力で利用させてもらうか、専用機なんて世界で68機しかないんだから、それが持てるんだから良すぎだ。

師匠も『利用出来る物は全力で利用しろ。』って言っていたしな。

千「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

山「は、はい！」

こうして、授業が始まった。

今、剣道場では2人の男女が木刀を持ち、袴姿になり佇んでいる。女の方は篠ノ之箒、2刀流で、流派は『篠ノ之流』という、戦国時代から続く実戦向きの古流武術である。男の方は織斑一夏、1刀流で流派は『一文字流』という、対銃撃戦に特化した古流武術である。水道管の水が落ちた音が聞こえた。

瞬間、両者は一気に相手の懐に飛び込んだ。カンツと木刀がぶつかる特有の音が響いた。先に動いたのは箒だ。舞のごとく木刀を回す、その一撃は致命傷とはいかないが連続攻撃が狙える。一夏はそれに反応し体全体を受け流す様に動かしそのまま、箒の手に強力な一撃を出す。だが箒はすぐさま反応しその一撃を木刀で受け流した。だが、勢いに負け片方の木刀は手から落ちてしまう。両者は一度間合いを取るために一定の距離を離れる、お互い長期戦は徳ではないと判断したのか2人は木刀を持ち直す。『次で決める。』お互い口では言わなくとも感覚で理解できた。

勝負は一瞬、一氣に間合いを詰めお互い木刀に全体重を掛け木刀を振るう。箒は縦、一夏は横。そして、そのまま一夏は箒の木刀を折り、風を切りながら木刀を箒の首筋に止める。その瞬間、勝負は決した。

打ちあいを終え、俺は一息ついた。あ、ちなみに今放課後の剣道場な。

一夏「ふう〜にしても危なかったあの回りながらの剣撃、一瞬ヒヤッとしたぜ。」

箒「何を言う私に対して圧倒的ではなかったか。」

一夏「そうか？こつちも色々焦ったけどな。まあ、なんにしても

箒、『お帰り。』

箒「ああ、『ただいま。』」

一夏「あ、そうだ箒。これからしばらくの間、放課後剣道の相手し

てくれないか？」

第「ああ、喜んで。」

何というか笑みが女の子じゃなくて、完全に剣士の笑いだったな。と、そんな話をしていたら周りにいたギャラリー達が口々に喋り始めた。

「す、すごい何が何だか分からないけどすごいよ!」

「織斑君つてもものすごく強かったんだね!」

「すつこつく、カッコイイ!」

「ものすごい新人はっけん!しかも2人も!」

「すごいわ?これはもう?2人とも達人にものすごく近いんじゃないかしら?」

…なんで最後の人全部疑問形何だ?結局その後ギャラリーが詰めかけられ勧誘が来たのでISのことはできなかった。あ、ちなみに第は剣道部に俺は剣道部(仮)ということになった。

T o b e c o n t i n u e d

#### 第4話 決戦準備（下）！！（前書き）

今回はあ、いいなこの話と思ったところを拝借 それと都合上短め  
組合長様いつも指摘、指導ありがとうございます。



#### 第4話 決戦準備（下）！！

一夏、第「「ありがとうございました！」」

IS学園に来てから6日目、俺たちはちょうど打ちあいを終えた後だった。一応ISは座学の応用を第に教えてもらっている。まあ、ある程度掴んだ感じだ。

第「では、私は先に上がらせてもらうぞ。また後でな、一夏。」

一夏「おう、今日もサンキューな。」

第「別にいいんだぞ。そんなにあらたまらなくなたって・・・それに私も一夏と一緒にいる時間が増えるからな。」

一夏「ん？なんか言ったか第？最後の方、聞こえなかったぞ。」

第「いや、なんでもないじょ！？と、とにかく私は上がるぞ。」

一夏「おお。」

たまに第って赤くなるよな。理由をきいても『大丈夫』の一点張りだからな。んー分からん。

と、まあ俺はとりあえず更衣室に行きシャワーを浴び制服に着替えて自室に帰ろうとすると。

一夏「ん？第3アリーナが使用中？だれだろ？」

そう思い俺は興味本位で覗いてみると、そこには夕闇の中にある満月に照らされる蒼碧のIS、満月の光によってより美しさを増しながら舞う金色の髪。その姿はまるで神話のワンシーンを見ている様な光景に一瞬、唾を飲んだ。蒼碧のISから放たれる4つの飛翔体。その飛翔体は踊るかのように宙を舞い、ターゲットを的確に射抜くそれもすべて百発百中。そして最後のターゲットに対し持っていた

長大なライフルで確実に射抜いた。その姿があまりにも幻想的で現実離れでいて余りにも美しい。そしてそれを操っている人の名は、

一夏「セシリア・オルコット…?」

と、小さな声で呟いていたら、

セ「あら、偵察とはあれだけ大口を叩いたのにも関わらず随分と卑怯ですわね。」

あちゃ、どうやら相手は俺のことに気づいたらしい。それにしても  
どんだけ、俺に突っかかりたいんだよ、あいつ。

一夏「いや、そういうつもりじゃ無かったんだが、余りにも美しい  
からついつい出るに出れなくなっちゃって。」

セ「フン どうやら貴方もわたくしの凄さをようやく理解したそ  
うですわね。今なら降参してもよろしくてよ。」

一夏「いや、降参はしないけど、確かにオルコットは凄いのよ。」  
セ「ええ、そうでしょう。そうで…って、ええええ!!」

ん? そんなにも驚くことか?

一夏「だってそうだろ。ていうか前から思ってたことなんだけどさ  
あ、どうしてそんなに国籍や性別、家柄をこだわるんだ。努力して  
いるのはそんなじゃなくって、オルコット自信なのに。」

セ「あ、あなたには関係ありませんわ!」

さっき俺が言った事こそオルコットが間違っていること。それは人  
を差別すること。それになんだかあいつ、自分を守るためというか  
何というか無理して差別しているようにも感じる。あの傲慢な態度

だって：セ「途中から声にでてますわよ！」 何！？しまった！口に出していたか！でも、なんでオルコットの奴顔真つ赤なんだ？女の子は皆そんなもんなのか？

一夏「わ、悪い声に出すつもりは無かったんだけど。あ、じゃあこうしよう。確か俺が負けたら小間使だったよな。だったら俺が勝つたらもう差別をしないこと、なんてたってそっちの方が人生楽しいぜ。」

セ「次はまた突拍子もないことを、まあ、いいでしょう。あなたが万が一、億が一でも勝つたらの話ですけれどね。」

一夏「まあ、俺も負けるつもりは無いけどな。って！やべ、そろそろ食堂が閉まつちまう。じゃあ、また明日な！オルコ……」

セ「セシリア！」

一夏「ん？」

セ「今度からセシリアってよんでくださいませんか。」

一夏「ああ、いいぜその位お安い御用だ。じゃあ、また明日セシリア！」

そう言つて俺は走りながら手を振った。

『守つてあげますよ。』

『僕がいるから大丈夫。』

『まったく、この小娘と来たら。いい御身分ね。』

そんな欲に目が眩んだ大人達の言葉、あんなうすっぺらい言葉はすぐに嘘だと理解できた。自分がどれだけ歯を食いしばり、好きなことも趣味も全部我慢して結果を出しても『オルコット家なら当然。』と鼻で嘲笑され一蹴された。でも彼は違う、私の事を『セシリア』として見てくれる。『自分を守るためというか何というか無理して

差別しているようにも感じる。『そんな言葉を聞いてうれしかった。いつも彼は私を混乱させる発言をしてくる。私は6日間彼を観察していた。分かったことは基本誰にでも優しくけれども自分の意志は必ずつき通す。そして、あの強い瞳。こんな人は初めて、禍々しい欲もなく他者に媚びることも無い。他者に媚びる。それは不意に、セシリアの父を逆連想させた。

（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった。）

名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていたのだろう。幼少の頃からそんな父を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない。』という思いをその幼いながら抱かずにはいられなかった。

逆に母強い人だった。今の社会以前から女でありながら複数の会社すべてを成功を収めた人だった。厳しいけれど、憧れだった。そう、『だった。』両親はもういない。3年前に電車の脱線事故で失ってしまった。一度は陰謀説がささやかれたが、事故は完全に路線の整備不備と会社の適当さがここで出てしまった。車両は全滅だったそう。

手元には莫大な遺産と欲に埋もれた大人たちの目。遺産を守る一貫として受けたISの適正テストでA+が出た。政府から国籍保持のために様々な好条件が出された。両親の遺産を守るために即断した。第3世代IS『ブルー・ティアーズ』の操縦者として日本にやってきたそして、出会った。織斑一夏という理想の男性に。でも、今はまだ・・・明日の試合で決着を決めよう色々なことに…

To be continued

## 第4話 決戦準備（下）！！（後書き）

セシリアの機体見ているとWを思い出す。

## 第5話 クラス代表決定戦！！（前書き）

調子がいいので2話連続投稿

## 第5話 クラス代表決定戦！！

今、俺と箒は第3アリーナのAピットにいる

一夏「なあ、箒。」

箒「なんだ？一夏。」

一夏「俺は出来ることはすべてやったよな。」

箒「ああ、十分すぎるほどにな。」

一夏「じゃあさ、俺、勝てるよな。」

箒「……………サッ（目を逸らす）」

一夏「箒さん、何で目を逸らすんでしょうか。」

箒「し、仕方ないだろ！専用機対量産機だったら、例えお前でも勝率は4割ほどしか無いのだから！！それにまだ、お前の専用機は届いていない、それがもし銃専門だったら…」

一夏「絶対に勝てないな。」

そう今だに俺の専用機は届いていないのである、何か色々ゴタついて到着していない。と思っていたら。

山「織斑君、織斑君！来ました、来ましたよ！織斑君の『専用機』が…！」

千「織斑、すぐに準備しろ。アリーナが使用できる時間は限られている。ぶっつけ本番ものにしろ。」

一夏「分かりました。」

とりあえず、銃専門のISじゃないことを祈ろう。

ピットの搬入口の防壁扉は、重い音を響かせながら開いた。

そこには『白』があつた。

実際には灰色だが俺にはこれ以上ないほど『白』を感じさせられた。

一夏「これが…」

山「はい！これが織斑君の専用IS『白式』です！」

千「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィティングは実戦でやれ。出来なければ負けるだけだ。わかつたか。」

そんな声も聞こえずにただ、ただ俺は白式に『触れた』。理解できる。馴染む。これがなんのためにあるか。分かる。

千「背中を預けるようにそうだ。座る感じでいい。後はシステムが勝手にやってくれる。」

言葉通り体を『白式』に預ける。受け止めるような感覚がしてから装甲が俺の体を包む。機械特有の空気が抜ける音が聞こえるそして、『白式』と繋がる。

A c c e s s

I n J a p a n l a n g u a g e t r a n s l a t i o n .

.

日本語訳完了 確認を取ってください。

戦闘待機状態のISを確認。操縦者セシリア・オルコット。機体『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り。

千「ISのハイパーセンサーは正常に動いているな。一夏、気分はどうだ。いけるか。」



一夏「ああ、大丈夫だ。千冬姉。」  
千「そうか。」

安心したような声これはハイパーセンサーが無かったら気づかなかたな。

箒「一夏。」

箒は不安で心配そうな声で俺の名を呼んだ。

一夏「大丈夫だ。箒、行ってくる。」

箒「そうか。勝って来い！一夏！」

その声はものすごく凜、としていて自信満々の声だった。

セ「あら、逃げずに来ましたのね。」

そう言っているが、どうやらセシリアは来ると分かっていたというような声。

一夏「ああ、約束の事もあるしな。それに御託は要らねえ、戦うぞ。」

セ「そうですか。ではお別れですわね！」

瞬間、ブルー・ティアーズ（以下、BT）のライフル『スターライトmk?』からレーザーが放たれる。一夏はそのまま下に急降下しアリーナの地面の近くで停止した。

セ「なかなかやりますわね。初撃を避けるだなんて。」

ですけれど。とセシリアは付け加えＢＴのスカート部分から４つの飛翔体『ピット』を解き放ちながら宣言する。

セ「さあ、踊りなさい。わたくしセシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」

一夏「わるいな！そんなのに付き合ってる暇ないんだ。」

各ピットからレーザーが放たれるまさしくその光景はレーザーの豪雨しかもその射撃は正確。それによって確実に削られる、ハズだった。だが『白式』はそれらをギリギリですべて避けた。

一夏（ようは、戦いつてのは流れや相手の呼吸、目、動作、間合いそれさえ掴めばなんとかなる。問題は『ファースト・シフト（一次形態移行）』が出来ていないこと、そういえば武器は…）

『白式』の武器コマンドを開くそこには『近接ブレード』と表示されているのが一本だけだった。

一夏（上等！！今まで竹刀だけで様々な場所を切り開いてきたんだ！これ一本で十分だ！）

そう思い『近接ブレード』を『展開』。それによって一夏の手元に片刃で１．６ｍほどある日本刀が『展開』された。

一夏（よし、いける。）

そうして丁度レーザーを放とうとしていたピットに向かい刀をピットの銃口から射線上に置きそのままレーザーごと『叩き斬った』。

セ「なっ！」

一夏（やっぱりな。セシリアの奴は必ず俺の反応から一番遠いところを狙ってきている。）

セシリアの攻撃は少し違うとはいえほぼパターン化している。なら話は簡単。あとはあえてその隙を作りさそってそのまま斬ればいいだけのこと。けれども、

一夏（興奮するな。ただか一機『勝って兎の緒を締めよ。』だ。相手は手負いの狼、油断するな、油断した瞬間取って食われるぞ。）  
そして白い閃光は蒼い雨を確実にかつ慎重に避け雨を消していく。

山「はあゝすごいですね。織斑君、あそこまでオルコットさんの射撃に反応するなんて本当にあれで操縦が2回目なんですか。」  
第「本当に凄い。…カッコイイ。」

二人とも驚愕の声を上げている。第の方はまさしく恋する乙女の声なのだが。

千「ああ、あいつは本当に2回目だ、だがあの大馬鹿者は対人戦の方は豊富だな。」

山「へ？」

千「身内の恥をさらすのであまり言いたくないのだが一夏は中学の頃とか篠ノ之、お前が引越してから大分荒れていてな。いや別にあいつは素行不良というわけでもないんだが、ただあいつは何かと色々な事件に首を突っ込んで竹刀一本で解決してな。」

第「じゃあ、まさか一夏が先に暴力を…」

千「いや、そういう訳ではない全て相手に非があるしなりより先に手をだしているのは相手なんだが、どうもあいつはそういう問題を

自覚が無自覚かわからんがあえて『そっち』の方に持っていこうとしてな。よく言うだろ『練習より実戦の方が実力がつく。』っと。極めつけにあいつは中国マフィアの所まで行ってそこで100人切りをしたんだ。」

やれやれ、と千冬はため息をつく。そして篤たちはさっきとはまた違った驚愕を表した。

試合開始から32分お互いのシールドエネルギーは拮抗、だが戦況は明らかに一夏に傾いていた。

セ（いったいどうなっているんですの！？それに何故直接攻撃を繰り出さないんですの！？）

一夏が攻撃を繰り出さない理由それは『ファースト・シスト』が来ていないことによって今下手にうつて出ればダメージがこちらに大きく帰ってくると判断したからだ。故の時間稼ぎ、そしてもう1つはISを实际使うのはこれが初、ゆえにこいつがどんな奴かみきわめるためにと、そうセシリアが思っている最後のピットが白式の回し蹴りによって完全に大破した。その時一夏は急にこんなことを言い出し始めた。

一夏「オルコット。俺はお前に感謝している。」

セ「な、何なんですの！？急に！」

一夏「もう一度言うぞ、感謝している。俺はこんな楽しい戦い初めてだ。」

瞬間、白式は白い閃光に包まれ機械的な凹凸はきえまるで中世の真っ白い騎士を思わせる姿へと昇華した。

セ「まさか、一次移行！？まさかあなた今まで初期設定だけで戦っていたんですの！？」

一夏はもう一つの変化に気付いた。それは武器の名が『雪片式型』に変わっていることに

一夏（『雪片』？これは千冬姉の武器と同じ名前！）

一夏は『雪片式型』を構えなおす、『雪片式型』はさっきとは違い刀身から青い精錬された光が太刀の形を成している。

距離は300、一夏はそのまま上方にいるセシリアに突撃していく。

ここは、世界のどこか、そんな場所でメカメカしいウサ耳を付けている少女が鼻歌を歌っている。

「Happy Birthday to You」  
「Happy Birthday to You」  
「Happy Birthday dear 白式」  
pppy Birthday to You」

どこか、寂しげにそれでいて楽しそうに歌っていた。

一夏はセシリアの元へ一気に駆け上がっていく。セシリアはその時不敵に笑った。

セ「かかりましたわね。BTのピットは6機あってよ！」

BTのスカートから2つの砲台が現れる。『ミサイル』だ。セシリ

アのジョーカー　それも追尾型の　を発射。『勝った！』あの速度なら避けることはまず不可そう思った。だが、横一線！！

それによりミサイルは2つとも完全に破壊。誰もが一夏の勝ちを見た。

セ（勝ちたい！勝ちたい！わたくしはこの人に勝ちたい！それが出来なくともせめて一矢報いることを！）

このまま惨めにやられるわけには行かないそう思い、放った攻撃は『スターライトmk？』とミサイルの『同時攻撃』だった。

一夏（な！？）

さすがにこのことは一夏も完全に予想外だった。直撃。だが、それでも止まらない。

一夏「うおおおおおおお！！」

それでも止まらない、爆風の中から現れそのまま雄たけびを上げながらセシリアの眼前まで来て、『雪片弐型』を振るう

『シールドエネルギー0！勝者、織斑一夏！』

そして、決着はついた。

T o b e c o n t i n u e d

## 第6話 新たな影（前書き）

誰でもいいから組合長様以外にも感想をください。マジお願いします。

ウサギは寂しいと死んじゃう

## 第6話 新たな影

千「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実戦してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んでみる。」

桜も終わった頃、俺は魔王・織斑先生の授業を受けていた。

千「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ。」

せかされて、意識を集中する。ISは一度フィティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。セシリアは左耳のイヤ カフス。俺は右腕のガントレットだ。

千「集中しろ」

いかん次は叩かれる。そう思い即効で『白式』を展開そして浮遊。同じくセシリアもIS『ブルー・ティアーズ』を展開して浮遊していた。

千「よし、飛べ。」

そういわれて俺とセシリアは飛んだがやはり経験の差というのか上昇速度はセシリアが上である。

千「何をやっている。スペック上では白式が断然上だぞ。」

通信回路からおしかりの声。って言われても、『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で一体どういう状況だよ。と、俺がそんな



風に四苦八苦しているとセシリアがアドバイスをくれた。

セ「“一夏さん”、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ。」

なんというか、かんというか。代表戦が終わった後セシリアの呼び名はいつの間にか“一夏さん”に変わっていた。まあ、親睦が深まったならそれはそれでいいけどさ

一夏「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体が分かんないだよな。なんでこれ浮いてんだ。」

セ「教えて差し上げてもいいですけど最低でも8時間は掛かりますわよ。」

一夏「すみません。俺には無理です。」

セ「そう、残念ですわ。ふふっ」

そうほほ笑むセシリア。初めて会った時のとげとげしさは無くどちらかと言うとむしろ晴れやかな感じになった。うん、こっちの方が可愛い。

それにあの試合以降、セシリアは何かと理由を付けては俺のコーチを買って出てくる。それは非常に感謝しているが、なんでここまで俺に親切にしてくれるんだろう？うーん。分かん。

セ「ちなみにこれでも9段階の機能制限が掛かっているんですよ。元々宇宙空間での稼働を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当然ですわ。」

さすがは優等生。知識面も豊富だ。あ、ちなみに機能制限をすべて解除した状態を『完全復活』って呼ぶらしい。なんかカッコイイな。

ちなみに箒に無理して頼んだことがあるんだがその説明が…

箒『ぐつ、とする感じた。』

一夏『……………』

箒『どんつ、と．．．いうか、感じた．．．』

一夏『……………』

箒『ず、ず、ずが、がん。と、という、かん、か、んじ…』

目に涙を浮かべ声も涙声だったので、すごい罪悪感に駆られ、その場で土下座した。

千「織斑、オルコット急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ。」

セ「了解です。では、一夏さんお先に失礼。」

言って、すぐさま急降下をするセシリア。ものすごい勢いで小さくなりそのまま回転しつつ完全停止を果たした。

一夏「はぁー凄いな。」

千「よし、次！」

そういわれて俺は一気に加速そのまま速度をあげそして．．．大きな音と砂煙とともに地面にキスをした。人はそれを墜落というらしい。

体はISによって守られているが、心はクラスメートの笑い声によってズタボロだ。

千「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。」

一夏「…すみません。」

箒「大丈夫…セ「大丈夫ですか。一夏さん？お怪我は無くて。」

一夏「あ、ああ。大丈夫だけど……」

セ「そう。それは何よりですわ。」

一夏「心配してくれてありがとな。セシリア、箒。」

箒「一夏、気づいて……」

千「おい、馬鹿者ども。イチャツクならあっちでしろ。」

そう言われて真っ赤になる箒とセシリア

千「織斑、武装を展開しろ。それぐらいできるだろ。」

一夏「はい。」

千「よし、やれ。」

言われて右手に『雪片式型』を展開。よしすぐにだせた。

千「まあ、いいだろう。次、オルコット。」

セ「はい。」

そう言つてセシリアは左手に『スターライトmk?』を展開しかも銃器にはすでにマガジンが接続されていて、セシリアが視線を送るだけでセーフティーが外れる。

千「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめろ。横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開出来るようにしろ」

セ「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な

」

千「直せ。いいな。」

セ「、はい。」

千「オルコット。近接用の武装を展開しろ。」

セ「え、あ、はっ、はい。」

心の中で文句を言っていたのだろうか。いきなり、話を振られたことにびっくりして反応が鈍るセシリアだった。

銃器を『収納』<sup>クロス</sup>そして新たに近接用の武装を展開。しかし、手に光は中々集まらず

千「まだか？」

セ「すぐです。 ああ、もう！<インターセプター>！」

武器の名前をやけくそに叫ぶ。このやり方実は初心者がやるやり方だ。

千「…何秒掛っている。 お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

セ「実戦では近接は間合いに…千「ほう、初心者との戦いで簡単に懷を許したのか？」…うつ」

その様子を何気に見ているとセシリアはキツと睨んできた。刹那、送られてくるプライベート・チャンネル

セ「あなたのせいですわ！」

そりゃ『雪片式型』しか武装しかないからな。

セ「あ、あなたがわたくしに飛び込んでくるから…」

えーでもそこでミサイル打ち込んできたじゃん

『せ、責任をとっていただきますわ！／／／』

何の責任だよ。

千「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グランドの穴を片付けろそれと、篠ノ之手伝うなよ。」

…わかったよ。一人でやれって言うんだろ。まあ、実際力仕事は男

がやるべきだ。女に肉体労働させるようでは、男が廃るというものだ。ていうか、まあ自業自得だしな。

「ふーん、ここがそうなんだ・・・」

夜、IS学園に一人の小柄で黄色のリボンで茶色に近い黒色の髪を括りツインテールにした少女が大きなボストンバックを持ち正門の前に立っていた。少女の第一印象は『活発的』悪く言えば『頭使え、馬鹿』である。

「ん？今誰か知らないけど私の事馬鹿にした気がする。」

まあ、いつか。と適当な調子で言いながらポケットにクシャクシャにした案内紙とは思えないくらい分厚い紙を広げ上下左右しながら

「えーと受付は…っと。」

と呟き、もう一度上下左右に振り回す。応答なし、当たり前である。ちよつとその光景が子猫みたいでかわいい。少女は「まあ、その辺の奴らをとっ捕まえて、聞けばいいか。」と思い案内紙を適当にポケットに突っ込む。

少女は日本人に似ているがどことなく似ているが違う。その鋭角で艶やかな感じの瞳は、中国人のそれだった。

まあ、そんな感じで敷地内をぶらぶら歩きながら人影を探す。でも、見つからない。こんな時間に人がたくさん移動していたら逆に問題であるが。

とにかく少女は歩いて探すのが飽きてきたので、

（もう、飛んじゃおっかな〜）

と、思ったがすぐさま却下。それをやったら広辞苑3冊分の規定条にいちいち目を通してながらサインしないといけないからだ。そっちの方が面倒だ。それにその事に関していつも偉そうにしている上官達が泣きながらそれだけはまじ勘弁！と泣いて懇願している姿を思い出したので少しスッキリした。少女はとりあえず何の理由もないのに偉そうにしている人間（とくに男）が大嫌いだ。

でも『アイツ』だけは違ったな。『アイツ』元氣かな。まあ、元氣か。それに元氣じゃ無いなら私が元氣づけたりゴニョゴニョ．．．とそんなことを思っている

「いや…いう…で…じゃ…らな。」

ふと声が聞こえる。あ、ちょうどいいや。とそう思いながら少女はその人に話しかけようとすると。

「いやいや、穴埋め結局手伝ってくれたんだからやっぱお礼しないと。」

不意を突かれた。件の『アイツ』だ。予期しなかった再会に少女は歡喜する。

あたしって分かるかな？まあ、分からなくなったらなつたでそれだけ私が美しくなってるってことよね。

超が付くほどのポジティブ精神ここまでポジティブだといろんな意味で称賛に値する。

まあとにかくアイツに声を掛けよう。そう思い『アイツ』の名を呼ぶ。

「いち」

わ、わわ、ちよつと声が裏がえちゃった。は、は、恥ずかしい」

「いや本当にそんなのはいいんだ。私が好きでやったことだしな。」

「ええ〜でもよ〜」

「ほらこの話は終わりだ、行くぞ。」

何あの光景？ 何あの女の子？ なんでアイツと仲良く話してんのよ？

さっきまでの乙女心は消失。代わりに血管マークと苛立ちと黒龍のオーラが出てきた。

その姿を見たモブjが後に語る『あれはもう形容しがたい表情だった。』と。

T o b e c o n t i n u e d

## 第7話 転校生はセカンド幼馴染（前書き）

すまない。昨日はすこし体がだるくてこうしんが遅れた。  
今回は鈴が活躍



## 第7話 転校生はセカンド幼馴染

ふっ。やっちゃったぜ。

「というわけで、織斑君1年1組のクラス代表決定おめでとう！」  
「「「おめでとう！！」！」

皆がそう言ったと同時にクラッカーの音が食堂の中でこだまする。  
その音がまるで俺に『もう、あきらめな』と言われている様な感じだ。

ちなみに今の時間は夕食後の自由時間、一組のメンバー全員そろっている。

各自飲み物を手に騒ぎまくっている。え？俺はものすごいブルーだ。なんだよ『織斑一夏クラス代表就任パーティー』って俺のことなのに全然うれしくない。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて。」

「ほんとほんと」

うんさつきから相槌打っている君、たしか2組だよね。ていうか軽く数えてみたけど50人以上いたぞ。なんでクラスの人数を超えているんだよ。

第「人気者だな、一夏」

一夏「…本当にそう思うか？」

そう聞くと第は何度も縦に首を振った。駄目だ、本気でそう思って

る。

「はいはい、新聞部です。話題の新人生、織斑一夏君にインタビューをしに来ました〜!」

周りは一斉に盛り上がる、俺は一気に盛り下がる。

「あ、私は2年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長をやってます。はいこれ名刺」

黛薫子（以下黛）「ではではぜひ織斑君！クラス代表になった感想をどうぞ。」

勢いよく俺の前に来る黛先輩、ていうか近い！ものすごく良い匂いがだめだ、煩惱退散!!

一夏「まあ、1組の皆に恥かせないように頑張ります。」

黛「お、中々いいコメントね〜これはねつ造のし甲斐がある。」

ちよつと待てい。今ねつ造って言ったよね確実に言ったよね

黛「ああ、オルコットちゃん、ツーショット取るからこっち来て。」

セ「え?」

黛「注目の専用機持ちだからね。あ、握手してくれるといいかも。」

セ「そ、そうですか…そう、ですわよね。」

何この『チャンス到来、ただし安く見られないように気を付けなくては』という雰囲気なんのチャンスだ?

黛「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は?」

一夏「え？えつと…40？」

黛「ぶー、74.5でしたー。」

なんだそりゃ。その直後黛先輩はデジカメのシャッターを切ったが、

一夏「何でほとんどの奴が入ってるんだ！？」

恐るべき行動力に俺、戦々恐々。うわ、箒以外全員入ってる。

セ「あ、あなたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはするもんね」

「クラスの思い出になるし」

セ「うぐっ」

何だ抜け駆けって？

まあとりあえずそんな属に言う『深夜のテンション』って奴でみんな大いに盛り上がって、自室に帰ったのが夜10時だった。

一夏「ふー疲れた。」

箒「お疲れ様、一夏。」

そう言うつですでに寝巻浴衣になった箒は俺に緑茶を出してくれた。にしても箒その心使いは非常にありがたいが何故俺だけにしかしないんだ。

とりあえず俺は緑茶飲んだので眠りに付くことにする。

一夏「ありがとな、箒。とりあえずまあお休み。」

箒「ああ、お休み。」

その日の夢は何故か昔のそれも中学のことを思い出した。

「織斑君、もうすぐクラス代表戦だね。」

今朝、クラスメートの一人が俺にそう話しかけてきた。

一夏「ああ、俺は正直結構楽しみにしてるんだよね」  
「やっぱり織斑君も男の子だね」

そう今回の戦いはセシリア以来の戦い他の人がどんな戦いをするか楽しみ。一番楽しみにしているのが4組の専用機持ち試合だけだな。

「そういえば2組のクラス代表変わったんだって。」  
一夏「へ 誰とだ？」  
「転校生。なんでも中国の代表候補生そうよ。」

中国か中国と言えばアイツを思い出すな。  
代表候補生といえば。

セ「あら、今更ながらわたくしのこと危ぶんでの転校かしら。」

呼ばれてとびでてセシリアさん登場。女の子って、どうしてこう噂話が好きなのかな。

一夏「そいつってどんな奴なのか強いのかな。」  
「今のところ専用機持ちはうちと4組だけだから余裕だよ。」

とそんな話をしていると、突然

「その情報古いよ。」

ものすごく懐かしくなんだか活発てきな感じの声、そのまま声の主は言葉を続ける。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単に勝たせないんだから。」

腕と足を組み片膝を立ててドアに背もたれしながら佇む彼女

一夏「鈴…?」

そして俺にとある言葉が頭上から降臨した。今、そう今言わないときつと後悔するそう思い俺はゆっくりと立ち上がりとある言葉を嚙む。

そして、少女いや、鈴はそれにきづいてゆっくりとほほ笑む。そのまま俺は全てのことを無視し言葉を言う。今すぐ言う。

「鈴．．．何カツコつけてんだ？スゲー痛々しいぞ。」

『突っ込み』というとある言葉を

鈴「え？そっち！？今までの地の文や演出は何だったの！？てゆーかこういう時は『お前がいなくてずっと寂しかった。もう、離さない。キリッ』とかでしょうが！というか何だったのその降臨とかとある言葉とか、これじゃあ本当に私が痛い人じゃないのよ

！！」

一夏「まあ、その辺のことは置いて。」

鈴「投げやがった！！こいつおもいっきり投げやがった！！」

というか地の文を読むな地の文を。あ、ちなみに今会話しているこ  
いつは『ファン・リンイン鳳鈴音』っていう幼馴染だ。

鈴「っていつか何よ？」

一夏「いや、後ろ。」

鈴「は？」

ジト目のまま鈴は後ろを見ると…  
спан！

千「もうSHRの時間ださつさと戻れ馬鹿物」

鈴「ち、千冬さん…。」

こいつ何やら千冬姉のことが苦手なんだよな。何でだろ。

鈴「またあとでくるからね！逃げないでよ一夏！」

千「さつさと戻れ」

鈴「は、はい！」

そう言っつて鈴は教室に戻っていた。

セ「……………」

セシリアはノートにペンを走らせている。だがそこに書いてあるのはなんの意味も成さない線を作っている。

セ（何なんですの？あの人は！）

セシリアは今非常に焦っている。なぜなら新たな敵しかも箒より強力な恋のライバルが出現の可能性大。しかも自分のアドバンテージを持っている上にあんなにも親しそうにしている。正直箒の方は何とかなると踏んでいた（だって訓練とか邪魔しないし）でも次の相手は積極的に来そうな可能性大である。なにか大きなそうあの2人を付き離すような何かを

千「オルコット」

セ「そう例えばデートに誘う、いえもつと効果的なおう・・・」

バシ　　ン！！！

とりあえずものすごい問題発言を言いそうだったので肅清した。

かくいう箒もポケ　　つとしていた。

箒（いいなあ、一夏と楽しそうに会話して・・・）

正直言つて箒は『とある出来事』によって欲を無くし人間というもののが『苦手』になった箒には嫉妬などの負の感情もない、なぜなら『いじめ』にあいそれによって色々と悟った。一夏はそのことから救ってくれたから大好き、それ以外の事は言うほど関心がない（剣道も一夏のことや自分を見極めるために続けた。）でもだからと言って羨ましいと思わないわけでもない、気が付いたらノートに一夏、一夏etc・・・と約十ページくらい書いていた。

千「篠ノ之、答えは？」

第「…3ルート5です。」

…これで聞いていたのでビックリである。

現在俺は食堂に第、セシリアと一緒に来ているとそこには…

鈴「待っていたわよ、一夏！」

といってラーメンを持って鈴が立っていた。ちなみに俺と第は日替わり定食、セシリアは洋食のランチだ。

一夏「まあとりあえずどいてくれ。食券だせないし、普通に通行の邪魔だぞ。」

鈴「う、うるさいわね。わかってるわよ」

一夏「伸びるから、早く座ろうぜ。」

鈴「うう、うるさい！わかってるわよ。大体、アンタが早く来ないからでしょ！」

いや、別に約束してないし。何時くるか俺の判断だろ。

一夏「それにしても久しぶりだな、鈴。1年くらいだけど、元気してたか？」

鈴「元気にしたわよ。あんたこそ少しは病氣位ひきなさいよ。」

一夏「はは、なんだよそれ。」

俺は鈴と久しぶりの再会とあって色々と聞きたいことがある俺が鈴と談笑していると…

セ「一夏さん、そろそろその人との関係を教えて下さいませんか？」



箒「一夏、私も気になる。」

おお、箒が俺や千冬姉、束さん、師匠以外にここまで怖がらずに興味を持ったのは珍しい。箒、重度の『人苦手』だもんな。

一夏「ああこいつは幼馴染だ。箒が引越したのは小4の終わりだろ？で鈴が転校してきたのは小5の頭。で、こいつが国に帰ったのは中2の終わりぐらいだ。そっぴや鈴、お前面識無かったよな。こいつが箒だ、小学校からの幼馴染で剣道の同門だ。」

鈴「ふうん、そうなんだ。初めまして、これからよろしくね。」  
箒「あ、ああ。よ、よろしく。」

なんだ2人の後ろから幻影が見えるぞ？

ちなみに鈴は伝説級の東洋龍、箒はブルブル震えている子犬だった。

セ「ンンン！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音さん？」

鈴「は？誰あんた？」

セ「な！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ。ご存じないんですの！？」

鈴「あ、ごめん私興味無いし。」

セ「な、な、なっ……！！」

鈴「うん。どうせ戦ったら私が勝つし。」

そうなんだよな。こいつって素で自分の方が強いと思っているし。まあ、そのせいで虐められたりもしたけどな。

セ「言ってくれますわね……」

沸点が限界に近いセシリア、そんなことを気にせずラーメンを啜る

鈴。

鈴「一夏、アンタ代表になったんだって。」

一夏「お、おう成り行きでな。」

鈴「ふん。」

鈴はそのままどんぶりを持ち上げ一気にスープを飲み干す。こいつはレンゲとかそういうのは『女々しいから嫌。』らしい。お前女だろ。

鈴「あ、あのさあ、ISの操縦、私が見て上げましょうか？」

一夏「そりゃ、助か

俺が言葉を続けようとする。そしたらいきなり大きな音を立てテールブルを叩くセシリア。そのまま勢いよく鈴に近づく。

セ「あなた2組でしょう？敵の施しは受けませんわ！」

鈴「私は一夏に言ってるの。関係無い人は引っ込んでてよ。」

セ「1組の代表ですから、1組のものが教えるのが当然ですわ。おなたこそ、後から来て図々しい

鈴「後からじゃないけど。あたしのほうが付き合い長いけど。家で食事もしていたし。」

セ「な、どういうことですか！！一夏さん！」

一夏「ああ、それは鈴の家は中華料理店だった。俺も千冬姉がISの現役操縦者の時は料理は一人分だけ作っていた、だったら作る気も萎える。それで鈴の中華料理店だ。一人分の作るよりここで食べた方が安いからな。」

セ「そうでしたのお店なら不自然なことはありませんわ。」

なんでセシリアと箒はそんな安心した顔なんだ。

一夏「そういえば鈴、親父さん元気にしてるか。また店開くのか？」  
鈴「あ、、、、うん．．元氣．．．だと思っ。」

鈴の答えに歯切れが無い。おかしい。

一夏「鈴。何かあったのか。」

鈴「うんうん！何でもない。それよりもさ、放課後どっか遊びに行かない久々だから色んなところ見てみたいからさ。」

セ「おあいにくですが一夏さんは『わたくし』とISの訓練がありますわ。放課後は埋まっていますわ。」

そんなセシリアの声を聞き鈴は途端に不機嫌な顔をした。そしてそのままラーメンの皿を持ち立ち上がりこう言い出した。

鈴「じゃあ、それが終わったら行くからね。空けといてよ。一夏！」  
一夏「おう。」

言われたのでつい反応して返してしまった。

鈴「とっ、言う訳で部屋変わってよ。」  
第「いや、その、え？」

ああ、いきなりすまない何でこんな話になっているかと言うと、訓練（という名のセシリアの攻撃）が終わり俺が自室に戻っていると部屋に鈴がやってきて『な・ん・でほかの人の荷物があるのよ！』という話になり事情説明すると『じゃあ幼馴染ならいいわけね。』と鈴が言い出し丁度他の用事が終わり戻ってきた第に詰めかけているのが今の状況。

鈴「いやあ、篠ノ之さん男と同室なんて嫌でしょ？その辺あたしは平気だし、変わってあげようと思っただけ。」

第「い、いやそういうわけじゃあ・・・。」

鈴「じゃあ、どういう訳よ！ちなみに私は幼馴染だから問題ないわよ。」

第「じゃ、じゃあ聞くが寮長の許可はとったのか？」

鈴「……。」

鈴沈黙

鈴「な、なら許可をもらえば・・・。」

第「ちなみに相手は千冬さんだぞ。」

鈴「……。」

鈴再度沈黙

鈴「じゃ、じゃあしょうがないわね。今回はあきらめるわ。」

鈴よカッコつけるのはいいが生まれたての小鹿のごとく足が震えているぞ。

鈴「話は変わって…一夏…昔した約束のこと覚えてる…？」

一夏「約束？ああ！あれか！鈴が料理出来るようになったら毎日豚を食べさせたくれるって奴だろ。」

なんかいつてたな…それにしても鈴何もじもじしているんだ？トイシカ？

あと第がものすごく悲しい顔している何で？

鈴「そうよ！それ！…でさあ、返事は…？」

一夏「は？返事？どういう意味だ？これって『おごってくれる』て事じゃないのか？」

そう俺が言った瞬間、鈴から張り手が飛んできたのでその振って来る手を掴んだ。

一夏「い、いきなり…鈴「最つつつ低！女の子との約束の意味もちやんと理解してないだなんて、男の風上にも置けない奴！豆腐の角に頭ぶつけて死ね！！！」

一夏「はあ？なんでそこまで言われなきゃいけないんだよ。じゃあ、意味ってなんなんだよ意味って。」

鈴「そ…それは…その…ああ、もう！だったらこうしましょう。今度のクラス代表戦負けした方がなんでも一つ言うことを聞かせてもらうんだから！」

一夏「おう良いぜ。俺が勝ったら約束の意味教えてもらうからな。」

鈴「ふん、せいぜい首を洗って待ってなさいよ。」

そう言いながら鈴はドアを勢いよく閉めた。

ん？なんだか後ろからものすごく非難の視線が…？

第「一夏、『味噌汁』。」

一夏「はあ？」

第「だから、『味噌汁』。」

一夏「????????」

第は何がいたいんだ？さっきから味噌汁って。

第「はあ」

第「一夏のバカ、唐変朴、破廉恥」ボソ

一夏「いや、なにに怒ってるんだ第？」

ていうかなんで俺が唐変朴ではれ…篇「…エツチな本…」何故  
それを!?

ともかく今日は寝よう

## 第8話 クラス対抗戦！！（前書き）

感想くれた人が2人目来たーーーー！！

## 第8話 クラス対抗戦！！

試合当日 第2アリーナ第1試合対戦者達は一夏と鈴だ。

噂の新生同士との戦いとあってアリーナは全員満席。それどころか通路にまで来てみる人でアリーナは人で埋め尽くされていた。余談だがその座席のチケットを高値で売りはらおうとした生徒もいたそうだが千冬さんに粛清されたそうだ。

一夏（そんなこと気にしている場合じゃないか）

と一夏はモニターに映っている第3世代型IS『甲龍』<sup>シエンロン</sup>を身にまとった鈴が鎮座している。『甲龍』はBTと同様肩にある非固定浮遊部位<sup>ニット</sup>が特徴さらに手に持っている青竜刀と言うには余りにも巨大な刀。もはやこれは一種の棍棒かもしれない。

一夏（セシリア曰く中国の第3世代は燃料の安否：つまり実戦向きで奴だな。）

まあ、そうする理由は日本に対して『我々はお前らとすぐに戦う準備ができています。』という政治的、感情的な思想も入ってそう言う仕様らしい。

『それでは、両者既定の位置についてください。』

そのアナウンスによって一夏と鈴は空を飛ぶ。一夏もセシリアとの訓練で基本的な操作方法を学んだ。

鈴「一夏、謝るなら今のうちよ、今なら手加減…」



一夏「なら断然やる気出てきたそれは師匠の流儀に反する。」

鈴「ふん。言っと、思った。じゃあ、全力で叩きつぶしてあげる。」

そんな牽制を続けていると、

『それでは両者試合開始。』

瞬間、一夏と鈴は一気に相手に向かって弾丸のごとく飛ぶ。相手に自分の間合いに入ったところで先に反応できたのは一夏だ、剣を上段切りの構えを取り一気に振り下ろす。少し遅れ鈴は青竜刀で受け止める。

鈴「へーやるじゃない。まさか私に初撃を食らわせようとするなんてさ。」

一夏「まったく代表候補生というのはどうしてこうおしゃべりなんだ。そんなことばかり言っていると足元すくわれっつぞ!!」

一夏はそのまま鈴に蹴りを加える。鈴は体制がぐら付くけれども前方から来る一夏に対し鈴は青竜刀を勢いよく回しそのまま高速回転による緊急防御。だがそれに対し一夏は一瞬の間を見て青竜刀の隙間に剣で突きを加えるそのまま鈴は吹き飛ぶ。だが、一夏も急にはじけ飛ぶ一夏は数秒理解でき無かった。

一夏（ISの特殊装備!?!）

鈴「足元すくわれたのはどっちかしら?」

鈴は確かにダメージをくらったがそれもここまでと言わんばかりの凶暴な笑みを見せた。

箒「なんだあれは？」

箒はいきなり吹き飛んだ一夏を見て驚愕していた。  
そして箒の疑問に答えたのはセシリアだ。

セ「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体をして砲弾化して撃ち出す」

箒は最後まで話を聞いていなかった。一夏がやられている所を見ていると心が痛む。けれども

箒（大丈夫だ。一夏はどんな状況でも決してあきらめない決して負けない。）

もはや願いというよりもこれは確信に近かった。

鈴（ああ、もうどうなってんのよ！！）

鈴は非常に焦っていた自分の切り札の一枚でもある『衝撃砲』が4発目以降まったく当たらないそれどころか一夏は着実に上方にいる自分に近づいている。

一夏（確かに見えない砲撃つてのは厄介だ。だがなあ、攻略法はある！！）

攻略法、それは鈴の『目』だ。確かに鈴の『衝撃砲』は見えないだがそれだけ『衝撃砲』はいつも4発の間に見ているとどうも一定の

間隔があるそこで気づいたのだ、これは一端相手をロックしないと発射できないとならば簡単、相手が何処に撃つか『見ないと』いけないゆえに『目』を見るのだ。  
ちなみに現状の鈴の心境というと…

鈴（う、うわゝそんな真剣な顔で私の顔を追いかけるなゝ！？）

絶賛乙女ゴゴロを発動中であつた。…まあ、これが原因で腕が鈍っていないと言つたら嘘になる。  
と、そんなことを思っている

一夏「ここで、決める！！」

一夏はそう叫びながら一撃必殺（一文字流『岩石切り』）を放つ。

鈴（し、しまった！この距離じゃ間に…）

だが、一夏と鈴の間に上から桃色の強力なビームが放たれた。…アリーナのバリアーを突き破って…

そして空から黒色のISが巨大な手を構えながら降り立つ。その顔は不規則に赤い丸のバイザーが付き首が無い、さらに大きさは2m強の大きさで今時珍しい『全身装甲<sup>フル・スキン</sup>』。特に目立つのがそのあまりにも巨大な両腕…いちやあ悪いがゴリラみたい。

一夏「なんだ。一体何がおきた！？」

白式 警告！所属不明のISと断定。ロックされています。

アリーナのバリアーは若干ISに劣るがそれでも一撃で破るには『それだけ強力な攻撃』をしなければならぬ。つまり相手はそれだ

けの能力を持っているということになる。

鈴『一夏！試合は中止、早くピットに戻って！』

一夏「鈴、お前はどうするんだよ！？」

一夏はいまだにプライベートチャンネルをつかえないゆえにオープンチャンネルを使う。

鈴「私がアイツを…」

そういつている間謎のIS（以下、『ゴーレム？』と総称）は鈴に手を携え強力なビーム攻撃を放つそれに気づいた一夏は一気に加速し鈴を両手…いわゆるお姫様だっこ…で持ち上げて回避した。

一夏「この攻撃、セシリアのBT以上の破壊力だ…」

これに、什么的確な射撃能力があったら…と考えると背筋から冷や汗が通る。

鈴「ちょ、ちよつと、バカ！離しなさいよ！」

一夏「お、おい急にあばれるな　ってバカ！いきなり殴るなよ！」

そんなことをしていると『ゴーレム？』は威力は低いが連射型のレーザーを放つそれを一夏は鈴を抱えながら攻撃をかわす。

そこにオープンチャンネルで山田の声が聞こえてきた。

山『織斑君、鳳さん！今すぐにアリーナから離脱してください！すぐに私たちが阻止しますから！』

一夏「いや、ここで俺が食い止めます。相手はどうやら俺のようですし。」

そう、『ゴーレム？』はさっきから一夏を常にロックしている。ここで逃走したら逆に被害が広がる。一夏はある意味良い選択をする。

一夏「鈴、お前はどつする。」

鈴「も、もちろんやるわよ。それより離しなさいよ！戦えないじゃない。」

一夏「ああ、悪い。」

鈴「じゃあ私は『衝撃砲』で相手をけん制するから、一夏は特攻して。武器、それしかないんでしょ。」

一夏「その通りだ。じゃあ、行くぞー！！」

鈴は『衝撃砲』による遠距離攻撃。一夏は飛びまわり始めた『ゴーレム？』へ徐々に接近を開始。まずはどんな奴か調べる。

2人による反撃が始まる

山「もしもし、聞いてますか！？織斑君！鳳さん！」

ISのチャネルは大声を出さなくとも聞こえるがそれを忘れてしまふほどの自体のようだ

ちなみに端から見ると色々残念に見える。

千「本人達がやると言っているんだ。やらせてみてもいいだろ。」

山「織斑先生！何を言っているんですか！早く救援に行かないと！」

千「これを見ても同じ事を言えるか？」

千冬は画面を指すそこには第2アリーナのデータが表示されている。

山「遮断シールドLv4…しかもステージに通じる扉が全てロック

されてこれじゃあ…」

千「ああ、2人は救援には行けん。それにこの防御を破れる『第10位』もない。シールド解除のために3年の精鋭に任せているが…あと何分かかるか分からん。政府にも連絡を入れたが…それもすぐには来ないだろ。」

山「そんな…」

山田は落胆の声を上げる。それを励ます様に千冬はこう宣言した。

千「シールド解除の済み次第すぐさまステージに部隊を突入。部隊以外の教員は生徒たちを屋外に避難させるように、山田先生すぐさま全教員に連絡を。」

山「は…はい！」

話を終えた所でセシリアと箒が部屋に入ってきた。

セ「織斑先生！話は聞きました。わたくも部隊に入れて下さい！」

千「オルコット、お前は駄目だ。」

セ「な、なぜですか！？」

千「お前のISは一体多向きだ。いたら邪魔になるだけだ。」

セ「そ、そんなことはありません！わたくしが邪魔など…」

千「ほう、では貴様は連携訓練はしたか？その時のお前の役目は？ピットはどう使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定している？連続稼働時間は？」

セ「わ、わかりました！もう結構です！」

千「ふん、分かればいい。」

放っていたらこのまま連携の抗議を2時間ぶつ通しでやられそうなことを、セシリアは両手を揺らし『降参』のポーズを取る

セ（はあ、言い返せない自分が悔しいですわ…）

そこで山田の声が入る

山「織斑先生、全教員に連絡はいき渡りました。」

千「ふむ、御苦労だった。」

山「織斑先生他に私達にできることは…」

千「山田先生少し根を詰め過ぎだ。糖分でも取って落ち着け。」

そう言いながらコ　ヒーを入れてそのまま置いてあったカップから  
白い粒子をスプーンですくい上げる…でかかと『塩！！』と書いてあるが…

山「先生。それ、塩ですけど…」

千「…何故こんな所に塩が置いてある？」

山「さ、さあ…？でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど…」

千「……」

山「あつ！やっぱり弟さんのことが心配で、だからそんなミスを…」  
千「……」

あ、地雷踏んだ。山田は直感的にそう感じた。千冬はゆつくりとそ  
うゆつくりと、『塩！！』と書かれたカップを持ち上げコーヒーに  
全部注ぎ込んだ。もう塩の山が出来ている。

千「山田先生は塩辛いのが好きでしたよね。」

山「い、いえ別に…」

その笑顔は100人中100人が美しいと言わせる笑顔だ…目は笑  
っていないけど…

千「どうぞ。一気に。」

山「は、はい。」

言われたとおり山田は一気に飲み干す。

山「グハア!!」

…こうして命という儚い花が散った。

一夏「はあああああ!!」

3回目の攻撃、1回目は相手の攻撃がどの程度かを調べ一旦離れた、2回目の攻撃は相手の素早さがどの程度か調べたが今は鈴による援護射撃によって『ゴーレム?』の懷にうまく入り右脇腹に刀の持ち手をぶつける。それによっていくらISといっても所詮は人間、その衝撃によって少しでも怯むと踏んでいた。だが『ゴーレム?』はそんなことを一切気にせずに一夏の顔を左腕で殴り飛ばした…人間の構造を無視した形で。そのまま殴り飛ばされている途中一夏は思考を巡らせていた。

一夏（なっ!!?あり得ないだろ今の攻撃を受けてビクともしないなんてどれだけ人間離れして…人間?まさか。）

飛ばされている途中後ろの壁に衝突する前に鈴がギリギリで一夏を受け止める。

鈴「大丈夫!?一夏!?!」

一夏「ああ、何とか。なあ、鈴あいつの動きって何っーか機械じみ



てないか？」

一夏「1回目と2回目の回避行動がまるきり同じ。それにさっきの攻撃、本来なら少しでも怯まないと可笑しい。もう一つは生身の人間から感じられる緩急や乱れそういうのがあいつには無いんだ。あれって本当に人が乗っているのか。」

手をあごに添えながら真剣に考察する鈴。

鈴「ううん。でもあり得ないISは人間が乗らないと絶対に動かない。そういう風にできてるもの。」

一夏（鈴は否定する当たり前だ。本当にそうならこんな社会にもならないし自分たちも必要ないでもどこかの国が権益のためにあえて黙っているのかもしれないそんな可能性だって否定できない。）

それにと一夏は白式のある能力を思い出す武器の拡張領域のほとんどを代償に発現している『単一仕様能力』<零落白夜>その能力は相手のエネルギー、ISが起こす超常現象を全て無効化する能力、ただしこの攻撃全力で放つと絶対防御まで突き破るし自分のエネルギーも食らうのでなかなか使えない。

そんな風に一夏が思考を巡らせていると、鈴はそれに気付きこう言い放った。

鈴「じゃあ、あれが『無人機』として攻めましょうか。策はあるんでしょうね？」

一夏「当然。」

これぞ以心伝心。そうして一夏は作戦を言う。

一夏「俺が合図をしたらあいつに全力の『衝撃砲』を撃つてくれ。」  
鈴「いいけど、当たらないわよ。」

一夏「いいんだよ。当てなくて。」

鈴「…あんまり無茶しないでよ。」

作戦を話し合っているその時

ゴーレム？《新たな、生体、熱源、反応、確認、ロック、開始、》

そんな無機質な声を出しながら何故かシールドが貼られていない中継所に逃げ遅れたナレーターが一人倒れている。どうやら一夏達が作戦を話あっている間に『ゴーレム？』は周囲を確認したのだろう。そんな彼女を庇う様に出てきたのは箒だ。

その間にも『ゴーレム？』はそこ全体に拡散レーザを放とうとしている。

一夏「鈴、やれ！」

鈴「わ、わつかたわよ。」

両腕を下げ、肩を押し出すような格好で『衝撃砲』を構える鈴、最大出力の反動を抑えるために補佐用の力場展開翼を後部に広げた。一夏はその射線上に躍り出る。

鈴「ちょ、ちよつと馬鹿！何してんのよ！？どきなさいよ！」

一夏「いいから早く撃て！」

鈴「ああもう…！どうなっても知らないわよ！」

高エネルギーを背中に受け俺は『瞬時加速』を作動させる。

『瞬時加速』の原理はこうだ。後部のスラスター翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性のエネルギーを利用して爆発的に加速する。それは、つまり外部からのエネルギーでもかまわないということ。

一夏は『衝撃砲』を背中に受け体がきしむだがそれによって爆発的な速度で『ゴーレム?』に突入する。そこで

<零落白夜>発動

その事を一夏は感覚で理解できた。一夏は決意する。

一夏(俺は…千冬姉を、箒を、鈴を、関わる人すべての人を 守る!!)

一夏は『ゴーレム?』を真つ二つに斬った。その瞬間、鏡が割れる音が響く。…コアを完全に破壊した音だ。

一夏(終わった…)

一応、これで決まら無かったらセシリアにやってつもりだったけどなそう思っていた瞬間

箒「一夏、後ろ

!!」

一夏(何を言っているんだ?箒…

後ろからもう一体の巨大な剣を持った無人機によって右腕と右足が斬られ回りながら飛んだ。その後一夏の意識も飛んだ…

一夏が血を噴きながら倒れるその光景に鈴もセシリアも千冬も啞然としそこでゆっくりと倒れこむだが、箒は

箒(何か、 何か が来る)

無人機は止めを刺そうと一夏に近づくだが、

o a e ] @ ] p . : a . f a o . j g g n . j a . : . j  
e w a i o

何処の言葉でも無い何かの言葉を呟きながら一夏はゆっくりと立つ  
無くなった手と足から白い 何か が飛び出し一気に形勢、手と足  
が元に戻る。

g p l k j h r . : . j k h [ . : . ] ] 5 p . j a [ 4 2 7 5 3 4 2  
a l . : a j o p g h s a p . : . r q w [ 4 3 @ u o  
o r y g 5 @ 2 i [ u p u i w . h u w [ u y 4 u . 9 u y 2 0  
u h p . : [ i w ] 3 6 i 8 t u 9 @ w [

歌う様に怒る様に楽しむように語る。

だが最後にこう語る

反 j o l e d 逆 f h s i g a . 者 l f d s j o 4 3 よ 8 9 3 q 2  
失せる f h j o p w w . 。

その瞬間、白い 何か は無人機を飲みこみ無人機は『消えた』。

## 第8話 クラス対抗戦！！（後書き）

3日間更新はチヨイ無理そう

## 第9話 事後処理（前書き）

久々の投稿 幻想殺しさん感想ありがとうございます。

## 第9話 事後処理

ここは、夕方、IS学園の保健室

一夏「う……？」

一夏（あれ、何で俺、ベッドに寝てたんだ？確か新しく現れた無人機に手と足が斬られて…）

一夏が記憶を探っていると、保健室のドアが開き、千冬が入ってきた。

千「気が付いたか。」

カーテンが勢いよく開かれる。

千「体に致命的な損傷はないが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうがまあ、慣れる。」

一夏「はあ……」

いまだにボ　とする一夏。自分が何故保健室にいるか分からない。それに、気づいたのか千冬は一夏に説明する。

千「『衝撃砲』の最大出力を背中から受けたんだぞ。しかもお前、絶対防御をカットしたな？よく死ななかったものだ。」

一夏（あれ、その後の無人機は？）

何故かは分からないが一夏はどうやら本来ならカット出来ない絶対防御をだ。

千「まあ、何にせよ無事でよかった。家族に死なれては目覚めが悪い。」

そう告げる千冬の顔は何処までも優しい。唯一の家族、一夏にしか見せない顔だ。

一夏「千冬姉」

千「なんだ」

一夏「いや、その…心配掛けて、ごめん。」

その言葉を聞き千冬は小さく笑った。

千「心配などしていないさ。お前はそう簡単に死なない。なにせ、私の弟だからな。」

変な信頼方だな。そう一夏は心の中で小さく笑い。

一夏（まあ、それは千冬姉の一種の照れ隠しだけだな。）

そう、一夏は思っていたら。千冬はすぐに顔を引き締める。一夏にとっては理想の大人像の一つだ。

千「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ。」

そう言つて颯爽と去っていく千冬。…それにしてもさっきから『体隠してポニーテール隠さず。』状態の筈がいる。

一夏「筈。」



一夏は箒の名前を呼びながら手招きする。箒は『ペン太』を抱えながらゆつくりと顔をだす、なんだか少し怖がっている。

箒「怒って無いのか？」

一夏「何を？」

箒「勝手に中継所に行ったこと。」

一夏「あ、確かにあれは驚いたな。でも俺は別に怒ってないからな。」

箒「本当に？」

一夏「本当に。」

その言葉を聞いて少し安心したけどまだ何か言いたげな箒

箒「でも、一夏。お前は無茶すぎだ。あんなことはもう一度やってみろ。私が竹刀で100回叩いてやる。」

一夏「うわ、怖。」

箒「ああ、怖いぞ。…だから、無茶、しないで。白い何か、も出さないで…」

一夏「？箒、最後なんか言ったか？」

箒「な、なんでもないじょ！？」

噛んだ。大分盛大に。

箒「じゃ、じゃあ私は帰るからな。今日はゆつくり休め。」

そう言って早足に箒は帰って行った。

一夏「ヤバい、急に眠気が…」

一夏は疲労が原因なのかすぐさま眠りに落ちた。

.....。

一人の少女が保健室に入ってきて来るそして少女は顔を一夏の顔に近づけ

「一夏……」

一夏「鈴……？」

「っ！？」

鈴は一夏が起きたことに驚いた……顔と顔がものすごく近い状態で

鈴「おっ、お、おっ、起きてたの！？」

一夏「お前の声で起きたんだよ。で、どうした？何をそんなに焦ってるんだ？」

鈴「あ、焦ってなんか無いわよ！勝手なこと言わないでよ、馬鹿！」

鈴の中では語尾の後ろに『馬鹿』を付けるのが流行らしい……まあ、照れ隠しなんだけど。

ようやく鈴が顔を離れたそこで一夏は気づいた。

一夏「あ、そういえば試合、無効だったな。」

鈴「まあ、そりゃそうでしょうね……」

そう言いながらベット脇の椅子に腰かける鈴。

丁度一夏は約束のことを思い出す。

一夏「そっぴや、約束ってどうなる？次の試合って決まってるんだよね？」

鈴「そのことなら、別にもういいわよ。」

一夏「え？なんで？」

鈴「い、いいからいいのよ！」

一夏「ふーん。なあ、ふと思ったんだが、その約束って違う意味なのか？俺はてつきりタダメシだと思ってただけ、筈がそのことでずっと『味噌汁』のことしか言わないからもしかして…」

鈴「ち、違わない！違わないわよ！？ば、馬鹿ね！そんなわけないでしょ！？」

そういつて照れ隠しのつもりで乾いた笑い声をだす鈴。それを見て首をかしげる一夏。やはり一夏に恋愛ごとの本心は伝わらない。

一夏「そういえば、鈴。こっちに戻ってきたってことは、またお店やるのか？鈴のおじさんの料理、うまいもんな。また食べたいぜ。」

鈴「あ……。その、お店は…しないんだ。」

一夏「え？なんで？」

鈴「あたしの両親、離婚しちゃったから…。」

一夏はその言葉を聞いて何と無く理解する。

一夏（ああ、こいつもこいつで苦労したんだな。）

鈴「一応、…一夏「もうその事は言わなくていい。」…へ？」

いきなり一夏に話を遮られ困惑する鈴。そして一夏は優しい笑みで鈴の頭を撫でながらこう言った。

一夏「ごめんな。俺、そのことに気づいてやれなくて。今度からもう少し鈴のことちゃんと見る。だからそんな悲しい顔するな。お前は天真爛漫に笑ってる方が似合ってるからな。もし、また辛いことがあったらできるだけ相談しろ。どこまでできるか分からないけど力になってやるよ。」

鈴「一夏…」

その言葉を聞いて鈴は目頭と頬が熱くなることを理解する。そして一夏は言葉を続ける。

一夏「なんってたって、俺達『友達』だもんな。」

…どこぞの幻想を殺す人よりも酷い幻想の殺し方である。

そして鈴はなんだか一気に力とか色んなのが抜けた。本当に色々と。

鈴「はあ…馬鹿…」

一夏「ん？なんかいつたか？」

鈴「何でもないわよ…。」

一夏「なあ、鈴今度2人で遊びに行かないか？」

鈴「え！？それってデ」

鈴が言葉を続けようとしていたら、保健室のドアが開きセシリアが突入してきた。

セ「一夏さん、具合はいかがですか？わたくしが看護に来てあ  
ら？」

つかつかと部屋に入ってきたセシリアの足が、言葉が、止まる。ベ  
ツドの傍らにいる鈴を見つけたからだ。

セ「どうしてあなたが…？一夏さんは一組の人間、二組の人にお見  
舞いされる筋合いはなくてよ」

鈴「何言ってるの？あたしは幼馴染だからいいにきまつてるでしょ。  
あんたこそただの他人じゃん。」

セ「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！それに、今は  
一夏さんの特別コーチですよ！」

とまあこんな感じで言い争いは続く。

一夏（なんで仲良くできないんだ？）

そんな風に夕日が沈み夜になっていく…

ここはIS学園地下特別区間

そこで千冬は今回の無人機の襲撃をモニターで同じ場面を何度も再生し、まき戻していた。

その場面とは一夏が『ゴーレム？』を真つ二つに斬り裂いた直後の場面だ。千冬の記憶が正しければ襲撃者は『ゴーレム？』しかない。しかし現場の無人機を回収した時『ノーマル・コア』は一夏が破壊したものと新品のコアが2つあった。故に千冬は一度モニターで再生し不穏な所を見つけた。一夏が破壊した後、画面が2、3秒白くなりまた元の場面に戻るのだ。

千（これは一体…？）

そう考えているとタッチ型の携帯に山田の連絡が入る。

千「私だ。」

山『織斑先生。解析完了しました。やはりあれは無人機です。それに使用コアは一つです。』

千「そうか。」

千冬は驚くこと無く短く答えた。『ISの無人機』、それは下手をうてば『世界で唯一男でISが起動できる』ことより重要かもしれない。その技術がああISに使われていた。その事実はずぐさま学園関係者全員にかん口令がしかれた。

山『どのように動いているのかは不明です。機能中枢はISに入っていた塩酸によって焼き切られていました。これでは修復は不可能です。』

千「コアはどうだった。」

山『…織斑君が破壊したコアは分かりませんが、もう一つの方は登録されていませんでした。』

千「やはりな、」

どこか確信じみた言様に山田は怪訝の声を出す。

山『何か心辺りがあるんですか？』

千「いや、ない。今はまだ　な。」

そう言つて携帯を切る千冬そしてもう一度モニターに視線を戻す。

その顔はかつて一度も負けなかったことを誇った、伝説の操縦者『ブリュンヒルデ』だった。

一夏「はあー、疲れた。」

セシリアと鈴の言い争いに解放された一夏は自室に戻っていた。ちなみに箒はここにはおらず手紙で『引越した』と短く書いてあった。

とりあえず今日は色々疲れたのでもう寝ようかと一夏が思っている  
と、

突然、ドアが叩かれる音がした。

誰だろうと思いつつベットから出てドアに向かう

一夏「はい、どちらさまで」

ドアの前に立っていたのは顔を真っ赤にした箒だ。一夏的には怒っているように見えた

箒「……………」

一夏「どうかしたのか？まあ、とりあえず部屋に入れよ。」

箒「いや、ここでいい」

一夏「そうか。」

箒「そうだ。」

一夏「……」

箒「……」

一夏「……箒、用が無いなら俺は寝るぞ」

箒「よ、用ならある！」

そう大声で叫ぶ箒

箒「ら、来月の学年個別トーナメントだが」

学年個別トーナメントそれは文字どりのこと。完全自主性で学年別以外に特に規定が無い。しかし、それは専用機持ちが圧倒的に有利なことに変わりない。

箒「もし、私が優勝したら」

顔を紅潮させ一夏を見ずに大声で宣言する。

箒「つ、ちゅきあつちゅもりゃう（付き合ってもらう）！！！！」

これ以上ないほど噛み噛みだったけど…

一夏「はい？」

一夏（これって『付き合ってもらっ』ってことだよな…へ！？これって、え！？）

そう思っている間に筈はもう脱兎の如く逃げ出していた。

…そしてこのことによって新たな波紋も…

「ねえ？聞いた？」

「うん、聞いた」

「聞いた？」

「『大ニュースだ（〜）！！！！』」

T o b e c o n t i n u e d



## 第9話 事後処理（後書き）

蘭どうしよう。

## 番外 真っ赤な一輪の花（前書き）

今回の話は転生でチートな奴のアンチものです。そういうの嫌だ方  
は見ないほうがいいです。

## 番外 真っ赤な一輪の花

スコールが降る夜中の路地裏、少年は走る。右手を無理やり引き千切られ肩の部分の骨が露出している。それでも走る。後ろの“怪物”から逃げるために。

（くそ！どうして俺がこんなめに！！）

少年は転生者だ。よくある交通事故と神のうんたらかんたらでこの世界に来た。彼は神（笑）からチート性能の兵器を貰い興奮し良くも悪くもこの世界をムチャクチャしようとしたその矢先、今少年を追っている“怪物”に出会った。開墾一番の言葉はこれだ。

「君がどんなものであれこの世にいてはいけない。だから死んで貰うたよ。」

「何言ってんだ？お前？俺は“特別”なんだぞ身の程をまきまえろ。」

その言葉を聞き“青年”は凶暴な笑みを広げる。その瞬間“青年”は“怪物”に変化した。その容姿は全体的に黒と黄色で構成され、顔はライオンのようだ。少年は特に驚きもせずチート兵器を展開そのまま怪物に殴りかかるしかし怪物はその攻撃をいとも簡単に止めそのまま右手を引き千切る。

「ぐうぎゃああああ！！！！」

少年の悲鳴がこだまする。少年は怪物から即効で距離を置く。そこで気づくチート兵器が殆ど破壊されていることを。

「な、何なんだよお前え……」

少年は恐怖する。この怪物に怪物は悠然と少年に近づく。少年は逃げ出す。この場所から。怪物は急に語り始めた。

「ねえ僕の話少し聞いてくれないかな。僕の「単一使用能力」ってさあ君みたいな屑をさあ、一撃で粉砕するって能力でさあ。酷いと思わない？いくら「オリジン？コア」が特殊だからってさあこれは無いよ。」

その話が終わった直接、少年は頭捕まり自分の方向に顔を向かわせそのまま髪を力任せに引っかく。抜かれた場所からは血が溢れ、ピンクの肉が見える。

「いぐうあ！？>」！\*！！」

「途中から何言ってるか分からないよ。あ、じゃあ本当に口が聞けないようにしよう。」

怪物はのたうち回る少年の顎を蹴りつけ、顎が飛ぶ。さらに顔が潰れ苦しみ息がろくに出来ない状態になり声も「ヒュー、ヒュー」としか言わなくなった。

「うーん。やっぱり胸がすつきりするや。こういう頭の悪い奴が苦しみながら何度も何度も蹴られる姿は。君さあ本当に屑だねそのままとつとと死ねば良かったのに変な力得てこっちにくるなんて。君の立ち位置はさあ村人hみたいなその辺の奴なんだよ分かる？意志も覚悟もないくせにシヤシヤり出て来ないですよ。」

「ま、君には一生分かんないか、じゃあね。」

怪物は少年を一通り蹴りつけた後、顔を思い切り踏み潰した。顔が潰れた姿はまさしく一輪の赤い花だ。怪物が青年に戻ると電話が入

った。

「何か用？ああ、今回ののははずれ。“例の物”は持って無かったよ。因みに君はなにしているの？え？VTシステムを使った無人機？そいつは面白いね。あ、そうだね。またね。」

そういつて青年は闇へと消えていった……

第9・5話 Conversation of adults (前書き)

今回はあえての短めその辺は気にしないで。  
あと、感想誰でもいいからください。

## 第9・5話 Conversation of adults

IS学園地下特別区間モニタールーム

そこで千冬は真っ暗な部屋の中空中に浮かぶモニターである男と対面していた。

千「以上が今回の襲撃事件の全容です。IS管理科最高委員長。」  
「うーん、報告、ありがとね。お勤めご苦労さーん。」

彼の名前は『マイク・デービット』

その姿は全体的に白を基調とした服装と帽子をしていて、髪の色は金色、目も何故か金色、体系は全体的にスリとしており年は20〜22ぐらいだ。

千冬としてはこの男は苦手だ。常に日本人の喜びそうな笑みをしているが、その笑みはどこか張り付いた笑みだ。

マイク（以下、マ）「そうだ千冬さん、頼みたいことがあるんだけどいいかなー??」

千「なんでしょうか?」

マ「いやゝ助かるよ。それがさあゝIS学園にさあ、2件ほど転入の話が来ていてさあゝその2つ、千冬さんのクラスにいれてくんない?」

あ、ちなみに両方専用機持ちだよと言葉を加える。

千冬が眉を顰める。何故この男が自分のクラスに専用機持ちを集中させるか分からない。

マ「あ、可笑しいと思ってるな〜まあ、ぶっちゃけ片方はついでなんだ〜もう片方が問題で〜いや〜爆笑系の話なんだよ。」

張り付いた笑みをしながらマイクはバカみたいに話を告げる

マ「いや〜フランスってどうなってんだろうね〜いきなり知識豊富、経験豊富な

『第二の男操縦者』が急にあらわれるなんて

まあ、監視を含めてよろしく。」

そのまま一方的にマイクは通信を切った。



## 第10話    B o y   m e e t s   b o y

IS学園、ここでは現在『ある噂』でもものすごく盛り上がっている。

セ「それは本当ですよ!？」

鈴「嘘じゃないでしょうね!」

「本当だってば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学園別トーナメントで優勝したら織斑君と交際できるって!」

篤が一夏とした(一方的)な約束があれよあれよと本当に色々あって『学年別トーナメントで優勝したら織斑と交際できる』ということになっていた。

セ「それは一夏さんは認めているんですの?」

「ううん。どうも女子間だけの話で織斑君はよく分かって無いんだって。」

鈴「そう、そうなのか」

そう言いながら鈴はチラリとセシリアの方を見る。セシリアも鈴を見る。目が合った瞬間、火花が散った。

鈴「じゃあ私は自分のクラスに戻るわ。」

セ「ええ、そうした方がいいでしょう。」

再度火花、そうしている間に一夏が教室に入ってきた。

一夏「どうしたんだ?皆して?」

「「「きゃあああ!」「」「」

一夏はいきなり皆に驚かれ若干たじろく。

一夏「え？俺なんかしたか？」

セ鈴「……いや、なんでもない（わ）よ（ですわ）！」「」

そそくさと自分の席や自分の教室に戻る

一夏「何だ、たんだ一体？」

そうしていると山田先生と千冬が教室に入ってきた。千冬の服装は夏服に変わっていた。

千「諸君、おはよう」

「……お、おはようございます！」「」

千「今日から本格的な実戦格闘を開始する。訓練機ではあるがISを使用する以上各人気を引き締めるようにな、ISスーツを忘れたのならかわりに学校指定の水着（スクール水着）で訓練してもらう。まあ、それもないのなら下着でいいだろ。」

一夏（それはだめだろ……！）

やはり一夏もオトコの子そういうのは行けないのである……主にオトコゴロ的なもので

千「では山田先生、ホームルームを。」

山「は、はいっ」

ちょうどメガネを拭いていたらしく、慌ててメガネをかけなおす姿がワタワタしている子犬のようだ。

山「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します　しかも2名です！」

「え……」

「『えええええっ！？』」

いきなり転校生が2人しかも乙女情報網を潜り抜けての登場。それによってクラス中がざわつく。

「失礼します。」

「……………」

一人は綺麗な黄金色の髪を後ろで束ね、礼儀正しく人懐っこい笑顔を浮かべ中性的な体格。雰囲気からいうと『貴公子』である。

もう一人は第一印象にくるのは眼帯だ。それも映画に出てきそうな本物、髪は切るのが鬱陶しくて伸ばした銀色の髪も片方の目は赤く、女としては小柄だがその圧倒的な冷たさで大きく見える。雰囲気は『軍人』だ。

だがそれよりも問題なのは金色の髪の方が：

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなこともあると思いますが、皆さんよろしくお願いします。」

…男ということだ。

クラス全員あっけに取られる

「お、男……？」

誰かがそう呟く。

シャルル「はい、こちらに僕と同じ境遇の方いると聞いて本国より

転入を」

「きゃ……」

シャルル「はい？」

「……きゃあああああ

っ！」「」「」

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「地球に生まれてきてよかった……」

教室は一気に騒がしくなるそれを見て千冬は

千「あー、騒ぐな。黙れ。」

鬱陶しそつに千冬が言う。どうやら仕事だからそう言っているのではなくこのテンションに付いていけないようだ。

山「み、皆さんお静かに、まだ自己紹介は終わって無いですから！」

慌てながら山田が言う。その言葉によりもう一人の転校生に視線が集まる。転校生はいまだに口を開かず転校生の視線はさっきからずっと千冬に向かっている。まるで教室の人間には興味が無いと言うように。

「……………」

千「挨拶をしろ。ラウラ。」

「はい、教官。」

いきなり佇まいを直し軍隊式の敬礼をし、素直に返事をする転校生。その反応にクラス一同哑然とする。その反応に千冬はまた違った鬱陶しそうなため息をつく

そして転校生は足を揃え姿勢と手を真直ぐ伸ばす。

「ラウラ・ボーデビッツだ。」

「……………」

続く言葉を待つクラスメイト達しかし名前を言った後再び口を閉ざす。その空気が耐えられ無くなったのか山田が質問する。

山「あ、あのく以上ですか？」

ラウラ・ボーデビッツヒ（以下ラ）「以上だ。」

再び沈黙。そうしていると一夏と視線が合う。

ラ「！貴様が！」

言ったあと、殺気を出しながら一夏に近づくラウラ。そのまま一夏の頬に平手を出そうとするが一夏はすぐに反応しその手を掴んだ。

一夏「おい、随分かわった挨拶だな。ドイツではこういう挨拶が流行ってんのか？」

一夏が珍しく殺気を出しながら言う。ちなみに何故一夏がドイツと言ったのかと言うとラウラが千冬のことを『教官』と言ったからだ。千冬はある事情により一年間ドイツで軍隊教官として働いていたからだ。ちなみに一夏はこのことを千冬に聞いたのではなく山田などの学園関係者から聞いた。

ラウラは一夏の手を突き離す様に手を勢いよく振る。

ラ「ほう、中々やるな。」

だがな、と言葉を続け一夏を親の仇を見るようにいう。

ラ「私は認めない。貴様が教官の弟であるなど、認めるものか。」

一夏「知るか。俺は千冬姉の弟だ。お前がどう思おうとその事實は変わらない。」

ラ「ふん……。」

そのままスタスタと帰っていくラウラ。その空気を破る様に千冬が手を叩きながら宣言する。

千「ではHRも終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

千「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろ。」

その言葉を聞きシャルルは一夏に近づく。

シャルル「君が織斑君？初めまして。僕は」

一夏「ああ、いいからとにかく移動が先だ。女子が着替え始めるし」

シャルル「し？」

シャルルが可愛く首をかしげる。

一夏「今に分かる」

一夏が最後まで言葉を続けようとすると。地面が揺れ始めた。

シャルル「な、何！？」

一夏「来た！走るぞ！！」

シャルル「え？え？」

そう言つて勢いよくシャルルの手を掴む一夏。二人の後ろから女子の大群が大波のようにやって来る。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君と一緒に！」

ちなみにこの波にのまれたら最後質問攻めの上授業に遅れ千冬の特別メニュー（という名の地獄）を受けることになる。

「いた、こつちよ！」

「ものども出会えゝ出会えゝ！」

一夏（いつの間には武家屋敷になつたんだよ！！）  
シャルル「な、何？何でみんな騒いでるの？」

状況が飲み込んでいないシャルルは困惑顔で一夏に聞く

一夏「そりゃ男子が俺達だけだからだろ。」

シャルル「…？あつ！ああ、うん。そうだね」

一夏「？」

そうこうしている内に一夏とシャルルは更衣室に到着した。

一夏「ああ、そういえば自己紹介まだだったな。俺の名前は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。」

シャルル「うん。よろしく一夏。僕のことシャルルって呼んでね。」

一夏「おう、よろしくなシャルル。」

そう言つて2人は握手を交わす。ふと一夏が時計を見ると

一夏「うわ！時間ヤバイな！すぐに着替えちまおうぜ」

一夏はすぐに服を脱ぎ始める

シャルル「うわー！」

一夏「？ どうしたんだ？」

シャルル「な、何でもないよ！」

そう言いながら顔を真っ赤にして手を覆う。その反応に対して一夏は頭に？を出した。

一夏「何でもいいけど早く着替えるよ。早くしないと織斑先生にみっちり絞られるぞ。」

シャルル「う、うんっ！き、着替えるよ？でもあっち向いてて……ね？」

一夏「はあ、俺も男が着替える姿なんて見たくは……って！早っ！」

シャルルは一夏が一瞬目を離れたすきにすでにISスーツに着替えていた。

一夏「着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

シャルル「い、いや、別に……って一夏はまだ着ていないの？」

一夏「これ、切るときに裸つてのがなんか着づらいんだよなあ。引つかかって。」

シャルル「ひ、引つかかって？」

一夏「おう」

シャルル「……………」

その言葉を聞いたシャルルはあっという間に林檎の様に顔を赤くし



た。

そうこうしている間に一夏も着替え終えた。

一夏「よっ、と。よし、行こうぜ。」

シャルル「う、うん」

一夏「そっぴやそのスーツ、なんだか着やすそうだな。何処の奴？」  
シャルル「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはフ  
アランクスだけど、ほとんどフルオーダー品」

一夏「デュノア？デュノアってお前の名前に…」

シャルル「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フ  
ランスで一番大きいIS関係の企業だと思う。」

一夏「へえ！じゃあシャルルって社長の息子なのか。道理で気品つ  
ていうか、いい所の育ち！って感じがするじゃん。納得したわ。」

シャルル「いいところ…ね…」

一夏「何かあったのか？」

シャルル「うんうん何でもないよ。じゃあ、行こ一夏」

一夏は少し不服ながらシャルルと一緒に更衣室を出た。

To be continued

## 第10話 B o y m e e t s b o y (後書き)

ひとつ聞きたいんだけど臨海学校の買い物や水着とかすっ飛ばしていいか？

## 第11話 学園教師

千「今日から実習を開始してもらつ。」

「はい!」「」

千「まずは戦闘を実演してもらおう。鳳、オルコット。」

鈴「はい!」

セ「はい!」

そうしつかりと返事をしているが二人は内心超絶ヤル気が無かった。

鈴（はあゝめんどいなあゝ何で私が．．．）

セ（はあゝこういうのは見世物の様であり好きではありませんわ。）

2人がそう思いながらISを起動しようとするのと千冬が二人に小さな声でこつ耳打ちした。

千「おまえら少しはヤル気をだせ。アイツにいい所を見せられるぞ。」

その言葉を聞いた瞬間二人の目に闘志が燃え元気ハツラツ!!状態になる。

ちなみに千冬はこれで一夏の好感度が上がるとは一コンマも思つて無いが、ひでえ

セ「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

鈴「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね!専用機持ちの!」

セ「それでお相手はどちらに？わたくしは鈴さんでも構いませんが」  
鈴「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」  
千「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は」

千冬が言いきる前に強烈な素早さで風を切る音に遮られる。  
その音を出している張本人は…

山「ああ　っ！ど、どいてくださいっ！」

山田だ。山田はIS『ラファール・リヴァイブ』を装着し上空から地上へと一気に下降。ただ神のいたずらかその到達地点に一夏がいたりするのだが…

一夏は即効で白式を展開上空へ回避しようとするが少し遅く山田先生と激突。そのまま二人は絡み合いながら数メートル後方まで飛んだ。

一夏「痛ってー白式展開してなかったら危なかった…」

な。と言いきる前に一夏はプリンを触る。

山「あ、あのう、織斑君…ひゃん！」

その言葉を聞き一夏はプリンと思って触っていた手の先に視線をやる。そこには自分の手が勝手に胸をモミモミしているのである…変態だ

山「そ、その、ですね。困ります…こんな場所で…。いえ！場所だけじゃなくてですね！私と織斑君は仮にも教師と生徒ですね！…ああでも、このまま行けば織斑先生が義姉さんってことで、それはとても魅力的な」

言ってること無茶苦茶である。そんな阿呆なことをしていると一閃の光が一夏を狙う。それに気づいた一夏は山田から離れる。1秒後、元いた自分の頭の場所にレーザー光が通り過ぎていく。

セ「ホホホホ…。残念です。外してしまいましたわ…。」

誰もがその笑顔を見たら吐息を吐くだろう…顔に『怒!』のマークが無かったら

鈴「……………」

無言で 双天牙月 を連結。レイプ目のまま一夏の首に目掛けて勢いよく投げる。ちなみに怒りのレベルはセシリアよりはるか上だ…理由は言わなくても分かるよな？

一夏「うおおおっ!?!」

一夏は間一髪で回避。しかし体がアクロバットした状態にいるので中々元の状態に戻るのは難しいそれを分かっているのかのように  
双天牙月 は再度一夏の首をロックオンしている

一夏（かわせるか!?!）

山「はっ!」

短く2発、火薬銃から飛び出るその弾は的確に 双天牙月 を落とした。一夏は自分を助けてくれた狙撃主を見る。その人は何といつも頼りなさそうな山田だ。

その光景にほとんどの生徒が驚愕を表している。その光景を千冬が説明する。

千「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない。」

山「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし。」

ぱつといつもの雰囲気に戻る。体を一回転させ起き上がると、肩部武装コンテナに銃を預ける。千冬の言葉が照れくさかったのか少し顔が赤い。

千「さて小娘どもいつまで惚けている。さつさと始めるぞ。」

セ「え？2対1で…？」

鈴「いや、さすがにそれは…」

千「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

その言葉がカチンときたのか二人はすぐに戦闘準備に入る。

3人は同時に空中に移動。それを確認した千冬は号令をかける。

千「では、はじめ！」

セ「手加減はしませんわ。」

鈴「さつきのは本気じゃ無かったからね！」

山「い、行きます！」

口調はさほど変わらないが目は冷静で落ち着き払っている。

先制攻撃をしたのはレーザービットをすべて発動しその上で『スターライトmk?』による同時攻撃を行ったセシリアだ。その攻撃を全弾回避する山田。その後ろから鈴は『衝撃砲』を何発も放つ。山田は即、肩に付いているシールドで受け止める。

鈴「なっ！」

セ「鈴さん！ちゃんと狙ってくれませんか！？」

鈴の『衝撃砲』の弾の内数発セシリアに直撃した。

鈴「五月蠅いわね！少し黙ってなさいよ！」

そうして油断している間に山田は無防備になったセシリアにマシンガンによる弾丸の雨を浴びせる。セシリアは余計ダメージを負う。すぐさま山田はブレードを展開しそのまま鈴に攻撃を加える鈴はそれに答え 双天牙月 で対応。しかし山田はいとも簡単に攻撃の型を崩し鈴を切りつける。鈴はその攻撃にたじろく、セシリアは即効で体勢を整えビットによる援護射撃を放つ。その一発が鈴の下手に動きよって被弾する。

鈴「ちよつと！なにすんのよ！」

セ「鈴さんの下手な動きのせいですわ！」

ちなみに千冬が簡単に負けるといった理由。それは実力ではなくコンビネーションだ。この戦いが乱闘ならばまだ話は別だ。しかし今回は2人を組ませている。だが、2人は息が合わないので誤射したり、偶然刀が味方に当たったりもする。そのことと『2対1なのに押されている。』という焦りにより負けを加速させているのである。二人は体勢を立て直し攻撃一手に絞る。セシリアは射撃、鈴は隙あらば突撃。その攻撃を二人とは真逆に山田は冷静に対処し確実に避けセシリアと鈴を疲弊させる。セシリアが完全に疲弊した所に山田は『瞬時加速』を使い接近。そのまま回し蹴りを決め追ってきた鈴にセシリアをぶつける。止めに絡まっている二人にグレネード弾を投擲。

グレネードによって巨大な爆発が起きる。

勝者は言うまでもない。

## 第12話 訓練という名の…（前書き）

今回はちょち失敗した気がする。



## 第12話 訓練という名の…

セ「くっ、うっ……。まさかこのわたくしが…」

鈴「あ、アンタねえ…何面白いように回避先読まれてんのよ…」

セ「鈴さんこそ無駄にバカス力打つからいけないのですわ！」

鈴セ「ぐぎぎぎっ……！」

二人とも言っていることはあっているもののすぐみつともない。このいがみ合い1、2組の生徒がクスクスと笑うまでと止まらなかった。

隙を見計らい千冬が手を叩く

千「さて、これで諸君にもIS学園教師の実力が理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

千「では、専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィヒ、鳳だな。ではグループごとになって、実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

千冬の言葉が言い終わるや否や、一夏とシャルルに女子が群がってきた。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「分かんないところ教えて〜」

「デュノア君の操縦技術をみたいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいれて！」

その状況を見かねたのか、あるいは自分の浅慮に嫌気がさしたのか、千冬は面倒くさそうに額に指で押さえながら低い声で告げる。

千「この馬鹿者どもが…。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたついたら、分かってるだろうな。」

その言葉を聞いた瞬間女子は急いでグループを形成した。

千「最初からそうしろ。馬鹿者ども。」

山『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげて下さい。全員にやってもらうので、設定でフィティングとパーソナライズは切ってあります。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね。』

ISのオープンチャネルで山田が連絡してくる。

一夏「それじゃあ出席番号順にISの装着と起動、その後歩行までやろう。一番目は」

「はいはいはいっ！」

「出席番号一番！相川清香！ハンドボール部！趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

一夏「お、おう。ていっかなぜ自己紹介を…」

「よろしくお願いしますっ！」

腰を折って深く礼をすると、そのまま右手を一夏に差し出してくる。

「ああつ、ずるい！」

「私も！」

「第一印象から決めてました」

ずらりと女子も一列に並び同じような格好をする。ちなみになりにいるシャルルも同じ状態だ

一夏「あいつも大変だな」

一夏は同情の視線を送った。

一夏「じゃあ、まあはじめよう。相川さんIS何回に乗ったよな？」  
「あ、うん授業でただけだよ」

一夏「じゃあ大丈夫かな。とりあえず装着して起動までやろう。」  
「うん。」

というわけで一人目の装着、起動、歩行と問題無く進んでいく

一夏「次は誰だ？」

第「わ、私だ…」

一夏「ほ、第…？」

実は二人ともあの（一方的な）約束以来まったく喋っていない。理由は一夏と第両方とも恥ずかしくて話しかけていないのである。ちなみに両方とも顔は真っ赤だ。

一夏「……………」

第「……………」

一夏第「あ、いや、どうぞ」

息ぴったりである、そんなことをしていると、（特に中国とプリテンが）一気に視線が集まる。そして

「「「あ「「「

一夏第「「あ？」「

「「「あまずっぱーい！」「「「

「何この甘酸っぱーい雰囲気は！？」

「くうゝ先越されたゝ！」

「篠ノ之さん、油断してたけれども強敵ね・・・」

鈴「何かしら…あれ」

セ「さあ、何でしょうね。」

周りが一気に騒がしくなる。それを見て千冬は

千「ほう、よそ見とはなるほどな。これくらい貴様らにとっては余裕という訳か。すまないな、こんなもので。ならより難しい訓練をしてやるうじやないか。さあ誰からやりたい？」

鬼になった。その姿を見て全員黙りこみさつさと自分の作業に戻ってしまった。

千「ふん、分かればいい。」

千「おい、織斑貴様もさつさとしろ。」

一夏「は、はい。じゃあやるぞ、箒」

箒「あ、ああだが、一夏。コックピットに届かないのだが。」

その言葉を山田が聞きつけその返答に答えた。

山「あー、初めての時によくやるミスですね。コックピットが高い位置で固定されてしまった状態ですね。それじゃあ仕方が無いので織斑君が乗せて上げて下さい。」

一夏「…え？」

箒「な、なに？」

一夏は箒の顔を見る箒は顔を真っ赤にして顔をそむける。その繰り返し

一夏はとりあえず白式を展開。一夏は顔そむけながら箒を『お姫様

抱っこ』で持ち上げる。

箒「へにゃ…！」

甘い声をあげる箒、そのまま箒をコックピットに乗せる。そこで箒は一夏に頼みごとをする…完全にイチヤついてやがるこいつ等。

箒「い、一夏そのだな…今日はお弁当作ってきたんだ。食べてくれないか？」

一夏「あ、ああいいぞ。」

箒「ありがとう。」

パツと花が咲くような笑顔。そんな顔を見て一夏は顔を赤くしてソッポを向いた。

その後は平常心を保つために一夏は授業に集中した。

### 第13話 昼休み

昼休みIS学園屋上で一夏、箒、セシリア、鈴、シャルルがいた。

なぜこんなにもいると一夏と箒がセシリアと鈴に捕まったからだ。ガールズの方はというと、英と中がにらみ合い、英と中は目をにらむ。日はそれに気づかず満点笑顔。これだから日は危機管理能力が無いと言われるのだ。ちなみに3人ともお弁当を持っている。

シャルル「いいのかな？僕がここにいて？」

一夏「いやいや、男同士仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこう。」

どっちかと言うと助かるし、と心の中で呟く。まあこの馬鹿にあんな空気耐えられるはずもなく現在シャルル達がいてくれた事により平常心を保っている。

シャルル「ありがとう。一夏って優しいね。」

一夏「あ、ああ。」

いきなり女の子みたいな無防備な笑顔でドキリとしてしまう一夏。少し罪悪感が湧いた。

鈴「な～に照れてんのよアンタ。」

一夏「いや、別に照れてねーよ。」

鈴「ふーん。」

少し不服そうな鈴。

鈴「はい、一夏弁当。」

そう言つてタッパ―を投げる鈴。中身は酢豚だ。

一夏「おお、酢豚だ。」

鈴「そ、今朝作ったのよ。アンタ前食べたいつて言つてたでしょ。」  
セ「コホン、コホン。一夏さん、わたくしも今朝たまたま偶然何の因果が早く目が覚めてしまひまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければどうぞ」

一夏「ほんとか？じゃあ二つもらい。」

そう言いながらサンドイッチをほおばろうとする一夏。しかしこのサンドイッチ、卵サンドのはずなのに何故かバナラの匂いがする。たぶん気のせいと思いつつ再度ほおばる。

一夏「うぐっ！！」

セ「どうですか？なんならいっぱい食べて下さいな。」

一夏「い、いやー後にするよ。」

実はセシリア料理がからつしき駄目で曰く『本の（絵）どうり作るのでは無くて？』らしい。ああ、哀れ一夏の優しさは自分を苦しめる。そんな中いまだに一言喋らず笑顔で弁当を持っている篤さん。

一夏「篤はどうなんだ？」

篤「うむ、私はこれだ。」

弁当を開けると中には色とりどりの料理が入っており、特にこの唐揚げが良い色を出していて食欲をそそる。ちゃんと健康のバランスが考えてある所がより素晴らしい。

一夏「おお、すげえなこりゃ、ものすごく手が込んでそうだ。」  
箒「大丈夫だ。高々3時間だ。」

一夏「さ、3時間？」

箒「そうだ。3時間だ。」

全員啞然。特に驚く所は箒がそのことに全然気にしてない事だ。

箒「ど、どうしたのだ、一夏。もしかして食べたくないとか…」

箒は一気に泣きそうな顔になる。それを見て慌てて一夏は

一夏「いやいやいや！大丈夫だから！だから泣くな！」

箒「そ、そうか。では早速食べてくれ。」

一夏「ああ、いただきます。」

そう言つて唐揚げを頬張る一夏。それを緊張と不安で見える箒。

一夏「おお、うまい！」

そのままもう一つ唐揚げを頬張る一夏。

一夏「これって混ぜてあるのはシウガと醤油と…なんだっけ？絶対食べたことあるんだけど。なんだろう？」

箒「おろしニンニクだ。それとあらかじめコシヨウを少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな。」

一夏「へえ！それはいいな。今度俺もやってみよう」

一夏「そっぴや箒。自分の分は？」

箒「？自分の分??」

一夏「いや、だからだな。自分の弁当は？」



箒「そんな物必要か？」

箒はこれを照れ隠しや冗談ではなく本心からそう思っているようだ。その事実には驚き呆れる一夏。『またか。』と。

一夏「箒。」

箒「何だ、一夏？」

一夏「はい、あ　ん。」

とりあえず箒に何か食べさせようと考えた結果が『はい、あ　ん。』らしい。まあ、そんなことをしたら面白くない人が2名ほど。

セ鈴「あ　　！！」

そんな声を無視して一夏は箒に唐揚げを『はい、あ　ん』をする。箒は少し顔を赤くし無言でその唐揚げを食べる。そんな様子を見てブロンド貴公子が一言。

シャルル「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あ　ん』っていうやつかな。仲睦まじいね。」

シャルルはそう言って納得したように微笑む。その言葉で虎とドラゴンが食ってかかる。

鈴「だ、誰がつ！何でこいつらが仲いいのよ！」

セ「そつ、そうですわ！やり直しを要求します！」

言いたいことは分かるが言っていることは一夏と箒が仲悪いと言っている様なものだ。ちなみにシャルルはそんなふうに接近されても笑顔を絶やさない。…お前本当は日本人だろ。

シャルル「うん。それならこうしよう。みんな、一つずつおかずを交換しようよ。食べさせあいっこならいいでしょう?」

一夏「ん? まあ、俺はいいぞ」

鈴「ま、まあ一夏がいいっていうならね。付き合っただけてもいいけど。」

セ「わたくしは本来ならばそのようなテーブルマナーを損なうようなことはしませんは『郷に入っては郷に従え』ですわね。」

鈴「つと言っ訳で一夏! はい、酢豚食べなさいよ酢豚!」

セ「一夏さん! サンドイッチもどうぞ! 一つといわずどうぞ全部!」

鈴セ「さあ」

鈴とセシリアは自分の食べ物を一夏に近づける。一夏はその事に色々と困った。

そんなこんなで昼休みが過ぎていく。

## 第14話 Blue days / Red switch

パンッ！という音がアリーナに響き渡り、火薬の匂いが鼻にこびりつく。これで12発目。目標にはいまだに一発も当たっていない。

一夏「……………」

シャルル「……え、え　と一夏？もう一回撃ってみようか。」

現在一夏とシャルルの恰好は一夏がシャルルの銃を構え、それを後ろからシャルルが支えている状態だ。その恰好でも真直ぐに進むはずの銃弾は何故か上に飛び、横に飛び、拳銃自分がいる方向に飛んできた。そう一夏は遠距離系の武器（投げ道具を除く）を使うと何故か変な方向に飛ぶのだ。ちなみに何故こんな事をしているのかというと、昨日の夜シャルルが『訓練一緒にしていい？』と言われ快く承諾。それにシャルルは解説や説明がうまくいままで（自称）コーチをやっていた鈴とセシリアに比べ分かりやすく良かった。

……ちなみにその時（自称）コーチ達の感想は

鈴『あんなにわかりやすく教えてあげたのに、なによ。』

セ『わたくしの理論整然とした説明の何が不満だというのかしら。』

と言われても一人は『感覚よ！』と説明、もう一人は『防御…以下略』と説明している…

のだが銃の使い方のことで講習をしてもらい『じゃあ、実際に使ってみよう』って話になり、撃っていたのだが…

シャルル「…一夏は銃が駄目なんだね。じゃあどうしてセシリアさんの攻撃をあんな簡単に回避できたの？」

一夏「ああ、それは師匠の修行の一環で『本物の銃を避ける。』ってことで全方位から銃を撃たれまくったんだよな。」

シャルル「へ、へー…」

シャルル啞然、たぶん心の中では『一体どんな人何だろ、せんせいって…』と思っっているに違いない。そんなことをしている矢先、アリーナが急に騒がしくなる。ピットから黒いISが出現する。

「ねえ、アレって…」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ。」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど…」

ラ「……………」

そこにいたのは『Schwarzer Regen（黒い雨）』を身に纏ったラウラ・ボーデヴィヒが佇んでいた。その目は一夏を見ている。

ラ「おい。」

ラウラがオープン・チャネルで一夏に話しかける。

一夏「…何だ。」

ラ「私と戦え。織斑一夏。」

一夏「いいぜ、そっちの方…バシンッ！！…っていった！何すんだよ第！」

そこには木刀を持ちムスツとしていた第がいた。

第「いゝちゝか」。何時の間にお前はそんなに喧嘩ばやくなった。大体周りを見る。他にも人がたくさんいるだろ。こんな所で戦ったら他の人が怪我をする。それでも分からないなら、『お説教』だぞ。」

一夏「ハイ、スミマセン、第さん。」

第「うむ、分かればいい。」

完全に第の尻にひかれている。そんな様子を見てラウラが舌打ちをする。

ラ「おい、そのJAP、折角あと少しで戦えたというのに邪魔するというのなら貴様から……」

第「ラウラ・ボーデヴィヒ、お前はそんなことを千冬さんから習ったのか？」

第は唐突にそんなことを言い、ゆっくりとラウラを見る。ラウラは第の目を見て若干、眉を顰める。だがラウラが気になったのはそんなことではない。

ラ「貴様。今、何と言った。」

ラウラから強力な殺気が出る。その様子を見ていた周りのギャラリィから「ヒッ!」という声さえ聞こえる。それを真正面から受けている第は決して目を逸らさない。

第「何度でも言う。お前は千冬さんからそんなことを習ったのか？」

ラ「貴様……」

ギリッと奥歯を軋ませる、ラウラは堪忍袋が切れたのか、右肩に付

いていたレール砲を箒に照準を合わせる。

そのまま巨大な音を出しながらレール砲を照射、箒に向かって、オレンジ色の球体が飛ぶ。直撃コースだ。

間に合わない、そう誰もが思った。だが、

一瞬。

そうとしか言えない速度で、オレンジの3メートル級のシールドが箒の前に現れ、飛んできたオレンジ色の球体を阻み、オレンジ色の球体はシールドに衝突し火花を散らしながら上方へと飛んでいく。そのシールドを出したのは…

シャルル「ISを装備していない人に攻撃するなんて、ドイツには常識というのが無いのかな。」

ラ「どいつもこいつも…、ふん、まあいい。興がそれだ。織斑一夏、『篠ノ之箒』、次会ったら貴様ら両方とも叩きつぶす、絶対にだ。」

そう言つてラウラはアリーナから立ち去る。

一夏「大丈夫か！箒、シャルル。」

シャルル「大丈夫だよ。一夏、それよりも…」

一夏「あ、ああ。」

一夏とシャルルが心配していることそれは箒がラウラの標的にされたことだ。

箒「大丈夫だ。一夏、心配無い。あいつとは元々話したいと思ってた。」

一夏「箒…」

箒「安心しろ、一夏には絶対に迷惑はかけない。それにそろそろアリーナが閉まるだろ。今日はもう終わりにしよう。」

そう言つて箒はアリーナからでる。そう意味じゃないんだが…と一夏は言いたかったのだが、箒がさっさと出て行ってしまったのでその事を言えなかった。

第14話 Blue days / Red switch (後書き)

報告・9月26日～30日まで忌々しい学校行事によって更新ができません。

申し訳ございません。



## 第15話 Romain 女

男更衣室

そこにはさっきのことで座りながら少し考え込んでいた一夏がいた。そこでシャルルは心配になり声を掛けた。

シャルル「一夏、大丈夫？」

一夏「ああ、さっきは助かったよ。サンキューなシャルル。」

一夏は立ち上がり制服に着替え始めた。それに合わせシャルルは上着を羽織り寮に戻ろうとする。

シャルル「じゃあ、一夏。僕は先に戻るね。」

一夏「おう、俺は山田先生の所に書類書きに行かないといけないから先にシャワー使つといてくれ。」

シャルル「うん、分かった。」

そう言つてシャルルは先に更衣室を出て行った。

シャルル「………………。はあ……………」

寮に帰り自室で一人になるとシャルルは溜め込んでいたものを吐き出すように息を漏らした。無意識に出した溜息は思ったより深く、シャルル本人が驚く位だ。そしてふと、さきほどの一夏と筈の会話を思い出す。

シャルル（…いいなあ、篠ノ之さんは、一夏にあんなに心配されて…って何で『私』こんなに苛々しているのだろ…）

こんな気持ちをどうにかしたい。あの光景を思い出して自分が無性に苛々しているのをどうにかしたい。

シャルル（…。シャワーでもして気分を変えよう）

そう思いシャルルはクローゼットから着替えを取りだし、シャワー室に入った。

一夏「はー、終わった終わった。」

一夏はそう言いながら自室に戻る。書類の方は実を言うと名前書くだけだったのでそれほど時間は掛からなかった。

一夏「ただいまー。ってシャルル？シャワーか？」

一夏（そーいやシャンプー。切れてたんだっけ。）

そう思い一夏はクローゼットから替えのシャンプーを出し、それを持ち洗面所へ向かう。

一夏は洗面所のドアノブを捻り洗面所の中に入ると丁度シャワーの中から人が出てきた。

………ただし、その『人』は女なんだけど………

「い、い、いち……か………？」

そのままお互いフリ　ズ。そしてその裸姿を固まりながら凝視していた。一夏の鼻から不意にドロツ、と赤い液体（迸る青春の何か）が溢れ出す。

一夏（あ、何かデジャブ…）

一夏がそんなことを思っていると女の方がその液体によって現在の状況を理解し

「きゃあ！」

と叫びながら自分の裸体を隠す。そしてそれを見た。一夏はとりあえずシャンプーを置きそのまま退散し始める。

一夏「し、失礼しましたー。」

一夏はそう言いながらドアを閉める、次に一夏が考えた行動は…

一夏（ふー、さて、どんなふうに土下座しよう…）

『どんなふうに』が非常に気になる様で知りたくないような気もしないでもない。

そんなこんな事をしているとゆっくりと洗面所のドアが開く。

「い、一夏？何しているの？」

シャルル（仮）が最初に見たのはドアの前で、一夏がとても綺麗な土下座をしていた。

一夏「すいませんでした。」

シャルル「う、うん。とりあえず顔上げよ、一夏」

一夏が顔を上げるとそこには胸元が開いている女子だった。

シャルル「とりあえず、座ろうよ、一夏。」

そう言つてシャルルがベッドに腰掛ける。その言葉に応じ一夏は椅子に座る。そこで一夏は気になっていた話題に切りだす。

一夏「なあ、シャルル。何で男のフリなんかしていたんだ？」

シャルル「それは、その……実家の方からそうしろつて言われて……」

一夏「実家つていうとデュノア社……！まさか……本当はその家の子じゃないとか……」

シャルル「うん、半分正解。僕はね愛人の子なんだよ」

一夏はその事実絶句してしまった。シャルルはそのまま顔を曇らせながらゆっくりと話を続ける。

シャルル「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんが無くなった時にね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でIS適応が高いことがわかって、非公式ではあつたけれどデュノア社のテストパイロットをやることになつてね。」

シャルルはその事実を言いたく無かつたのであろう。それでも健気に紳士に喋る。一夏はその言葉を一字一句聞き逃さず黙つて話を聞く。

シャルル「父に会つたのは2回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別宅で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときはひどかつたなあ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘

が！』ってね。参るよね。母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね。」

そう言つてシャルルは愛想笑いをする。一夏は今の心境は

一夏（こいつも、こいつも大人達の欲望にやられて…）

自分の幼馴染を思い出す。彼女も大人達のくだらない欲望のオモチャにされているのか、そのせいで幼馴染は欲を失い、それどころか、一時期一夏以外全てのものが認識できなくなつてしまった。今、一夏は怒りと『彼女を救いたい』ということでいっぱいになっていた。…あんな姿もう2度と見たくない。

シャルル「…とまあ、そんなところかな。でも一夏にはばれちゃつたし、きつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ…潰れるか他の企業の傘下に入るか、どの道今までの様にはいかないだろうね。僕にとってはどうでもいいことかな。」

一夏「……………」

シャルル「どうしたの一夏？何だか顔怖いよ？」

一夏はいきなり顔俯きながらシャルルの肩を掴む。

シャルル「い、一夏？」

一夏「…いいのか、それで？」

シャルル「え……？」

一夏「それでいいのか？いいはずないだろ。親がなんだっていうんだ。どうして親だからって子の自由を奪う権利がある？おかしいだろ！そんなものは！？」

シャルル「ど、どうしたの？……」

シャルルが困惑と怯えた声で一夏に話しかける、だが一夏はそんなことは一切無視し感情をおもいつき前にだし、ただ、ただ続ける。

一夏「親がいなけりや子供は生まれない。当然だ。でも、そんな理由で子供をましてや親がオモチャにするなんて、俺達だって自由に生きる権利があるはずだ、親だからって大人だからだって言っている、利用し騙し苦しめるなんてそんな間違っている！」

一夏はそう言っていることに気づく

一夏（そうだ、これはきつとシャルルのことを言っているんじゃない。たぶん自分のことを言っているんだ。）

シャルル「ど、どうしたの？一夏、変だよ？」

一夏「あ、ああ悪い。それよりもシャルルはこれからどうするんだよ？」

シャルル「たぶん女つてことがばれたから、本国に呼び出されてIS管理の査問科に審議されるんじゃないかな、よくて牢屋行きじゃないかな」

一夏は齒軋りする、仲間がこんなにも悲しんで苦しんでいるのに自分は今どうすることもできないことに、ふとあることを思い出し、一夏はすぐに椅子から立ち上がり、かばんの中から生徒手帳を取り出し、急いでそのページを捲り一夏はシャルルにそのページを見せる。

一夏「シャルル、これを見る。」

シャルル「こ、これは…」

その内容はIS学園の特記事項だ。そこにはシャルルに他のものか

らの介入は不可能という内容だった。それを見たシャルルは一度驚き、そして今度こそ愛想笑いなんかじゃなく心から安らいだ顔で笑った。一夏はその笑顔を見て急にドキドキし始める。

シャルル「一夏。」

一夏「…！な、なんだ？」

シャルル「ありがとう」

今までの紳士的な物の感謝ではなく心からの感謝。それを一夏は何故だか感覚的に理解し自然と一夏は笑みをこぼした。それにつられてシャルルは再度、笑みを浮かべる。

と、そんなことをしていると、少し大きめにドアを叩く音が響く。

一夏は慌ててシャルルをベッドの布団にかけて隠す。ドアを叩いて入ってきたのはセシリアだ。

セ「一夏さん、一緒に夕食はいかがですか？…ってどうしたんですかお二人とも？」

一夏とシャルルの恰好はシャルルが布団を被りその上を一夏が乗っかっている状態だ。

一夏「い、いやシャルルが風邪をひいたからな布団を掛けてやったんだ。」

シャルル「ごほごほっ」

一夏はものすごく胡散臭い言い分をする。シャルルは聞けば絶対に騙されないような咳き込みかたをする。

やはり厳しいか。

二人は同時にそう思うが・・・

セ「そうです…では、仕方ありませんわね。シャルルさんお大事に。」

一夏シャルル（あ、騙されてる…）

恋する乙女は盲目という言葉で二人は知らないのだろうか。なにはともあれセシリアは一夏の手を巻きつけ（あえて胸をおしつけて）移動を開始。

セ「では、いきましょう。一夏さん。」

一夏「お、おう（ちょ、セ、セシリアの胸が…）」

そうして赤くなって軽く固まってるのと、すっごく喜びのオーラを出す奴、二人は部屋から出たっていった。



## 第16話 それぞれの思い（前書き）

すみません更新が遅れました。ちなみに明日から10月まで更新は出来ないので注意してください。：感想がぽつぽつと増えてきている。ヤッホー！！！！

## 第16話 それぞれの思い

星がきらめく夜の中一人の少女が日本刀を鞘に入れながら練習用の木の棒の前に立っている。少女は一瞬のうちに刀を抜き、木の棒を横に切り裂く。そしてもう一度刀を鞘に戻す。その少女は篠ノ之箒だ。箒は今日のアリーナでのひと悶着を思い出す。まず最初に思い出したのはラウラの目だ。あの目は箒は知っている、いや箒だからこそ人一倍にその目を知っているのだろう。

箒（あの目は…昔の私だ。強さという意味を勘違いし悲しみにくれた…。）

箒は目を閉じる。『とある出来事』の後に起きた最悪の事件を思い出す。

『大丈夫、君のお母さんとお父さんは帰って来るよ』

泣いている箒に青年は語りかける。箒はその言葉を聞き顔を上げる。

箒『ほんとに…？とおさんとかあさんがかえってきてくれる…？』

『ほんと、ほんと。君の『力』を行使すれば』

青年は張り付いた笑みで箒に語りかける。…その後の光景は箒はあまり覚えていない。でも覚えているのは自分が青年の言う『力』を行使し、『生命体』を作り出し地獄を作った。そうとしか覚えていない。

箒（私は教えないとあいつに強さの意味を…）

そう思いながら箒は目を開け、再度目を閉じた。

一夏はゲッソリしながら自分の部屋に戻ってきた。何故ゲッソリしているのかというつぶつちゃけ、自分の理性を保つために精神をすり減らしたからだ。

シャルル「だ、大丈夫！？一夏？」

一夏「あ、ああな、何とか…それよりもシャルル。お腹空いてるだろ飯持ってきてやったぞ。」

シャルル「ありがとう。一夏。」

ちなみに飯とは和食定食だ。その定食をシャルルは受け取りお箸で食べようとするのだが…

シャルル「あ…」

箸がうまく使えずサンマの切り身を落とす。

シャルル「あ、あ…」

再度、箸がうまく使えず切り身を落とす。

一夏「えーと、もしかして箸使うの苦手か？」  
シャルル「うん、練習してるんだけど…あ…」

何だかその光景が可愛そうになった一夏はスプーンをもらいに行こうとするが

シャルル「いや、いいよ。一夏には迷惑かけたくないし。」

一夏「はあー」

一夏はものすごく呆れかえったような溜息をする。何かを遠慮する光景、自分のファースト幼馴染で何度も見てきているからか

シャルル「な、なにな。その『又か』みたいなため息は」

シャルルがそう言っていると一夏はシャルルの両手を勢いよく掴みシャルルに顔を近づける。

一夏「なあ、シャルル。お前ももつと誰かに頼ることをしようぜ。俺はお前の味方なんだからさ」

シャルル「…は、はい…」

ちなみにシャルルは一夏に急に手を掴まれ顔を近づけられたので顔の色は絶賛真っ赤かである。シャルルは少し顔を俯かせている。少しして顔を上げ一夏を見ながら頼む。

シャルル「じゃ、じゃあ、あのね、一夏、…食べさせてくれないかな。」

シャルルは上目遣いで一夏に頼みこむその姿を見て一夏は一瞬惚けてしまった。

シャルルはそのまま言葉を続ける。

シャルル「あ、甘えてもいいって言ったから……」  
一夏「お、おう。分かった。」

そうやって一夏はシャルルにご飯を食べさせた。

闇、深い深い闇の中、自身は誕生した。最初に目にしたのはただの闇と科学者達そして周りには自分と同じように緑の液体に浸っているもの達。当たり前の人間は生まれた瞬間光を見るという、だが自分は闇に生まれ闇に生きる。それは今も変わらない。そんな光を一切通さない部屋の中、赤い右目は鈍く光りを放つ

ラウラ・ボーデヴィヒ

それは自分のコードネーム。その名を呼ばれても何も感じない、きつと周りの奴らだってそうなのだろう。だがたった一人だけその名をコードネームではなく意味を持ち発してくれるものその人の名は織斑千冬。

ラ（あの人の存在が……その強さが、私の目標であり、私の存在意義）

最初にあの人の操縦、あり方、振る舞い、全てにおいて自分の心は震え、歓喜し、恐怖し、感動し、感情というのが芽生えた気がした。まさしく光、一条の光。

率直にこう思った、『ああ、こうなりたい。』つと。それによりラウラ・ボーデヴィヒの全てが『満たされる』という感覚に陥った。けれどその光には一つだけの汚点物、それはあの男 織斑一夏。故に潰す。そしてあの女 篠ノ之箒も。あの女の言葉、特にその目、まるで今の自分が否定されている様な錯覚に襲われた。

ラ（まず先にあの女から潰す。）

自分を否定したあの女を消す。そしたらあの男も黙っていないだろう。きっとあいつは舞台に立つだろう。その時は

ラ（排除する。たとえどのような手段を使っても）

闇という眠りに付くその目は暗い孤独と深い妬みの目の火が灯っていた。

## 第17話 ラウラVS第(前書き)

やあ、学校から解放されようやく更新できるようになった村人aです。気づいたらちよくちよく感想が増えているのもものすごくうれしい。

## 第17話 ラウラVS箒

へ　これが君たちの言ってた『Plan・AI』　か、おもしろいね。

で、今回の依頼はこの計画に関係すること？あーなるほど、なるほど。

で僕はそのコアを回収するんだね。

ていうか君たちは凄いね。

ドイツにこんなもの仕組んだ上に目の上のタンコブの研究所まで破壊するなんて、用意周到だね。

少しは頭が回るんだね。

あいつもこれを見越して学園に送ったのかな？

まあ何にしても今回の依頼はそのコアを回収するんでしょ、まかせてよ。

余裕だしね。

時間は放課後、第三アリーナ

そこで『打鉄』を纏った箒がそこにいた、今は箒が早く来すぎたので誰もいない。

箒は軽く『打鉄』を動かし始める。最初に飛行から始め次に移動と次々とISの基本操作をしていく　しかしその一連の行動は一発のレール砲によって遮られる。砲弾は砂埃を起こしながら勢いよく箒に向かってくる、当たれば間違いなく『絶対防御』が発動する威力だ。

箒は一直線に來た砲弾に対し軽く焦りつつもすぐに冷静になり、右



上に飛んで避けるという緊急回避を取る。避けられた砲弾はそのまま地面に着地し穴をあけ砂埃を起こす。箒はその砲弾を撃った張本人を睨む。

箒「どういつつもりだ。いきなり攻撃してくるなど。」

ラ「ふん、挨拶代りには丁度いいだろ。篠ノ之箒、私と闘え」

箒はその言葉を聞いた瞬間『打鉄』の近接ブレードを展開、構えを取りラウラに対し威嚇する。

ラ「ふん、そう言いつつも展開したではない、かつ！」

箒「なっ！」

ラウラはそれを戦う意思ありと判断しワイヤーブレード展開、赤黒く先端は黄色い四角い形の刃がある6本のワイヤーはラウラの背後から排出してきて縦横無尽に駆け回りながら箒に向かう。箒は驚きつつもすぐに意識を戦闘に向ける。

箒は最初に向かってきたワイヤーは顔に向かってきたので顔を傾けて避け、次は箒の脇払いを狙い襲う、それに対し箒は体の重心を右にかけて避けるが、残りのブレードが動けない状態を狙ったかの如く同時に箒の右手と左足を狙う。

箒は避けようとするが先ほど避けたワイヤーがそのまま伸びた状態にあり、箒の動きを邪魔おし襲ってきているワイヤーが避けることができない。

向かってきたワイヤーは箒の腕と足に直撃する。

箒は後ろにのりけようとするが、避けて虚空を飛んでいたはずのブレードが風を切りながら急激に曲がり始め、追い打ちを掛けるかのように箒の背中を同時に突き刺す。

箒「かはっ！」

肺の近くにブレードが突き刺さり、息が一瞬でなくなる。

そしてブレードは箒から一度、縦横無尽に駆け回り箒を離れ、ゆつくりと前に倒れこんでいる箒に対し、全てのブレードは箒に止めをさすために一斉にその倒れこんでいる背中に もはや虐待をするために 落ちてくる。

少し時差を開けつつブレードは箒に集中砲火する、ブレードの影響により砂埃が起きアリーナに穴が開く。

そうして箒は少しも動かなくなる。

それを確認したラウラは、ブレードを全て仕舞い、箒に背を向けISを展開しながらアリーナを出ようとする。

ラ「ふん。」

ラ（これであの男も俄然、私と闘う気になるだろう…）

ガチャリ。

と機械がこすれ合う音が響く。その音はゆつくりと、そして確実に増えていく。その音はラウラの後ろから響いている。

ラ（…まさかっ!?!）

ラウラはすぐに後ろを振り返る。

その音を出していた張本人は箒だ。

ラウラはその光景に啞然とする。ラウラはあそこまで完膚無きまでやられたならこの学園にいる甘ちゃんどもなら心も体も、完全に叩きのめせるはず。

そのはず。だが、箒は今もゆつくりと立ち上がるうとしている。その目には今だに闘争の炎が点いている。ここまでの実力差を見せつけられても、なお、『立ち上がる』。

体はボロボロだが、心は未だに傷一つ、ついていない様子だ。  
箒は驚いているラウラにゆつくりと少量の血を口から出しながらゆつくりと震えながら唇を動かす。

箒「…やはり、『弱い』、な…こんな…もの、痛くも、痒くも…無い…ぞ。」

そう言いつつも箒の体は体中、痣だらけで、『絶対防御』もすでに発動済み。足取りもどこか不安定で、何時倒れてもおかしくないような状態だ。医者が診たらきつとすぐに治療を始めるだろう。

そんなにまでやられてもラウラを『弱い』と称する。

ラウラは『弱い』という言葉に激しく動揺する。本来ならそんな言葉、この状況で言われてもいつものラウラなら鼻で笑い、一蹴していただろう。では何故ここまでラウラが動揺しているのか、それは箒の『目』だ。強力な信念を宿したその目にラウラは動揺している。その目を見、自分が酷く醜く見える。

箒は再度、唇を動かす。

箒「お前の…『強さ』、は…ただの、力だ…」

ラ「黙れ…」

箒「そんな、もの…強い、とは、言わない…それは…自分…を」

ラ「だまれ、だまれ、だまれだまれだまれだまれだまれだまれだまれ！」

ラウラはそう絶叫しながら『瞬時加速』でゆつくりと近づいてくる箒に弾丸のように接近。そのまま箒の首を掴む。

ラ「貴様だけは…貴様だけは！」

ラウラは箒を上を持ち上げながら箒の首を締めあげる。それでも箒

の目に光は消えない。それとは対照的にラウラの目は酷く不安定で、どこか怯えているように見える。

その時、蒼い一筋の閃光が箒の首を締め上げていたラウラの手に向かって突き進んでくる。

ラウラはその攻撃に気づき、掴んでいた箒をハンマー投げの様に思い切り投げ飛ばす、箒はそのまま地面に勢いよく衝突。

ラウラはすぐにやってきた閃光に意識を集中し手刀を展開し、横に弾く。

閃光は一撃だけでは止まらず、空中から四方八方にまるで踊る様にピットが駆け巡り、そこから連続してレーザーがラウラに向けて撃ち込まれる。

ラウラもそれに反応、ダメージがありそうなものは手刀で弾き、残りは多次元に飛びまわり回避していく。

これらの攻撃を行ったのは…

セ「いい加減になさい！あなた専用機持ちなのでしょ！？そのようなことをして恥ずかしくありませんの！？」

セシリアだ。そういつて『スターライトmk?』でラウラに照準を合わせる。

ラ「……」

ラウラはいったん立ち止まり、完全に冷めきつた目でセシリアを見つめる。そうしている間、風を切り裂きながらラウラの背後からブーメランのように飛んでくる『双天牙月』が首を狙い出現した。ラウラはレール砲を後ろに向け『双天牙月』を撃ち落とす。

鈴「なんか面白そうなことやってんじゃない。私も混ぜてくれないかしら？」

セ「鈴さん。篠ノ之さんは？」

鈴はその言葉に気づき自分の背後を親指で指す。

鈴「大丈夫よ。もう医療班も呼んできたし、それよりも…」

セ「ええ、あっちの方が問題ですわね。」

セシリアは再度『スターライトmk?』を構える。鈴は『衝撃砲』をラウラに対しお見舞いする。

それによりラウラの周りは小規模な爆発と大量の砂が吹き荒れる。おそらく1,2撃は入っただろう。そう、鈴は踏んでいただが、砂埃が無くなっているそこにはラウラが腕をかざし、手を広げながら悠々と立っていた、しかも無傷だ。

鈴「A I C（慣性停止能力）…」

セ「まさかすでに完成していたとは…」

ラウラはその言葉を見殺し、レール砲を二人に向け砲撃、それに気づいたセシリアは空中に飛び、鈴は『瞬時加速』で『双天牙月』の所まで行き『双天牙月』を持ちながら空中へと飛翔する。専用機持ち達による戦闘が始まった。

## 第17話 ラウラVS箒（後書き）

正直もうちょっと箒が立ち上がるシーンは長くてもよかったかなと少し反省。そして戦闘シーンは本当に難しい。

第18話 In the Gong of the soul (前書き)

今回はだいぶ飛ばす！！ やっぱ入れたい部分があるので入れました。すいません。

## 第18話 In the Gong of the soul

場所と時間は変わって保健室、

結局あの後鈴達はある程度の戦闘は行えたが、2対1でもギリギリの接戦であり千冬が来てその場は治まったが…

一夏「箒！大丈夫か！」

そう大声で叫びながら保健室に乱入する一夏、その後ろで若干息を切らしながらついてきたシャルルもいる。

一夏「…つて、あれ？」

一夏が聞いたのは箒はラウラに完膚なきまでやられ重傷だと聞いていたのだが…

箒「？どうしたのだ一夏。そんなに慌てて」

無傷なのだ。完璧と言っていいほどの、そして保健室の中にいたセシリアと鈴に一夏がどうなっているのかと聞こうかとする、先にセシリアが一夏にしか聞こえないほどの声で返答してくれた

セ「それがわたくしたちもよく分からなくて本来なら全治1カ月のはずなんです…」

鈴「目を離れたすきみると回復していくから正直驚いたわ。」

一夏「そうか…」



一夏は何か分からない感じのものがあられを拭えないがとりあえず箒の無事を安堵する。

そして一夏は箒を面と見る。何時になく真剣な顔だ。その事に気づき箒も一夏の顔を直視する。

一夏「箒！」

箒「な、なんだ一夏」

一夏は箒の肩を勢いよく掴む、まるで願う様に箒に語りかける

一夏「お願いだ、箒。もう無茶はしないでくれ、俺はお前が傷つく所なんてもう見たくないんだ・・・」

一夏が見た箒が傷つく所それは『いじめ』だ。一夏は一週間インフルエンザで寝込みそして学校に来た時、箒は学校挙げての『いじめ』にあっていた。この話はまたのちほど（具体的に言うと大体第5...いや、何でもない）話そう何故なら...

まず最初に保健室にある薬品が揺れたそして廊下からまるで動物の大移動の様な音が響き、そしてドアが冗談や比喻ではなく本当にドアが吹き飛んだ。その中からまるで濁流のように女子、女子、女子、女子が入り込んできた。

「織斑君！」

「デュノア君！」

「.....わたしと学年別トーナメント組んで!!!!」「.....」

一夏「ちょ、いきなり皆してどうしたんだ!？」

シャルル「そうだよ、皆、ちょっと落ちて着いて、一体何の話？」

シャルルが女子にそう諭すと女子の一人が一枚の紙を鞆の中から勢いよく取り出し、シャルルの目の前にズイツと近づけられた。

紙の内容は簡単に言うと『今年はペア対抗戦だぜ！あ、ちなみに組めなかったら抽選で』てことである。そこで女子達はここぞとばかりに一夏やシャルルにアタックするチャンスを得たわけだ。しかし…

シャルル「え、えつと…」

シャルルは実は女、もし他の女子と組んでしまったらその事がバレてしまうかもしれない。その事に一夏が気づき一夏はとっさに助け船を出す。

一夏「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ」

一夏のその言葉を聞き女子達はとりあえず納得し各々「仕方ない」といつて保健室を出て行った。しかしまあ、納得できてないのが2名ほど…

鈴「一夏っ！」

セ「一夏さん！」

鈴「あ、あたしと組みなさいよ！幼馴染でしょうが！」

セ「いえ、クラスメートとしてここはわたくしと！」

一夏を締め上げる勢いで近づいてくるセシリアと鈴、結局2人には相手が男だからという理由で納得してもらった（しぶしぶ）

時も場所も変わり対抗戦Aブロック一回戦、選手は

『織斑一夏、シャルル・デュノア』 VS 『ラウラ・ボーデヴィ  
ヒ、篠ノ之箒』

なんと箒とラウラがペア組んでいた。その原因はラウラは誰とも接しようとせず、箒は『人苦手』で一夏以外基本誰とも接しようとなかったので抽選ペアによりこうなってしまったのだ。

ラ「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ。」

一夏「ああ、こっちも同じ気分だ。」

そういつて一夏はラウラの後ろにいる箒を心配そうに見る、箒は『心配するな』というもののすごく不安な目線を送ってきた。そしてラウラはその事に気づき

ラ「ふん、貴様はあの『化け物』のことが心配なのか？」

一夏「なんだと、てめえ」

一夏は本当に珍しく怒りを露わにする。その事に気づきシャルルは一夏を小声で諭し始める。

シャルル「駄目だよ、一夏。相手のペース飲みこまれちゃ」

一夏「ああ、すまん。シャルル一つ提案があるんだ。」

シャルル「何？」

一夏「あいつとサシで戦い合いたい」

シャルル「うん、いいよ」

一夏「え！？意外と簡単にオケー出すんだなお前」

シャルル「うん、正直僕も少しあの子には怒ってるしね。」

シャルルがそう言い終えた瞬間、試合開始のゴングが鳴る、

瞬間

一夏は『瞬時加速』でラウラに接近、シャルルも箒に対しマシンガンを2丁展開し応戦。

ラウラは自分の前に手をかざす、一夏はそのままラウラの手に衝突、本来ならラウラの手はただでは済まないだろう。だが、一夏はラウラの手の目の前でピクリとも動かなくなつた、『A I C』だ。ラウラは止まっている一夏を見て、ほくそ笑む。

ラ「やはり、敵ではないな。この私とSchwarzer Regenの前では、貴様も有象無象の一つでしかない　消えろ」

ラウラはほぼゼロ距離でレール砲を一夏に向ける、チェックメイト（王手）。そのはずなのに一夏は

笑う。

一夏は『白式』を解除し始めた。

ラ「なっ！」

一夏「確かに俺は接近戦しかできないからその武器は強力だ、けど意外性で攻めればなんてことは無い！」

『白式』は未だに粒子の状態で『A I C』に張り付いている。その間に一夏は拘束から抜け出し、再度、『白式』の手の部分だけ展開。左手には刀が握られている。そのまま刀をラウラに投げつける。

ラウラはとっさに刀に反応、それを『A I C』で防ぐ。

当の一夏は一度地面に足を付け、大きく飛にはねて展開されている部分だけでラウラの顔を殴ろうとする。

ラ（くっ！こいつ、確かに意外な攻撃だ、『A I C』の弱点をうまくついてくる。だが、殴るだけで私は止まら…）

一夏はラウラの顔面に力いっぱい殴りつける。そのままラウラは頭から音を立てながら勢いよく地面に叩き付けられる。

一夏は『白式』を展開する。

一夏「これで、箒のはかえさせてもらったぜ。」

戦いは始まったばかりだ。

第19話 ラウルVS一夏／一夏VSラウル（前書き）

今回は全面バトルゆえに反応が怖い・・・

## 第19話 ラウラVS一夏／一夏VSラウラ

頭がジンジンとなり響く、それでもラウラはワイヤーを展開し一夏に攻撃。一夏はその攻撃を防ぐ。そこから立ち上がり、バックステップをしながら一夏から距離を離す。

一夏は地面に刺さっていた『雪片式型』を引っこ抜き、刀を構えなおす。

ラ（くっ！まさかあんな芸当ができるとは！）

ラウラにとっては先ほどの攻撃の威力は完全に予想外。まさかシールドエネルギーで衝撃を打ち消せないほどだとは。

一夏は空を飛び、上空から地上にいるラウラに上下左右に移動しながら突っ込む。

ラウラはワイヤーブレードで応戦。ブレードは縦横無尽に駆け回り一夏を襲う。

まず最初に来た一本目は刀に巻きつき刀を奪おうとする、それに対し『雪片式型』に収納されている『エネルギーブレード』を展開し焼き切る、2、3本目は一夏の背後から現れ一夏を狙う。一夏は『エネルギーブレード』を素早く収納し体をグルリと回しブレードの前に出る。

ブレードは一夏の目の前にでると足を狙っていた2本が左右に急激に曲がる。

曲がったブレードはそのまま真っすぐ行く。

一夏（何をするつもりだ？）

答えはすぐに出た。

残りのブレードが一夏の足に、手に、素早く、ワイヤー独特の音を

出しながら一夏に巻きつく。

一夏（しまっ！）

一夏が心の中で舌打ちする。ワイヤーブレードによって強制的に手と足が広げられる。先ほど虚空へと逃げたブレードが一夏の腹を狙い突き進む。今の一夏に止められる術はない。

一夏にブレードが突き刺さり、強制的に地面に落とされる。一夏は地面に叩きつけられ砂埃が起こる。

一夏「ぐっ！」

一夏の口から少量の血が出る。しかしそのおかげかワイヤーブレードが緩む。一夏はすぐに拘束から抜け出す。一夏は『白式』のスラスター（翼部分）から火を吐き、素早く立ち上がる。

しかし、立った瞬間、オレンジ色の球体が真直ぐと砂埃を起こしながら一夏に向かう。

避けられない。直感でそう感じた。一夏は『雪片式型』の『エネルギーブレード』を展開。展開し終わった直後、目の前に球体が現れる。一夏は武器を構える、球体が刀にぶつかる。刀は球体を切るために、球体は刀を突き飛ばすために、刀と球体はぶつかり合い赤い火花が飛び散る。一夏の両手がしびれ始める、一夏は力いっぱい鞘を握り切り裂こうとする。

一夏「うおお

」！

球体は刀によって切り裂かれ、割れた二つは左右に吹き飛び同時に地面にぶつかり2つのクレーターが出来上がる。なんとか回避できたが両腕が痺れる。

どうやらしばらく使えなさそうだ。



ラウラは再度、  
レール砲を放つ。

一夏はスラスタの火を出し横に緊急回避する。

一夏「くっ！」

「どうした！さっきの様な芸当はもうしないのか！？」

ラウラはワイヤーブレードを操りまるで弓の矢のように連続して二夏を狙い続ける。一夏は手の痺れが取れるまで回避に専念する。

しかし、一夏だって遣られてばかりでない。一夏は痺れが取れたのか刀を突きのに構えなおしラウラに突撃。ラウラはワイヤーブレードを自分の前で束にして応戦する。

ブレードの束と『雪片式型』が衝突する。

兩者拮抗。

2つの武器の間に火花が散る。お互い一瞬でも集中力が切れれば負ける。

ラウラはこの束が破れた瞬間、一夏がく零落白夜を發動されればいくら『A I C』やエネルギー手刀があろうともそれごと切り裂かれ一発アウトだ。

一夏は『雪片式型』が吹き飛ばされればワイヤーブレードの束に飲み込まれ蜂の巣にされてしまう。

お互いがお互い譲れない、この罅迫り合いでこの戦いのケリがつく。

一夏「う」

ラ...

「夏う」「うおおおおおおおおおおおおお！  
「！」「」

両者、負けじと絶叫し鏢迫り合う。武器も自身も限界。そして先に相手の懐に入ったのは

一夏だ。

一夏はそのまま突きを決めラウラを後方へと突き飛ばす。そして止めを刺すために：

白『<零落白夜>発動』

その言葉とともに一夏の体全体が黄金のオーラを放つ、一夏は『瞬時加速』を発動。

『一字流』の技『岩石切り』でラウラを切り裂く。

この攻撃によりラウラの機体は壊れ、絶対防御も破壊される。

この戦い一夏の勝ちだ。

ラ（Verliere ich! Warum tut! Warum verliere ich einen Mann wie diese Nanter!）

：わ、私は負けるのか！？何故だ！何故あんな男に負けるなんて！：

ラ（Win meinen Reisen Passagiere erfordern! Wir können nicht besiegt werden!）

：わたしは勝たなければならい！負けられない！：

ラウラは一夏に切られながらそう思う。幸か不幸かその思いを聞きいれ心の奥から赤い球体が現れる。赤い球体はラウラに語りかける。

『Erzwingen Hey HA, Wo Nozomu Catur?（才前ハ力ヲ望ム力?）』

ラ (Hey, jemand?)

：お前は誰だ？：

『Nicht ein Demogut, w?rden Sie  
e HA ihr? Kraft Wo (誰デモ良イダロ、才前  
ハ欲スルカ?カラ)』

ラ (Unn?tzig zu sagen, es gibt ke  
ine Macht - leere ich meine mic  
h!)

：言うまでもない力があるなら 空っぽの私なんてくれてやる!!!：

赤い球体は液状態となりラウラを飲みこんでいく…

第19話 ラウラVS一夏／一夏VSラウラ（後書き）

ラウラ戦は次回で終了するように頑張ります。

## 第20話 強力な襲撃者 / Charles (前書き)

なんか途中グダグダになってしまった

## 第20話 強力な襲撃者 / Charles

ラ「あああああああ！」

ラウラは張り裂けんばかりの絶叫をする。そしてラウラのISは紫電の電撃を放ちながらドロリとその形を崩し、まるで真黒い泥のようになりラウラを飲みこんでいく。

ラウラを飲みこんだ泥は浮かび上がり形を再構成する。手を作り、足を作り、武器を作り、体を作る。そしてその最後に顔を作る。

その顔の中央には赤黒くそれでいて何処までも透き通っている不気味な丸い水晶が埋まっている。

しかし一夏が最も驚き怒ったのはこの形の『モデル』：織斑千冬の姿だ。

一夏「ざけてんじゃね      ぞ

「！！！」

一夏は声が可笑しくなるほど絶叫しラウラを飲みこんだIS（以下、偽千冬）に何も考えずに突っ込む。

それに気づいたのか偽千冬は武器（刀）を流れるように風を切りながら一夏に鋭い斬撃を繰り返す。怒りで我を忘れた一夏はその攻撃が直撃し『白式』が強制解除される。一夏はそのまま地面にぶつかりながら吹き飛ばされ数mほどの場所で倒れこむ。

一夏（許さねえ。許さねえ。許さねえ！）

一夏は立ち上がり拳を握る。一夏は真直ぐと偽千冬に向かうが、拳を握らなかつた手を掴まれる。一夏はその掴んだ相手を睨む。その相手は箒だ。ちなみに箒はすでに『打鉄』は強制解除されている。

一夏「何しやがる！箒！邪魔するならお前も…」

一夏は箒に手を上げようとする。箒は一夏を見る。決して目を離さず。

箒「…いいぞ、殴ったって。でもそんなの一夏じゃない、一夏はそんな酷いことはしない。一夏、冷静になれ。そんなの一夏が目指した『強さ』か？」

一夏はその言葉に冷や水を掛けられたように固まり、手をゆっくりと下げる。

一夏「ごめん、箒。俺どうにかしてた。」

箒「分かってくれたならいい。」

一夏「でも、あいつとあのISはぶっ飛ばす。じゃないと納得いかないし、あいつに言いたいことがある。」

箒「しかし、先ほどの攻撃で『白式』のエネルギーは切れてしまっているぞ。」

一夏「ぐッ…」

一夏は齒軋りする。そこに空中からふわりとシャルルが下りてくる。

シャルル「無いなら持つてくればいいんだよ。でしょ？一夏」

一夏「シャルル…」

シャルル「僕のリヴァイブならコア・バイパスでエネルギーを移せるところ思う。」

一夏「本当か！？じゃあ早速やってくれ！」

シャルル「でもっ！」

シャルルは人差し指をピツと立てる。その言葉もいつもとは強い強く、有無を言わせない様なものだ。

シャルル「約束して。絶対に負けないって。」

一夏「もちろんだ。ここまで啖呵切って負けたら男じゃねえ」

シャルル「じゃあ、負けたら明日から一夏は女装して名前も『千夏ちゃん』ていうふうにしなないとね」

一夏「ヒド！何処の罰ゲームだよ！」

シャルルの小粋なジョークでいつもの調子を取り戻す一夏。

シャルル「じゃあ、はじめるよ。…リヴァイブのコア・バイパスを開放。エネルギー流出を許可。 - 一夏、『白式』のモードを一極限定にして。それで<零落白夜>が使えるはずだから。」

リヴァイブから伸びたケーブルはガントレットに接続され、そこにエネルギーが注入される。

シャルル「完了。リヴァイブのエネルギーは全部渡したよ。」

一夏は『白式』を展開しかし起動できたのは右腕と武器だけだ。防御なし、敵の攻撃を受ければ当たれば即死、運が良くて重傷だ。あとは一夏次第で結果が出る。

一夏の背中が叩かれパンツという大きな音が出る。叩いたのは箒だ。

箒「行つて来い一夏。あいつに強さの意味とことん教えてやれ。まあ、負けたら承知せんがな。」

一夏「箒…。」

箒「どうせ止めたって意味は無いんだ。…だったら自分の思う通りに全力でぶつかりに行け」



一夏「おう！」

一夏は敵の所に向かいながら二人に背中から手を振り敵に立ち向かっていく。

そして今更気づいたのか敵は一夏の方を向く。

一夏「じゃあ、行कुぜ偽物野郎！」

一夏には聞こえなかった。その言葉を言った直後、偽千冬が発した言葉を……

『フン、愚カナル人間メ。コレモ計画道理トモ知ラズニ……』

ようやく、作動したのか。うゝん中々いいデータが取れた。これであいつらも満足……あ、コア回収しなきゃいけないじゃん。さゝとと、どうやら倒されたようだしコア回収しないとね。ふふん、こういう反応しめすか今から楽しみだよ『兄妹』

ラウラを助けた直後、アリーナの中央に突如爆発が起きた。大量の砂埃が起き視界を遮る。アリーナの真ん中は巨大なクレーターができその中央に人影が現れる。徐々に砂埃が収まり人影の姿が見えてくる

人影の形は異常だった。まず体は黒と黄色を基本とし、手は凶暴そうな爪がある。足も人間とは思えない様な爪が伸びている、尻尾も伸びており顔の部分は全体的に刺が6本ありまるでライオンの様な顔だった。

異形の人影……いや、もはや“怪物”であった。

一夏「お前：一体何者だ？」

怪物は自分を指さしながら答える。

「僕？僕は君と『紅巫女』の『兄妹』みたいなものだよ。」

「それで、名前は…『撃て

！！』

怪物が自らの名を語ろうとした直後、教師陣による四方八方によるマシンガンの雨あられが降り注ぐが、怪物の周りに『エネルギーシールド』が発動し全弾防がれる。

『なっ！馬鹿な！』『エネルギーシールド』だと！？』

教師陣に動揺が走る。しかし、動揺もすぐに終わる。

怪物は浮かび上がりそのまま『連続・瞬時加速』の様な移動の仕方  
で教師陣を指揮していた人物に背後から回し蹴りを食らわせる。

「ぐはっ！」

教師の一人が地面に自由落下していくそれを見た怪物はその教師に  
自らの尻尾を発射し教師の体に尻尾を巻き付け地面すれすれの位置  
で止め地面に優しく下ろす。

ほかの教師達も反撃を加えるが、それを見て怪物は笑う。怪物は一  
度、体上半身を胎児のようにくるまり体を大きく広げると同時に黄  
色の円型の波動が全教師に直撃する。

『怯む…な…アwポあ…だgwp.jpw…』

突如『オープン・チャネル』が起動停止になり教師陣のISが全て  
使用不能になりそのままゆっくりと地面に続々と着地していく

その場にいたものが啞然とする。

この間僅か50秒。たったそれだけの時間で圧倒的な力でねじ伏せられる。

一夏は直感する今の自分ではあいつに…

一夏（負ける、確実に負ける。）

怪物は悠然と地面に降り立つ。そのまま一夏に近づく。一夏はゆっくりとラウラをシャルルに預け『雪片式型』を構える。

一夏（もし、こいつらに近づくなら俺がどうなるうと関係ねえとにかく何も考えずに斬る！）

しかし怪物は一夏の近くにある偽千冬の残骸に近づきそしてラウラを支配していたと思われる不気味な水晶を拾い上げる。

「よし、任務完了つと。」

軽い感じで怪物がそう言うのと体全体が黄黒い炎に包まれる。炎が消える、そこには先ほどまで怪物がいたのに今は青年が立っている。しかもその青年どこかで見たことある姿だ。その姿とは…

シャルル「ば、僕？」

そうシャルルの数年後（ただし男バージョンで）の様な姿だ。青年はもう一度一夏の達の方に顔を向ける。

「ああ、先ほどは邪魔が入ってすまなかったね。改めて紹介するよ。僕の名前は『シャルル』よろしくね。」

一夏「一体どういうことなんだ、俺達が『兄妹』なんて。それに何なんだ？『紅巫女』って！」

一夏は叫ぶ。シャルルは笑いながら説明する。

シャルル「『兄妹』ていうのはこういうことだよ。」

シャルルは自分の胸部分を思いっ切り殴りつける。シャルルの胸部分から黄色の光が輝き出す。それに合わせるように『白式』から金白い光が放たれる。

一夏（アイツと『白式』が共鳴している！？）

シャルルは再度自分の胸部分を殴るそれによって光が消える。それと同時に『白式』も光が消える。

シャルルは歌う様に指を回しながら説明を始める。

シャルル「どう分かってくれた？僕達『才…

ピリリと携帯の音が鳴る。シャルルは少しむっとした感じでスピカモードにしながら電話に出る。

シャルル「はい、なんだい今楽しく解説してたのに」

『いいすぎだ。もう目的の物は回収できたのだからさっさと戻れ。じゃないと『例のもの』は渡さんぞ。』

シャルル「えっ、嫌駄目だろ！僕の猫じゃら・・・間違えた『例のもの』を取り上げるなんて完全死活問題じゃないか！」

『…だつたらとつと戻れ。迎えも用意した。とつと帰ってこないと猫じゃらしは渡さんぞ。』

シャルル「言った！こいつ僕が必死に隠してたのに、包み隠さず言

いやがった！つてもう切ってるし！」

一夏シャルル箒「……………」

一夏とシャルルと箒は微妙な顔になりながらシャルルを見る。今までのシリ阿斯ぶち壊しである。シャルルはとりあえず質問する。

シャルル「えーと猫じゃらし好きなんですか？」

シャルル「I Love…いや、何でもない。」

どうやらものすごく好きなようだ。

…そんな事やっていると何も無い空間からIS？らしきものがいきなり出てきてシャルルの肩を掴む。

シャルル「おっと、お迎えが来たようだ、じゃあまたね『兄妹』」

一夏「て、おい！まちやがれ！」

そう言つて完全に取り残された一夏、シャルル、箒を置いて謎のISとともにその場から消えた。

## 第21話 I Love y u (前書き)

今回の話は完全にグダグダです。…やっぱりギャグよりシリアスが向いてる。

## 第21話 I Love y u

『トーナメントは襲撃事件により中止となりました。ただし

一夏は学食のテレビを消す。ちなみに今回の襲撃事件によって試合の行われていたアリーナの部分だけ完全にクラッキングされた（そのせいで千冬や山田とは通信を取れなかった）その上に教師陣の半数が撃破され、世間的にはIS学園の評価はダダ下がりだ。

一夏は無言で海鮮塩ラーメンを啜る。シャルルはそれを心配そうに見る

シャルル「い、一夏．．．今回のことはその．．．あんまり気にしない方がいいよ」

一夏「あ、ああごめん。シャルル」

シャルル「うん、いいよ。別に気にしなくて」

一夏「でも俺、今回の事でもっとISのこと知らなくちゃって思った。ほら俺ってさ、師匠に徹底的に鍛えられてさ、別にISの基本動作ぐらいでいいだろうって今まで思ってた。．．．はは、完全に天狗だな。師匠に聞かれたら絶対シバかれるな。．．．もっと強くないといけないな、俺は。」

シャルル「じゃあ、明日からもっと訓練厳しくしないとね。」

シャルルは一夏に顔を近づけてものすごく可愛く美しい笑顔だった。

一夏「お、おお、ありがとう」

一夏は恥ずかしくて顔を掻き目を逸らす。それを見たシャルルは再

度笑う。

…それにしてもさっきから女子達がひどく落胆しているのだが…

「…優勝…チャンス…消え…」

「交際…無効…」

「…うわあああああんっ！」

泣きながら数十名の女子がプロランナー並の速さで泣きながら学食から去っていく。

シャルル「どうしたんだろっね？」

一夏「さあ……？」

一夏とシャルルは完全に先ほどの状況は理解できなかった。

…ちなみに今回の事件の当事者の一人篠ノ之箒さんは

箒「…まあ、いつか…」

なんか諦めていた、そのつぶやきを幸か不幸か一夏は聞いてしまった。そして一夏は思い出す。箒とした（一方的な）約束のことを…別に忘れてた訳では無いが…

一夏（もう、逃げちゃ駄目だな。）

一夏はそう思い席を静かに立ち上がり箒にゆっくりと近づくと、そして一夏は箒を呼ぶ

一夏「箒。」

箒「うん？どうしたんだ、一夏？」



一夏は箒を見ながら直角90度で頭を下げる。それを見てシャルルや残っていた女子が驚く。

一夏「ごめん！箒！ああいうのは初めてだから今の俺にその答えはまだ出ない。でも、今度から『幼馴染の篠ノ之箒』じゃなくてお前のことちゃんと『篠ノ之箒』として見るから、それに答えも必ずこの3年間で出す。だから…今は保留ってことでいいか？」

一夏は顔を上げ真直ぐと箒の顔を見る。箒は少し残念そうにしながらゆっくりと言葉を紡ぐ。

箒「…そうか『買い物』は無理なのか…」

一夏シャルル「……………は？」「……………」

一夏や周りの人間は思わず間抜けな声を出してしまう…この娘、今何て言った？

一夏「ちょ、ちょっと待ってくれ。今何て言った？」

箒「だから、買い物は無理だって話だろ？」

「……………ちっさ！欲ちっさ！……………」

全員驚愕の意を表す。まさか箒はそっちの方に解釈していたとは完全に予想外である。一夏は肩の力が抜けその場にへたり込む。

箒「ど、どうしたのだ一夏！？いきなりそんな場所に座りこむなんて、一体どうしたというのだ！？」

そういつて箒は一夏に手を差し伸べる、しかし一夏は自力で立ち上がる。

一夏「い、いや問題ない色々ビツクリしまつて。」

第「そ、そうか。では私は戻るぞ…それと一夏、あの怪物に立ち向かおうとした所カッコよかったぞ。」

凜、とした声で指を口に添えながら一夏に言う。そのまま第は立ち去って行った。

一夏（はあー何だよそれ、取り越し苦労じゃん。…でもやっぱり第のこともう少し『女』として見た方がいいかもな。）

一夏はそう思いながらシャルルの方に向かい食器を片づけようとするがシャルルは何だか不機嫌な感じた。

一夏「?どうしたんだ。シャルル？」

シャルル「なんでもない」

そう言いながらシャルルは食器を片づけ始める。しかしその声は若干刺があり足も少し速い。

…その後山田が来て『お風呂使えまゝ』す二人は男（正し一人は女）なので今すぐ入って』と言われ二人は渋々お風呂に入って行った。

場所は風呂場、現在一夏はお風呂に入っている。ちなみにシャルルの方は『先に入って』と言われ一夏は先に風呂に入った。

一夏「ふうふううう~~~~~~~~」

オッサンぽく一夏は頭に置いてあるタオルを手で押さえながら風呂につかっている。

一夏「あ…生き返る…」

一夏は風呂を満喫する、しかしその満喫は10分ぐらいで終わる。何故なら風呂場のドアを開け人がそれも女の人が入ってきた。顔を半分沈ませていた一夏は驚きながら顔を飛びあがらせる。ちなみにその女とは…

シャルル「お、お邪魔します。」

一夏「!？」

シャルルだ。しかもタオル以外彼女の姿を隠すものは何もない。しかもタオルは濡れており隠しているはずなのに逆にエロくなっている。一夏は顔を真っ赤にし鼻血を出しながらシャルルに問う。

一夏「な、なあ」

シャルル「あんまり見ないで…一夏のえっち…」

一夏「す！すまん！」

一夏は謝りながらシャルルに背を向ける。

一夏「シャルルさんは、どうしてここに？確かに先ほどわたくしは先にお風呂をはい入ることを勧めました。しかし、それはわたくしが入って無い時であって…」

シャルル「ば、僕が一緒だと、イヤ…？」

捨てられた子犬の様な目で一夏に訴えるシャルル。

一夏「うれし…いや、そう言う訳じゃ無くて！」

一夏もやっぱ男子高校生。こういうシチュチュに遭遇するとオトコゴ

ゴロが火を点き精神統一を頑張らなきゃいけない。

一夏「やっぱ、俺出るよ。十分堪能したし！」

シャルル「ま、待って！」

シャルルは急に大声で一夏を呼びとめる。一夏は驚き風呂から出ようとするのを止める。

シャルル「そ、その、話があるんだ。大事なことから、一夏にも聞いてほしい……」

一夏「お、おう……」

一夏は風呂を出るのを止めシャルルに背を向けながら耳を傾けた。

シャルル「その…僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだって思える居場所を見つけられていないし、それに……一夏がいるし……」

一夏「へ？」

一夏はついつい間の抜けた声を上げる。そしたら突然シャルルは一夏を抱き締め始める。一夏は心臓が飛び出しそうな位驚く。シャルルは構わず一夏に語りかける。

一夏「シャルル、む、胸が御当たりになっっていますが……」

シャルル「僕ね、ちょっと怒ってるんだよ。一夏はアピールしても全然気づかないし、それなのに『第』の告白はすぐ理解するなんてちょっと不公平だよ。」

一夏は混乱した頭を使いながら状況を整理する。

一夏（つまりシャルルは俺のことが…す、…好き…？）

一夏は未だ信じられない様な顔をする。それに気づいたシャルルは顔を可愛く膨らませる。

シャルル「一夏って自分に関することは本当に鈍感だね、気づいてる一夏？オルコットさんも鳳さんも僕も一夏のこと…好き…なんだよ。」

一夏「え…？」

一夏は心底驚く、一夏の頭は真っ白になり一瞬、何も考えられなくなる。しかしすぐに思考を切り替える。とりあえず一夏は今までその好意に自分が気づかなかったことに謝る

一夏「ごめん、俺、そう言うの全然分かんないし…」

一夏は言葉が続けようとしたらシャルルが一夏の口を優しく両腕で覆う。

シャルル「今は言わなくていいよ。でも今度からこういうこともじっくり考えてよ。それと僕のこととはこれからシャルロットって呼んでくれる？二人きりの時でいいから」

そう言つて一夏の口から両腕を離す。一夏は確かめるように喋り始める。

一夏「それが本当の………？」

シャルル「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

一夏「わかった シャルロット」

シャルル改めシャルロット「ん」

嬉しそうにシャルロットが返事をした。一夏は時折見せるシャルロットの本当の笑顔を頭で想像する。

シャルロット「じゃあ、僕は先に上がるね…一夏、明日は学校まで一人で行ってね。」

一夏「お、おう…。」

その後シャルロットはさっさと出る。一夏は頭をボ　とさせながら自分のことを好意にしてくれていることたっぷり30分風呂の中で考えたがやっぱり分からなかったそうだ。

本当に色々あった日から次の日、クラスいや、学園中が騒然とする事件が起きる。それは一つ！二人目の男操縦者は女だということだ。しかも一夏はその女子と一緒に風呂に入った

二つ！ラウラ・ボーデヴィヒが織斑一夏に公共の場で強制的に猥褻行為を働いたこと（いや、キスだけど）

そして三つ！ラウラが一夏に対し『お前を私の嫁にする！異論は認めん！！』と発言。

ちなみに第はオーバーヒートして目を回しながら倒れ、鈴はISを使って一夏に対し半殺しを行おうとし、セシリアは『OHANAS HI』をしようとして、シャルロットは笑顔で一夏に『シールドピアス』を携えながら追いかけてまわしたそうだ。

## 第21話 I Love y u（後書き）

そつえば最近組合長様を見ない…

## 第22話 Post-traitement

マ「ハッハッハッハッハ！」

マイクは腹抱えながら笑う。千冬に襲撃事件の件を聞いているときはいつになく真剣でその話を話し合い、今後学園は生徒会長　つまり『第10位』　がしばらくロシアに行き不在中の間どう生徒を守るべきかを話し合っていた。

マイクが笑っているのは、もう一つの報告であるシャルロットが女だったことを聞いた瞬間、一気に噴き出したからだ。

マ「ヒ　　おかしい、まさか女なんて。まあ、予想はしてたけどまさかそいつも千冬さんの弟が落とすなんて、一体どういう頭をしているのかちよつとのぞいてみたいね」

千「私もその部分は常々頭を悩ましています。」

マ「まあ、その話は後にしよう　とりあえずデュノア社は解体、アラスカ条約の違反と子供虐待で社長は捕まえるとして、即刻デュノア社の上層部分を洗いざらい調べ上げる。そいでもって査問委員会に引っ張り出す。まあ、少なくともこの件に関わったやつらは最低禁錮刑12年、下手すりゃ一生かもね」

マイクは軽い感じでそう言い放つ。今頃彼の言葉道理IS委員は動きだすだろう。

マ「まあ、報告御苦労。次回も期待しているよ、千冬さん。」

そう言ってマイクは一方的に通信を切った。



ふふん、ようやく完成したよ。今は真黒だけど箒ちゃんが乗れば変化するし、これで箒ちゃんの誕生日には少なくとも間に合うね、まあ、『コアナンバー002』じゃ無いと『紅巫女』たる箒ちゃんを支えることなんてできないしね。

楽しみだなー箒ちゃん一体どんな顔をするのかな

あ、箒ちゃんのお胸の具合も確かめないとね、ふふん

とある高級高層ビルのレストラン

そこで昨日IS学園を襲撃したシャルルと名乗る青年と執事のような燕尾服を着ている男と　しかし男の手にはその雰囲気からかけ離れたようなガントレットを手に着けてる　一緒に商談をしていた。ちなみに男の方は仲介人だ。シャルルと名乗る青年と男はお互い銀色のアツタシユケースを持っていた。

シャルル「じゃあ、これが約束の『ヴァルキリアー』の『コア』だよ。」

そう言つてシャルルはアツタシユケースを開ける。中には今回奪つた『水晶』が収納されていた。

「ではこちらも約束の10億と『ノーマル・コア』です。」

男は何処までも平坦で棒読みな声で言いながらアツタシユケースを開ける。中には10億の小切手と『コアナンバー212』が入っていた。

お互い中身を確認して閉じる。そしてアツタシユケースを交換する。シャルルはまるで玩具を買ってもらった子供の様に早速バッグを開け『ノーマル・コア』を取り出し自分のポケットに入れる。

シャルル「これで後、『44枚』。」

そしてシャルルは静かに立ち上がり領収書とアタッシユケースを持ちながら会計に行こうとする。

「おや、もう食べないんですか」

男は紅茶を飲みながらシャルルの食べ残しのステーキをそのなにも映していない様な眼で見る。ステーキはまだ一口しか食べられていない。

シャルル「うん、もう十分だから。」

「そうですか。」

男はまたもその平坦な声で答える。

シャルルはそのまま黙って店を出た。

## 第22話 Post-traitement（後書き）

この小説を見ている人にアンケートが二つあります。

一つはハーレム r 箒ルートで行くか、この二つ、どちらかによって物語は大きく変わります。

もう一つは『番外編』を物語の序盤、中盤、終盤のどれでやるかお答えください。

ヒロインの方は物語の終盤まで受け付けて多数決で決議します。

答え方は『1Ⅱハーレム』、『2Ⅱ箒ルート』です。

『番外編』は『臨海学校編』の終わりまで受け付けます。

答え方は『序盤Ⅱあ』、『中盤Ⅱい』、『終盤Ⅱう』です。  
たくさんのお応募お待ちしております。

## 番外 密林の暗殺者

ヨーロッパのある深い森の中、静かにだがものすごい跳脚力で森の木と空のギリギリの場所まで上がり、下に落ちた時は木の枝を使いまた、上に上がりものすごい速度で移動する。移動している物体の姿はどうやら体型からして女のようなようだ。まず、最初に目がいくのはその長く細い両足だ。色彩は全体的に黒緑で顔にはバイザーが取り付けられている。

彼女には目的がある。それは指定された目標の撃破。

その目標とは現在逃走しているIS。

本来なら捕獲なのだが今回の目標は「男」で「転生者」だ。

転生者は全力で逃げる。

（くそ！どうしてこんなことに！！）

転生者はこの世界に来てから約半年立った。最初にここに着いた時からずっと彼女に襲われ精神と体力を徐々に削られていった。

カミからもらったISも彼女の前では全く役にたたず。

今や機体も逃げることにしか使えない。

そしてついに彼女が追いつく。

「ヒッ！」

「Game set」

彼女はその長い脚で男の腹部分を叩き斬る

男は肉と骨を強引に引き千切られ、腹から鮮血を吹き出しながら上半身を近くの木に叩きつけられ、見るも無惨な姿へと変わる。

彼女は男が死んだことを確認し、素早く闇へと消えた。

## 第23話 幸せは不幸に・・・ Backrunner

ハワイ米軍某所現在、第三世代型IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルのテスト稼働を行っている。現在空中で待機している操縦者はナターシャ・ファイルスだ。『オープン・チャネル』で通信が入る。

『You can go? Natasha（行けるか？ナターシャ）』

ナターシャ（以下、ナ）『And yeah, well OK this tone seems good.（ええ、大丈夫よこの子も調子が良いようだし。）』

『Or so, then I'll go（そうか、じゃあ行くぞ）』

その言葉とともにナターシャは『銀の福音』（以下、福音）』は勢いよく上下しながら空中を舞う。次に『福音』の最大の特徴、背中のスラスター部分にある銀の鐘シルバ・ベルを使用スラスターが開き青色のエネルギーが凝縮する。凝縮されたエネルギーをいつきに解放しエネルギーがはじけ飛ぶ。そして一つ一つの弾丸になり空中に出てきた簡易版の目標を全て撃ち落とす。当たら無かった弾丸はすべて海に直撃し小さな水の柱がポツリポツリと出来上がる。

『What's next...（よし、次は...）』

テストは問題なく続くがそこに軍艦のアンテナの上に一人の青年が立ちつくしている。青年は懐から黒いUSBメモリを取り出し、『怪物』へと変化する。『怪物』は変化した直後黒いUSBメモリを



福音は雄たけびを上げながら高速飛行形態に移行し無茶苦茶な足取りで空を突き抜け量産ISを蹴散らしながら監視区域から離脱する。『福音』はそのまま真直ぐと日本の方角へ向かおうとしている。それを遠くから見つめる『怪物』は青年へと戻り静かに聞き取れない声で言う。

シャルル「さあ、存分に働いてもらうよ。ふふふ・・・」

そう言って青年は手を広げながら背中から海へ自由落下した。

**第24話 ある朝でのひと悶着と決意（前書き）**

誤字脱字編集しました。



## 第24話 ある朝でのひと悶着と決意

IS学園、早朝 4時

一夏は目を開ける。基本IS学園の登校時間は8時からなのでいつも一夏はこのくらいの時間に起き簾と剣道したり、基礎体力を高める時間なのだが…

一夏はむくりと起き上がる。その隣に何故か裸のラウラがいた。ちなみにラウラは嫁宣言してからいつもご飯は常に一緒、たまに浴場に侵入してくることもある。最近なんて着替えの途中に突入してきた。…半ストーカーである。

「……………」

一夏はとりあえず気づかれないように素早く起き、できるだけラウラを見ないようにしながら、シーツをラウラにかけてやる。しかしそこでラウラが目を開ける。

「…ん？何だ、もう朝か？」

ダッ！ 一夏が見ない為に部屋から逃走する音

ガシッ！ドスッ！ ラウラが素早く一夏の手を捕まえ自分の胸を当てつつ拘束する音

「何故、逃げる？」

「い、いや その罪悪感と言うか何というか…ていうか隠しなさい！君には羞恥心とかないのか！」

「何をおかしなことを言うのだ。夫婦とは包み隠さぬものだろ」

ここまで堂々と言われたら逆に言い返す要素が見つからない。…余

談だが実は箒も人の10分の1しか羞恥心が無い…一夏は色んな意味で溜息を洩らす。しかし一夏にはそれ以上の問題は…

「あの ラウラさん。貴方様のお胸が当たっているのですが、離していただけませんか。」

「な!?!い、いくら嫁と言えど、そ、そういうことには物事の順序が合ってたな…」

「…(タステケ)…」

いきなり顔を朱に染めながらラウラが口でゴニョゴニョ言い始める。一夏はこのままでは犯罪者である。(主にロリコンで、嘘だけど)とりあえず10分ほど説得して何とか解放してもらった。ちなみに服は貸したそうだ。

「ていうかラウラ、俺前から聞きたかったんだが何でおれにキ、キ、キ、キスしたんだ?」

「むろん、…す、好き…だからに決まってるからだろ…」

「そ、そうか…」

ラウラは一夏の服を可愛く掴み上目使いで見る。一夏はその姿を見てドキドキしてしまう。

「ごめん。今はその答えは出てない。」

「そうか、まあ、問題無いがな」

「え?なんで」

「お前は私の嫁だからな。」

「……………」

コンコン、と誰かがドアを叩く音がする。

「一夏。どうしたんだ？もう時間だぞ。まさか、風邪なのか？お腹が痛いのか？足が痛いのか？手が痛いのか？くしゃみが止まらないのか？ま、まさか死にそうなのか！？ま、待っている！今すぐ先生を…」

「いや、大丈夫だから！」

一夏は箒の突拍子の無いセリフに耐え切れず、勢いよくドアを開け箒に突っ込みを入れる。

「あ、そうなのかそれはすまない。」

そう言って箒は頭を下げる。とりあえず一夏は道で話すのはどうかと思い自分の部屋に入れる。そこで箒はあることに気づく。

「そういえば、何故ボーデヴィヒがいるんだ？」

「何を言うと思えばそんなこと、当然であろう。何といったって私達は『夫婦』なのだから。」

ちなみに前回（ラウラVS箒参照）の件はラウラが謝り箒はなんでもないように様に許した。ラウラは胸を張り自信満々に宣言する。箒はその言葉を聞き衝撃を受け、一気に暗くなりながら部屋を出ようとす。

「そ、そうか。それは済まなかった…」

箒はすでに目にはたくさんの涙を浮かべ足は小鹿の様に震えながら部屋を出ようとする。

「いや、違うから！」

一夏は箒を捕まえ説得と説明を30分弱繰り返し（その間、間にウラが色々誤解するようなことを言ったので余計時間が掛かった）で誤解を晴らしたそうだ。

鳳鈴音は絶賛悩んでいた。

悩み事は自分が素直になれなくてついつい暴力を振るってしまう事だ。鈴もつうすうす感じている。

（このままじゃ絶対だめね。）

そう最初に思わせたのは箒だ。いつも一夏は箒を扱う時はまるで何処かのお姫様か、はたまた壊れ物を扱うような扱いだ。

ちなみに何故箒だけそのような扱いをするかというと、一夏が見た『虐め』のせいなのだがその事実を鈴は知らない。

端から見たらまるで好きな人を優しく扱うような感じだ。

次にそう思わせたのはシャルロット。シャルロットを扱う時も一夏は箒ほどでは無いにしろシャルロットの扱いもどこか特別な物を感じさせる。

ちなみにこれもシャルロットが悪用されていたのが原因なのだがその事も鈴は知らない。

まあ、とにかく鈴は一つの結論に至る。一夏は自分に暴力をしない人により優しくなる。

当然ちゃあ当然なのだが・・・

（よし、とりあえず今までのことの謝罪のために一夏と買い物に行く！…べ、別に私が行きたいからじゃないんだけど…）

鈴は顔を朱に染め人差し指どうしを当てながら口をもごもごする。

ツインテールも若干下がっている様な気がする。  
しかし、ここで一つ問題が…

（私もしかしたら嫌われてないかしら…）

いや、ぶつちやけ嫌われても可笑しくないんだが…  
その事を考えるとなんだか気持ちが悪く沈んでしまう。

鈴は頭をぶんぶんと振りそんなネガティブな発想を追い払う。

「とにかく私は一夏を買い物に誘う！」

拳を天井に向かって勢いよく突き上げる。鈴の覚悟の表しの様なものだ。

これは余談だが一夏の方はすでにシャルロットと買い物に行っちゃたりしてるのであった。

第25話 海に着いたら11時!! : ocean's eleven

バスがトンネルを抜ける。するとそこに見えてきた光景は一面に広がり風で木々が揺れ潮風になり美しい青色の海が広がっていた。

ちなみにバスは一人ひとりの席が快適でここで暮らしても問題ない様なものだ。 それを見て誰かがそれを見て大声で叫ぶ。

「海だ  
！」

「本当だ。綺麗だなあ」

一夏は窓側の席で腕を置きながら外の海を見る。一夏も感嘆するほどの美しさだ。これほど美しい海を見るのは写真ぐらいしかない。

「なあ、シャル綺麗だよな。」

「う、うん？ そうだね。」

シャルロットは一夏の隣の席に座っている。

何故一夏がシャルロットのことを『シャル』と呼んでいたのはシャルロットが結局女であることをばらしたので『シャルロット』という呼び方が特別じゃ無くなったので一夏が『じゃあ、これからシャルって呼ぼう。』ってことになったのである。

一夏はシャルロットに問いかける。しかしシャルロットはどこか上の空で自分の腕にかけてあるブレスレットを見る。それは一夏が買いた物の時に挙げたものだ。シャルロットにとってこのブレスレットはどんな宝石よりも美しく見えている。時折一夏の顔を見てホニヤつてした顔になり再度ブレスレットに視線を移す。

「むー、ずるいですわシャルロットさん。一夏さんからプレゼント

をもらうなんて…」

「ごめんね、オルコットさん。へへ」

それを見て不機嫌になっていたのはセシリアだった。しかしシャルロットはそんなこと一切気にせずまた喜びに浸る。それに気づいた一夏はセシリアにこう言う。

「そうだな、セシリアにも何かあげないとな」

「ほ、本当ですか？ふふ、では約束ですよ」

セシリアは一気に楽しそうな笑顔になる。

（やっぱシャルやセシリアが喜んでいるのは好きな人から贈り物をもらったからなのか？）

そう思うと一気に顔が赤くなり熱くなる。一夏はそれを悟られないように顔を窓の方向に向ける。

そうしているとバスが島の旅館に付く。その後一夏達は海水浴やおいしい料理を楽しんだそうだ。

## 臨海学校一日目の夜

現在ヒロインズはラスボス（千冬）に部屋に呼び出されていた。ヒロイン達は全員体ガツチガツチになり正座している。ちなみに一夏と千冬は同じ部屋だ。一夏はセシリアにマッサージを終え、現在風呂に入っている。その間に全員集められたのだ。ちなみに部屋は和室で外の景色を一望できるようになっており畳も杉の匂いを損なっていない。

「……」

「おいおいどうした。篠ノ之は別にしてどうして黙っているんだ。いつものバカ騒ぎはどうした。」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは……」

「は、はじめてですし……」

「まったく、しょうがないな。私が飲みものを奢ってやろう、鳳、何が良い？」

鈴は名前を呼ばれビクツとなる。言葉はすぐに出ずあたふたしてしまふ。

そうこうしていると千冬は冷蔵庫から有料の飲み物を5本取り出しヒロインズに軽い感じで投げる。

「ほれ、各々別のが良いなら交換しろ。」

「いえ、織斑先生。そんな物受け取れません。」

箒はそう言つて飲み物を受け取るのはどうかと思ひ拒否する。

「そんな細かいことは気にするな篠ノ之。それに人の好意を無下にするな。」

「は、はい。すみません」

「ふむ、分かればいい。」

箒は自分の非を認め素直に謝る。そうして五人はゆっくりと飲み物を口にする。

それを見た千冬は獲物を狙った獣の様な笑みを浮かべる。

「飲んだな？」

「は、はい？」



「そ、そりゃ、飲みましたけど……」  
「そうか……」

そうして千冬は冷蔵庫を開け麒麟のマークがある有名な缶ビールを取り出す。そして景気よくプルタブを開ける。空けた瞬間、缶ビール特有の空気が抜ける音を出し中から白い泡が溢れ出す。千冬はそれを満足そうに見ながら顔を上にあげながら缶ビールをに傾け喉を鳴らしながら飲みだした。

「……」

箒以外啞然とする。特にラウラなんてさっきから口を大きく開け、瞼を何度も目を開き閉めする。それほどドイツでの姿とのギャップがあつたのだろう。

箒はそんなことには一切興味が無いのか人の好意を無下にしない為にと炭酸が苦手なのかラムネをチビチビと飲む。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらい飲むさ。それとも、私がオイルで動いている物体に見えるのか？」

「い、いえ、そういうわけではないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……？」

ラウラは未だにその光景が信じられず、ついに口から白い何かが出てくる。

「って、ラウラ！」

シャルロットはラウラからタマシーばいのが出てきているのを見て驚きつつも何とかラウラの口に押し込み返す。

「はっ！私は一体何を！？」

千冬はラウラが生き返ったのを確認して二本目のビールを取り出しながらついに本題に掛かる。

「さて、本題に入ろうか。お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

あいつ、とはこの場では英語では one summer な人のことだろう。そして全員その人を頭の中で思い浮かべる。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけですわ。」

先ほどのマッサージの反動か、少しツンとした態度で答えたセシリア

「あ、あたしは…その…何というか…」

鈴はスポドの淵をなぞりながら、ごもごもと言う。  
ラウラは声が小さいが力強い声で言う。

「私は強いところ、でしょうか…」

「いや、よわいだろ。」

なんでもない。まるで当たり前のことのように言った。

「いえ、強いです。少なくとも私よりは…」

珍しくラウラが千冬に反論する。

「そうかねえ……………」

そう言いながら缶ビールを傾ける。千冬。

「僕 あの、私は……やさしいところ、です。」

ぼそりとそう言ったのはシャルロットで、声の小ささと裏腹に真摯な響きがあった。

「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ。」

「そ、そうですね…。そこがちょっと、悔しいかなあ」

あははと照れ笑いをしながらうつすらと顔を熱くするシャルロット。そして千冬は未だに炭酸と格闘している筈に質問する。

「で、お前はとうなんだ、篠ノ之？」

「わ、私は…全部…です」

「ほう、偉く抽象的だな」

「えっと具体的に言つと、誰にでも優しくて、弱いけど強くあろうとして、人の悪いところを許せたり、いつも笑顔で、たまにおかしなことを言ったり助兵衛なことをするけど、それが一夏らしくて私はそんな一夏が大好きです。」

筈は一夏の良さも悪さも楽しそうに語る。その様子を見た4名は押し黙り羨ましそうにそれでいて悔しい感じで筈を見る。

なるほどねえ、と言いながら千冬は2本目のビールを開け最後に全員に質問する。

「まあ、なんにしてもあいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなか

だしマッサージだってうまい。」

そうだろ、オルコット？と話を振られたセシリアは、赤い顔をして俯き頷く。

「とうわけで、付き合える女は得だな。どうだ。欲しいか？」

「……え！？」

「……く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

「……ええ……」

ここで気づいた人もいるだろうが箒は驚きもせずただ5人の会話を聞いているだけだった。

千冬は眉をひそめながら箒に質問する。

「篠ノ之、お前はどんなんだ。」

「私には無理です。一夏を自分のものにしようだなんて、私はただ一夏を見る。それだけで十分なんです。一夏は誰のものでもないし、ましてや私なんかが一緒にいたって一夏は喜ばない。織斑先生は太陽を独り占めしようと思いますか？それと同じです。」

箒はさも当然の答えの様に返答する。それを見た千冬は箒に警告する。先生では無く個人として。

「箒、お前はもっと欲を持て。でないとそれが原因でいつか死ぬぞ。」

「はっ、はあ」

箒はあいまいな様子で返答する。千冬はそれが不安ながらも最後にこんな言葉で締めくくる。

「女ならな、奪うつぐらしいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、餓鬼ども」

## 第26話 その境界線を越えて

合宿2日目 早朝

一夏は男トイレのある場所に移動していると箒が道端で座り込んでいた。箒の顔は真剣そのものだ。そして箒の目線の先にはウサミミ、ウサミミ、ウサミミ、ウサミミ、ウサミミ、ウサミミ、ウサミミ、ウサミミ、etc、etc...である。数も軽く90個ぐらい埋められており、白いテロップには『私を見つけて?』とふざけた事が書いてあった。ちなみに箒はすでに十本ほど抜いており、ウサミミから生えていたのはなぜか本物のにんじんだった。しかも無駄につまそうだ。

「なあ、これってー」

「ああ、たばねえなんだが…」

『たばねえ』、その人は箒の実の姉『篠ノ之束』。ISの開発者にして天才of天才、『God's Brain』、その才能に天井なしである。

「どうするこれ?」

「とりあえず、全部抜こうか」

そうして一夏と箒は一緒にウサミミを抜き始める。そして地面から抜き出るのはにんじん、ウサギの人形、指輪、にんじん、ピンポン玉、小説、にんじん、クマの人形、DVD、にんじん、マオの人形、アスロスイッチ、にんじん、ガアメモリ、セメダル、にんじん…

後半は何かが違う(世界観とか)そして無駄ににんじんが規則的に出てくるのが妙にム力つく。

そして何とか最後の一本になるが…

「う、一夏手伝ってくれ。これ中々抜けない。」

「おう、そうか手伝うわ。」

一夏は箒に近づく。それにより一夏は箒と自然と顔が近くなる。箒は顔が真っ赤になりながら顔が近いことを指摘する。

「へ、にゃ、ち、ちか…」

「あ、わるい！」

一夏はパツと箒から離れる。一夏がウサミミを持ったまま立ち上がったので勢いよくウサミミがズポッ！と抜ける。

瞬間、

飛行機が出す耳をつんづくような音が響く。空から謎の飛行物体が現れ地面にドリルの様に回転しながら突きささる。しばらくはものすごい勢いで回転していたがゆっくりと回転を止める。その形はイラストチックでデフォルトされた…

「「に、にんじん……？」」

一夏と箒はそう漏らす。そしてにんじんから勢いよくドライアイスのような空気が噴き出す。

にんじんは真ん中からパカッと綺麗に割れる。そして中から出てきたのは…

「あっはっはっは！ひっかかったね、いっくん、ほうきちゃん！」

件の篠ノ之束だった。姿は不思議の国のアリスでそのアリスが来ている様な青と白のワンピース。で一夏が持っていたウサミミを取り、

頭に付ける。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うく何処かの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

束がさり気にとんでもないことを発言する。とりあえず一夏は挨拶をする。

「お、お久しぶりです。束さん。」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいね。箒ちゃんもしっかり大きくなって…」

そう束は言いながら本来人間では出せない様な素早さで箒の背中に移動しその大きなマスクメロンを手をワキワキさせながら掴みあげる。

「…特にお胸が、きや」

「た、たばねえ！？ちょ…や、あふ！そ、そこは、だ…ひゃん！」

「ほれ、ほれ ここがええのか それともここか？」

「やめてください！束さん！」

一夏は大声で束に突っ込む。無論それは一夏の精神的な問題を防ぐために突っ込んだのだが…

「およ？いつくん？ほつきちゃんの喘ぎ声聞きたくないの？」

束は箒のマスクメロンを離し一夏に質問する。その間箒は息を整えなおす。



「ききた…じゃなくて！箒が嫌がつているじゃないですか！」

「ちやえゝいつくんのいけず。あ、もしかしていつくん、『自分は毎晩聞いているけど他人には聞かせたくない』とか？いやーん、いつくん、えちい。」

「違いますから！聞いていませんから！ていうか束さん、俺のことどう思ってるんですか…？」

一夏はゲッソリとしながら束に質問する。

「うーん、破廉恥なハーレム・キング？」

「何ですかそれ…。」

一夏はよりゲッソリとする。

（いや、まあ『ハーレム・キング』ってのはあながち間違っていないが、箒は別段俺のこと好きじゃないだろ。）

…なあ、こいつ一回ぶっ殺してもいいかな…

とまあそんな感じで『束ワールド』に巻き込まれ一夏と箒は半グレロツキー状態になっていると束はクルリと童話の主人公の様な回り方をして森の方に向かう。

「じゃあ、ほうきちゃん、いつくん。またあとでねえゝビュビュー  
ーん」

そう言つて束は茫然としている一夏と箒を置いていき某ペンギン村の怪力メカ少女風に走り去っていった。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行う

様に、専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はい、と全員が返事をする。現在の位置はIS試験用ビーチで、四方を切り取った秘密ビーチの様な場所だ。一夏達専用機持ち達の前には大量のパーツがずらりと並ぶ

一夏はそのパーツに近づこうとする瞬間。

「ち　　ちや~~~~~~~~ん!!!」

砂埃を巻き起こしながら崖を人が走ってきている。その人は

「束…」

である。束は一気に4m取るほど飛びあがり千冬に飛び込む。周りはその光景に圧倒され一言も出なくなる

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ　　ぶへっ」

千冬に飛びかかろうとするが束は千冬に顔面をアイアンクローをくらわす。しかも容赦は無い。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

そして束はその拘束からばくちゅうしながら抜け出す。

「よっ」

回転しおえて筈の方を向く

「やあつ！またあつたね、ほうきちゃん！」

「どうしたの？たばねえ？一体何の用事が」

「ふふん！よくぞ聞いてくれました。今回はなんと……」

束はポケットから銀色の四角形で真ん中に赤いボタンがあるスイッチを取り出しそれを軽い感じで振り回す。

突然、束が歌い出す。

「Happy Birthday to You」

「Happy Birthday to You」

「Happy Birthday dear ほうきちゃん」

Happy Birthday to You」

そしてスイッチを押す。

瞬間

空から銀色の立方体の物体が物凄い速さで砂浜に下りてくる。

物体の壁が四方に割れ、そして中から真黒で錆付き所々塗料がはがれ：金色の枠に嵌められた赤い水晶：ISのコアが見え隠れするISが出てきた。

その場にいた者全員が唖然する。

「これこそほうきちゃん専用機、『コアナンバー002』以降の全てのISを統べ、ほうきちゃんという器に『001』を除く全てのISコアを収める時、神という存在さえも超える究極の存在……『紅椿』……」

束は自慢するように大声で演説する

静寂はゆっくりと破られ周りが騒がしくなる。

あんなのが束が作ったISなのかと

「あ、あれがIS?」

「しょ、正直あんなのだったら要らない...」

「でも、束博士が直々に作ったんだよ。見かけによらず...

「強...くはないよね」

だが、一夏はというと...

(違う、あれは本当の姿じゃ無い、あれは...!!)

一夏は戦々恐々とし『紅椿』を見る。

そして箒の返答は...

「わかりました。乗ります。」

「...えっ!」

正直箒は別に姿かたち能力など関係無く束の贈り物だからという理由で受け取るつもりだ。

昨日千冬に言われた『人の好意を無下にするな』を実践しているのだろう。

「うんうん。そうじゃないとねーこのままほうきちゃんが他のISに乗ってたらその子達の方が壊れるもの。では、早速のつてみて」

箒はその言葉に従い『紅椿』に乗る。周りは心配そうに箒の事を見るが束だけが物凄く楽しそうに笑う。

瞬間

『紅椿』から莫大な紅と黄金の閃光が発せられる。

太陽は簾を照らし

風は簾を中心になびく

ここにある全てのISが展開され、『白式』を除くISが『紅椿』  
に對しまるで騎士が王女に永遠の忠誠を誓うかのように『紅椿』に  
頭を下げる。

島や海にいた動物達は祝福するかのように現れる。

まるで聖書の一節の様な光景だ。

そして閃光が終わり真の姿になる。色は真紅、そして先ほどの様な  
さびは一切なくまるで自然のルビーを見ている様な美しさだ。その  
姿を見て再度束が叫ぶ

「Happy Birthday !!!!!」

「綺麗……」

誰かがそんな声を漏らす。それほどまでに圧倒的な存在感。これぞ  
まさしく究極の存在。

しかしその祝福は一つの電報によって遮られる。

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生！」

今までにないほど慌てている山田が現れた。

「どうした？」

「こ、こ、これを！」

千冬は山田から小型端末を受け取る。内容はハワイで暴走起こした  
機体を食い止めよ。との事なのだが……

「『ただし、作戦時、空域封鎖は教師陣で行い、迎撃は専用機持ちで行え』だと!？」

千冬はその作戦内容に驚愕する。つまりそれは『子供に銃を持たせ戦場に行かせる。』事と何ら変わらないことだ。

千冬は齒軋りする。その上

『尚、命令に従わなかった場合専用機持ちもろともそれ相応の処置を下す。これはIS管理科議会の決定である。』

つまり人質。逆らえば子供を殺すと言っている様なものだ。

千冬は怒りで煮え滾るが、すぐに冷静さを取り戻し、今いる全員に通達する。

「全員、注目！」

その後千冬は生徒達を避難させ、専用機持ち（箒を含む）を呼び今回の作戦を伝えた。

今回の作戦は第4世代IS操縦者2名『織斑一夏』『篠ノ之箒』を中心として決行。

『銀の福音』の高速機動に対し束博士直々の作戦立案により移動の際は『篠ノ之箒』を使用。攻撃は一撃必殺の破壊力を持つ『織斑一夏』を起用。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ』はレール砲による超遠距離支援射撃件、モニター役として起用。

他3名の本作戦時の役割は作戦が失敗、成功を問わず前記の2名を回収。成功の場合は『銀の福音』の操縦者『ナターシャ・ファイル

ス  
も回収するとする。

## 第26話 その境界線を越えて（後書き）

明日は更新できないかもやっぱり感想いっぱい欲しいので誰でもいいから書いて



## レポート：「白騎士事件」

およそ10年前、日本を攻撃可能とする各国の大陸横断型巨大ミサイル - 当時は中華人民共和国とアメリカ合衆国との半冷戦状態に陥り日本はどちらに付くかでミサイルが向けられており - 計2341発が東京の国会議事堂を中心とした半径632mに座標が合わせられ、同時に管理コンピュータをハッキングされ一斉に日本に向け発射された。

しかし、篠ノ之束博士が開発した白銀のIS…後の白騎士…により、1221発を持っていた刀で空中で切り裂き、残りも一つ残らず格闘、当時は我々しか成功していなかった「大型荷電粒子砲」を虚空での照射、全ての兵器を圧倒的にその機動力、攻撃力、特にそのミサイルをまともに受けても傷どころか微動だにしなかった防御力によってISの脅威的な能力を知らしめる。

ミサイルによる人為的、経済的、それどころかパニックも何者かの誘導により被害は完璧な0%となった。

各国特に中華人民共和国とアメリカ合衆国は核兵器を除く自軍の最新式兵器、超兵器（切り札）を日本を火の海覚悟で全力で投入。

しかし、IS側はそれを赤子の手の平をひねるかのように向かって来た兵器を撃破。つまり

「相手を生かしたまま無力化するほどの余裕がある」

しかし中華人民共和国は痺れを切らし…20発の核がISに向けて発射された。

ISはそれに対し20本の5・2m級の長大な槍後の「グングニル」と呼ばれる兵器を使い核爆発を完全に無効した。

それでも各国は兵器を投入するが、

ISは日没と共に従来のステルスを凌駕するステルスにより逃走。

「白騎士」の戦果（撃破数）

ミサイル：2341

戦闘機：207

巡洋艦：7

空母：5

衛星系兵器：11

世界は即ISに関する条約「アラスカ条約」を締結。

レポート：「白騎士事件」（後書き）

最近組合長様を見ない

## レポート：「B・M・B事件」

白騎士事件から1年後、世界の兵器はISにより持つ意味を無くし各国は当時保有していた兵器の6割を「平和のために」といいながらスクラップにしていき軍事費用を全てISに向けていた。

しかし、実はスクラップにされるはずの兵器の約84%は「ブラック?マーケット」に出され各々の紛争地域に出回り各国の懐を潤していた。

それを深刻な問題としてIS科管理委員会は手始めに各国の重鎮達を調べ上げその問題に関わったもの達を逮捕し場所をはかせ、ISを使つての一掃作戦

「Brack?Market?Brake?作戦」  
を執行。

使用ISは4機

それぞれが各国の最新技術を使用していた。それら全ては「ノーマル?コア」を搭載しており

11月21日 pm.6:32に作戦は開始された。

最初の3時間45分19秒間はISの圧倒的な戦闘力で出回った兵器を駆逐。

しかしその21秒後一機のIS-後の「Beast」-が他のISに対して攻撃を繰り出す。

これが実施初のIS同士の戦闘、実戦である。

しかし反乱も残りの2機のISに30分49秒掛かるが鎮圧。

それから約11時間掛け世界中の「ブラック?マーケット」を全滅した。

## 第27話落ちる白

午前10時58分 『一撃必殺作戦』 決行。

一夏と箒はISスーツを着ながら砂浜にいる。

一夏はすでにいつでも行ける精神状態で、箒は先ほどから何度も深呼吸を繰り返している。

お互い一度顔見て頷く。

「こい、白式」

「行くぞ、紅椿」

一夏は白い光に包まれ白式を装着する。

箒は紅い光に包まれ紅椿を装着する。

2体ともゆっくりと空へと浮かび上がる。

それにより2人の足の下の海の水が揺れる。

一夏は箒に近づく。

すると紅椿から人が後ろに乗れるように持ち手や足を付ける場所が展開される。

「行けるか、箒」

「うむ。一夏、一つ言いたいことがあるのだが、いいか？」

「なんだ？」

「もし私が調子に乗り始めたら殴ってでも止めてくれ」

「わかった。」

それ以上はお互い一言も言わず連絡を待つ。

通信を待つこと1分。

ついにISの『オープン・チャネル』に千冬からの通信が入る。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか』

「はい。」

「はい。」

一夏と箒が頷きながら返事をする。

『今回の作戦は説明通りだ、いいな。』

「了解。」

「織斑先生。私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいでしょうか？」

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない。』

「分かりました。できる範囲で支援します。」

箒は寒気を覚えるほど何処までも落ち着いた感じで受け答えをする。千冬は一瞬そのことが引かかったが続行可能範囲として無視する。

『では、始め！』

千冬から作戦開始の合図が走る。

紅椿のスラスタにエネルギーが急速に凝縮され一気にエネルギーを解放しものすごい速さで紅い弧を描きながら空中300m強までぶっ飛ぶ。

この間僅か1秒それほどまでの速さで空中に舞う。

紅椿は目標地点500mに到達するとその速さを落とすところかよりスピード上げながら上昇を止め少しまっすぐ進んだ後カーブしな

がら北西（福音の現在位置）に進み始める。

「目標補足、一夏、敵との遭遇はジャスト15・3225秒後だ。」

衛星さえも使わず敵の場所を捕捉したうえで細かい時間まで表記する。

箒は敢えて若干スピードを落とす。理由は一夏がこの状態では立てないからだ。

一夏は左手で箒の背中を押しながらゆっくりと慎重に立ち上がる。

一夏は『雪片式型』を構えいつでも<零落白夜>を発動できるようにする。

一夏と箒は福音の背中へとぐいぐいと近づく。

『<零落白夜>、発動』

そこで一夏は<零落白夜>を発動。箒は紅椿を一気に加速し福音に斬りかかる。

あと1m

すると突然、福音は半回転し手は腹の脇に置き一夏と箒の方向に向く。

（なっ！）

一夏は福音の方向転換に内心舌を巻く。

しかし例えそのような芸当ができたとしても今なら確実に当てられる。

一夏はそう確信し福音を斬る。

しかし福音は斬られる後数ミリ単位で体をマトリクスしながら『瞬時加速』を逆噴射し一夏と箒の視界を遮った上で勢いよく下に落

ちる。

福音は海から約460mの所で一瞬だけ止まりすぐに弧を描きながら一夏達より少し上の所まで上昇する。

一夏はすぐに<零落白夜>を停止。

臨戦態勢に入るために箒の背中から軽く飛びあがり箒から少し距離を離す。

その間に福音は自身の両方のスラスターを羽のように広げ真ん中から機械特有の空気が抜ける音を出しながら開く。

開いたスラスターから出てきたのは透明で薄い膜が張ってあった。

するとそこを中心に青い色のたくさんのエネルギーの粒が球体を描きながら中心で凝縮する。

福音は2mほど回転しながら飛びあがり右手を前に突き出しながらスラスターを羽のように広げながら『オープン・チャネル』から機械音でこう一夏達に宣戦布告する。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。銀の鐘<sup>シルバー・ベル</sup>発動。」

スラスターに凝縮されていたエネルギーが一気に解放。

あたり一面を青いエネルギーの粒 いや、弾丸が飛び散り、無作為にたくさんの弾丸が一夏達を狙う。

一夏はそれを感じて危険と判断し物凄くギリギリで避ける。

実は一夏はこういう『数撃ちや当たる。』戦法に対してめっぼう弱い。

一夏がいままで避けてきたのは精密性のある弾丸だった。

逆に言うとこれは精密性ゆえに相手の息遣い、癖、目の視線など様々な物で読みとりかわしてきたが、

今回の攻撃はそういうのが無いので一夏からするとこちらの方が非常に危険だ。

そうしていると一夏の右手に青い弾丸がかかる。

突然



一夏の右手の近くで小爆発を起きる。

「つつつ！」

一夏はいきなりの爆発と予想外の威力に右手が痛み、顔が少し歪む。

「大丈夫か！一夏！」

「ああ、何とか、それより箒、撤退だ。今回の作戦は一発目が失敗した時点で作戦失敗。引き返すぞ。」

一夏がそう宣言する。箒も作戦内容を思い出しゆっくりと頷く。

しかし福音はそれを許さず再度エネルギーをスラスタに溜め銀の鐘を放つ。

一夏と箒は急いでこの領域脱出を図る。

それを追撃するかのように沢山の青い弾丸が襲ってくる。

しかし箒はあることに気づき急速に方向を変え一夏を通り過ぎる。

箒はそこで止まり青い弾丸を2本の刀で撃ちを落とし始める。

「どうした！箒！」

「船だ！船がいるんだ！」

箒のその言葉を聞き一夏は止まり海の方を見ると密漁船と思しき船があり、箒が弾丸を止めていなかったら確実にやられていただろう。

「箒援護する。」

「分かった。」

一夏は福音に戦闘を掛ける。

しかし福音はその高度な機動力で踊る様に上下しながら一夏の斬撃を避けそのうえ近づけたと思ったら福音は一夏の顔面を殴りつける。

福音はそのまま箒の方に向かいながらスラスターにエネルギーを溜め始める。

箒は防御の構えを見せる。

しかし箒の気持ちを裏切るかのように箒の背中を狙い後ろから密漁船がミサイルランチャーを発射する。箒はそれに一切気づいていない。

一夏はすぐに『瞬時加速』で箒の方向に向かう。

一夏は箒の所にまで近づき箒を両手で勢いよく突き飛ばす。

二つの攻撃が当たるギリギリだ。

「一夏！何を…」

箒が言葉を言い終わる前に一夏がいる場所を中心に爆発が起きる。爆発の少し後黒煙から一夏が落ちてくる。

「一夏

！」

箒は絶叫しながら一夏の方に全力で向かう。

箒は気絶している一夏を抱きしめながら海へ墜落した。

作戦失敗

篠ノ之箒の信号により回収部隊は2人を回収

織斑一夏は重傷を負い現在危険な状態

福音と密漁船はその後消息を途絶える

全生徒は部屋で待機命令を継続

福音の搜索は学園が継続

## 第28話 上る紅

それは一夏がまだ4年生の頃の話だ

箒がスライド式の教室のドアを開ける。

すると上からたつぷりと黒板の粉が付いた黒板消しが箒の頭上に落ちる。

箒の頭は黒板の粉により真っ白になってしまう。

それをニヤニヤ見ていた一人の男子がこう大声で言う。

「あ　！モップが来た！皆、早く水に漬けないと！」

「本当だー！掃除用具だー！」

「くすくす」

「くすくす」

女子はそんな箒の様子を見てあからさまに笑う。

そう男子達が言いながら水が入ったバケツを取り出し箒に水をぶちまけバケツを投げつける。

「……………」

箒は水が掛けられびしょ濡れになるがまったくもって無言。

その目は何も写さず、まるで此の世に希望が無いような目だ。

箒はそのまま自分の席に行こうとするが一人の男子が箒の腹を殴りつける。

「掃除用具だから殴っても問題ないよな」

「だよなw」

そう言って男子達が箒の髪を引っ張ったり足を蹴り付ける。

しかしそこに男の教師が入って来る。

「おい、どうした何をやっている、お前達！」

「えゝ先生、僕たちはモップで遊んでるだけですよゝ」

教師は呆れながら生徒たちを叱る

「まったく、お前達、『掃除用具』で遊ぶにしてもちゃんと用具入れにいれとけよ（笑）」

「はい。wwwwwwwwww」

教師はそのまま箒の顔をけりつけた後、適当に席に座る。

何故箒がここまで虐められているかというと簡単である『篠ノ之束』の妹だからだ。

ISが発表され世間は一気に女尊男卑の社会になり男達は不満と苛立ちを感じていたそこで標的にされたのは箒だ。

元々箒は人間関係もあまりなくそういうことを他人に中々言い出せない、完全に恰好の的だった。

女子の方も箒を助けようとはしない。

その理由は『嫉妬』だ。箒は周りとは一線違うほど美しくその上たびたび（そのころから一夏はもてていたので）一夏の近くにいます。

そのことが『嫉妬』に拍車を掛け女子達の方からも虐められた。

そうしていると一人の男子が箒のリボンに気づく。

「おい、見ろよwモップのくせにリボンなんて付けてるぜww」

「まwじwwでwwww」

一人の男子が箒のリボンを奪おうとするが、箒は自分のリボンを外しギョツと離さないように体をうすぐまらせる。

「おい、そのリボンよこせよ」

男子がうずくまった箒に蹴りながらいう。

箒は黙ってその理不尽な暴力に耐える。

けれども誰にも聞こえない心の中で箒はこう呟く

（た…す…け…て…）

その思いが届くのかは分からない。

「へくしょ！あーっ、やっべまだ風邪が残ってんのか？」

一夏は頭の後ろをかきながらそうぼやきながら教室の窓を開ける。

「おはよー、う？」

教室を開けた瞬間一夏が見たのは箒が虐められている光景だった。

「な、何してるんだよ…お前ら！」

男子の一人は一夏が入ってきた事に気づき近づいてきた。

「ん？おう、久しぶりだな、一夏。どうだ？お前も…ぶへっ！」

一夏は男子の顔面を思いつ切り殴りつける。

一夏は普段から剣道や千冬から体術を習っていたので人並み以上に腕力も闘い方も熟知している。

そんな拳に男子は殴られたことにより背中から倒れ口と鼻から血が出てくる。

周りの生徒達もいきなり一夏が男子を殴ったので茫然と立ちくしている。

一夏はそんな奴らを見殺しにして箒の手を引っ張る。

箒は状況が理解できずに軽く混乱する。

「い、い、一夏？」

「いくぞ。箒、こんな奴といたらバカがうつちまう。」

一夏は箒を引っ張りながら教室を出ようとするが、

「おい、織斑！お前今何をした！」

教師は一夏を怒鳴りつける。

しかし一夏はそんなことを無視して教室に出ようとする。

教師はその態度が気に入らなかったのか一夏を殴りかかるうとするがそれよりも早く一夏は教師の股間に思いっ切り蹴り上げる。

教師は股間を蹴り上げられたことにより地面で股間を押さえながらのたうちまわり余りの痛さに意味不明なことを口走る。

「... ㄥ ¢ @ ? = ㄥ £ k く あ 3 あ 3 2 あ b h れ w ! !」

一夏はついでにもう一発股間に蹴りを教師に加え箒を連れながら教室を出て行った。

## 一夏の自宅

そこに一夏に勧められシャワーを浴び千冬のジャージを着ている箒

と一夏が椅子に座っていた。  
最初に口を開けたのは箒だ。箒は自分が思っていた疑問を一夏にぶつける。

「……どうして私なんかを助けたのだ？」

「前にも言っただろ。ム力つくからぶん殴った。それだけだ。」

「そんな事したらお前が虐められてしまっではないか。」

「知るか。それにダチが虐められていて、黙ってられるほどお人好しじゃねえしな。」

「なんで私が友達なんだ？」

そこで一夏が気づく。箒の目に意思らしい意思が宿っていないことを。

「ダチをダチって言って何が悪い。それに俺は泣きたいときは泣いていいと思うぜ、箒」

「え？…」

「そうだろ、お前本当は泣きたいのに泣けないって顔してるぞ。」

「どうしてそんな事がお前に分かるのだ？」

「あー、よくわかんねえや。でもそんな顔している。泣いてもいいんだ、箒。だからそんな悲しい顔するな。それにあれだ、もしまたお前が虐められたら千冬姉が何とかしてくれるしな。」

一夏は頷きながらそう言う。箒は驚き、そして少し涙を流すがすぐに止まり、笑った。

「一夏、そういうのは『他力本願』っていうんだぞ。」

「ぐっ、うるせえ。」

「ふふっ」

「へへっ」

一夏と箒は笑い合う。その後一夏は箒のそばに極力いたそうだ。  
…余談だが箒を虐めていた連中は一夏が学校に登校してから一週間  
後には影も形も無くいなくなっていたそうだ。

箒は一夏が寝ている部屋に箒が入って来る。

箒はそつと一夏が寝ている所に歩み自分の髪を括っていたグリーン  
ライトのリボンを外し静かに一夏の手のそばに置く。

そして箒は窓に近寄りゆっくりと開きそこから飛び降りる。  
次に窓から見えたのは紅い閃光だった。



## 第29話 最悪の状況下 / second・shift

た…ス…け…て…

ク…る…しい…

か…な…しい…

…コ…ワイ

…『紅…巫…女…』…

空中で胎児の様にうずくまり苦しむように少し顔上げたが、まるで誰かに無理やり押し付けられたように顔を素早く下げる。

右手に、左筋に、右スラスターに、胸に、複数の小さなヒビが入る。そこに音源が分からない機械音が頭に直接響く。

『完全復活移行完了まで残り12% 暴走mode:Quetzalcoatlus』

千冬は電話で今回のことについて怒りながら通話していた。周りの教師も千冬の殺気に当てられびくびくしながらモニターを操作している。

「貴様、織斑達が福音と接触する直前にボーデビィツヒを待機させるとは一体何のつもりだ！」

『その答えにはお答えできません。織斑千冬さま。』

ラウラが狙撃を行わなかった理由は先ほどから千冬に何処までも平坦な声で受け答えしている男がIS管理科議会命令と称しラウラの行動を制限したのだ。

そのうえ密漁船も敢えて警備を甘くしろとの命令が来ていたのだ。  
千冬はすぐに問いただしたが、何処までも平坦な声を出す男は先ほ  
どからその話題をはぐらかし続けている。  
千冬が激昂しながら男に言い放つ。

「では、今すぐIS管理科最高委員長に通信を回せ！ 奴なら貴様ら  
よりよっぽど話が分かる！」

『その件はこの緊急時では私個人で対応はできません。連絡するに  
は長いプロセスが必要ですが、それでも行いますか？』  
「ちっ、もういい！」

そう言つて千冬は受話器を思いつ切り机に叩きつける。  
それにより受話器は木っ端微塵に破壊された。

千冬は顎に手を置きながら考える。

今回のことは明らかに可笑しい。

そう、何か大きな闇がこのような状況を作り出している様な。

そう考えていると突然、ドアが勢いよく開かれ鈴が入ってきた。

千冬はこの部屋に入ってきたことに叱ろうとするが鈴の顔が相当焦  
っていた。

「織斑先生！」

千冬は鈴に静かに質問する。

「……いったいどうした、鳳」

「篠ノ之がいないんです！」

「な、に………！！」

その返答は千冬が聞きたくなかった答えの一つだ。

篠ノ之箒は一夏を愛する以外に欲が無い。

それはこう言う見方ができる。

自分の『生』にも『死』にもまったく興味がない。

他人にも正直言つと一夏以外興味がない。

だが箒が唯一他人に興味を持つことそれは…

誰かが苦しみ自分で這いあがろうとしても這いあがれないものに『救いたい』という欲がわく。

そして箒は今紅椿を飛ばし胎児の様にうずくまっている福音に大砲の様に突っ込む。

福音は箒にぶつかり1～2mほどがむしゃらに回転しながら吹き飛ばが、すぐに体勢を立て直し銀の鐘を発動し大量の青い弾丸を辺り一面に撒き散らす。

箒はそれでも弾丸に当たるのを知りつつも真直ぐと進みながら『雨月』と『空裂』を展開して向かってくる弾丸を弾き返す。

福音は向かってくる箒に対して銀の福音を待機状態にして近接戦闘の方向に移る。

箒は『雨月』で福音に突きを入れる。福音は向かってくる『雨月』を右腕で掴みとる。

箒はもう片方の『空裂』を腹に入れようとするが福音はそれを許さず足で『空裂』の側面を蹴りつける。

それにより箒の左腕が痺れるがその事を一切気にせず『雨月』のエネルギーを発動し福音の右腕に致命的なダメージを与える。

福音は『雨月』を離し近距離で銀の鐘を発動する。

箒は顔を驚きで歪ませつつも避けようとするが飛んでくる弾丸が急に箒の周りで膨れ上がり爆破し始める。

福音は爆破地点から2本の刀が落ちていくのを確認する。

爆発は治まり黒い煙が立ち込める。

福音は勝利を確信し再度うずくまろうとする。

が、

突然、福音の後ろにボロボロの箒が現れ両腕に付いている『展開装甲』を開き紅い弧を描きながら福音の両方のスラスタをチョップするかのように根元から叩き斬る。

福音は反撃を開始しようとするが箒はそれを許さず足にも『展開装甲』を開き空中で一回転をしながら福音の頭上を蹴りつける。

福音は蹴られたことにより真直ぐと海に落ちていき水柱を立てながら沈んでいく。

しかし箒の顔はすぐえない。

突然、

海が光を出しながら渦を巻き始め青い翼の様なエネルギーの塊が海から現れる。

そしてその根元には福音が胎児の様にうずくまりながら浮上してきた。

『強制セカンド・シフト』

箒の脳裏にその言葉が駆け巡る。

紅椿のエネルギー残量は残り10%

敵はそれ以上のエネルギーを有しているだろう

しかしそれでも…

（やってやる。例えこの身が減じようともあの中のコアと操縦者は救い出す！！）

何処までも続く青い海と白い雲がある空。そして真っ白な砂浜  
その砂浜に立っているのは一夏だ。

「ここは…?」

一夏が疑問の声を上げる。一夏の服装は何処までも真っ白な袴だ。

一夏はゆっくりと砂浜を歩きだす。

ラララ、ラララ

とても綺麗な歌声が響く。その歌声は心を白く洗い流してくれそう  
で元氣な歌声だ。

一夏はその歌声の発信源に向かう。波打ち際に少女がいた。

白いワンピース、白い肌、白い髪、何処までも白くそれでいて…美  
しかった。

白い少女はくるくると踊る。

(ふむ…)

一夏はなぜか彼女に声を掛けず砂浜に手を点きながらゆっくりと座  
る。

波の音が静かに聞こえる。時折の風が気持ちよく一夏をなびく。

一夏はその光景を静かに見ていた。

福音は莫大な咆哮を上げながら驚異的な速度で左手を前に突き出し  
箒のいる所に向かう。

箒は首を勢いよく掴まれ息ができなくなりおかしな声を出す。  
箒は福音に首を掴まれながら近くの小さな島に真直ぐと進む。  
福音は砂浜に勢いよく箒を島にぶつけ鈍器にぶつけられた様な音を出しながら砂埃が起きる。

福音は箒の首をギチギチと締め上げる。自然と箒の体は福音に首を掴まれ地面すれすれに持ち上げられた状態になる。

箒は抵抗しようにも先ほどの戦闘でボロボロになり動くこともできない。

箒の口から血反吐が吐き出される。箒は少しずつ意識が遠のいていく。箒はそんな何か自然にこんな事を思った。

（ああ、すまない。どうにも助けられそうにない。すまない。助け  
たかった。）

(…もう一度、もう一度、だけ、一夏の、顔、見たかったな…)

箒は目を閉じる。そして意識が途切れる。はずだった。箒はいきな

り首が放され地面に倒れる。首が放されたことにより息ができるようになり箒は咳き込みながらもなんとか空気を取り戻す。箒は目をゆっくりと開ける。するとそこには…

「アンタには言いたいことはたくさんある。けれども今はあいつを倒すことが先。それが終わったら絶対アンタの頬、引っ叩いてあげるから。」

そこには箒に背中を向けISを装備しているツインテールが立っていた。その人物の先には福音が吹き飛ばされ尻もちを付いていた。福音はゆっくりと立ち上がる。

すると空中から蒼いレーザーの豪雨が福音に降り注ぐ。福音は放った先を見る。そこには夕闇の空中に浮かび金髪をなびかせ蒼いISを装備した一人の女性がいた。

福音はその女性に向かい直し巨大なエネルギーの翼を振るおうとし翼を大きく広げるが、

突然、体が硬直する。福音はモニターで自身の背中にいる敵を確認する。敵の髪は銀で黒い色のISに乗っておりその肩に浮いている長大な砲台を福音に向けオレンジの球体を放つ。福音はそれにより赤オレンジの火花を散らしながら吹き飛ぶ。福音はそのまま十数m オレンジの球体に押されるように小島の岩にぶつかり岩が割れ抉る様に張り付く。砂埃が起き岩の破片が福音の近くでパラパラと落ちる。

福音は立ち上がろうとするが実弾の雨霰がふる。福音は咄嗟に翼を振るい弾丸を全て弾き飛ばす。福音は空中を見ると短い金髪を揺らしオレンジのISに乗る相手を見る。

相手は笑みを浮かべる。福音は何故笑ったのか一瞬分からなかった。しかし風を切る小さな音が響く。福音は音がする蒼いISの方にすぐさま振りかえる。すると2つの小型ミサイルが福音の眼前に現れる。福音はすぐに翼を棍棒の様に振り回しミサイルを破壊する。ミ

サイルを迎撃したことにより福音の視界は黒煙によってさえぎられる。

福音はこの場合は危険と判断し、『瞬時加速』を行い空中へと翼を羽ばたかせ飛翔する。すると福音の真上からピンクと黒のISが物凄い速さでラダキックをかます。

それは福音の顔に直撃しバランスを崩し頭から小島に落ちる。もくと砂埃が起こる。そこからゆつくりと両手をぶら下げる様に翼は大きく広げ福音は立ち上がる。福音は顔を上に向ける。そして福音の仮面がグバリとまるで化け物の牙の様に開かれる。そして機体にひびが入りそのひびから翼が腹から、手から、顔から、胸から、足から大量に湧き出てくる。

a a a a a a a a a a a a a a ! ! ! ! !

g y a a a a a a a a a a a a a a a

.....

ラウラは空に飛び上がり強化パッケージ<sup>『</sup>パンツァー・カノニア<sup>』</sup>に変更する。他の3人も強化パッケージを取り出し武器を構える。福音は爆音をだしながら空に飛び上がる。4人は福音を取り囲むようにまばらになる。

5人の間に静寂が包みこむ。

しかしそれも長くは続かず福音は右手を据えそして体を高速回転させる。すると福音を中心とし大量の青い弾丸が4人に放たれる。最初に動いたのはシャルロットだ。シャルロットは『ガーデン・カーテン』を使いラウラの近くに寄り弾丸を防ぐ。鈴は『瞬時加速』で弾丸の避けられるか回避できないかのギリギリの所まで降りそこから4つの衝撃砲から同時に熱殻拡散衝撃砲を放つ。その弾幕は福音の『ファースト・シスト』時の銀の鐘に若干勝てるほどの量だ。

セシリアは『ストライク・ガンナ』でより高い場所まで緊急離脱しそこから『スターライトmk?』と4機のピットからの同時攻撃



を行う。

福音は上から下からの攻撃を全て体から生物の様に蠢いている翼を使い弾き返す。

福音は手始めに近くにいるラウラとシャルロットに先ほどより若干速度を上げて向かう。

そこで何故シャルロットが何故ラウラを防御したかというところ…

「ゼロ距離での強化されたレール砲。さすがの軍用ISといえどこれを食らえば貴様とてただでは済まさんぞ。」

ラウラが凍てつく氷柱の様な笑みを広げながらそう宣告する。福音はギョツとしたように見えた。ラウラはそれに構わず引き金を引く。福音は急いで全ての翼を使いラウラ達を飲み込もうとするがすでに時遅し引き金は引かれレール砲はその反動により上に飛び上がりラウラは後ろに吹っ飛びかけるが背後にいたシャルロットがラウラを抑え何とかそこに踏みとどまった。

福音は先ほどの攻撃により胸のアーマーが壊され翼の半分以上が消えてしまった。

鈴とセシリアは福音に武器を向ける。福音はもはやロクに動く事もできなくなってしまうた。チェックメイト。誰もがそう思った。音源が分からない機械音がそれぞれの頭に直接響く

『全制御システム解除解析完了 完全復活に移行： 失敗。緊急コード』

Q u e t z a l c o a t l u s

発動』

瞬間、福音から青と金の光と紫電をだし始める。体の中にある莫大

なエネルギーが全て吐き出されアーマーがゆつくりとエネルギーに連れて行かれ大きな白い翼が2本現れ福音の元下半身のアーマーはエネルギーを抑え込む様に広がり長細い足になり顔の開かれた部分から大きなエネルギーの口ばしが生え耳の様に伸びていた長い部分が目になりそのクリスタルの中央に赤い眼球の様な球が現れる。手はそのままブラリとぶら下がり後ろから白い尻尾で先には蛇の頭が生えてくる。大きさは大体16mはありそうだ。

その姿はまさしく『ケツアルコアトルス』

アステカ神話にでてる神の名でもあり白亜期末に出現した史上最  
大級の翼竜の名だ。

a k  
a i  
a y  
a a  
a a  
a a  
a !  
a !  
a !  
a !  
a !

『

ケツアルコアトルスはその空間をも揺らす咆哮を上げる。

これから最強の翼竜の舞台になる。

### 第31話 最強の翼竜 / Awakening (前書き)

今回は大分グダグダしている気がするので注意！

### 第31話 最強の翼竜 / Awakening

耳に心地いい波の音が聞こえる。

少女は歌を止める。

一夏が気になり声を掛けようとするが、

「呼んでる…行かなきゃ…」

少女は気が付いたら消えていた。一夏は周りを見回す。そして上を見ると大きな白い扉があった。そして再度一夏が視線を元に戻すと秋の夕焼けになっており白い女の騎士が太陽を背にしながら大剣を自分の前に突き出し両手を添え海に下半身を浸かりながら立っていた。女はゆっくりと一夏に話しかける。

「力を欲しますか…？」

「え……？」

白い女の騎士は顔の甲冑が口部分以外全て覆われている

「力を欲しますか…？」

「うーん、強いて言うなら…欲しい…かな？」

一夏は半信半疑のように頼かきながら言う。

「何故…？」

「たぶん、俺の大切な人を守りたいからかな」

「大切な…」

「ああ、俺にはさ、俺の事を大切に思ってくる人がいるんだよ。一人は自分の居所失つても黙っちゃう奴、一人は力の『意味』を間違えていた奴、一人は自分を守るために殻にこもってしまった奴、一人は笑っているけど家族が離れ離れになっても無理している奴、一人はいつも俺に厳しいこと言っているけど本当は物凄く俺の事を思ってくれている人、一人は俺に生き方、戦い方を教えてくれた人、一人は自分の事を全て我慢するくせに他人の事になったら全力を注ぐ奴　そういう人たちを腕力とか単純な物以外に守れる力を」

一夏は一人一人の顔を思い出しながらそう語る。  
白い女の騎士は小さくうなづく

「そう…」

「だったら行かなきゃね」

「え？」

一夏は後ろから誰かに声が掛けられる。一夏は後ろを振り向くと先ほどまで歌っていた白い少女が無邪気で無垢な笑顔を浮かべる。

「ほら、ね？」

白い少女は一夏に手を差し伸べる、一夏は自然とその手を取る。  
すると世界は白い光に包まれていく

そんな中一夏は一瞬白い　何か　が見える。

（あれは…）

そして…



「効いていないだー!!」

『ケツアコアトルス』はそのまま何事も無かったかのように体全身から青い弾丸を放つ。

それにより3人はその攻撃を何とか防ごうとするが、弾丸が爆発して起きた爆風により吹き飛ばされる。

ラウラは先ほどの砲弾と攻撃に耐えられず箒がいる小島に不時着する。

そんな中シャルロットは何とかその猛攻に耐え『シールドピアス』を展開し『ケツアコアトルス』に叩きこもうとするが、当てようとした所がいきなりギョルン!と音を出しながらエネルギーの体がポツカリと開く。結果的に『シールドピアス』は当たらずその上穴がいきなり締め出し『シールドピアス』の上半分を丸ごと飲み込む。

『k u a a a a!』

『ケツアコアトルス』の尻尾の蛇が雄叫びを上げながらシャルロットの足に噛みつきそのままシャルロットをぶんぶん振り回して海に浮いている大きめの岩に叩き落とす。

シャルロットは岩に叩きつけられ気絶してしまいそのままゆっくりと下に落ちていく。

「はああああああ!」

鈴は『双天牙月』を『ケツアコアトルス』の背中から斬りかかろうとする。しかし『ケツアコアトルス』は鈴を翼で力を殺すような感じで叩き潰す。鈴は空中で気絶しかかる。そこに止めを刺すかのように『ケツアコアトルス』は青い弾丸を鈴に集中的にぶつける。

弾丸は鈴に当たり連鎖的に爆発を起こす。  
爆発は終わり黒煙が立ち込める。黒煙から鈴は自由落下して近くの小島に落ちた。

全滅

その一言に尽きた。

そして『ケツアコートルス』の視線は何か立ち上がろうと必死になっている筈に映る。

『ケツアコートルス』は筈の目の前に音速の速さで飛来する。

「うっ…」

筈は『雨月』を杖代わりして何とか立ち上がる。『ケツアコートルス』は口を大きく開き筈を丸のみしようとする。

筈は目をきつく閉じる。自らの死を覚悟して、しかし…

（あれ…？）

いつまでたっても『ケツアコートルス』は丸飲みしてこない。

筈はゆっくりと目を開ける。

目の前には白式の第2形態『雪羅』を纏い『雪羅』の『シールドモード』にしている一夏がいた。

「待たせたな。」

一夏は筈に顔を向けながらそう言う。しかし筈はいまいち現在の状況が把握できず混乱している。



『零落白夜』のシールド、それは体の80パーセント以上がエネルギーの『ケツアコートルス』にとっては完全たる天敵にして弱点。『ケツアコートルス』は一度空中へと翼を羽ばたかせる。その影響で爆風が起き、その爆風で一夏を牽制しつつ音速の速度で飛翔する。

「大丈夫か箒！」

一夏はそう言つて箒に近寄る。箒は状況を理解する。そして箒は息絶え絶えになりながら叫ぶ。

「どうして来たんだ！一夏！危ないではないか！」

箒はそう叫ぶ、けれど一夏は笑顔でこう答える。

「簡単だ。仲間を守るためだ。」

箒はそんな答えが返つて来るだろうと予想していた。でも納得がいかない。一夏がこの戦場にいるのが納得いかない。一夏が誰かのために傷つくのが納得いかない。そういう傷つくことは自分だけで十分なのにそんな顔をしていた。

一夏はその顔を見て箒の頭に『雪羅』の方の腕でチョップをかます。

「痛……！」

「箒、そんな顔するなよ。」

「で、でも……」

箒は駄々っ子のような表情になる。一夏は箒の頭を優しく撫でる。

箒はキョトンとする

そうして一夏は進化した白式のスラスターで『ケツアコートルス』に向かっていった。

算はそこに取り残される。

箒は思う。

（私は、助けたい。一夏を助けたい！一夏を助けたい！！）

箒は「したがる」。それは欲。箒の強い欲望に答えるかのように紅椿と箒の体が徐々に回復していく。

「……これは……!!」

箒は紅椿から黄金の粒子が出てくるのを確認する。

絢爛舞踏 発動。

『コア203、176、078、401、操縦者ともども回復開始』

そう紅椿が発した瞬間、  
各々の倒れた場所に黄金の粒子が舞い落ちる。

箒が驚きながら呟く

「これが…紅椿の『単一仕様能力』…!!」

行ける。素直にそう思った。この力なら一夏を助けられる。

箒はそう思い、『連続瞬時加速』を使い一夏の方へと弾丸の様に飛び立っていく。

[illegible]

ようちんだ。

ようやく『創造（紅巫女）』と『破壊』が覚醒した。

これで6年前に成しえ無かった『復活』と『Gk』がもう一度動き出す。

さて、まずはお手並み拝見と行こうか

### 第32話 とりあえず（前書き）

済まない更新が遅れました。今度から好意のないように極力気をつける。

### 第32話 とりあえず

「くっ…！」

一夏は苦戦していた。

その理由を説明するところだ。

一夏と『ケツアコートルス』は高速での追いかけてを繰り返していた。

最初は一夏が『ケツアコートルス』をエネルギー無効のシールドで押していた。

しかし、『ケツアコートルス』はエネルギーだけではなく翼を大きく羽ばたかせ爆風を巻き起こしたり、あえて小島の方まで一夏を誘導し翼を小島にぶつけ岩なだれなどを起こして一夏と渡り合っていた。

一夏はそれらの攻撃を雪片式型で岩を斬り裂き、雪羅の大きな腕で爆風を遮るなどして、攻撃をかわしこちらからも反撃するが『ケツアコートルス』の機動力が異常に高く、紙吹雪の様に一夏の攻撃をかわし、尻尾の蛇を飛びださし一夏に噛みつくこうとする。

一夏はそれに対して雪片式型の 零落白夜 の発動前に移しながら、刀を自分の前に縦に置きながら構える。

蛇は一夏の刀にわずか数？のところですぐに攻撃を止め、嫌がる様にとぐるを巻く。

『ケツアコートルス』はついに堪忍袋の緒が切れたのか、体全身を光らせ、『銀の鐘』を発動させる。

それが現在の状況だ。

一夏は雪羅を使わず雪片式型でできるだけ青い弾丸を斬り裂きながら、上下左右、大きく移動して青い弾丸を回避する。

しかし、弾幕がモノをいわせ、一夏の右肩に青い弾丸がかかる。

「しまっ…！」

それによって弾丸は爆発する。

一夏はすぐさま体全体を大きく回転させて爆発から少し逸れ、爆発の威力を削る。

しかし、その一連の行動がまずかったのか、『ケツアコアトルス』は一夏のほんの一瞬の隙を突く。

一夏の体勢は『ケツアコアトルス』に背中を向けている状態だ。

例えばここで何とか体勢を立て直し攻撃を仕掛けようとしても、相手の攻撃速度が速くやる前にやられてしまう。

『ケツアコアトルス』は一夏の背中に向け口を大きく開けて、その口に巨大なエネルギーの球体を溜めて、一夏にそれを放とうとする。しかし、その攻撃は稀有に終わる。

『ケツアコアトルス』はいきなり頭が殴られた様に頭を大きく下げる。

結果、口に溜めていたエネルギーが押しつぶされ、『ケツアコアトルス』の口の中で爆発を起こす。

一夏と『ケツアコアトルス』は自分の頭上を見るとそこから数m先に鈴が衝撃砲の準備をしながら一夏達を見下ろしていた。

すると鈴は再度、『ケツアコアトルス』に向けて衝撃砲を何発も叩きこむ。

『ケツアコアトルス』はすぐに衝撃砲を避けるために、弧を描きながら降下する。

『ケツアコアトルス』は一夏達に向かうために、すぐさま上昇しようとするが、『ケツアコアトルス』の目の前にオレンジの球体が海の水を小さく斬り裂きながら真直ぐと向かってくる。

『ケツアコアトルス』はその球体を口を開き、飲み込もうとするが、空から蒼いレーザーの豪雨が降り注ぎ、『ケツアコアトルス』に少なからずダメージを与える。

『ケツアコートルス』は飛び回りながら、体を光らせ銀の鐘を発動させようとする。

しかし、『ケツアコートルス』は小さな違和感を自分の胸元に覚える。

まるで誰かが自分の胸のあたりに張り付いている様な……

!!

『ケツアコートルス』はその事に気づき、自分の胸元を見るとそこにはシャルロットが『ケツアコートルス』の体に着くかつかないかのギリギリの路線にいた。

『ケツアコートルス』はより急いで銀の鐘を発動させようとするが、シャルロットはそれを許さず、『ラピット・スイッチ（高速切替）』で取り出した手持ち型の8連ミサイルと口径9cmの自動機関銃（秒速897発）を『ケツアコートルス』に撃ちこむ。

爆発と機関銃特有の音が鳴る。

これには『ケツアコートルス』も一溜まりも無く小さく体が飛び上がる。

『ケツァコートルス』は攻撃を止めこの空域から脱出しようとする。

『ケツアコートルス』は一気に離脱し雲を突き破りながら、上方へと勢いよく飛び立つ。

しかし、後ろから風を大きく斬り裂く音が異様に『ケツアコアトルス』の耳にこびり付く。

『ケツアコートルス』は異変に気付き素早く後ろを振り向く。

しかし、それよりも早く、風を大きく斬り裂いている音を出していた。箒は『ケツアコートルス』が振り向くよりも『雨月』と『空裂』を同時に振るい、尻尾の蛇を斬り裂く。

ku a a a a a ! !

尻尾の蛇は根元から斬り裂かれ、斬られた部分からエネルギーを鮮血の様に出しながら、もだえ苦しむ様な奇声を上げながら、海へと落ちていく。

kyaaaaaa!?!?!?!?!

この攻撃にはさすがの『ケツアコートルス』も痛さに耐えられず苦しみの雄叫びを上げる。

そして、『ケツアコートルス』は眼前に巨大な青竜刀が振るわれている事に気づく。

青竜刀は『ケツアコートルス』が大きく体勢を変え、『ケツアコートルス』の本来の最大の特徴である巨大で鋭い鉤爪で青竜刀をオレンジの火花を散らしながら掴む。

「くっ…！」

鈴は双天牙月を押し戻そうとするが、『ケツァコートルス』の鉤爪が食いつき離れる様子が無い。

『ケツアコートルス』はそのまま鈴を頭から食い干切ろうとする。

「はああああ！」

箒は『ケツアコートルス』と鈴の間に上から素早く舞い降り雨月を横一に『ケツアコートルス』の腹を斬り裂く様に振るう。

雨月の打突に少し遅れて紅のエネルギーの刃が飛び出し、『ケツアコ  
アトルス』を襲う。

『ケツアコートルス』はこの攻撃には耐えれそうな様子だったのだが、背後から蒼い豪雨と小型ミサイルが直撃する。

「わたくしを忘れては困りますわ！」



『ケツアコアトルス』は後ろを振り向くとそこにはセシリアがおり鈴を投げ捨て突撃しようとする。

しかしセシリアのいる直線上に下からシャルロットとラウラが武器を構え現れる。

『ケツアコアトルス』は口から銀の鐘を放ちシャルロットをラウラに攻撃する。

シャルロットはそれに応戦し『ガーデン・カーテン』を発動し銀の鐘の攻撃に耐える。

『ガーデン・カーテン』を閉じると同時にラウラはワイヤーブレードを展開し『ケツアコアトルス』に真直ぐと各々目標に向けて飛び出す。

ワイヤーは『ケツアコアトルス』の首、右の翼、左足、口ばし、目標から少し離れた所から円を描く。

そしてワイヤーは一気に目標に絡みつけながら縛り上げる。

『ケツアコアトルス』はワイヤーを全て、まるで飛行機が一回転したように回り、無理やり引き千切る。

『ケツアコアトルス』は再度全身を光らせ銀の鐘を発動しようとするが、箒が『連続瞬時加速』を使い、真正面から現れ『ケツアコアトルス』に斬撃の嵐を降らす。

『ケツアコアトルス』は即、防御に移るが、箒の斬撃が余りにも凄まじく、防御を破られてしまう。

このままではいずれ負ける。『ケツアコアトルス』は自然とそう思った。

そして、『ケツアコアトルス』はついに一つの決断を出す。

『ケツアコアトルス』は突然、体をコマの様に素早く回転し箒の斬撃を退き、『瞬時加速』を使い、飛び上がり大気圏近くで止まる。

『ケツアコートルス』は顔を空に向け口を大きく開け、翼を大きく開き、胸を大きくさらけ出した姿になる。

空間が揺れる。

体の至る所のエネルギーが線を描きながら『ケツアコートルス』の口に集まり始める。

集まっているエネルギーは徐々に球体という形を作り始め、ついには20m級の大きさまでに膨れ上がった。

先ほどの島を消滅させた球体は約1m。

その20倍の大きさがこのまま地球に当たれば破壊はされなくとも少なくとも『ノアの大洪水』の再来だろう。だれにも止められない。

零落白夜 を除けば

「一夏！受け取れ！！」

箒は一夏に向かい手を真直ぐ伸ばす。するとそこから黄金の粒子が飛び出る。白式に黄金の粒子が移る。

「な、なんだ？ エネルギーが回復！？」

一夏は箒の方を見る。

箒はそれに気づき大きく頷く。

一夏はそれですべてを悟る。

『 零落白夜 、発動』

一夏は体全体が黄金のオーラに包まれる。



「終わったな」

一夏は静かに言う。

「とりあえず、な」

箒もまた静かにそう口にした。

空はすでに満月が昇り、その光が戦士達を祝福する様に感じた。

## 船の上で

一人の少女がボロ付いた船の船首の上で灰色のISを手の部分展開しながら立っていた。

手の平に突然『黒いUSBメモリ』が現れる。

「おー、おー、よくやってくれた。これで故意的に『完全復活』を起動できるようになったわ。」

少女は船の中からノートパソコンを持ちながら出てきた白衣のボタンを外し、適当に羽織った男性の方を見る。

男性は髪を黄色に染め、顔は所々にピアスが付いている。

男性は少女から『黒いUSBメモリ』を受け取りノートパソコンに差し込む。

男性はノートパソコンを開き『黒いUSBメモリ』のデータを取り出す。

データは今回の福音のデータ、完全復活状態での操縦者の精神安定のグラフ、『ケツアコートルス』状態でのデータ。

男性はパソコンを閉じ『黒いUSBメモリ』を適当に白衣のポケットに入れる。

男性はもう片方のポケットから円型の銀のイヤリング ISの待機状態を取り出し、少女に適当に投げる。

少女は若干うつろたえながらも受け取る。

「なにこれ」

「ああ、これは『お仕事』。アメリカの『アラスカ収監所』にいる「Beast」を解放したいって、『大首領』命令だよ。」

「そう。」

少女は短く答え、『消えた』。

「くくく」

男性はゆっくりと船に背をもたれる。

男性はウオッカが入った、ボトルを笑いながら飲む。

「今夜は良い夜になりそうだ。くくく」

男性はウオッカを飲み干しボトルを適当に海に投げる。

今夜の月は不気味に歪に光っていた。

### 第33話 君の名は… / your name is…

戦士たちはお咎めを覚悟していた。

しかし、千冬の返答は戦士たちを驚かすものだった。

「お前達には今回の件に関しては他言無用ならお咎めなしだ。…正し篠ノ之は別だ。貴様は反省文と『私直々の』懲罰トレーニングある。覚悟しろよ。」

千冬は物凄い殺気を箒に当てながら言う。

一夏達はその殺気に当てられ戦々恐々する。

山田なんてさっきから気絶してしまっている。

しかし、さっきの当てられている箒の方は、

「はい。」

あっさりと、その殺気を何事もない様に流す。

千冬はそれを見て怒りを透り越し大きなため息をつく。

「篠ノ之、次、あんな事をしてみる。殺してやる」

箒は小さくうなづく。

一夏はそれをあまり納得いかず、静かに箒の顔を見ていた。

「……………」

ビキニのタイプ

箒は水着姿になり静かに岩場で三角座りをしながら空を見上げていた。

箒は思う。

（一夏に謝らないと。一夏には迷惑をかけた。…嫌われたらうな）

箒はもう一つ気になる事があった。

（どうして千冬さんは怒っていたのだろう。）

分からない。ただただ、分からない。

箒は思考をめぐらす。

「箒」

後ろから声がかけられる。

箒はそのいつも自分を安心させてくれる声が聞こえ、すぐに振り向く。

「一夏…?」

「よう」

箒は驚きを隠さず、目をまん丸とする。

一夏はそれを気にせず箒の隣に座る。

「どうしたんだよ。箒、そんな顔して、何か悩み事でもあるのか?」

箒は肩をビクツ!とさせ、ゆっくりと一夏の方を見る。



「どうして分かるんだ？」

「うん、そりゃあ箒のことだからな。もしかして千冬姉が怒った理由が分からないのか？」

箒は小さく顔をうなずかせる。

そっかー、と一夏は軽い調子で言う。

「箒、千冬姉はお前のことが心配だからあんな厳しく言っているんだと思うぜ。」

「?どうして千冬さんは私を心配するんだ？」

「心配するのに理由はいるか？」

「?????」

箒は心底、自分が心配されているのが分からない様だ。

一夏はそれを見て、箒にこんな事を言う

「箒!」

「は、はい!」

一夏が大きな声で箒の名前を呼ぶ。

箒もそれに釣られて大声で返事をする。

「今からお前には罰を与えます。罰は2つ。理由は千冬姉の怒った理由が理解できないのと独断専行だ。」

いいか?と一夏は箒に確認をとる。

箒は小さく頷き覚悟を決め、目を閉じる。

一夏は箒が目を閉じるのを確認すると、ゆっくりと両腕を箒の頭の後ろに回す。

シユル、シユルリと何かを結ぶ音が聞こえる。

箒はよく分からず小さく目を半開きし髪の手を見つめると、そこには白をベースにし赤い線が通ったりボンだ。

箒はゆっくりと自分の髪を結んだりボンを触る。

「これは…」

「誕生日、おめでとう。箒」

「あ、あ…あり…がと…う」

箒は小さな声でお礼を言う。

それを一夏は満足そうに見て、箒の頭を優しく撫でる。

「もう一つの罰は箒、お前は欲を持て。」

「欲…」

「そう、例えば生きたいとかどんな小さなことでもいいからさ」

「じゃあ…キ…」

「キ？」

「キス…して…欲しい…なあ…」

「キ…キス!？」

一夏はその答えに驚き、狼狽する。

箒は気にせず目を閉じ一夏に顔に接近する。

一夏はその光景を見てまるで魔法に掛かったかの様に一夏は箒の肩を優しく持ち、顔を近づける。

そして…

「あー！ずるいよ！箒！抜け駆けなんて！」

一夏と箒はその声を聞きパツと磁石が反発するかのようにお互い離れ

る。

一夏と箒は声の主を見る。

するとそこには水着姿のシャルロットがいた。

シャルロットは少し頬を膨らませていた。

その後二人はシャルロットにいろいろ問い詰められ結局、キスの事は有耶無耶になった。

「紅椿の稼働率は12%かあ、まあ、こんなところかな？」

束はいつ崩れても可笑しくない様な崖の上にちょこんと座り、足の子供のようにぶらぶらさせながら、空中ディスプレイを表示させ紅椿と白式のパラメーターデータがぎつしりと載った、それを無邪気な子供にも天使にも神にも大人にも悪魔にも見える笑顔で眺める。

「  
」

どんな人をも魅了させるその声で鼻歌を奏でる。  
そして白式の戦闘映像を表示する。

「はあ、それにしても白式には驚かせられるな、まさか、『縦者の傷やISの起こす超常現象を無かった事』にするなんてやっぱり白式は…」

「全世界を無かった事にできる最凶の『オリジン・コア』、『コアナンバー001』。とでも言いたいのか束。」

「ピンポーン。そうだよ、ちーちゃん。それにしても不思議だよね、ちーちゃん。あのコアは6年前の『あの時』に完全に破壊されたと思ってたのに」

『あの時』、それは筈に欲を無くす原因になった日。

その時、千冬と束はその場面に出くわし筈の『力』を見て、千冬は『呪い』を受け、束はこの戦いに傍観者に成らざる得なくなった。

千冬はそのことを思い出すが、すぐに気持ちを切り替え束の答えに返答する。

「不思議なこともあるものだな」

「でも、これで世界はほうきちゃんを狙いにくるのは確定したね。」

千冬は小さく齒軋りする。

自分は『呪い』を受けISがほとんど使えなくなり、その事がやはり引き目を感じざる得ない。

しかし、束はそんなことを気にせず千冬に質問する。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこ、な」

「そうなんだ」

疾風が吹き荒れる。そんな中、束はこんな事を呟く。

「私はこの世界で『本当のヒーロー』が見てみたい。」

疾風が過ぎ去った後、すでにそこには束はいなくなっていた。

「ねえ、織斑一夏君って君？」

「あ、はい。俺ですけど」

翌朝、一夏たちはクラス別にバスに分かれようとしていた。そこで20歳位の女性に話しかけられているのが今の状態だ。ちなみに女性の服装はおしゃれなカジュアルスーツで開いた胸元からは大人の女性特有の整った膨らみがわずかに除き、そこにサングラスが掛けられている。そうして、一夏に視線を合わせるように腰を折り、一夏の顔を興味深く観察する。

「あ、あの、あなたは…？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「あなたが…」

一夏はその事実に対し驚くも直ぐに思考が停止する。

なぜなら、頬にキスされたからだ。

ナターシャは直ぐに一夏から離れ、大人の妖美な笑みを浮かべる。

「これはお礼。ありがとう。白いナイトさん。」

「え、あ、う…」

一夏は突然の事態についていけずしどろもどろになる。

「じゃあ、またね。バイ。」

「は、はい…」

ナターシャは一夏たちに背を向けながら手をひらひらと振りながら颯爽と去っていった。

一夏は物凄くいやな予感がする。だって、後ろには4?体の阿修羅がいるのだから。

「一夏……!!」

鈴が声を張り上げISもびっくりの速さで一夏に急接近する。

「はい！なんかよく分かりませんが、すみませんでしたー！」

一夏は『どうか、お命だけはお代官様！』的なポーズを取ろうとするが、

ちゅ…

一夏の唇に突然、何か柔らかい物が触れる。

そして、チュパという音を出しながら唇から柔らかい物が離れる。

一夏の目の前には顔を林檎みたいに真っ赤にさせたツインテールの幼馴染が、

「り、鈴…？」

一夏も顔を真っ赤にしながら鈴に事の事実を尋ねる。

鈴はそんな言葉を見せず、箒のほうに勢いよく向き箒を指差しながら大声で宣言する。

「篠ノ之箒！私はあんたには負けない！恋でもISでも絶対負けない！これは宣戦布告、一夏がハーレム希望なのは知ってるけど、あんた（正妻）の座席、奪わせてもらわよ！」

鈴からの箒に宣戦布告。

箒の返答は…！！

「どうぞ。」

意外とシンプルだった。

聞く耳立てていた周りの生徒達もこの返答には全員ずっこける。

「ええい！そこは譲るな！！」

鈴は勢いよく突っ込む。

「まで、一夏は私の嫁だ。そんなことは一切認めんぞ。」

ラウラの『嫁宣言』こうげき！

「私は一夏の嫁よ。だから問題ないわ。」

「嫁に嫁ができる？」

ラウラは何度も『嫁』と繰り返し頭がこんがらがりフリーズする。

「へえー、『鈴』。箒にはそういうことは宣言するけど僕には宣言しないんだ。ふーん。」

シャルロットがいきなり笑顔で修羅以上のナニカをつれて鈴に歩み寄る。

「何？あんたは眼中ないわよ。どうせ勝てるし」  
「ふーん。まあいいや」

そういうがどうやら鈴はシャルロットを敵と認識し火花を散らす。  
そんな中セシリアも参加し軽いカオスになる。  
完全に置いてけぼりになった一夏から一言。

「俺、別にハーレムしたいとか一言も言っていないぞ…」

「おいおい、余計な真似をしてくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ。」

千冬は壁に背をもたれながらナターシャに面倒臭そうにいう。

「思っていたよりカッコよくて、つい。」

「やれやれ、それよりももう動いても問題ないのか」

「ええ、おかげ様で。私は『あの子』に守られていたから」

先ほどの陽気な雰囲気はすでに無く気配を静かに鋭くさせていた。

「やはり、そうなのか」

「ええ、あの子は無理やり『完全復活』をさせられあんな醜い姿にさせられた、だから私は許さない。あの子の翼を奪い最後には姿も無理やり変えられたことに私は許さない。たとえ相手がどんなものであれ」

「そうか、ならこれを見ておけ、きっと敵の名前が分かるぞ。」

そう言っただけ千冬は折りたたまれた紙を投げる。

ナターシャはその紙を広げ静かにその内容を見る。

「福音のコアに残されていたメッセージだ。」

千冬は目を閉じながらそう呟く。

それと同時にナターシャは力強くその紙を握りつぶす。



その紙の内容は

『Welcome、Welcome Princes .

From PHANTOM

」

ファントム・タスク  
「亡国機業…」

ナターシャそう恨みがましく呟きながら速足で去っていった。

第33話 君の名は… / your name is… (後書き)

ここでアンケート〜!! ドンドンパフパフ(ここら辺は特に意味無し)

jen様が『次回は日常』っていつていたのですが、すみません。完全にギャグ回とか考えてません。夏休みも『更識簪編』というわけです。というほのぼの系は念頭に置いていませんでした。

そこで皆様が希望する場面(例えばプールなど)を感想に記入してください。

こんなのがいい!! って人は『A』を入れてどんな所に行くかも記入してください。

いらなくねって人は『B』で

では、以上です。

…ヒロインのアンケートはいまだに続いている。

第34話 『Beast事件』（前書き）

今回は大分残酷な描写が含まれます。ご注意ください。

### 第34話 『Beast事件』

アラスカ刑務所

そこにはたった一人の受刑者を閉じ込めるに作られた難攻不落の要塞。

その中で一人のいかにもアメリカの太った警官が欠伸をしながら懐中電灯を振り回しながらその受刑者の扉の近くまで見回りに来ていた。

扉から鼻歌が聞こえる。

「　　　　　」

「おい、おい、またその歌かよ。飽きないな、お前」

受刑者が奏でているのは有名な日本のわらべ歌だ。

この年に入ってから受刑者は急にこの鼻歌を歌い出したのだ。

警官は呆れながら扉の小さなガラス（といっても重機関銃でも簡単には壊せないが）から中を除く。

その中にいたのは体中が拘束衣でがっちり固め、手、足や首などに拘束具がされ口以外は一切肌が露出していない女性がいた。

その女性のコードネームは「Beast」

5年前「B・M・B事件」の首謀者にして当時千冬と『第一位』に捕まえられて行動できなくなりこの刑務所に放り込まれたのだ。女性はその声に気づき警官に語りかける。

「おい、おっさん。」

「Beast」に話しかけられ警官は顔を真っ青にし、後ずさりする。

「聞いてんのか？オッサン？聞いてなかったら、今すぐその豚の様に丸々太った肉体を切り刻んで家庭用ミキサーでごちゃ混ぜにして人肉ジュースにすんぞ。」

「ああああ、す、す、すまない。聞いているよ。」

その言葉を聞き「Beast」は満足そうに腐った果実の様な笑みを広げる。

そして「Beast」は楽しそうにまるでテストの満点を取ったのを自慢するように語る。

「私、今から脱獄するわ。」

「は？」

警官はついついきょとん、とした顔になる。

次の瞬間、

グチャ！という果実をつぶした様な音がドアから響き、本来ISでもない壊せないドアがいきなり吹っ飛び、ドアは警官にぶつかりそのまま壁に激突する。

ブチュ、という生肉が潰れる音が生々しく鳴る。

グチャグチャになったドアと壁の隙間からドロリと、血が流れそれと一緒に人間の肉らしきものが赤い線を引きながらゆっくりと現れる。

ドアの奥底からフルアーマーのISがゆっくりと現れる。

色は黒と赤と青が基調で、手は大きな爪がついており、足は凶暴そ

うな鉤爪があり、顔はまさしく獣の様な形が取られていた。

赤いランプが光り、緊急事態を知らせるアラームが刑務所内でけたましく鳴り響く。

そんな中「Beast」は笑いながら日本のわらべ歌を歌う

「通りゃんせ　通りゃんせ　ここはどこ　細通じゃ」

ゆっくりと獣が獲物を探す様に移動していると目の前に完全武装をした兵士達がバリケードを作って待ち伏せしていた。

手には短機関銃が握られており、中には超電磁砲レールガンを構えている兵士もいた。

兵士達に恐怖と緊張が走る。

あるものは若干手が震え短機関銃からカタカタと揺れる音が小さく聞こえる。

「Beast」はそれらを無視して尚も歌い続ける。

「天神様の　細道じゃ　ちつと通して　下しゃんせ」

『撃て　！！！！』

兵士達からそんな怒号が聞こえる。

兵士達は一斉に発砲する。

ガガガガガガガガガ！！という機関銃特有の音が複数に大きく響く。

しかし、「Beast」はそんなことは一切気にせずゆっくりと歩く。

その間にもISのアーマーに弾丸が何千発も当たる。

当然のことながらISにはその程度の攻撃は効かない。

「Beast」は手を大きく上に挙げ、風を引き裂く音を出しながら兵士たちやバリケードを薙ぎ払う。

「くぐわあああ　　！！」

兵士達はそれによりまとめてゴルフボールの様に空中に放り投げられ様々な場所でぶつかり、あるものは壁にそのままザクロが道路で潰れた様になり、またあるものは何とか助かったが頭上からバリケードの残骸が降り注ぎ押し潰されたりしていた。

「ヒ、ヒ　　！」

先ほどの攻撃を唯一逃れた者が四つん這いになりながら逃げだす。

「Beast」は兵士の背中を思いつ切り踏みつける。

「くぺえ！？」

兵士は明らかに可笑しい声を出しながら踏みつけられる。

「御用のないもの　通しゃせぬ　この子の七つのお祝いにお札を納めに　参ります」

「Beast」は心底から楽しそうに歌いながら兵士の頭を掴み、力を込め生きたまま頭蓋骨を引きずり出す。

頭の皮膚が剥がれそこからピンクの肉が露出し、血が溢れ出てきて髪の毛も血で赤く染まりながら、ゆっくりと頭蓋骨が引きずり出される。

兵士は最初釣られたばかりの魚の様に暴れていたが、次第に動かなくなってしまった。

「Beast」は引つ張り出した頭蓋骨を適当に後ろに投げ捨てる。

「Beast」はまたゆるりゆるりと歌いながら歩き始める。

「行きはよいよい　帰りはこわい　こわいながらも」

獲物を見つけ出すために…

「通りゃんせゝ 通りゃんせゝ」

それから30分後

アラスカ刑務所は瓦礫の山と化した。

「こいつは…」

『IS世界ランキング』第一位』、『イーリス・コーリング』の目の前には地獄絵図が広がっていた。

アラスカ刑務所から救援要請を出されすぐに向かったがすでに時遅くアラスカ刑務所には『素敵な骨董品（死体）』の山が出来ていた。

あるものは股間にパイプを無理やり刺されそこから蒸し焼きのように肉体が膨れ上がり

あるものは自らの眼球を無理やり喉仏に埋め込められていたり

あるものは首を吊るされ体の内臓などの人体のパーツがさらけ出されたり

あるものは皮をすべて剥がされ人間プラタリウムになっており

あるもの いや、複数の人間は人肉ジュースの海にされていたり

あるものは50人ほど適当に長細い破片などで顔面を突き刺されていた。特にそのうちの13人には大量に肉体に突き刺されていた。

あるものはワイヤーで吊るされたまま首を絞めつけられたり

あるものは四股と首を綺麗に胴体から切り離されていた

これを見たさすがのアメリカの優秀なる一般兵士と言えど、吐いて



しまったものいる

イリスはその光景を見て奥歯をギリギリと歯軋りする。  
特に50体の死体に

（「Beast」…貴様なりの復習とでもいいたいのか！）

この事件は後の『Beast事件』、アメリカ史上でも類を見ない  
ほどの大事件になったという。

### 第35話 後処理／新たな敵（前書き）

『お母さん。痛いよ、中二病が痛いよ。』  
という場面が入っています。ご注意ください。

### 第35話 後處理／新たな敵

「すまない、千冬さん。どうやら貴女が通信していたのはどうやら僕達と繋がって無かったようだ。」

「なに？」

千冬はドスの聞いた声でマイクに聞き、ギロリとマイクを睨む。  
何故このようなことになっているかというところ今回の『福音事件』の理解不能な指令が来ていたからだ。

その真偽を聞くためにマイクに通信を入れた。

しかし、マイクはIS管理委員会で一切そのような通信が入って無いし、それどころか学園側がやるという風に連絡が来ていたという。  
「怒らないでくれよ、千冬さん。僕だってこの状況は驚いているんだから。でも風の噂でこんな事聞いたことがある。『IS管理委員会上層部の一部が闇に浸食されているって』」

マイクは真剣な顔で噂をいう。

どうやら冗談ではなく本気でその事を考慮している表情だ。

「はあ、さっきUSAから「Beast」が脱獄したという報告を受けてすぐに国際指名手配の準備をしていたら、まさかもう一つきな臭い問題が現れるなんて。はあ、こりゃあ徹夜確定だな。」

マイクは呆れながら資料に目を通す。

「待て、マイク。今、「Beast」が脱獄したと言ったな？」

「うん。でもその問題より千冬さんが持ってきた問題の方が大問題だよ。」

IS学園はそもそも世界中の選りすぐりのエリート達が集まる場所である。

その学園が3回も襲撃。それは学園の信頼は大きく落ちその上、今の生徒達が危険の確率が上がる。それこそ死活問題である。

「とにかく、今回の件は僕と千冬さんだけしか知れないようにする。あと、世界中に一応『正体不明の敵』に注意せよ、という報告も送る。今後の通信もプライベートモードで行うからそこそこよろしく。」

そう言つてマイクは一方的に通信を切つた。

「許せない……」

少年は呟く。

獣の様なうねり声を上げながらテレビを見る。

そこにはISが映っていた。

少年はISが嫌いだ。

少年には夢があつた。

それは『宇宙飛行士』になること。

簡単なごくごく当たり前の夢だ。

しかし、それらはISの登場によってその夢は稀有に終わった。  
正直、夢への努力はしていないけれど。）

そして、女も嫌いだ。

まるで自分達が世界のトップに立っている様な様子がム力つく  
ただ、ただム力つく。

だからそれらを認めている世界もム力つく。  
ム力つくからこの世界に何時か復讐する。

「君の願い、僕が叶えてあげようか」

ふと、そんな声が後ろから聞こえてくる。

「うわぁ！」

少年が後ろを向くとそこには『怪物』がいた。

体は黒と黄色を基本とし、手は凶暴そうな爪がある。足も人間とは思えない様な爪が伸びている、尻尾も伸びており顔の部分は全体的に刺が6本ありまるでライオンの様な顔だった。

その手にはブレスレットを持っていた。

そして、そのブレスレットを少年に渡す。

「これは…」

「君の新たな「力」だよ。これでム力つく奴ら全員を叩きのめせし、女を犯すことだって可能だよ。」

少年はその話を聞いていかにも楽しそうに笑う。

「本当だな？女を抱けるのは？」

「ほんと、ほんと」

怪物は気軽に手を上下に振りながら言う。

少年はブレスレットを腕に付けその名を言う。

「我に従え『フレディ・クロス吸血鬼神』！」

そう叫んだ後、少年の周りを光が包んだ。

### 第35話 後處理／新たな敵（後書き）

最後の少年のセリフ本当に痛々しい

### 第36話 新たな出会い

八月。

In summer vacation

一夏はそんな暑い夏の日のにんびりと散歩をしていた。  
散歩の理由は学内見学

本来なら4月の中旬までに終わる様な事なのだが、一夏がこの学校にはいてから『黒いISの襲撃』、『ラウラの暴走&怪物の襲撃』、止めに世界を滅ぼしかねない翼竜との対決

そんなこんなのがあって一夏はこの学園を見て回る余裕なんてなかったのだ。

一夏はふと、ある看板を目にする。

「これは…」

そこには『整備科』と書かれていた。

『整備科』…それは簡単に言つとISの装備や世代を研究、開発、整備する場所である。

（そついや、ここ行つた事が無かつたな）

一夏はふらりと扉をくぐり『整備科』に入る。

そこで一夏が見たのは薄暗い部屋の中によく分からない工作具、機材、機械の山、山、山

さすがにこの光景には一夏は一步引き下がる。

しかし、夏休みだからなのか『整備科』には人っ子一人おらず、け



れども冷房は完璧であつた。

一夏は興味半分怖さ半分で、足元にあるごみや紙の束を退かしながら奥へと慎重に進んでいく。

一夏は奥へ進んでいくと小さな青白い光が見える。

（誰かいるのか…？）

一夏はその光に向かって山の中を進み始める。

そこでごみなどを蹴ったりしたので、少々騒がしい音を出しながら光のもとに何とかたどり着く。

そこには少女がいた。

髪は水色で制服を見ると一夏と同じ一年の様だ。

ちなみに何故一夏がこの女の子が一年と分かった理由は制服にある線の色だ。

赤は一年、黄は2年、青は3年という風に分けられる。

しかし、今はそんなのは問題ではないなぜならこの少女、一夏は騒がしい音を出しながら移動してきたのにも拘らずうつ伏せの状態ですべて起きないのだ。

一夏は少し大きめの声で少女に話しかける。

「もしもしー」

「……………」

反応なし

ちよつとヤバくね？つと、一夏は若干焦り始める。  
とりあえずもう一度少女に話しかける

「もしもしー！」

大声で、

そこで、少女は肩を小さく揺さぶりようやく反応する

「……………」

「お？」

少女の声は微妙に苦しそうに言う。

一夏は少女が言った事を反復しつつも今すぐ『医療班』を呼んでこようかと一瞬迷う。

「…おなかへった…」

「……………」

どこぞのインなんとかさんかよ。

一夏は心のなかで激しく突っ込んだ。

とりあえず一夏は購買まで行って捜査の相棒達を買ってこようと思った。

もぐもぐもぐもぐと一生懸命小動物のように食べ物をかじって食べる少女

一夏はその光景が可愛らしくて頭をなでなででしりたいと思ったのは秘密だ。

少女はメガネを掛けていて目は赤色で人よりも細く、髪は少しぼさついているが基本の型はセミロングで癖毛のハネが内側に向いている。

少女はアンパンを食べ終えて牛乳でそれらを流し込む。

少女はようやくおなかを満たし頭が回ったのか一夏を食い入るように見る。

「えーと、初めまして。織斑一夏です。」

一夏はとりあえず笑顔を見せながら自己紹介する。

「…知ってる」

少女は短く答える。

そして、一夏の手を持っている『限定焼きそばパン』に視線を移す。  
一夏はその視線に気づき焼きそばパンを少女に差し出す。

「食べるか？」

「……………」

少女は無言で首を振る。しかし少女の視線は焼きそばパンから離れない

とりあえず、一夏は少女の手の平に焼きそばパンを置く。

数秒、沈黙が走る。

もきゅもきゅ

という音が『整備科』の中で響く。

やっぱ、食べたかったんだ。と一夏は心の中でつぶやく

そうして少女が食べ終えると立ち上がり手をゆっくりと上げまた下げた。

「？」

一夏が頭にクエッションマークを浮かべているのを無視して少女はまた席に座る。

一夏は気を取り直し彼女の名前を聞くことにする。

「えーと、お前の名前は？」

「…私の名前は『更識簪』<sup>（よりしきかんざし）</sup>。…私には、あなたを…殴る権利がある。  
…けどパンの御礼があるから…殴らない。」

「はあ…」

一夏はよく分からないという曖昧な返事をする。  
簪は言葉を続ける

「…あなたのせいで…私の専用機は完成していない。」  
「えー！？」

そういつて簪はちらりとたくさんのケーブルがついた物を見る

「あれは…IS？」

一夏が怪訝な声で言う。

よく見るとケーブル以外にもISの周りにはたくさんのパラメーターが載った空中ディスプレイが複数浮かんでいたり工具が地面に散らばっていた。

どうやら簪はそのISを自力で作りがっているようだ。

簪は再度口を開く

「…私の専用機とあなたの専用機は開発元は同じ…」

一夏はその言葉を聞き理解する。

それはつまり一夏の白式に『倉持技研』がすべての人員を回し簪の専用機がほっばかされ彼女の専用機が未完成であるということである  
しかもその言葉にはどこか陰りがありあまり言いたくなさそうな声だった。

「その、ごめん。」

一夏は手を合わせ簪に謝る。

簪は完全にその謝罪を無視する。

嫌な沈黙が走る

一夏の頭の中の電球の光が点灯する。

「じゃあ、そのISを作るのを手伝わせてくれないか？」

一夏は懇願するようにその提案を簪に告げる

「…嫌」

一言で断れた。

むろん、一夏がそんな発言した理由は罪悪感に駆られたからだ。

「そう言わずにさあ」

一夏はもう少し粘ろうとするが簪は立ち上がり『整備科』を出て行った。

IS学園の門番の屈強な警備員たちが立っていた。

その警備員の一人の影に黒い小さな物体が入り込む

「うん？」

「どうしたんだ？」

「いや、なにも」

「そうか」

「それよりも交代の時間だ。ちよくら弁当食いに行こうぜ」  
「お、おう」

そいつって警備員達はIS学園に入っていく。  
黒い物体とともに…

### 第37話 潜入完了（前書き）

更新遅れてしまつてすみません。

### 第37話 潜入完了

(うーん)

絶賛鈴は迷ってイライラしていた

この今自分が持っているプールのチケットをどうやって一夏に渡すかを

イライラしている原因はこの暑さだ。

鈴はこの日本の蒸し暑さが大っ嫌いだ。

(だあー！暑いどうしてこう日本の夏はじめじめして暑苦しいのよ！)

ちなみに蒸し暑さなら大阪が一番である。特に夏の夜とか暑い何の

「何してんだ？鈴？」

「ふえ！？」

いきなり目的の人物に話しかけられかわいい声を出す鈴

「？本当にどうしたんださっきからずっと同じ場所をぐるぐる回って」

「えーいや、その…」

ちょっと前までの鈴なら『ツンデレ』をしていたのかも知れない。しかし、前回の一件で皮向けた鈴（実際向けたかどうかは不明）



はそうは行かない

「一夏！」

「なんだ？」

「その…これ一緒に行かない？ふ、二人きりで・・・」

「なっ！…」

鈴は目を瞑りながら二枚のチケットを一夏の前に突き出す。

いつもの鈴とは違うしおらしい感じに言われ、一夏は狼狽する。

けれど、一夏はそのチケットの日付を見て気づく

「あ、ごめん。その日は倉持技研にいつてデータ取りに行かないといけないんだ。ほら、先月<sup>セカンド・シフト</sup>二次形態しただろ。だから改めてデータが欲しいんだって」

「そう…」

鈴はしゅんとした顔になる。

ツインテールも若干垂れ下がっている気がする

「ごめん！この埋め合わせはちゃんとするから！」

「本当！じゃあ、約束だからね！」

鈴はその言葉を聞いて元気な笑顔浮かべながら去っていった。

一夏はしばらくそこで胸をどきどきしながらしばらくそこで立ち止まってしまった。

カタカタとキーボードを叩く音が静かに『整備科』のなかで響き渡る。

本来この時間なら生徒たちは寝静まっている時間だ

しかし、夏休みだからなのかIS学園では就寝時間があまり定まっておらず好きな時間に寝て起きれることも出来るのだ

簪はキーボードに叩き続ける

「…各駆動部の反応が悪い…どうして…？」

ディスプレイを必死に凝視する。

簪がやるうとしていることは前にも言ったようにISを独自の技術を組み込んで実用化する

- 未完成の機体を独力で実用化 -

それだけなら『第10位』

つまり簪の姉がやってのけた事。

それをすこしでも超えるためにも独自の技術を組み込んだこの『打鉄式』を完成しなければならない

「…コアの適正值も上がらない…やっぱりタイプが向いていないの…？」

リヴァイブの汎用性を参考に全距離対応できるが『打鉄式』の真骨頂は後方支援である

「…ふう…」

思考を一旦止め一息つくこうとすると頭の仲で今日会った少年の顔を自然と思い浮かべてしまう。

(…！)

簪は直ぐにその思考を取り払うかのように顔をブンブンと振る

(…どうして彼のことを思い出すんだろ…)

あれは同情のために手伝うと言っただけ  
けれども…

(…始めて他人に心配された気がする…)

姉は自分のことを快く手伝うだろう  
けれども

自分にとってそれは恐怖と畏怖に感じてしまい、どうしても受け入れられない

簪は再度首を振り思考を遮る

(ビデオでも見よう)

簪はカバンからi p a d t o u c hを取り出しヒーロー物のビデオを再生する。

簪が好きなのはヒーローが悪の組織を倒すというシンプルな物が大好きだった

しばらく簪は画面に釘付けになる。

『ダブル！！ライダー……！！キッツック……！』

『ギャアアアアア！』

『はあ！こいつはいい儲けをしたな』

「ふっつ」

簪は満足したのか画面を閉じカバンにそれを入れ、椅子に沈み込むように背を伸ばし気を緩める。するとまた今日会った少年の顔が頭によぎる

簪は磁石が反発するように飛び上がる。

ふと、鏡を見ると自分の顔がほのかに赤くなっていた。

(…なんでもない、なんでもない…！)

簪はその思考を振り切るために立ち上がり早足で『整備科』を出て寮の部屋に寝るために向かった。

時は少し戻りIS事務所

そこには2人の警備員が休憩中なのかのんびりしていた

一人は寝そべりながらリモコンを持ち適当に面白そうな番組を探すためにボタンを何度も押していた

もう一人は白いテーブルに焼肉弁当と麦茶を入れた紙コップを置き、パイプ椅子に座っていた。割り箸で肉と一緒に紅生姜を掴みながら旨そうに頬張っている

黒い物体は弁当を食べている警備員の影から水から湧き出るように現れ静かに物陰を目指すために移動を始めようとする

「おい、麦茶何処においた」

警備員は飲んで空になったコップを軽く振りながら相方の警備員に尋ねながら立ちあがる

黒い物体は慌てた様なふらふらしつつも素早く注意深く移動する。

黒い物体は一旦テーブルの下で止まる

「其処にあるだろ」

もう片方の警備員は寝そべりながら簡易型のキッチンにある大きなペットボトルを指す。

「本当だ。」

警備員はそうぼやきながら簡易型のキッチンを指し歩き出す

黒い物体は動き出したのと同時に移動を始める

黒い物体の頭の中のBGMは『メタルギアリソッド』だ。

警備員はコップにむぎ茶を注ぎ込み、コップを片手に持ちながら回り椅子に歩き出す

この間残り9秒。

その間に物体は弾ける様にテーブルから飛び出し急いで扉を指す。

残り5秒

コップには半分以上麦茶を注ぎ込まれている

物体はドアの前にで立ち止まる。

残り4秒

物体の中から黒い粒の様なものが飛び出し、ドアを開ける赤いボタンの当たる

コップにはもうほとんど麦茶が入っている

残り2秒

ドアが空気が抜ける音を出しながら数センチほど開き始める

コップに飲み物を注ぎ終え警備員はコップを持ち向きを変えようとする

残り1秒

物体はそのわずかの隙を突き一気に外に出る。

警備員は歩き出す。

「うん？」

「どうした？」

「なあ、なんでドアが開いているんだ。」

「さあ？」

黒い物体は見えているのに見えていない（例えばスーパーなどの立ち入り禁止の場所など）ところにたどり着き物体はゆっくりと人間の形を作り始める。

・ククククク

・ナントカISガクエンニシンニユウデキタ

・シバラクセンニユウシテ、ヨサソウナオンナヲサガシダシテ、ソ  
イツヲオレノモノニスル

・ソレニハアイツガジャマ

・オリムラ、イチカ、

・ソレニオトコノクセニフクシュウシナイノモ、ムカつく

・アイツハカクジツニコノカデ殺す

### 第38話 本音（前書き）

あ、報告するの忘れてましたけど第番外部『All begins』は第3部終了と同時に始まります。日常はおそらく第2・5部『日常』という風になると思います。

### 第38話 本音

簪との邂逅から9日目

未だに一夏は簪に会ったびに説得していた。

簪は飲み物を買ったために『整備科』から出ようとする。

けれども、それとほぼ同じタイミングで一夏が『整備科』に入ってきた

「よっ」

「……………」

屈託の無い笑みを浮かべながら簪に軽い感じで挨拶する。

その両手には飲み物を持っている。

右手には少し大きめの午後に飲むレモンの紅茶のペットボトルを手の熱で熱くならないようにハンカチで持ち、左手には少し小さめの葡萄ジュースが右手と同じように持っていた。

しかし、簪はその顔を見ないようにしながら無視を決め込むもはや恒例行事である。

「紅茶とブドウどっちがいい？」

「……………」

簪はそんな言葉を見無視して少し速足で『整備科』をでる。それを一夏は慌てて追いかける。

「なあっ」

「……………」



もう一度一夏は簪に声を掛ける。

しかし、簪は先ほどより少し速足で移動する。

「更識さん」

一夏は簪の名字を呼ぶ

簪はすつと歩みを止め、一夏をゆるりとした動作で睨みつける

「…名字で呼ばないで」

「…すみません・・・」

地雷踏んだ

一夏はそう直感で感じしょんぼりとしながら謝る。

「…私に構わないで」

そう言つて簪は歩み始める。

一夏はその言葉を聞き、気を取り直しちよつと大きな声で簪に呼び掛ける。

「じゃあ、ジュース貰ってくれよ。2本もいらないし」

ピクッ。

簪から猫耳ぽいのが生えた気がする。

チラリと一夏の方を見る

一夏は飲み物を簪の方へ差し出そうとする。

すると簪はまたソップを向き歩き出そうとする

チラリと再度一夏の方を見る

簪はゆつくりと口を嚙む

「…葡萄…」

「了解」

そう言つてペットボトルを差し出す一夏。

簪もペットボトルを受け取るうとして手を動かす。  
すると一夏と簪の手が触れる。

「……！」

簪は驚き反射的に手を素早く背中へと引つ込める。

それを不思議そうな感じで一夏は首を傾げる

その姿が簪は気に食わなかったのか頬を小さく膨らませ目を若干吊り上げながら、一夏の手からペットボトルを奪い取る。

「ととつ」

奪い取られた事によつて一夏は前のめりなるが、直ぐに体勢を立て直す

簪はペットボトルの蓋を開け、ペットボトルを小さく口に預けるように傾け、こくこくこく、と小さく規則的な音を出しながらジュースを飲みながら先ほどより早足で歩き出す。

「簪さん」

一夏はとりあえず簪の名前を呼んでみる。

ピタリと簪は歩みを止めたまま一夏の顔を見ずに言い放つ

「…名前で呼ばないで」

今度は先ほどよりは言葉にとげが無かった。

一夏はその言葉を聞き胸をなでおろす。

「じゃあ、少女？」

「…馬鹿に、してる？」

「いや、馬鹿にはしてないけど。あー、じゃあ、俺はなんて呼べばいいんだ？」

「…それだったら名前のほうがまだいい…」

「そうか、じゃあ簪さん」

一夏は名前を呼ぶ簪はとりあえず満足して頷き早足で歩く  
今度はさきほどより足の速さは遅くなっている。

「なあなあ、簪さん俺にISを作るのを手伝わしてくれよ。」

「イヤ……」

即答だった。

一夏はその姿がどこか意地というか何かを後ろめいている様子に見えた。

顎に手を据えながら何気なく一夏は簪に疑問を投げかける

「もしかして、其処まで拘っているのは何か原因があるのか？」

「！？、」

簪は今までに無い以上にビクッ！！と身をすくませる。  
どうやら凶星だったようだ。

「…あ、あなたに何が分かるの？」

簪はゆつくりとそれでいて荒々しい口調で語り始める。

「私がどうして自分でISを作ろうとしているのか…いつもいつもみんな口を揃えて『流石、楯無ちゃん、妹凄いわね。』、そればかり…何で皆私を見てくれないの!? どうして、あの人はいつも怖いぐらい優しいの!? どうして私は何一つやっただらいけないの? 私は何なの!? 私はお飾りなの? 私は何時になったら『更識簪』になつて、あの人の『完璧』から逃れられるの?…ねえ、私はどうしたらいいの?」

簪は珍しく大声を張り上げたことによって息がしばらく荒くなる。しばらく沈黙が訪れる。

やがて簪は何回か深呼吸をして息を整える。

「…ごめんなさい。…やっぱり分からないよね。あなたみたいな一人で何でもできる人には…」

簪はゆつくりとおぼつかない足取りで歩き始める

「簪!」

一夏は勢いよく簪の名前を呼びながら両肩を優しくそれでいてしっかりと掴む

「…な、「ライダーチョップ」、痛っ!」

一夏はいきなり簪の頭に軽くチョップを入れる。

簪は叩かれた部分を涙目になりながら両の手で押さえる。

一夏はそのことに構わず話し始める。

「俺はお前のお姉さんのことはよく知らないし、どれだけ凄いのかも知らない。でも、これだけははっきり言える。簪、俺はお前を尊敬している。」

一夏ははっきりとした口調でそう言い放つ

「…へ？」

簪は困惑と疑惑の声を上げる。

「だってそうだろ。俺にはISがどんな構造しているのかさっぱり分からないし取扱説明書見せられたって本当に分からない。」

「…それぐらいだったらあの人にも…」

簪は不安そうな声色でそういう。

しかし、そんな言葉を一夏は遮る。

「だったら、お前が何時もしているあのタイピングはお前の姉さんにできるのか？素人見た目ではお前の打つ早さは束さんも引けをとらないと思うぜ。」

一夏は自信満々に若干胸を張りながら言う。

簪はその言葉を聞き少し驚く

「それに俺は正直言つて一人何かできたためしがない。いままで人並みに生活できたのは千冬姉のおかげ、剣術だって師匠のおかげ、ISの操縦だってこの学園の皆に教えてもらったんだ。だから簪、俺にも手伝わせてくれ。お前が『更識簪』になるのを。それでお前のお姉さんをびっくりさせてやろうぜ。『もう大丈夫。』ってくらいにな」

簪はその言葉を聞き少し黙る。

簪は顔を小さく上げ一夏の顔をじっと見る。

一夏はその顔を見て綺麗だなっと素直に思う。

「…じゃあ、手伝ってくれる？」

「応。」

簪は少しだけ微笑む。

一夏はそれに答えて笑顔で答える。

「…でも、図面とか読めるの？」

簪は悪戯を掛ける無邪気な子供みたいにそんなことを言う。

「……………」

一夏は視線を逸らし空に顔を向ける。

「空って青いな。」

「…役立たず」

「ぐはっ！」

お姫様は辛辣であつた。

「…じゃあ、早速白式の稼動データと力仕事お願い」

簪は笑いながら一夏にそう語りかける。

一夏はその笑顔を見て頬を赤くするが直ぐに気を取り直し元気のよい返事をした。

「あ  
あ  
！」

### 第39話 のほほんさん（前書き）

すみません。二日も遅れてしまっ、しかも中途半端になると思います。



### 第39話 のぼんさん

第2整備室そこには現在簪と一夏がいた。

それ以外に人は夏休みだからなのかほとんどおらず精々5、6人いるくらい

余談だが通常の授業があるときは基本4・30人は必ずいるそうだ

「じゃあ、早速簪さんの機体を見せてくれよ」

そう一夏が事を始めるために簪に語りかける。

簪はその言葉に従い右手を軽く突き出す。その中指にはクリスタルの指輪が嵌められている。これが打鉄式式の待機状態なのだろう。

「…おいで、打鉄式式…」

指輪は青白い粒子になりながら簪を包むように広がり、そしてISが形作られる。

簪はISを装備したと同時に浮遊する。

打鉄の後継機で発展機と一夏は話に聞いていたが、その姿かたちは打鉄からかなりかけ離れている。

スカートアーマーは機動性を重視した独立ウイングすらスターが装備されており、防御型の打鉄に比べて式式は機動型なのだろう。

肩部は大型ウイングスラスタがひとつに、小型の補佐ジェットエンジンが前後2機搭載されている

腕部装甲は何故か異様に膨れ上がっている

打鉄とほとんど同じなのは頭に装着しているハイパーセンサーだけだ。

「ってあれ？機体はもう完成してる？」

一夏は簪に質問するとE.S.を着陸させていた簪は頭を何度も振るう。

「武装が……まだ……。それに……まだ稼動データも取れてないから……今のままじゃ実践は無理……」

「そうなのか、ちなみに武装って？」

「マルチロックオンシステムによる高性能誘導ミサイル、フィールドシールド……それらを一手に任せれる『能力入力』……。それと……荷電粒子砲がまだだからあなたの『雪羅』の荷電粒子砲のデータが必要……」

そう言いながらモニターから一夏のほうを見る簪。

しかし、一夏は少し困ったような顔になる

「あー、悪い。俺、『雪羅』の荷電粒子砲使ったことが無いんだ」  
「え……？」

簪もその返答に驚きつついつい声が出てしまう。

一夏は言葉が続ける。

「いや、俺って射撃形の武器使うとどうしてか相手に当たらないから全く使わないんだ」

一夏の話半分半信半疑で聞く簪。その顔を見て一夏は困り果ててしまう。

「おーりーむー。かーんちゃーんー」

パタパタという普通ならなかなかでない足音を出し謎のネーミングセンスで一夏と簪の名前を呼ぶ人影が整備室に入ってくる。その人の名は

「本音……」

のほとけほんね  
布仏本音、別名のほほんさん。

一夏のクラスメートで何時も眠そう顔をしながらだぶだぶの服を着て動きがものすごく遅いのが特徴の人だ  
それよりも一夏が驚いたことがある

「のほほんさんって本名じゃ無いんだ……」

冗談などではなく結構本気で驚いている一夏

「ひどいよー！おりむー！私の名前は布仏本音だよー！」  
「あ、わ、わるい」

さすがにこれはひどいと思ったので謝罪する一夏

「……本音嘘はだめ」  
「てひひ、バレた。分かったよ。かんちゃん」

本音は泣き顔崩しすぐにのほほんとした笑顔になる

「何だか親しそうだな二人とも」  
「うん。かんちゃんとわたしは、幼馴染なんだよ」  
「へえ」

一夏は二人の親しさの理由を知り納得の声を上げる

一夏が納得した様なので本音はぶかぶかの制服をパタパタと振りながら、簪のほうに向き直る

「かーんちゃーん、機体調整手伝ってあげる。えへへ」

「や、やめて……いじらないで……。あつ、あつ……」

簪はどうにもこの幼馴染が苦手のようだ。

なんとか簪は本音の調整を止めて本音を少し睨む

「どうせ、お姉ちゃんに言われて……来たんでしょ……」

「えゝ？ 違うよー。私はっ、かんちゃんの専属メイドだからー、お手伝いするのは当たり前なんだよー」

「……………」

簪はあえて何も言わずに黙り込む

そんなことを気にせず本音は鼻歌を歌いだす

「月曜から木曜までゝ暮らしを見つめる布仏本音でゝすゝ」

「せめて金曜は働いて……」

「えゝ」

簪は本音に毒気を抜かれがっくりとうな垂れながら溜息をつく

その光景を優しく見守っていた一夏は唐突に妙な本音が発した単語を反復させる

「（うん？ 『専属メイド』？）」

その後3人は機体を調整したり、飛行試験をして簪が落ちるなどが起こったそう

「うーん、ここでもないか」

箒は顎に手を添えながら食堂から出る。

「一体どこにISが潜伏しているんだ？」

箒は呟きながら辺りを見回しながら歩き始める。

この10日間、箒が探しているのはIS学園に侵入した『登録されていないコアを使用しているIS』。

箒は紅椿を収得して以来ISのコアが何処にあるかが感知できるようになり、例え潜伏状態になっても感知できる優れた能力を手に入れた。

それにより箒はIS学園に侵入したISを搜索していた  
しかしこの感知能力には弱点がある

一つは街一つ分しか包めない

もう一つは具体的な場所が感知できず『多分ここ等辺じゃ無い？』  
という曖昧な物である

それでも箒はずっと探していた

ちなみに何故箒がその事を言わないかというと、どうせ取り合ってくれないだろうと思いいこの事は誰にも言っていない。

もっとも善良的な奴なら箒も放置していたかもしれないがなんだが良からぬ気配があるため探知し続けていた

余談だが見つけたら即、紅椿を展開して相手をとっ捕まえて何故この学園に入ったのか問いただすつもりだ。

「うむー、もう少し探してみるか」

そう言いながら箒は速足で食堂から離れていった。

フー、アブネエ

ドウシテアノ女ハオレノイバシヨガワカルンダ？  
モシカシテスキナノカ？

ソウカ、ソウカ

ナラ、オレノセイドレイニシテヤル  
ククククク

## 第40話 完成と急転直下

「いつ、『実験動物』は動くのかな？そろそろ、こつちとしては動いて欲しいんだけど」

怪物は学園の警備は範囲ギリギリで一夏達と少年を電柱の上から観察していた

怪物は先ほどまで一夏がもはや神がかった射撃の下手さを見て爆笑していたが、今は明らかに機嫌が悪い、というかブチギレそうな様子だ。

「うーん、でも青い髪の女の子がISを完成させてからの方が『実験』も効率よく動くかな？」

怪物は指をくるくる回しながら墜落した簪を受け止めている一夏の方を向く

怪物は指を動かすのを止め薄く笑う。

「そっちの方が面白いかな、でも『紅巫女』が気づいたらそこから『実験』開始ってことで」

そうときまれば怪物はこの場には用が無くすぐさま立ち去った。

「はあー、やっぱりというか、当然というか、報告書提出か」

打鉄式式の飛行、起動テストを行っていたのだが、式式が事故を起こしてひと悶着あり第6アリーナから出てきた。

お互いに命に別状はないそうだ。

一夏と簪の手には数十枚の束になった報告書を持っていた。

一夏はものすごく嫌そうな顔で報告書の束を見る

「……………」

簪は申し訳なさそうに顔を俯きながら一夏から少し離れて歩いている。

「どうした？」

「私のせいで……ごめんなさい……」

「なんだよ、気にするなって、機体の事故じゃあしょうがないだろう……」

一夏が何気なく言うが、簪は掌を力強く握り拳を作る。

「（あー、やっぱりショックだったんだろうな。自分で調整した機体が事故をおこしたんだし）」

「やっぱり整備科の人に手伝ってもらおうぜ」

実は説得した後一夏は『自分以外にも手伝ってくれそうな人を探そう』と提案したのだが簪が『まだいける……』とその案を拒否したので一夏もあえてそれ以上言わなかったが今回の件により独力での限界が来たことを思い知らされた



「う……、うん……そうする……」

簪はそう小さく頷き肯定する

「じゃあ、さっそく今学園にいる整備科の人に声をかけてみるか」  
「し、知り合いいるの……？」

簪はちよつと不機嫌そうな顔をしながら一夏に聞く

「いない！」

どうどうした態度でいないことを一夏は肯定する。

それを簪は呆れながら一夏を見る  
前途多難の予感がびんびんする  
其処に一つの希望が舞い降りる

「かーんちゃーん！おりむー！大丈夫だった？」

ぶかぶかの制服を振りながら覚束ない足取りでやってきた本音。

「（うん？そつえばのほほんさんって整備があそこまで上手くできてたし、もしかして『整備科』の知り合いいるんじゃないか？）」

本音の顔を凝視しながら考え込む一夏

「どうしたの？おりむ」

首を傾げながら一夏に質問する本音

「あ、ああ。悪い、のほほんさん。そういえばのほほんさんは『整備科』の知り合いっているか？」

「うん、いるよ」

「本当か!？」

本音の言葉を聞き一夏は歓喜する。

本音はのんびりとした動作で肯く

「本当だよ」と、黨先輩に「フィウ先輩に」他にもいつぱいいるよ」

頭を傾げ人の名前を言いながら指を一本一本立たせていく

「じゃあ、その人たちに簪さんの機体の手伝いつて頼めるか？」

「うん、できるよ」

『よっしゃ!』とガッツポーズを取る一夏

「じゃあ、私は皆に頼んでみるよ」じゃあね」おりむ」かんちゃん」

そう言つて来た時と同じように覚束ない足取りで元来た道を歩いていく本音。

その足は先ほどより微妙に速い

「…あ、…あの…」

「ん?どうした簪さん」

先ほどまでずっと黙っていた簪はしどろもどろになりながら一夏に

喋りかける

「た……たす……助けて……くれて……ありがとう……」

顔を一夏に急激に近づかせたかと思うとすぐに一夏から離れる

簪は指を不規則に弄びながら顔を真っ赤にさせて俯させる

一夏は一瞬驚き、ゆっくりと温かい笑顔になる

「なんだ、そんなことか。そんなの当たり前だろ？」

「……………」

簪は顔を上げ一夏の顔をしばらく凝視する。

「格好、いい……」

そう小さく呟きまた顔を俯させる

「ん？何か言ったか？」

「うんうん……」

頭を小さく振る。

一夏はその様子の意味がよく分からず頭上に『？のマーク』を浮かばせる。

ふと、窓の方を見るとすでに空は夕闇から夜に変わっていた

一夏と簪は未だにISスーツを着た状態で夏といえど流石に汗で体が若干冷え込んでくる。

一夏は上の空になっている簪を呼びかける。

「帰るか。このままいても風邪引くだけだしな」

「……………」

「簪さん？」

「……らない…… “さん” は……いない……」

そう小声で告げたと思ったら簪は逃げ出す様に走って去ってしまった。

簪が角を曲がり見えなくなるまで見届け、一夏は頬を人差し指でかく

「（『 “さん” はいらない』か……少しは近づけたかな？）」

一夏は自室に戻るために歩き出す。

その足取りは何処か楽しそうだった。

この6日間は壮絶を極めた

打鉄式式の機体不全が露呈してから翌日

本音の紹介により整備科の2年エース黛薫子、京子、フィーの3人が助っ人が入った。

ちなみに手伝いの報酬に本音は『とにかく甘いもの』

京子は『一夏と2ショット写真、学内デート（ただし自費）』

フィーは『開発の一週間好きなきにマッサージができる券』

薫子は『一夏のピーでズッキュッン！でドツカンな写真が欲しい』  
そうだ。

…注意：薫子の発言に閲覧不能な物がありましたので削除されました  
まあそんなこんなで簪、本音、薫子、京子、フィー、一夏の計6人  
によるISの開発が始まった。

簡単に説明するところだ。

簪は機体の特殊能力『能力入力』とハードウェア、ソフトウェアを  
8枚の球状のキーボードを使っての同時試験稼動、データ蓄積、フ  
ィードバック調整を人並み外れた打ち込みの速さで入力していく

本音は簪のサポート、ちなみにサポートしている時の本音はのほほんとした空気は無く一夏がしゃべりかけたら舌打ちされたという。

薫子は全身の装甲

京子は内部火薬と荷電粒子砲などの攻撃エネルギー

ファイは武器

一夏は他の人たちから指定されたものを機材室から走って持つてくるという超重労働をさせられていた。

2年生から指定された工具、ディスプレイ、ケーブル、お弁当（5人分）、スキャナー、髪留めを付ける、検査装置、マッサージをする、図書館の本（20冊）を返す、シャンプーを購買で買う、ジュースを飲ませる、夕食を買ってくるなどにかく大変であった。そして今日

「できた……！」

簪はキーボードを打ち終わり打鉄式式が完成したことを周りに伝える。

最初に反応したのは一夏だ。

「本当か!？」

「うん……」

一夏の感嘆の声を肯定する。

其処から各々口々に喜びの声を上げる

「やったね〜!かんちゃん〜!」

「うしや!」

「なんとかあ行けましたかあ〜」

「よし!」

「あ、あのっ……!」

皆の注目を集めようと簪は口下手ながら大きな声を出す。  
一斉に全員の視線が簪に集まる。

「あ、ありがとう……ごさいました……。わ、私……ひとりじゃ、  
できなくて……。あ、あの……本当に……本当に……ありが……。あ  
りがとう、ありがとうございました……！」

簪は所々言葉を詰まりながらも先進誠意を込めて五人に感謝を伝え  
頭を大きく下げる。

「あはは、気にしないでよ。同じ学園の仲間じゃない」

「ま、あれだな。久々に日本製のISが触れて面白かったぜ」

「んんー。今度は甘い物を食べさせてくださいねえ」

「私はケーキがいい」

「え！？のほほんさんまだ甘いもの食べるの!？」

「えーおりむー其処は言っちゃだめだよ」

そうして優しい笑いが整備料を包む。

簪は目からほろりと一筋の涙が零れる。

ああ、どうして私はいままであんなにも意地を張っていたのだろう  
世界はこんなにも明るく優しい光に満ち溢れている  
そして、そのことを教えてくれた笑顔が似合う私のヒーロー

簪は微笑みながら一夏の方を熱の籠った目線で見る  
その様子を周りにはやにやしながら見つめている。

だからこそ予想外だった。まさか、突然隣の機材室が爆発  
を起こすなんて……



第40話 完成と急転直下（後書き）

もっと感想が欲しい否定でもいいから



## 第41話 戦闘開始（前書き）

今回は少し切りが悪いです。

## 第41話 戦闘開始

「追い詰めたぞ」

箒は機材室で追っていた侵入者を追い詰めている。

右腕に部分展開と雨月を展開しゆつくりと侵入者に近づく。

「目的は何だ。事と次第によっては容赦はせんぞ」

あくまで冷静に、それでいて言葉の端々に殺気を滲ませて相手に語りかける。

『なんだよ、俺の性奴隷か』

唐突に部屋全体から声が響き渡った。

箒は部屋全体を見回すが、人がいる気配は無い反応からしてISと一緒にいるはずだ。

箒はもう一度問いかける。

「もう一度問う。お前は何をしにこの学園に来た。それと先ほどはどういう意味だ」

返答は直ぐに返ってきた。

『俺の目的？そんなに聞きたいか？いいだろう！聞かせてやろう！俺の名前は『鉄のダークムー<sup>くらがね</sup>ン』！この腐った女尊男卑をぶち殺し…うんたらかんだら以下略』

箒は内容を見殺しに相手がどこにいるかを声を頼りに詮索する。  
目を閉じ、意識を耳に集中させる。

「そこか！」

箒は声の音源を割り当て、すぐさま体をひねりながら箒の背後にある音源に雨月を投げつける。

本来なら刀はそのまま壁を貫き周りにも大きなひびが入るはずだ。しかし、刀は壁からあと少しの所で静止しそこで固定される。

雨月の刃先だけ何故か空間が歪んでいる。

じっと睨みつけながら紅椿を展開、赤い粒子の粒が箒を包み込む。その間に雨月が箒に向けて投げ返される。

箒は紅椿を展開し終え、顔に飛んできた雨月を掴みとる。

雨月を軽く上に挙げて掴み直す。

『ほう、やるじゃないか。だが、これはどうだ！ヴァンパイアボム

！』

そう叫ぶのに合わせ空気の温度が異様に高くな

「ちっ！」

箒は異変に気づき舌打ちしつつも防御の型を取り衝撃に備える  
部屋全体が赤く光り始めそこから一度光が収束し耳がつんづくような音を響かせなが爆発する。

型を崩さずに瞬時加速を逆噴射し、壁を背中から突き破って爆発から逃れる。

爆発から逃れ地面を滑りながら停止する。  
攻撃の型に変えて煙の中にいる敵を睨む。

煙からISを纏った人影が悠然と現れる

煙は徐々に晴れ敵の姿が現す

ISの基本カラーは黒でスラスタは小さいのが2つ、腕と足は異様に細長く、そして最も驚くことは操縦者が男ということだ。

だが、箒が驚いているのは其処ではない。

「（馬鹿な…！奴の中にコアが23個もあるだろ！？しかも全て『登録されていないコア』、あのままいると精神が食われるぞ！）」

ISは一つに付きコアは一つ。それは原則であって必ず守らなければならぬ。

理由はしごく単純。操縦者の身の安全のためだ。

確かにコアが多ければ多いほど戦闘力は『倍』ではなく『乗』に跳ね上がり、3個も揃えれば『オリジン・コア』をも圧倒できる。

だが、ISは2つ以上あるときお互いがお互い相手を潰そうとしてコアが暴走してしまう。

その影響でコアに心を食われてしまう恐れがある。（正し箒だけは幾らコアを取り込んでも問題なく使用できる）

下手を打てば福音のように『暴走復活』を起すか、身体ごと灰になる危険性がある。

実際過去にロシアが2つのコアを同時使用した結果、研究所を半壊させた上で操縦者を死なせている。

今、相手の機体はそれだけの危険性を持っている。

「おいおい、どうした？男ってことがそんなに驚きか？驚くなよこんなこと二次創作じゃあよくあることじゃないか。そしてそういう時は常に俺みたいなのは最強ってことも…ね！」

敵は一気に箒との距離を詰め腹を殴りつける

「ぐふっ！？」

箒は殴られた反動で後ろへ後退する。

一瞬、意識が薄れるが自分自身に渴をいれなんとか踏みとどまる。

敵はそんなことを構わず大きく後ろに後退し、全身から大量の蝙蝠型の弾丸を放出する。

箒はその場から退避しようと足に力を加える。

「きゃっ！」

「助けて…！」

その考えを直ぐに放棄し偶然、この戦いに巻き込まれた生徒達の盾に成ることを選択する。

その場を動かず両の刀を振るい弾丸を生徒達に当たらないように叩き落す。

手を休めずに後ろを振り向かず、必死に叫ぶ。

「速く逃げろ！」

「え…「速くしろ！」…は、はい！」

生徒達は箒の言葉に従いそそくさと非難する。

「（ちっ…！こんな場所だったらろくに力が発揮できん！）」

内心毒づきながらも敵の攻撃を真正面から雨月と空裂の斬撃で周りに被害を出さないように弾丸を裂き続ける。

そう、周りにだけ当たらないようにする。

それは裏を返せば箒には今の所全弾命中ということ。

結果、箒のシールドエネルギーは面白いように削られていく。

このままでは負ける、焦りが生じる。  
しかし、弾丸の嵐は突然止む。

「やつぱ、お前はいい女だ。おい、俺のペットにならないか？そうすればベットの上でヒーヒー言わせてやるぞ？」

敵からゲスな質問が送られる。  
むろん、箒の答えは

「断る。貴様のような他人を蔑む事しかできない愚か者など言つことなど誰が聞く」

ノーだ。

返答を聞き敵は額に血管が浮かぶ

「あ、そう。じゃあいいよ。お前は今から散々殴って道具のように屈辱してやるよ。光栄に思え。主人公に犯されるんだ。最高じゃないか」

敵は言い終わると両腕を広げる。  
すると腕の装甲が崩れチューブのようなものに分裂し始める

「こいつの能力は相手にナノマシンを注入し元ある人格を破壊し俺の都合の良い人格を作り上げる。その名も『バンバル・ソルジャー吸血兵』だ。」

敵は楽しそうに武器の説明をする。

「じゃあ、早速我が僕しもへになれ！奴隷一号！」

敵は腕を前にかざし、カッコつけながらチューブ型の武器を箒に向

かつて数本放つ。

箒は真っ直ぐと向かってくるチューブを身体を捻り最初に来た2本を避ける。

その状態から元に戻る勢いを利用しチューブを流れるように両の刀を振るい切り裂く。

チューブは切られた部分から火花と中から緑の液体を散らし真ん中から真つ二つになる。

次に来たチューブに対し箒は一步後退して腰を引き、腕を引き、突きを放つ。

チューブは止まる事ができず引き込まれるように刃先に当たりそのまま綺麗に分かれる。

次も一本で襲い掛かってくる。箒は再度、腰を引く。地面からチューブが現れ箒の両手を拘束する。

「しまっ！」

箒は突然の攻撃に戸惑う。

チューブはそんなことお構いなしにと、真っ直ぐと箒の頭を狙い突き進む。

箒は足の展開装甲を展開し撃墜しようとするが、いつの間にか足もたくさんチューブで拘束され身動きが取れない。

この程度、展開装甲を出せば1秒ともかからないがチューブはきつく締まりこれをこじ開けるのも4秒はかかる。

それでは今、眼前に来ているチューブを回避することができない。まずい。

箒はそう思うがチューブは止まらない。

チューブは箒の額に当たりナノマシンを注入する。

本来ならそうなる筈だった。

だが、箒の眼前に来ていたチューブは横から吹き飛んできたドアによって進路を強制的に変えられる。

白い閃光が先ほどのドアがあつた部屋から飛び出して敵に突っ込み、そのまま敵を押さえ込みながら壁を破壊して外へと出る。ようやくと展開装甲が展開しチューブを焼き切り箒をチューブから開放する。ようやくチューブから解放され箒は手足の首を動かし体勢を立て直す。

「（いったい誰が？）」

箒はハイパーセンサーを使い外を見る。そこには敵と空中に飛び去っていく自らの思い人がいた。

「一夏！」

箒は感嘆の声を上げる。

だが、すぐに顔の緩みを無くし落ち着いた表情になる。

箒はスラスターにエネルギーを収束。

放つ。

その反動で空を飛ぶ。



## 第41話 戦闘開始（後書き）

MFの12月にIS8巻がなくて悲しい。

## 第42話 敵VS一夏、幕、？

「おりむらいちかくん！てめえ一体どういうつもりだ。俺の復讐を邪魔するなんて死ぬ覚悟できてんだろうなああ！？」

敵は荒々しく叫びながら一夏を睨みつける。

一夏は相手の反応を無視し雪片式型を構える。

「ああん！？無視してんじゃねえよ。あ、分かったアレか、もう自分だけがIS動かせなくてシヨックなのか！？ざくろんぐろんでした！てめえはもう空気キャラなんです！こっからはこの物語の主人公のこの俺が統べるんだよ！世界最強のこの俺が！！」

一夏はそれでも構えながら無言で立ち尽くす。

敵は無視されたことにキレ、一夏に突進する。

「死ね！モブキャラ！」

敵は感情的にこぶしを振り回す。

一夏はその拳を雪片式型でうまく受け流す。

受け流した拳に沿いながら刀を下に振るい胸部分を斬り付ける。

「はあ！きかねんだよ！」

「くっ！」

しかし、敵にとってはこの程度のことは痛くも痒くもなく、人を不

快に思わせる笑みを浮かべる。

一夏はうねりながらも連続して斬り付ける。  
そこから火花が散るが、それ以上は何も起こらず敵はそのまま笑みを浮かべながら一夏を見下す。

「すこし、面白い技を見せてやろう。光栄に思え」

一夏が再度、雪片式型を振り上げた所で敵は空に『溶け込み』、消えた。

刀はその勢いを殺せずそのまま虚空を斬る。

「なに!?!」

驚き、すぐに敵の姿を探すため一夏は周りを見渡す。

敵はどこにも居らず一夏は地上逃げたのかと思い、下を見下ろす。  
すると、刀に斬られたような激痛が背中を走る。

「グッ!」

一夏はうめき声を上げつつも後ろを振り返るが其処には誰もいない。

「どこだ!」

一夏はもう一度周りを見渡す。  
すると、また背中に激痛が走る。

『俺の単一使用能力は ダーク・パワー 黒影人型 相手の影に侵入してそうして確実に敵を討つ戦法だ。どうだ、素晴らしいと思わないか?』

空気全体を揺らしながらそんな声が聞こえる。

一夏の影から敵が湧き出てくる。

手には鋭い刃物上の物を持っている。

それを一夏の背中に向けて振り下ろし一夏に傷を負わせるはずだった。

『一夏！後ろだ！』

一夏は何処からとも無く聞こえてきた声に従い身体を捻らせながら刀を振るう。

敵は刀に傷つけられ一夏の影から飛び出る。

「いつてええええ！」

痛みを訴えながらも瞬時加速を使い一夏から離れる。

『大丈夫か？一夏？』

プライベート・チャネルで一夏に語りかける筈。

『ああ、大丈夫だ。』

一夏は敵を見据えながら短く答える。

自然に一夏へ近づきながら筈は返答に安堵しほっと、胸を撫で下ろす。

すぐさま気持ちを切り替え、視線の先で斬られて悶え苦しんでいる敵を見据える。

一夏も一瞬微笑む。それは本当に一瞬で直ぐに筈同様、敵を見定める。

『なあ、おかしいと思わないか？』

『何がだ？』

『あいつは俺と真正面に対峙した時、俺の攻撃を食らってもまったく効かなかった。でも、あいつのワン・オフが発動中のときは雪片式型がまともに徹った』

『確かに』

箒は説明に納得し頭を少しばかり頷かせる。

一夏は意地の悪い笑みを見せつつも話を続ける。

『それにあいつの動きと意思は素人同然。なら、これを使うしか手は無いだろ。』

箒はお茶らけた笑みを浮かべる。

『何か考えが浮かんだのか？』

『え！？どうして分かったんだ？』

『顔に書いてあるからな。でも、どうする？今専用機持ちは私とお前しかないない。それに先生たちだってこの行動に合わせるように極端に少ない。その上残っているのは新任の先生たち。どうやって敵の隙を付くんだ？一夏』

そう、今IS学園にいる専用機持ちは一夏と箒しかないない。

鈴は急な本国の呼び出しで3日前から居らず、

セシリアは本国で家の仕事、専用機持ち特有の『客寄せ』をしていて今はない。

シャルロットは本国に戻り、無罪になるために報告書を作り上げている。

ラウラは『OTAKU』文化を持ち帰り軍に里帰りしている。

千冬はIS管理科本部（アメリカ合衆国・ロサンゼルス）に赴いていない。

『そこまで分かってんのかよ。』

一夏はぼやきながら顔をげっそりとさせる。

『でも、あるにはある』

『じゃあ、信じるぞ』

「てめれえら！むじしてんじゃねえぞこおらあ！」

ようやく痛みから解放された敵はチューブを放ち一夏と箒を狙う。  
お互い顔を見つめ、頷く。

一夏は空高く飛び上がり、箒は雨月と空裂を展開し蛇の群れのように襲ってきたチューブの大群を切り裂く。

「てめあ！までやがれ！」

敵は必死な形相を浮かべながら一夏を見上げてチューブを放出する。

「やらせんぞ」

雨月を舞のごとく振るう。振るわれた道順をたどり紅いエネルギーが撃ちだされる。

紅いエネルギーは一夏を追いかけていたチューブを焼き払う。

「でめれ……」

敵は顔を俯かせ、獰猛な獣に似た呻き声を搾り出す。  
両手をぶら下げながら相手を睨み付ける。

「もっつ、ゆるさねえ…」

地の底から聞こえてきそうな声を出す。

顔を上げる。

箒はその顔に少なからず恐怖を覚える。

敵の顔の右半分が光沢を出す真つ黒な塊に変化し、口だった部分ももはやその面影も無く、眼の部分が赤い線に変化しそこから歪な赤い光が滲み出る。

箒は敵の姿をよく観察すると左腕と右脚も元の形を残しつつも同様の塊になっている。

髪の毛も所々同じものになり始めていた。

変わり果てた左腕を前へとかざす。

左腕は急激に膨れ上がり弾け飛ぶ。中から出てきたのは大量のチューブ．．．いや先ほどまでのチューブとは違い血管のような線がチューブに張り巡らされ、先端も鋭く、洗練された刃物が付いている。右腕から出てきたチューブはしばらくの間、活発にくねらせ、一本、一本が生きているかのごとく蠢く。

敵は小さく顎を上げる。

チューブは一瞬固まるが、直ぐに箒に向かって襲い掛かってくる。

箒は両の刀を使い撃ち落とそうとする。

チューブはうまい具合に刀を避け懐に入ろうとする。

箒はそれを許さず足で下から蹴りつける。

チューブは一本に留まらずに束になって襲い掛かる。

束になっているチューブが余りにも多すぎて端からは巨大な蛇に見える。

しかし、箒は勝利を確信した笑みを浮かべる。

『零落白夜 発動』

箒たちよりもさらに上空から機械音が鳴りながら敵にめがけて一夏

は雪片式型の剣先を向け急降下する。

「はあああああああ！」

敵は一夏を察知し右腕を乱暴に振るい、中から出ていたチューブの向きを無理矢理変える。

そんなことお構いなしに一夏は突き進む。チューブが鏡を割る音を立てながら破壊されていく。

「がはっ！なら逃げろのむ！」

敵は 零落白夜 から逃れるために空域から離脱を図る。

「なーんてな」

突然、一夏は笑い出しながら 零落白夜 を停止させる。  
その顔を見て敵はようやく気づく。

「（罨か！）」

すでに時遅し、地上から46発のおよそ2・1mのミサイルが群れを成して襲い掛かる。

敵はミサイルを避けるが、ミサイルは敵を追いかける。敵はチューブでの攻撃を行う。

ミサイルは難なくとチューブをかわす。

右腕、脇腹、左脚、右足、左足、腹、胸、頭、頬と次々にミサイルが敵に着弾し爆発する。

普通のミサイルならISには痛くも痒くも無い。

けれどもこれは通常の10倍以上の破壊力を持つので例えISの装甲といえども爆風と共に砕き、散らし、見るも無残な姿になる。



敵は意識を失い自由落下を始める。

そのまま勢いよく地面に頭からぶつかりその場を動かなくなる。

一夏は敵を撃破したのを確認し視線を移す。

そこには打鉄式を纏った簪がいた。

一夏は一度拳を作り、笑いながら親指だけ立てる。

簪も同じく親指を立て笑った。

## 第43話 決着（前書き）

すみません。今回は大分荒作業なので読みにくいと思います。

### 第43話 決着

一夏と箒はゆつくりと簪の近くに着地する。

簪も二人が降りてくるのに合わせ、式式のデスクを粒子化し、代わりに式式の腕を展開し装備する。

一夏は雪片式型を粒子化しながら簪の方に振り向く。

「ふう、なんとかなったな。ありがとな、簪」

「……大丈夫、作戦通りだから……」

実は先ほどのミサイルによる攻撃は、敵が襲来したときに簪がすぐさま組上げた作戦だったのだ。

「そういえば、この子は誰なのだ。一夏？専用機を持っているようだが、このコアは今日始めて認識したぞ」

箒がコアを探知する場合必ず一度動かさなくてはならない。

もし、コアが初期状態なら箒でも認知が不可能だが、『オリジン・コア』のときは例え初期状態でも範囲内に入れば認知は可能である。箒は武器を収納しつつ、簪の顔を軽く凝視して、すぐさま視線を一夏のほうに流す。

一夏は首を傾げている箒に簪との経緯を簡単に説明する。

箒は顎に手を添え、腰を曲げながら興味深く説明に耳を貸す。

説明を終え、納得し姿勢を正す。

「なるほど、そういうことが」

簪に振り向き、右腕のアーマーだけ解除し、朗らかな笑みを浮かべながら簪へ手を差し伸べる。

簪は最初、右腕を凝視し、不安な顔になり立ち尽くしていたが、慎重に自らの手を箒へと伸ばす。簪と箒の手の平が触れ合い、お互い柔らかく握手をする。

ちなみに簪の視線は箒の大きい部分に向いていた。

「（……大きい……）」

一人自分の胸元を見てブルーな気持ちになる。

箒が突然、簪の手を勢い良く離し、右腕と両の刀を展開する。

『『負けるわけには……いかない……』』

3人の頭に直接、おぞましい声が響き渡る。

一夏もすぐさま雪片式型を展開する。未だに何が起きているのか理解できず、簪は困惑しその場で突っ立つ。

声は続ける。

「助けてくれ！俺はまだ死にたく……」『我は……憎しみと……悲しみと……怒りを……噛み締め、元来なる吸血鬼「嫌だ！」となるもの……我が名は『コア・ヴァンパイア』！……さあ、「止め……我と戦え！……3人の戦士よ……！！』』

おぞましき声の折々に敵の声が挟み込むが、お構いなく『コア・ヴァンパイア』は言葉を続ける。

一夏たちは倒れている敵に急いで振り返ると、敵から青い色の紫電が吹き荒れ、黒い塊が破裂し、中から舞踏会に使うような黒い仮面と血管が浮き彫りでぶよぶよしたピンクの肉の塊が、溢れ出す。肉は身体の到る所から湧き出て、元ある肉体を飲み込んでいく。身

体が再構成される。肉は血管を浮かび上がらせ「どくどく」と脈を打ちながら浮遊し始める。

脈はある程度まで伸びるとチューブへと変化し、だらりと幾重にもぶら下がる。

仮面は疎らに肉に張り付き22個もある。一つ一つが、考を凝らして作られている痕跡がある。大きさは30m強はある。

仮面などは違うが、その姿はまさしく初めて文献に描かれた『吸血鬼』だ。

ここで少し吸血鬼について語らせてもらおう。

そもそも吸血鬼は農業の家にしか現れず、死人の霊、蘇えった人間、変身能力、血を吸う生き物である。

姿は2種類あり、ぶよぶよした肉の塊か、死ぬ寸前の肉体で復活する。

吸血鬼の殺傷方法は目を見る、名前を呼ぶなどで血や生気を絞りつくすことによって生前の家族と自分が育てていた家畜を殺すものである。

漫画やアニメなどの真祖の吸血鬼や知恵のあるものは、後からつけられた設定で、実際にはそのようなことはどこにも載っていない

「まずいぞ。『暴走復活』だ!」

一夏は筈の言葉に驚き戦慄する。しかし、簪の方はいまいち意味が分かっておらず、頭にクエッションマークが浮かぶ。

簪の様子などお構いなしにぶら下げていたチューブを生き物のように動き始め、戦闘の準備を始める。

『『来ないのか……??なら、我から……行こう……!!!』』

『コア・ヴァンパイア』は口が無いはずなのに饒舌に喋り掛けなが

らチューブを飛ばす。

箒は足に力を加え、大地を深く蹴り、一步手前に出てチューブを迎え撃つ。数本のチューブは両の刀によって緑の液体を出しながら切り裂く。

先ほどのような無駄な動きが一切無く、確実に自分たちの命を狩るために襲う。

一本のチューブが箒の猛攻をすり抜ける。チューブは鋭利な刃で簪を狙うが、一夏は簪とチューブの間に入り、真正面からチューブを斬る。

「一夏！あいつは『暴走体』だ！相手はお前の 零落白夜 で倒せるはずだ！」

箒は沢山のチューブを捌きながら叫ぶ。

「分かった！簪！援護できるか！？」

「……うん、できる」

一夏は後ろを振り向き簪に質問する。簪は顔を頷かせ肯定する。

すぐさま両手、両足の装甲を粒子化させ、代わりに空中投影キーボードを上下二枚、二手二足、指五本につき二個の球状キーボード、計8枚が展開される。

簪はすべての指を使い、一夏を援護する体系に入る。

「……コード認証。『能力入力』発動……！」

『能力入力』。防御、攻撃などを臨機応変にタイピング操作で行う簪が一から作り上げた後援専用の特殊システム。便利そうに聞こえるが、即座に状況の把握、天候、距離の計算などを的確に素早くタイピングしなければならぬので、実質、簪にしか使えないシステム

ムだ。

簪の言葉と同時に一夏も動き出す。

一夏は二段瞬時加速を使いチューブの群れを一気に駆け巡る。チューブの一本が一夏に襲い掛かる。しかし、チューブは一夏に当たる前に何かにぶつかつたかのように動きを止める。

他のチューブも先ほどと同じように四方八方から一夏に目掛けて襲い掛かる。

だが、やはり、何かに遮られる。

チューブたちは首を傾げるような動作を取る。

再度一夏を攻撃する。小さな赤いひし形のエネルギーシールドが幾重にも繋がっているのが現れ攻撃を防ぐ。

どうやらこのエネルギーシールドが、今までの攻撃を防いでいたようだ。

一夏はチューブの群れを切り抜け『コア・ヴァンパイア』速度を落とさず雪片式型を構える。

『零落白夜 発動。』

雪片式型が振るわれる。

結果、『コア・ヴァンパイア』は仮面の一枚が、鏡が割られる音を出しながら、壊され、血肉と鮮血が飛び散る。けれど、それだけだった。

「何!？」

ISならばこれで倒せるはずだ。

では、今斬られた部分をものすごい勢いで修復を行っているのどういうことだ？

『『良き腕だ。……だが!……私には効かん!……!』』

仮面以外は完全に再生。『コア・ヴァンパイア』は驚き、呆けている一夏に容赦なく襲い掛かる。

一夏は反応しきれず、大きな身体で突進され10mほど吹き飛ばされる。

『大丈夫か!? 一夏!』

『!.....大丈夫!?.....一夏!?』

オープン・チャネルから二人の心配した声が聞こえる。

『ああ、なんとか』

一夏は強がってそうは入っているものの、先ほどの突進により、左腕が痺れてうまく動かせない。顔を歪ませながらも『コア・ヴァンパイア』を睨み付ける。

『嘘をつけ』

『.....うん、嘘』

『な...』

一発で嘘がばれる。基本一夏はどれだけ痛くても絶対に顔に出さない。けれども、2人には直ぐにばれた。

『どうする? 一夏は何処か怪我をしている...そして相手は 零落白夜 を食らっても、即再生。状況は絶望的だな。』

箒は口では絶望などといったっているが、その顔には絶望の色は無い。それは簪も同じだ。



『……でも、やるしかない』

簪は真剣な顔で相手を見据える。

箒は返事のように不敵な笑みを浮かばす。

『当然』

箒と簪はテキパキと話を進める。その様子に一夏は完全に置いてけぼりにされてしまった。

『……でも、倒せない訳じゃない』

『なら、その言葉を信じるぞ』

『待ってくれ、俺にも戦わせてくれ』

一夏は二人の会話に割り込み、頼み込む。

簪は顔には反対の意思が込められている。

『はあ、どうせ止めても無駄なのだろ。正し！無理はするな。無理は私の領分だ』

『お、応』

箒は一夏に一応釘を刺す。

一夏は若干、最後の言葉が引かなかったが、とりあえず『コア・ヴァンパイア』に集中する。

『そろそろ私の相手をして欲しいものだ……！！』

『コア・ヴァンパイア』はチューブの群れを一夏たちに向けて襲い掛からせる。

同時に簪は『切り札』の準備を始める。

一夏と箒はチューブの大群を簪に当たらないように迎え撃つ。チューブは一夏たちに切り裂かれ、緑の液体を鮮血のように噴出しながら倒れていく。

その間に簪はとにかくすべてのキーボードを叩く。

『切り札』の手始めに簪の前に大きな幅50cm、長さ30cmほどの円柱の砲台が現れる。砲口には赤いエネルギーが溜められている。

『完了まで残り8秒』

そっけない電子音が残秒数を3人に伝える。

その間にも襲ってくるチューブを一夏と箒は切り裂く。

『4秒』

チューブの猛攻はより激しさを増し、数も増えていく。さすがに、2人とも限界が来ており、エネルギーも残り少ない。特に一夏は先ほど 零落白夜 を使ってしまったので戦えるのは残り一分あるか、無いかだ。

『2秒』

いける。

2人はそう心の奥底で確信する。けれども、その期待を裏切るようにチューブが2本、一夏たちを通り抜け簪に襲い掛かる。

「しまった！」

「逃げろ！簪！」

一夏たちは簪に向かって必死に叫ぶ。

簪がもし攻撃を食らった場合、今の形態では一発で絶対防御が発動してしまう。

「……大丈夫」

『Full Charge』

簪はゆっくりと砲台の引き金を引く。

赤い巨大な閃光が真直ぐと砲口から放たれる。閃光は余波だけで周りの地面を抉りながら突き進み、襲ってきたチューブも閃光に飲み込まれ消失する。

閃光は『コア・ヴァンパイア』に直撃する。閃光は『コア・ヴァンパイア』の身体を貫き

『コア・ヴァンパイ』の細胞を焼き切られ巨大な爆発が起こる。

勝敗はついに決した。

第44話 復讐「バカ（前書き）」

さあ、批判よ。バツチこいやー！！！！！！

## 第44話 復讐「バカ

「ぢくじょう、ぼうれそうじるでんできいでじやいぞ」

少年は爆発から逃れ今はIS学園の外にいる。

死にかけの虫が地面を這いずるように蠢き、移動する。

少年の身体は腐り悪臭を立ちこめ、骨まで見えている始末だ。

今やコアが少年の命を繋ぎ、なんとか肉体を保っている。

ジャリ。砂を踏む音が聞こえる。

少年が腐った顔で上を見上げる。

そこには少年に力を与えた怪物が立っていた。

「やあ」

怪物は気楽そうに手を上げる。

少年は怪物の姿を見て楽しそうな笑みを広げこんな事を頼み込む。

「おい！おでももつど「力」をじよこぜ！こんどこぞあのぐぞやろうどもに復讐するんだ！あのぐざれびつちどもに自分のおろがざをぎづがぜでやるから！！！！だからもつと「力」をよこぜ！！！！」

少年は叫びながら怪物の足に必死にしがみ付きながら訴えかける。

怪物はそんな少年を慈愛の目で見つめ、ゆっくりと優しく立たせ、

少年の腹を左腕で貫く。

少年は一瞬何が起きたのか理解できなかった。

余りにも自然な動作で希望から絶望へと落とされ、顔が困惑の色に満たされる。

怪物は無事な『ノットナンバー・コア（登録されていないコア）』を少年の身体から抜き取り、乱暴に少年を放り投げる。

「なあ！ガブツー！！」

ようやく思考が追いつき口から血泥が出る。はずだった。

だが、口から出たのは白黒く何処か虚無感を感じさせる色をした、『灰』。

必死に口元を押さえ、もう一度口から出たものを確認する。やはり、『灰』だ。

「なんじゃあ！？こりゃあああ！？」

少年は手の平に付いた灰を見て叫ぶ。

よくよく見ると口以外にも体中から『灰』が溢れ出ている。

「まあ、当然といえば当然だよ。これがコアと『奴等の技術』を過剰使用した末路だよ。ふうん、にしても『報告書』にも書いてあったけど、一般の人間がコアを2枚以上使うところなのか」

怪物は興味深げに少年を観察しながらも言葉を続ける。

「そういえば、君さっき復讐とか言ってたけど？まあ僕から言える事は『復讐なんてほざいている奴等は生きる価値が無い』ってところかな？」

少年はその言葉を聞き苦しむのを止め怒りを露にする。

「『復讐なんてほざいている奴等は生きる価値が無い』だと？ふざ

けるな！てめえこの世を許すのかよ！？この女尊男卑の世界を！？  
ISだってそうだ！！軍の兵器が役に立たず沢山の失業者が出たん  
だぞ！？それをわかって言ってるのか！？ええ！！！？」

少年は怪物を睨み息を荒げに力説する。

少年にとってこれが今の信念であり希望でもある。

これは誰にも論破できない。そう確信して放った言葉だ。

「ははっ」

怪物は小さく笑った

少年は驚く、なぜこの怪物が笑ったのか分からない。

そう思いながら眉をひそめる。

やがて、少年は悟ったように笑みを広げる。

そうか、俺のこの持論が論破できなくて、余りの悔しさに笑ったの  
か！そうだ俺は間違っていないんだ！俺が正義だ！

少年は勝利の確信を得たことを気づかれないように笑みを必死に隠  
そうとする。

だが、顔をはもとに戻らず、ずっとニヤニヤした笑みになる。

「やっぱりお前を『実験動物』にして正解だったよ。近年稀に見ぬ  
頭の弱さと屑さを持ち合わせたゴミだ。ありがとう。つまらないギ  
ヤグを」

怪物の口調は相手を心の其処から馬鹿にしている。

少年は完全に予想を裏切られ呆氣にとられる。

怪物は自嘲の笑みではなく、本当に、下らないジョークを聞かされ、  
つつい出てしまった笑い声だった。

つまり、失笑だ。

「おや、分からないようだね。それと君は歴史を学びなおすことをお勧めするよ。なら一から説明してあげようか。まず一つ目、女尊男卑なんて昔の男尊女卑に比べたらまだマシだよ。近世まで女性に選挙権与えないで差別し、江戸の中期に中国は女に纏足をつけ朝鮮なんて女性の胸を丸出しにしてたじゃないか。所詮、痴漢電車ほどの騒ぎでしかないこの女尊男卑を？君はこういう言葉を知っているかい？『五十歩百歩』1000年近く男尊女卑やってたんだろ？だったら女尊男卑は4、5年しか経ってないんだから我慢しろよ。というか君みたいな奴が男尊女卑を進めているんじゃないかい？まあ分かんないよね。君みたいなモテナイ奴にはさ。2つ目は確かにドイツやイタリアは兵を減らし、世界は武器を減らしたね。いいんじゃないかい。知ってる？ドイツの兵隊の約8割がメタボって事。要は使えない奴を減らして優秀なものを入れる。それにアメリカなんて逆に兵士を増やしたじゃないか。素晴らしいじゃないか。武器だってそうだ一個何百億の武器と数十億のISならコスト削減、さらに低燃費に紛争を鎮圧可能。緊張状態だった中国とアメリカもISが原因で『WW?』を回避できた。まあ一番減ったのは核かな？なんてたつてISなら核も破壊できるし『どこまで破壊していいか』なんてISだったら判断できる。…喋るの疲れたからこれぐらいにするけど復讐は頭が弱い奴がするって事で」

シャルルは饒舌に喋っていたが途中飽きてホッポリだしてしまった。少年は怪物の言葉に圧倒され心も根元から折られた。

「は、はははは」

乾いた笑い声が自然と出る。

そして少年は『灰』になり消えた。

「おや、演説は終わりですか。もう少し楽しみたかったのに」



不意に、怪物の後ろから燕尾服を着た男が、冷酷な笑みを広げながら立っていた。

怪物は首筋をかきながら鬱陶しそうに後ろを振り向く。

「ああ、お前か今回はどういったクレームで」

鬱陶しそうにぼやきながら怪物は黄黒い炎に包まれる。

黄黒い炎が止むと中から青年が現れる。

「今回のクレームは2つ。一つはそろそろ『我々』のことを『財団』と呼んで欲しいことです。」

淡々と冷酷な声でシャルルに報告する。

シャルルは面倒臭そうに疑問を投げかける。

「もう一つは？」

「今回の『実験』は余りにも遅すぎるので、釘刺しに。再三にわたって申し上げていますが、あなた方『亡国機業』の代わりなら幾らでもいるですよ。」

そう言いながら唐突にタッチ型携帯を取り出す。其処には『投資停止リスト』と書いてある。

中には『ヒヒロカネ』、『虚無』、『Plan・Z・S』、『ケンプファー』、『I・S技術』、『精霊契約』と載っていた。

「あなたの方は脅しの方が宜しいでしょうか。素晴らしいですね3年前の約束を忘れず、研究所に特攻し、一体のISを強化するなんて、確かあなたが守りたい人物の名前はシ……だまれ、それ以上言うなら殺すぞ」…これは失礼しました。」

シャルルは珍しく本気の殺気を混ぜながら男を脅す。

男はシャルルの殺気に引いたのではないが、『商談相手』なのでとりあえず引き下がった、という感じた。

「あと、伝言がございます。『A t o Z』よ時は来た』との事」

シャルルはその言葉を聞いた瞬間、驚いた顔になった後、じんわりと心の其処から楽しそうな笑みを広げる。

「では」

男はそう言って一礼すると『消えた』

#### 第44話 復讐Ⅱ バカ（後書き）

ちなみにこの世界では『第3次世界大戦』が起こりそうな状態でI  
Sが登場。

あと、書いてあることはISや兵器のことを除き事実です。  
でも、やっちゃったぜ！

第45話 酒場（前書き）

今回は超短め

## 第45話 酒場

古めかしいバーにマイクと千冬が一つ席を空けながら飲んでいた。何故こんな古めかしいバーにいるかというところやく作戦会議が終わったのでマイクとともにつかしのバーに足を運んだ。

最初はお互い楽しく飲んでいた。正し、千冬のブラコンをマイクが聞いていただけだが。

しかし、マイクに一本の電話が入ったことで話は中断した。

「ていうか大変だね、千冬さん。まさかアメリカまで来たのにまさかまた襲撃事件の話の聞くなんて」

マイクが『アフィニティ』を飲みながら千冬に語りかける

「ああ、もう大変だ」

千冬は疲れ切った顔で先ほどマスターから出されたレモンがグラスにつき上は赤く、下は白透明な『アメリカンレモネード』をゆつくりと口に運ぶ

「ふふん。疲れたときは甘いものが一番よ」

そう言っただけで千冬を元気にしようとするマスター。：ちなみにこのマスター黒人で筋骨隆々な人。口癖は『嫌いじゃないわ!』正直マイクと千冬は初対面の時、内心『ええ』と呟き、引いたという。

「にしても懐かしいわね。6年前の『戦争』を思い出すわ。昔はここにマイくん、千冬ちゃん、たーちゃん、げんくんて未来の話をしてたわね」

「……………」

二人はマスターの言葉を聞いた後、静かに自分のカクテルを飲み干す。

マスターは二人を気遣うように静かに2杯分のカクテルを作り出す。カクテルグラスに酒を丁寧に注ぐ。

マスターが作ったのは白透明な色をしている『XYZ』だ。

マスターは二人に差し出しながらカクテルの由来を語り始める。

「…。由来は知ってる？」

「さあ、」

マイクは短く答える。

千冬は昔を思い出しているのかボーとグラスを眺める。

「『これ以上ない最高のカクテル』、貴方達はよくやったわ。でもね、そこでお話が終わって『最高』というのはどうかと思うわ。落ち込むのも同じそこで『最低』で止まってちゃだめ。生きているんならそれを覆さないと面白くないでしょ。私はカクテルと人間はそういう事がそっくりだと思うわ」

マスターは二人に優しくけれどおこった口調で語りかける。

マイクと千冬はその言葉を聞き朗らかな笑みを浮かべ、笑った。

「ぷっ」

「くっくっ」

「もう何よ、笑っちゃうなんて！人がせつかく心配してるのに」

「いや、済まない」

マスターは手をお腹に当て『ぶんぶん』と怒る。  
千冬は素直に詫びを入れる。

「まさかオカマに説教されるなんて生まれて初めてだ、くっくっ」  
「もう、でも嫌いじゃないわ」

そう言いながらマスターは二人に『ステインガー』を差し出す。

「毒舌家か、」

「ええ、お姉さんのちよつとした意地悪」

「ふふ、今夜は朝まで付きやってやる」

「おいおい、そういう台詞は弟さんに言ったら？」

マイクは『ステインガー』を取りながら千冬に冗談ぽく喋る。

「馬鹿者が。あいつは未成年だぞ」

千冬は『XYZ』をぐいっとな景気良く飲む。  
そうして夜は更けていく

## 第45話 酒場（後書き）

ここで質問！

本来の予定ではこのまま五巻に行く予定でしたが、組合長様から「これから夏休みですね」と言われ、『ヒロインたちといちゃラブ編』にしようかと迷っています。

そこで皆様にお聞きます。

『ヒロインたちといちゃラブ見たい！』て人は『紅』を

『はあ？そんなのどうでもいいから』とと本編進めるよ馬鹿』て人は『白』を

受け付けは今日まで

ちなみに順番に行くと セシリア 簪 ラウラ 鈴 シャルロット

篇、です。

感想もよろしく願います。

多分次の更新は水曜日です。



## 第46話 円卓の会議（前書き）

いちやラブは次回から突入、今回は先にこいつらのことを投稿したかった。

## 第46話 円卓の会議

襲撃から3日後のタイのとある大都市

其処の一番高いビルの中で、シャルルが口笛を吹きながら、ズボンのポケットに手をつ込みながら我が物顔で歩いていた。

ドア以外の周りは高級な装飾を施されており、赤い絨毯が道を埋め尽くし、壁には金銀の粒が散りばめられている。シャルルが此処までに来るため使った、エレベーターにも金が使われていた。

シャルルにとってはこの光景は馴れ無くて内心場所も変えて欲しい位である。足を止め一つのドアに振り向く。

それは周りの風景に合わせずに突出した科学的なドアがある。

シャルルはドアにある長方形の装置に顔を近づける。

『認証しました』

ドアがシャルルの網膜を確認し空気が抜ける音を出しながら開かれる。

部屋は薄黒く、光源は部屋の端にある6つのライトのみ。足場は高級な動物の毛を使った赤色のシート、56階なのに一切鏡がなく、中央には円卓の騎士団が使いそうな席があった。部屋の奥には階段があり、その先には『亡国機業』の紅、白、天使、悪魔がモチーフにされた紋章が飾ってある。

「あなたが最後よ『Lion』」

丁寧な口調で円卓の席の『S』と書かれた席に座っている女性がシャルルに語りかける

「コードネームで呼ぶなよ『Squal』」

シャルルは不機嫌そうな声で楽しそうに自分を見上げている、女性を感情の赴くままに睨み付ける。

「あら、ごめんなさい」

『Squal』と呼ばれた女性は、手を拳にして、口元に当てながら、妖美な笑い声を静かに上げる。

シャルルは鬱陶しそうに歓迎の酒を取りながら『L』と後ろに大きく書かれ、一つ一つが丁寧に作られた席にどっかりと座る。ちらりと他の円卓の席に座っている人物を酒を飲みながら見回す。

『A』と書かれた席には『大首領』がまだ来ていない事にむしゃくしゃして、円卓を蹴りつけている女性が。

『B』には大きないびきをかきながら、先ほどまで、人間だった何かを枕にして寝ている女性が。

『C』は『一握の砂』を呼んでいる女性が。

『D』は人形と寂しくじゃんけんをする女性が

『E』はニコニコと笑顔のまま座っている女性が。

『F』は何も考えずボーとしている少女が。

『G』は静かに目を瞑り眠っている銀色の髪の少女が。

『H』は音楽機器で動画を見ながら、時折笑う女性が。

『I』は訳が分からないポーズを取りながら、空に浮かんでいる女性が。

『J』は欠席と書かれたプレートが。

『K』は両腕を組みながら全身を黒い甲冑で纏っている人物が。

『M』は無言で全く動かない少女が。

『N』は『J』と同様

『O』は高級な黒いドレスを着、頭に大き目の赤黒いバラの髪飾りを付けながら朗らかな笑みを浮かべ、周りを見渡す老婆が。

『P』はずっと手元にある鏡を自前の雑巾で決め細やかに磨いている女性が。

『Q』は人間を椅子にして優雅に座っている女性が。

『R』は『N』同様。

『S』は『A』に落ち着くように促した後、百合展開を始めた。

『T』はデザートイーグルの調整をしている女性が。

『U』は『R』同様。

『V』は堂々とした中世の騎士のように座りながらハイビスカスを眺めている女性が。

『W』は『U』同様。

『X』は静かに座っている女性が。

『Y』は大音量で音楽を聴いている女性が。

『Z』はずっとマ オをプレイ中の少女が。

彼等の名は『A t o z』。

この世界の一番深い闇であり9割が『亡国機業』のものだ。

彼等はそんな大組織の次期大首領候補たちだ。

彼等には信念と象徴によってイニシャルが振り分けられている。

シャルルは一通り周りを見回した後、飲み干したグラスを適当に後ろへ放り投げる。

こつ、こつと階段から歩く音が聞こえる。

全員自分の事を止め、そちらに振り向く。

「時はもう直ぐやってくる」

歩きながら喋る。

「我々の悲願は『G K』をなし、全ての世界に理のある不平等という平等を作ること」

歩いている人物は『ISらしきもの』を纏って、その姿は全体的に銀を基調としており、腕や足脚、胸、肩、背中には金色の装甲があり、顔は真ん中は銀色で卵型の表面で、周りには金の装甲が付いている。この者自身、名言はしていないが、振る舞いや体のラインなどから中性的な男であると『Atoz』の面々は推測している。

『彼』は語り続ける。

「もうじき『序章』は終わりを告げ、新たな段階へと進む。」

『彼』は重々しく、一言一言が、場の空気を揺らす。『彼』は階段を下り終え、優雅に歩みを止める。

「世界は腐っている。その証拠に不純物たる『転生者』という、愚かな者たちが、世界を滅ぼそうとしている。変えなくてはならない。世界のありとあらゆる『システム』を」

それと同時に『Atoz』は、全員ISを展開し、纏う。シャルルは『怪物』へと変化する。『K』は甲冑がISなのか、姿を全く変えずに座っている。

『彼』 いや、『亡国機業大首領』 は手を白鳥のように広げる。

「さあ、死神のパーティタイムだ。楽しみゆな」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

最後の最後で噛みやがった。それも盛大に。

「あ、ちょ、ちよつと待つて！　一からやり直すから！　仕切りなおし！　じゃあ皆、又一時間後に！」

『大首領』は手をビシッ！と挙げながら階段を上がろうと体の向きを変える。

「「「「いいからとつと戻れ。面倒臭い」「」  
「はい……」

『A to Z』の比較的まともな人物たちに総突っ込みされ、肩を落とし、ご飯をお預けになった子犬のようにシュンとなりながら円卓の中で一番豪華な席に座る。

「ぐーーーーー、ぐーーーーー」

大きないびきをかきながら、未だに起きる気配の無い『B』。それを『H』は見るに耐えなくなったのか、ついに『B』を叩き起す。

「おら！起きろ！『Beast』！」

『H』は一撃で人を肉の塊にすることができ、巨大で黒く背中に生えている、ISのアーマーを使い、『B』 『Beast』の頭を殴りつける。

「あゝん？もう、春なのか？」

むくりと殴られたことが何事も無かったかのように、目を覚まし、寝惚けたまま上半身を起こす。その上、あくびを垂れながら馬鹿な発言をする『Beast』。

「うんなわけねえだろ！この馬鹿！」

「はあ？てめえ人を罵倒するなんていい度胸じゃねかミンチになる覚悟できてんだろうな」

一気に場の空気が変わる。『Beast』は立ち上がり、『H』に特攻するために、足に力を加える。このような場所でIS同士の戦いが始まるとなれば、必然的にビルは倒壊し街は地獄絵図になる。けれども周りは止めずに傍観しているだけだ。

今の空気は決して『Beast』が恐ろしくて、静まり返ったのではなく。単純に『H』がどれほどの時間立っていられるのか、それとも、打ち負かしてしまうのか、そういう興味での空気だ。

『H』はそんな空気の中、『Beast』を見据えながら喋りだす。

「じゃあ、お前 14+56を答えてみる。そしたらさっきの言葉は謝罪してやる」

「ふん、どうやら本格的にオブジェになりたいようだな。決まってるだろ、答えは1456だ！」

「「「「「.....」」」」」」

再度、場の空気が変化する。

『H』はもはや戦う気も失せ、顔に手を当てながら、何とも言いがたい表情になる。

周りも完全に苦笑いになり、そのまま『Beast』に優しげな視線を送る。

『Beast』は何故周りがこんなにも優しい目で見つめているのか理解できず、辺りを落ち着きも無く、見回す。

「答えは70ですよ。『Beast』」

『O』の席に座っている老婆は人を安心させる笑みを浮かべながら『Beast』の答えを修正する。

「あ！そくだ70だ。ありがとな！『Old』、あいつ等には言うなよ！ほら見ろ！『Hands』！70だ！」

「全部聞こえてるし、『Old』に答え修正されて、何故自分のが間違っていないのか、考えないから馬鹿って言われるんだよ！この馬鹿！」

額に血管浮かばせながら叫ぶ、『Hands』。

「あ、てめえ！また馬鹿って言いやがったな！ははあん。つうーか、馬鹿って言つやつが馬鹿なんだよ。この馬鹿！」

「日本の男子小学生か！」

ギャー、ギャーと騒いでいる美女2名。完全に周りはその光景に飽きて、各自、自分の事に取り掛かり始める。

「おや、おや、皆さん元気ですね」

のんびりと『Old』はそんなことを言う。



プルルル、プルルル

と昔ながらの携帯の着信音が何処からか鳴る。それにすぐさま反応したのは『C』だ。

本を閉じ、淡々と喋り始める。

「携帯の電話はオフに。館内禁煙。上映中はお静かに。撮影禁止。どんなに足が長くても前の席は蹴らない」

映画館かよ。自分の事を勝手にやっている奴等は全員、『C』を見なくてもそう心の中で呟いた。

「あらあらご免なさいね」

そう言いながら携帯を高級そうなカバンから取り出す、『Old』。携帯を開き、手馴れた手付きで、着信ボタンを押す。

「もしもし？あらー、どうもお久しぶりです。あ、はいはい、え？本当ですか！？私、？ゲームに参加しても良いんですね！あ、そうですね。分かりました。はい」

そう言つて携帯を切る『Old』。その瞬間、その場にいたものが全員突っ込む。

「「「「「「「「「「お前が一番元気じゃないか！！」「「「「「「「「「

ちなみに『？ゲーム』とはアメリカの若者を中心に人気のある、怪我人続出のゲームである。決して老人がやるものではない。

「いい加減、静まれ。話が進まん」

『K』の席に座っている人物が、溜息混じった、大人になりかけの少年の声で全員をとりあえず鎮める。

「ありがとう。黒騎士。ようやく話が始めれる」

ようやく落ち込みモードから復帰した『大首領』は両手を顎に添え、本題に入る。

「では、これより本題に入る」

全員今度こそ真面目に聞く態度をとる。

「9月21日にIS学園で開催される学園祭で『新勢力』に『ご挨拶』をしようと思うのだが、異議はあるか？」

.....

肯定の意。そう『大首領』は受け取って話を続ける。

「では、今回の作戦のメンバーを発表する。『Autum』、『M』、『Squal』で行こうと思う。異論は認めんぞ」

静かに圧倒的な殺気で場の空気を完全に支配する。

しかし、そんな中今すぐにも異論を申し立てたい者が一人。

「どうした？」  
「Knight」  
「何か文句でも」

「ああ、ある。『新勢力』てのは『オリジナル』が所属しているんだろ。だったら行かせろ。俺はソイツとケリを付けたい」

「無理だ」

即答だった。黒騎士が何かを言う前に言葉を続ける。

「今はまだ時期じゃない。お前にはもっと別の場面で『オリジナル』と決着をつけさせてやるっ」

「嘘だったら殺すぞ」

「ご自由に」

黒騎士は殺気をぶつけるが、相手は何事も無かったかのように受け流す。そのことが黒騎士としては気に入らなくて席に大きく背中を預けながら舌打ちをする。

「もう異論は無いな。では、皆の者、死神のパーティタイムだ、楽しみな」

「「「「「.....」」」」」

#### 番外 第4位（前書き）

すまない！ 遅れてしまった理由は単純。いちやラブがどうすればいいかわからなかった！いや、割とマジで…  
多分これからもいちやラブの間は更新が遅れる。  
それでも良ければどうぞ

## 番外 第4位

、イタリアのベネチア

そこで一人の人物が女を口説いていた。

「へい、姉ちゃん！ 私と一緒にお茶しない？ 歌うたわない？

パスター一緒に食べない？」

「え、えーと」

最初、女はこの身の程知らずに一発、張り手でも喰らわそうかと思つた。それでもしないとここはイタリア、『愛と飯と歌』によつて形成されているような国だ。いちいち相手していたら霧が無い。

このご時世にナンパなんて、ただの馬鹿か、勇者しかない。

とは言うもののヨーロッパとしては『レディーファースト』が当たり前。

彼等としては『は？ なんでいちいちそんな風潮とか、そんなの気にするの？ 空気読まないと差別する、変態国家ジャパンじゃあるまいし』、的な考えがあるので、あまり『女尊男卑』が浸透しないのである。ちなみにアメリカは元々が『女尊男卑』状態になっていたので、あまり変わらなかった。

でも、それらをひつくるめても、このナンパしている人物には通用しない。

「へーい。聞してる？ 彼女？」

「あー何してるんですか？ 『一角獣の聖女』、ピアンカ・アイモディア様？」

ナンパしているのは、出るところは出ていて、それ以外はしっかりと鍛え上げた肉体でほっそりとした、青い目の色と金色の長い髪

毛が特徴的の女。

しかも世界ランキング『第4位』、第三世代型IS『ユニコーン・テンペスタ』を駆る、女たちの憧れの的でもあるその人が、自分の幻覚でもなければ、今、目の前で自分をナンパしているのだ。どうしよう。その一言に尽きた。

女性の顔も大分引いた顔になっており、『第4位』のイメージが駄々下がりである。

「はっはっ、これは幻覚でもないし、悪魔の使いでもない。とりあえずお茶しない？ いい店してるんだぜ」

とかなんとか言っつて、ドヤ顔をするビアンカ。  
マジビビリする女性。

遠目から見たらカツアゲに見えなくも無い。

女性が困っているうちにビアンカは丁寧に相手の手をとる。

「よろしいでしょうか？ 姫」

キリリと先ほどとは打って変わって、まじめな顔になり手に小さくキスをする。

その行動はまるで騎士そのものである。

「（あ、これはやばい…！ いっその人に任せてしまえば…）」

堕ちるまで十秒前。これは勝ったな。と内心高らかに笑う、ビアンカ。

「はい、そうですね。ビアンカ様。とりあえず先ほど訓練で開けた穴について報告書（約2000ページ）を書かれたら、行っても良いですよ」

心臓が驚掴みされる錯覚に捕らわれる。ゆっくりとまるで古い動く人形のように首を動かす、ピアノ力。

顔を向けた先には笑顔だが額に血管が浮かび上がっている青年が立っていた。

「や、やあアルベルト君。今日もお仕事ご苦労様。精が出るね」

「ええ、でますよ。本来今日は休みでしたので、家でゆつつくり  
としようとしていたら、どっかの誰かさんの不始末のせいで、無理  
矢理軍に呼び戻され、あのやる気の無い上官に『どうせお前なら捕  
まえられるだろ。あつ、帰りにピツツア買ってきて』とラブコール。  
そうして、少なくとも2時間以上貴女を探して見つけたと思つたら、  
今度は女誑かすというふざけた真似しやがつて、いくら幼馴染だか  
らつて、やっていいことと悪いことがあるぞ！ このストッコどつ  
こい！」

「悪い！ちよつと急用ができた！」

そう言ってダッシュで逃走を図るビアンカ。

「待ってやゴルラアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアア！」

アルベルトもアルベルトで口調が完全に崩壊し、ダッシュで逃走者を捕まえに走る。

洒落た町のビルと海の間にある道で、夕日が沈む中走る男女が二組。

「H a、H a、H a！ 捕まえられるかい？ 童貞君？」

「黙れや、処女！ いつもいつも人が寝ているときに勝手に入り込

みやがつて！　どんだけ一人が怖いんだよ！　この臆病者！」

「なんだと！　私が臆病者？　この『第4…』あ、左の角から幽霊」  
ぎゃあああああああああああ！？！？！？！？」

とりあえずこの二人のことは後ほどに…



## 番外 第2位（前書き）

まず最初に一言。

申し訳ございませんでした。

本来ならこの後、『いちやラブ編』を組み込む予定でしたが、とある人物から厳しい指摘を受け、自分でも「変じゃないか？」と思い始め、本来の本編に進めさせていただきます。

ただ、自分は決して、『いちやラブ編』を諦めたわけではありませんん。

必ず、2・5章にまで合わせるように勉強します。

楽しみにしていた方々、本当に申し訳ございませんでした。  
では、本編どうぞ

## 番外 第2位

グレートブリテン及び北部アイルランド連合王国 ウェストミンスター寺院

今は照明が薄暗く、目を擦らせないと人がいるか、いないかの場所に、3人の人間が佇んでいた。

一人は王冠を被り、豪華なドレスを着た老婆が、偉そうな笑みを醸し出しながら椅子に踏ん反り返っている。

一人はきつちりとした服装で身を固め、肩から実用的なブロードブレードをさげている男性が。

最後の一人は、先ほどドアから入ってきた、燕尾服を着、目を細め、腰にロングソードを吊るしている女性が。

老婆が口を開く。

「で、どうだったい？ 騎士団長。バーミンガムで起きた（駄々）は押さえられたかい？」

意地の悪そうな笑みを見せながら二人の男女に質問する。

先に眼鏡を上げ、男性が紙の束に目を通してながら質問する。女性は一瞬、男性の方に目を向けたが、直ぐに、老婆の方に視線を戻す。

「鎮圧には成功しました。しかし、ベルファスト、リバープル、ロンドンでも暴動は起き始めています。いかがいたしましょう。女王陛下」

小さく頭を下げ、報告を終えると一步下がり、また無言で立ち尽くす。

老婆は顎に手を置き、小さくやれやれと息を吐く。老婆は女性に顔を向け顎を上げる。

それだけで、女性は老婆の意図を察し、一步前に出て、毅然とした態度で報告を始める。

「はい。今回の暴動の原因はやはり、IS学園の襲撃が3回も行われ、第2の男操縦者が確認されたことにより、一部の過激な男女平等派が主導のもと、行われています。しかし、彼等が行っていることは、町の店や、日本人、女性などを襲撃する。言わば賊どもです」

暴動 それは現在世界中の到る所で行われており、特に酷いのが、中国、韓国、西アジアなどの元男尊女卑が続いていた地域だ。

暴動を起こしている相手側の主張は「再度、男女平等を」と掲げているが、実態は武装し、関係の無い住民たちを殺したり、旧世代の兵器で子供を押しつぶしたりとやりたい放題。

政府としても、彼らの不満を全て、日本人とISと女尊男卑の社会に向けることによって、円滑に政治が行われるのだから願ったり、叶ったりだ。

そして、原因があるとすればこの世界に巣くっている『闇』の住人達。彼等は3度もIS学園を襲撃し、発展途上国、貧相な国で様々な実験を行っている。中には国自体が支援しているものも在る。

特に現在力をつけているのは『五行六家機関ごうごうろくかきかん』という日本最大の暗部組織。

更識家の人間たちも尽力を尽くして、動きを封じているが、篠ノ之箒が『紅椿』を手に入れて以来、世界中の支部が活発に動いているという。

もう一つは『ISがあるから世界が平和に成らないのじゃないか?』という懸念だ。これまで、IS学園側を襲撃してきたのは紛れもなく、IS。それによって、世界の流れるには『ISを無くす』という風になっている。

けれどもそれは、

「それではダメだね」

老婆が慎重なおもむきで告げる。

「あんたはどう思う？ 『第2位』、 『無限の聖剣』 ステファニー・マーフイー？」

「確かに、由々しき事態です。これ以上の混乱は避けたいです。」

現在イギリスは世界で2番目に偉い立場になっている。発言権も強く、何をやってても在る程度は許される。

それは、すべてISのおかげだ。

『モンド・グロツソ』 - そこでどの国が勝ち、どの国が言う事を聞くかという、いわば『世界大戦を縮小して比較的安全化』にしたものだ。

つまり今のイギリスは大変有利な立場にいる。

もし、ISが無くなったら一番困るのは、このようにISで自分たちの地位を上げた国々だ。確かに一位は欲しいが、今はこの立場を十分に發揮しているので、あまりイギリスとしては、ISのことは触れないで欲しいのだ。

「それにセシリア・オルコットの安否も問題に挙げられます。彼女は仮にもこの国の経済を支えている重要人物。やはり、『紅巫女』と男性操縦者に合わせるのは無理があったかと」

そこで男性が口を挟む。

「しかし、『第2位』。彼女には我々の重大な『計画』を行ってもらう事になっている。時機に起こる『戦争』にも必要だ」

お互い、どこかセシリアを物としてしか見ていないような感じだ。当然といえば、当然かもしれない。この二人にとって、女王などの王室とイギリスの安泰さえ、手に入れるためなら、二人はどのような手でも使うだろう。

結果、二人はセシリアを物としてか見れず、このような会話が成立してしまっているのだ。

男性は言葉を続ける。

「では、セシリア… やめい！ 貴様等、いい加減にせんか！ 我が栄光たるイギリス国民を愚弄するとは、英国の騎士としては恥の極まり、次にそのような恥を晒すような発言をすれば、貴様等の首は無いと思え！」

老婆は二人の言葉に痺れを切らし、ついに怒鳴り散らす。老婆にとっては先ほどの会話は不快で怒りを上げるものだったようだ。

二人は一瞬、言葉を詰め、姿勢を正し、謝罪にする。

「「申し訳ありませんでした。陛下」」

はあ、と溜息をつきながら老婆は適当に手を振る。

「わかりやあ、いいんだよ」

とりあえず3人のことはまた後ほど…

### 番外第3位

中華人民共和国 シーピン

その近くにある『正体不明の基地』

そこで一人の女性が囲まれていた。

女性はまさしく中国人といった容姿だ。その左手には赤色の腕輪が嵌められている。

彼女の名は李小麗<sup>リー・シャオリ</sup>。世界ランキング第3位、『魔棍』である。

「はあ、私も忙しいから、さっさと捕まってくれへん？」

「……………」

小麗は面倒臭そうに周りの兵士に告げる。

しかし、兵士たちは無言を保ち続けている。

兵士たちの手には武器が握られており、一つとして同じ武器はない。服装もバラバラで、ほとんどが今から外に出ても問題はない。

唯一の共通点といえば、兵士全員が女だということだ。

小麗は近くの兵士の目を注意深く、見る。

しかし、相手の目は黒く淀み、生気が無い。

見ているこちらが、生きているという感覚が無くなりそうなのだ。

小麗は相手の目を観察することに、兵士たちが人間ではなく、物を見つめている錯覚に陥る。

小麗は小さく息を吐き、出方を探るのを止める。

「……………」

同時に、兵士が動く。

一斉に銃を構え、近接武器を持っているものは小麗に特攻する。

小麗は左腕と棍棒を展開する。

最初に向かつてきたのは正面にいたものだ。

相手は一気に飛び上がり、的確に小麗の頭にメイスを振るう。

「まず、一人」

唱えるように、呟く。

向かってきているメイスに棍棒で受け流す。

続けて、棍棒が伸び、相手の頬に突き刺す。

相手は激しく回転しながら、宙を舞い、血が飛び散り、歯も2、3本飛び出す。

兵士は地面に激突し、じんわりと血の水溜りを作りながら、動かなくなる。

小麗はその光景をできるだけ見ないようにしながら、冥福をお祈りする。

彼女の棍棒の名は『如意棒』。西遊記に出てきた孫悟空が使用したといわれる武器を人工的に再現したものだ。能力は武器の長さ、長さ、破壊力を自由に操作できる品物だ。

小麗はすぐに棍棒を元の長さに戻し、持ち替える。

その間にも、兵士は左右から挟み撃ちで突撃する。

小麗は面倒臭そうに告げる。

「3人」

兵士たちは小麗の言葉を見無視して自らの武器を振るう。

小麗は棍棒を素早く伸ばし、両方の腹に打突部を食い込ませる。

兵士たちは吹き飛び、口から胃液を吹く。

銃を持っていた兵士のひとりが、散弾銃を発砲する。

散弾は突撃している兵士の一部に当たる。

小麗は自分に向かってきた散弾を全て、棍棒で弾き返す。その間に忍び寄り、ナイフを持った兵たちが、小麗の背後から急襲する。

小麗はスラスターを展開、そのままエネルギーを収束させる。

しかし、兵士たちはたじろくどころかより勢いを増して、小麗を刺そうとする。

（やっばか…）

相手は先手必勝を考え、勢いを増したのでは無く、ただそうしただけ。

本来ならスラスターが自分の目の前で展開され、エネルギーが噴出されようとしている今、この瞬間でも敵の表情からは何も読み取れない。

それを小麗は感じ取り、一瞬、確信めいた表情になる。だが、直ぐにもとの面倒臭そうな表情に戻る。

スラスターからエネルギーが噴出される。

中華鍋の中で油が暴れる音がする。

同時に兵士はエネルギーを顔に直接当てられたことにより、元の顔が分からなくなるほど、目にも当てられない姿になる。

小麗はこれが背後で本当に良かったと内心、ドキドキする。

「7人」

それでも、焦りを悟られないために、あえて乱暴な口ぶりで告げる。

弾き返した散弾は、皆、銃を構えていた兵に当たる。

兵は散弾に当たり、たじろく。

其れを狙ったかのように子麗は一気に兵士たちの眼前まで接近し、



棍棒を大きく振るう。

兵は棍棒には当たらず、その風圧によって紙くずのように吹き飛ばぶ。

兵士たちは壁に衝突し轢かれた蛙のような姿になる。

「はい、全滅」

鬱陶しそうにそう告げて、武器を仕舞う。

そうして、今回の目当てのものに近づく。

それは台座の上に載り、高さ15m、厚さ50cmの強化ガラスによって守られていた。筒状のもので、中には緑の液体が不気味に蠢いている。

小麗はガラスの前に近づき、ISのアーマーで思いっきり殴りつける。

ガラスは大きな音を出し、盛大にひびが入ったかと思うと直ぐに日々は全体に広がり、ゆっくりと上から下へと、砕け散る。

その光景がなんだがちょっと幻想的やな、とほんの少し感嘆する。小麗は周りに飛び散ったガラスの破片をあえて無視しつつ、筒に近づく。

筒を取り、ふーと息を吐き、一安心する小麗。

筒を自分の前に近づけ、興味深そうに見る。

「これが、五行六家機関が開発した大量殺戮ウイルスか……ていうか、なんでこんな大事そうなものを逢えて警備の薄い場所に移動したんや？」

疑問に思いつつもとりあえず今回の目的は達成された。

後はこれを政府に渡し、ウィルスは新島生体研究所で除去されるだろう。

とりあえずこれを届けた後は家であいつは今日の夕飯、何作って

るんやろとか思いながら秘密基地を後にした…

## 番外 第一位（前書き）

とりあえずいったん今回でランクの皆さんは最後です。  
次回から本編！

## 番外 第一位

アメリカ合衆国 ワシントン・D・C ホワイトハウス

そこで3人の男女が『待合室』と呼ばれる豪華な部屋で、自分の好きなことをしながら相手方が来るのを待っていた。

『待合室』には空中ディスプレイを使用した40インチの大型テレビがある。テレビにはアメリカでもそこそ有名なニュースが流れていた。大きな画面にはニュースキャスターと評論家がIS操縦者のあり方について議論していた。

テレビを見ているこちらとしては、脂ぎったハゲた、おっさんの顔をでつかくて美しい画面で、鑑賞しなきゃいけないのかと思わなくも無い。

「……ですから、IS操縦者というのは実戦にも行っていない半端者なんです。それに、なんですか？ ISをファクションかなにかに勘違いして、もつとこう兵器としての自覚を持ち、『殺す』、みたいな強い覚悟を……」  
「だまれ、ISをファクションの、は認めるが、それ以外はうぜえんだよ。そんなに血肉が好きなら、てめえのその脂ぎった腹をナイフで斬り付けてろ。ていうかなんだよ？ 殺す覚悟って？ そんなにてめえは平和が嫌いなのか？ え？ つつか、可笑しいだろ。各国は『モンド・グロツ』によって血流さないでISを治めてんだ。それを何もしないで椅子にふんぞり返ってる奴に覚悟とか言われても、全く心に響かねえよ」

そうぶつくさと文句を言いながら、豪華そうな白色のソファに寝そべり、リモコンの電源ボタンを押す第1位、『最強の牙』イーリス・コーリング

その様子を苦笑いしながら眺めながら、ナターシャ・ファイルスは『待合室』に置いてあった『本格引き立てコーヒー!』となんとモ胡散臭いパッケージのコーヒーを3人分、注ぎいれて各自に配る。もう一人は柔らかい絨毯の上でパソコンと沢山のグラフが書いてある紙の束を広げ、交互に見ている男性。チャーリー・オズエル。

「どうぞ。チャル」

「うん？おおう。ありがとナタル」

軽い感じでチャーリーはナターシャからコーヒーを受け取り、そのまま口に運ぶ。

ナターシャはパソコンの画面を覗き込みながらチャーリーに尋ねる。

「直りそう？ 『あの子』？」

「うーん。最初は苦戦したけど何とかかなりそうかな？ でも、前みたいにエネルギーはバカス力使えないし、前のデータのまま復元するととなると、見劣りしちゃうけどいい？」

『あの子』とは、『銀の福音』のことで、現在は永久凍結されるはずだった。しかし、イギリス、チャーリーの抗議をIS管理委員会に申し入れなんとか凍結をま逃れたのだ。

ちなみに福音の開放を推薦したのはマイクである。

そして、現在は装甲が全て破壊されたので、なんと修復しようとチャーリーががんばっているのである。

ナターシャの方を振り返り、顔色を伺うような感じで質問するチャーリー。

ナターシャはそんな彼の顔を見て、呆れ半分、その反応が面白い表情になる。

「まったく。ダメよ。チャル。あなたのそういう癖は直しときなさいといったでしょ」

「あつ、ごめん」

ぺこりと親にしかられたときの子供のように、頭を下げる。

よろしいとナターシャは言いながら腰に手を当て満足そうに頷く。

「おい！ ナタル！ 何時になったら管理の行き届いてねえ、屑工S管理委員長は呼び出して置いて、来てねえじゃねえか」

コーヒを飲みながらナターシャ達の方に振り向き、たずねるイリス。どうやら休日のバカンスから呼び戻されて、相当ご不満のようだ。

「落ち着け。イーリ。確かに休日を失うのは残念だけど、それもこれもすべてアメリカ国民のためを思つてやればなんてことも無いだろ」

「だけどよ！ チャル！ せつかく一年ぶりの休暇だぜ。しかも3人同時の！ それをあの措置をろくにとらない温室ぬくぬくのIS学園の馬鹿どもの不始末を私たちで考えるなんて、ぶっちゃけ、やってらんねえよ！ そういうことは更識に任せとけよ」

ソファの上で盛大に寝っころがり、腹を出し、駄々っ子のようにパタパタと足と手をせわしなく動かすイリス。大人の女性が子供のように駄々を捏ねる光景はなんともシニールである。

ちなみにコーヒは律儀に近くのゴテゴテと装飾のついたテーブルに置いてからこのような格好になっています。

「イーリ。もう少し、大人になれ。そんなんだからテレビに向かつておかしな持論を言うんだ。お前のも、結構暴論だぞ？」

チャーリーは先ほどのテレビの内容とイーリスの喋っていた事を聞いていたのか、イーリスの先ほどの発言に突っ込む。

「だつてよ」

じたばとまた、両の手をばたばたさせ、目をバツテンにし拗ねながら本音の部分を語る。

「あれだぜ。 あいつら碌なこともしないで私たちに文句を言うだけ言つて、紛争のときは、『じゃあ、ガンバ』だぜ。 現場にいる私たちの気持ちも分からずにいちいち知った被った口をすんなくて奴だぜ」

ナターシャがコーヒを口に近づけながら、話しに割って入る。

「でも、IS学園の生徒がたるんでいる、ていうのは否定できないけれどね」

「ああ、それには同意。 だから軍に入ったIS学園の生徒どもは私が受け持つんだけどな」

静かに残りの2人はイーリスの言葉を聞き、こう思った。

（まあ、あなたくお前>の訓練のやり方はやりすぎ感が拭えないけどねくな>）

ちなみに、イーリスの訓練の仕方は『おい！ ションベン臭い小娘ども！ てめえらは屑だ！ 何か勘違いしているようだ、この国じゃあ、てめえらみたいな屑！なんて幾らでもいるんだ！ でも、安心しろ！ 私は優しいからな、そんな使えない屑！でも、捨て駒

並みにはこの私じきじきに教えてやるよ!』という、なんとも前世紀的な仕込みで、ここを通った者たちは平均2、1個のトラウマを持ってアメリカの正式な軍人になるのである。

ナターシャは呆れた溜息をつく。

「あなたの育てた軍人たちって、大体私の方に送られてくるんだけど、みんな口を揃えてこう言うは『ここは天国か!?』って」

「そうそう。 ケビンさん(58歳現役)だって、『あの嬢ちゃん、一体どこを目指してるんだ?』ってばやいてたよ」

「古株の軍人にまで厳しいって言わせるなんて、お前本当に大丈夫か」

チャーリーは怪訝な顔でイーリスの方を見る。

ナターシャも同じような顔になりイーリスを見つめる。

「なんだかイーリス的にもすごく不利になってきた空気になり、え!?! なんかやばくね!?! と冷や汗をかき始める。 なんとかこの空気を返るために周りを必死に見渡す。

ふと、あるものを発見する。 いや、これはものと言っているのかは定かではないが、

「なあ?」

「なんだ? イーリ」

「お前等の後ろにいる奴ってダレだ? ていうかケビンの話した奴ってダレだ?」

「なに訳の分からないこと言ってるんだ? イーリ? そんなのいるわけ・・・」

とかなんとか言いながらチャーリーは後ろを振り返ると

「やつぽー」



なんかいたよ。

「・・・なにやってるんですか。マイク委員長」

「いや、遅れて悪いね。完全に二日酔いでさ。というわけで、さっそく会議始めちゃうよ」

からからと笑いながらいつの間にか部屋に入ってきたマイク。

「おい、ゴリア。マイクてめえ今更スカズカやって来てな、にが、始めちゃうよ」だ。てめえはそんなにミンチがお好みなのかい？え？」

「こ、怖いよ。イーリスさん。とりあえず落ち着こうよ。ね？」

「ね？ じゃねよ！ つうか私たちを本国まで呼び戻したんだからよほどのことなんだろうな？」

イーリスはマイクの服を掴みながら睨み付ける。

マイクは若干、あ、やばいと気づき始め、くだらんと冷や汗をかき始める。

「落ち着きなさい。イーリ。それよりも外でこそと盗撮しているテロリストをどうにかしたほうが良いわ」

イーリスはマイクをソファに向けて叩きつけるように投げ、即ISを部分展開して窓を鋭利で長大な爪で斬り壊す。

窓は強化ガラスで通常のロケットミサイルでも破壊不可能なように作られている。それをイーリスは飴細工を壊す感覚でグチャグチャにする。

ナターシャは隠していたレディースと呼ばれる小型の拳銃を取り出し、いつでも撃てるように安全バーを外す。

チャーリーはパソコンを畳み、袖に隠し持っていたスプリングフイールドXDと呼ばれる半自動拳銃を手に取り、マイクの盾に成るよう即座に移動。

イーリスは手をグー、パーと動かし、倒せたかどうか確認。肉がつぶれた感触が手から伝わる。

イーリスはゆっくりと引き戻し、手の平を見つめる。手にはびっしりと血と豆腐のような白いものが付着していた。

皿のようにすわったような目でじっと観察する。

「目玉、だな」

静かにこの残骸が何だったのかを回りに伝える。  
同時にイーリスとチャーリーは向き合い目線で会話。

『キャハハハハ　お久々　第一位　とついでにその仲間たち　元気してた？？』

どこからか、音源不明の声が『待合室』を包み込む。

「Eyes…」

イーリスは本気で鬱陶しそうに相手のコードネームを呟く。

『あれ？？　元気ないな　さあ、お姉さんと一緒にもっと大きな声で　Eyes！！って呼んでみよう』  
「てめえ、一体何が目的で監視しに来た？」

イーリスはEyesの言葉を無視して怪訝そうに尋ねる。

『ちえ！　つまんないの　まあ　お姉さんは優しいから』

「！？ みんなの疑問に答えちゃおう」 理由は○ 第一位の監視です それと、いつ君の周りにいるねずみどもの弱点が分かればいいな（笑） なんて」 思ってます！！ きゃ！！ 言っちゃった」 でも、ばれちゃった以上」 私は帰ります」 じゃね？！！！！！！」

次の瞬間、回線コードが切られたような音が響いた後、声は聞こえなくなった。

「逃げられたか…」

イーリスは先ほどまで、Eyesがどこにいるか調べていたが、先ほどの音とともに見当が付かなくなってしまった。

「…で、どうする？ マイク。このままだって、またあいつに聞かれるぞ」

「…そうだね。今日は止めとくよ」

イーリスはISを解除しマイクに尋ねる。  
マイクもそれに同意し尻餅をつきながら首を傾ける。  
ナターシャとチャーリーも武器をしまう。

「…今日は厄日だな」

なんのけなしにチャーリーはぼやく。

彼らのことはまた後に話そう…

## 第47話 悪夢

白い空を背に一機のISが、ゆっくりと歩む。

そのものが歩くところは全て最初からその場に無かったかのように、白い灰になり消滅していく。

迎え撃つかのように458機のISが各々武器を構え、一機のISを睨み付けるように見る。

気にせず、歩むが、何を思ったのか唐突に、止まる。

同時に、458機のうちの一機が攻撃の合図を出す。

一斉に襲い掛かる。

白いISは手に握られていた刀を振る。

たったそれだけで半分のISはコアを残し、白い灰になり消滅する。

残りのISも地面に着地し、白いISに襲い掛かる。

けれども、残りのISもすべて切り伏せられ、白い灰になる。

白いISの周りには458個のコアが白い灰を被りながら虚しく残る。

しばらく、手を宙ぶらりんにして、白い灰とISのコアをなんのけなしに見る。

ふと、何かを見つけたのか白いISは真っ直ぐと前を鋭く、宿敵を見つけたように睨み付ける。その目は愛と、悲しみと憎悪と、優しさと苦しさ、うれしさに満ちていた。

視線の先には紅い炎を背に紅いISがゆっくりと歩いてくる。

紅いISが歩くところからは木が生え、炎が荒々しく美しく燃え上がり、建物を創造し、水が湧き出て、風は和やかに激しく吹き、闇が禍々しく生まれ、光が神々しく輝く。

紅いISは白いISを見つけると突然立ち止まり、悠然と両手を

広げる。

白いISにはそれがどういふことか理解できず、小さく首を傾げる。

物が小さく揺れ動く音が白いISの鼓膜に侵入。

徐々にその音は増えていき、やがて一つの生き物のうねり声のよ  
うに音が重なる。

白いISは後ろに振り向く。

其処には大量のESコアが浮かび上がりうとしてゆらゆらと動いていた。

一気にESのコアは飛び上がり、意思を持つように紅いESに勢い良く飛び込んでいく。

白いISは刀を構える。瞬間、白いISから白色の渦々しいエネ  
ルギーが奔流する。

紅いISは全てのコアを取り込んだ後、紅い黄金のエネルギーが滑らかに奔流する。

お互い相手をじっ、と見る。

やがて、白いISは視線を外し、ゆっくりと顔を上げる。そして、のそりと口を大きく開き、

[illegible]

叫ぶ。その叫び声は悲しそうで虚無感があり、憎悪に満ちていた。

白いISは叫び終わると、すぐさま両の足に力を加え、突撃の準備。

紅いISも白いISへと突撃の準備。

お互いが静止し動かなくなる。全く動かず、そこにいたら時が止まっているような錯覚に陥ってしまうだろう。それほどの沈黙。

ただ、ただ動かず静かになる。

だが、沈黙は長くは続かなかった。

お互い叫び、力いっぱい跳び、真っ直ぐと相手の方に突撃する  
ぶつかる寸前、二体は自らの刀を思いっきり振る。

刀が衝突する。

瞬間、紅と白と黄金と黒の光が爆音を響かせながら、全てを飲み  
込まんばかりの速度で周りを包み込む。

そして…

「は！」

目を見開き、がばりと布団をどかしすぐさま起き上がる。

「はぁ、はぁ、はぁ」

息も乱れ、体中が気持ち悪い感覚に陥る。

ふと、自分の手を見ると、べちよりと大量の脂汗がこびりついて  
いた。

あたりを見渡すとまだ薄暗く、隣のルームメイトも未だにぐっす  
り眠っている。

ちらりと、ベッドとベッドの間にある植え込み型のデジタル時計  
に目をやる。日付は九月三日、時刻は丁度、六時を指していた。  
息を整えるために深い息を吐く。

「…夢、か…」

何気なく天井を見る。やがて、自嘲的な笑みを浮かべ、ベッドか

らルームメイトを起こさないように静かに降りる。

（当然といえば当然だな。私は一夏を裏切らない。ましてや、一夏があんなことをするはずが無い）

そう思いながら、タオルを取り、シャワー室に向かう。

だけれども、

あれは本当に夢だったのか。そう思えてしまうほどの先ほどの夢はなんだか、現実味がありすぎた。まるで、予知夢のような気がしてならない。

それに、

（何故、私は夢の二機を一夏と私だと思ってしまったのだ？）

分からず、首を傾げる。

とにかく汗を洗い流すためにシャワールームへと入っていった。

第48話 青い髪の女／Who is this? (前書き)

久々の更新。楽しみにしてくれていた皆さん。遅れて申し訳ございませんでした。

ぶっちゃけ本編はあまり進まないです。



第48話 青い髪の子／Who is this？

「でやああああっ！！」

鈴が巨大な青竜刀を一夏に向けて振り下ろす。

「甘い！」

一夏は青竜刀を雪片式型で受け止め、鋭く重い音を第三アリーナで響き。

互いの刃が交わり、火花が散る。

一夏と鈴は二学期最初の訓練、1、2組合同の実戦訓練を行っていた。

「それはこっちの台詞！」

鈴は足元に2、3発衝撃砲を放ち、突風を起こし砂埃が舞う。クラス長同士、というわけで始まったこの模擬戦はお互い、ほぼ互角の戦いを繰り広げていた。

「ちっ！」

一夏は驚き、舌打ち。すぐに、二、三步下がってハイパーセンサーで鈴の居場所を突き止めようとする。

ハイパーセンサーが反応し、軽快な機械音。一夏は咄嗟に顔を上げる。

「引つかかたわね！」

鈴は太陽を背に衝撃砲を撃つ。一夏は太陽を直視し反応が遅れ、衝撃砲は一夏の右手に直撃。手が強烈な痺れに襲われ、雪片式型を落としかける。

本来なら鈴が衝撃砲を撃っているところで荷電粒子砲を使用し、攻撃を遮る事ができたかもしれない。しかし、一夏は決して、『雪羅』を使わない。いや、使えないのだ。

一夏は『雪羅』を手に入れて以来何度も起動させようとしたが、荷電粒子砲以外全く持つて起動不能。それに加えて、一夏は遠距離系の武器だけが何故か全弾、外れる。

それに加えて、二次移行で白式はよりいつそうエネルギーを喰う機体になってしまい、下手に瞬時加速などのエネルギー系の武器が使いにくくなっている。

正し、簪にエネルギー調整をやってもらい45%エネルギーが増幅した。

「ぐっ！」

一夏は歯を食いしばり、雪片式型を強く握り締める。鈴は追撃のために青竜刀を振り下ろす。青竜刀が風を切る。一夏は『雪羅』を装備した手で青竜刀を受け止める。

激しい衝突音。

汗が頬を伝う。腕も小さく震える。一夏は鈴の顔をチラリと見る。鈴も腕が震えル野が伝わり、限界に近い顔になっている。

そろそろ、潮時か。一夏はそう思い、叫ぶ。

「ここで決める！」

一夏は獲物を狩る獣の笑みを浮かべて、決着をつける宣言。 零

落白夜　の発動を準備。

「こっちこそ！」

鈴も宣言に答え衝撃砲を最大出力で放つ準備と青竜刀を振り上げる。

零落白夜　発動

白式から報告。一夏と雪片式型は金色のオーラを纏う。一夏は鈴に向けて刀を大きく振り下ろす。

同時、鈴は衝撃砲を至近距離で撃つ。衝撃砲と刀の刀身が接触。鏡が割れる音。衝撃砲はあつという間に消え去った。刀はそのまま振り下ろされる。

勝った！と一夏は確信をし、小さくほくそえむ。

確かに、このまま一夏は刀を振るえば一夏の勝ちだ。しかし、それでも、

鈴は笑う。

一瞬、一夏はその笑顔に疑問を持ち、力を緩める。それを鈴は見逃さず、分離した二本の青竜刀を左右同時に振る。

「……！」

一夏は驚き齒軋りし、鞘を強く握り締める。互いの刀が衝突し火花を散らす。一夏はそのまま刀を滑らせ、青竜刀をギリギリで避ける。

「しまっ……！」

鈴は刀が青竜刀を潜り抜けたことで、零落白夜　が発動してい

る一夏の前では裸同然の状態だ。鈴は驚愕し、明かな焦りを見せる。刀は鈴を上から下に切り裂く。警告音とともに甲龍は膝から崩れ落ちる。決着はついた。

「はあゝ後少しだったのに…」

しょんぼりと箸で狐色に焼け肉汁が染み込んでいるタマネギを掴みながら肩を落とす鈴。そのツインテールも垂れ下がっているように見える。

「いやいや、なに言ってるんだよ鈴。正直あそこまでやれるとは思っても見なかったぞ」

「ムツ…なによその言い方。私だってね、夏休みの間ずっと特訓してたんだから」

前半戦は鈴が辛うじて勝利したが、後半戦は一夏が勝利し引き分けて模擬戦は幕を閉じた。その後片づけを終えいつもの面々…いや、今のは語弊があり、今は一人追加されている。

「…鳳さんは衝撃砲に頼りすぎ。もう少しバリエーションを考えなきゃダメ」

追加されたのは簪だ。夏休みの終盤に織斑家で一夏が紹介し色々な意味で全員と意気投合して仲良くなった。

簪は親子丼をスプーンで掬いつつ先ほどの模擬戦を旧式の黒いノートパソコン（ASUS K53TA）でさりと目を通す。それだけで選手の機体、戦術を何処が悪く、何処が良いかを瞬時に見極

めることができるのはこの学園でも一握りぐらいだろう。  
ふいにパソコンが閉じられる。

「…あつ」

簪は突然パソコンが閉じられたことに驚き少し悲しそうな呟きを漏らす。簪はパソコンを閉めた相手をほんの少しきつめに睨み付ける。

しかし、睨み付けられた相手は全く動じず、金色の髪の少女は立ち上がり、腰に手を当てながら簪を諭し始める。

「こらっ！ ダメだよ更識さん。食事中に他のことをやるのは、行儀が悪いよ」

「…むっ」

シャルロットは子供が悪いことをしたのを叱る親のような、優しくも厳しい口調で簪に言い聞かせる。

そのことが正論なので言い返すことができず、子供のように膨れっ面になる簪。

簪はしぶしぶシャルロットの言い分を聞き入れ、箸を取り食事を再開する。

「ゆみゆ。チャルニヨットニヨゆみゆちよおりだ」

もぐもぐとシマリスが食べ物をお口の中に含んでいるように頬を膨らませ、口を動かすラウラ。

その頭の上には赤い目で黒色の子兎が、にんじんの切れ端をこりこりと食べながらちょこんと乗っている。

ちなみに先ほどは「うむ。シャルロットの言うとおりだ」と喋りたかったらしい。

シャルロットは呆れつつも叱る、と言うよりも漫才の突っ込みの様に指摘する。

「ラウラも口に物を入れながら喋らない。それにその子も食堂に連れてこないの」

口の中に含んでいた食べ物の効果音が出るほどの勢いで喉に通して、ラウラは首を傾げてシャルロットに質問する。

頭に乗っていた黒兎は銀髪の水に押されて少し横に傾く。

黒兎はラウラに合わせるように首を傾げて、その無垢な瞳でシャルロットを意味もなく真っ直ぐと見つめる。

「何故だ。シャルはいい子だ。今現在でも大人しく私の頭の上で人参を食べている」

「兎とか動物を食堂に連れて来ることが間違ってるんだけど…後、その子の名前はシャルは止めてって言うてるよね」

シャルロットは溜息をつきながら自分の席にうなだれて、深く座り込む。

セシリアはその光景をビーフシチューを音を立てず、テーブルマナーを守りながら啜る。湯気が立ち、良い焼き目が付いたパンをその繊細な指で摘み取りながら、ぼそりと呟く。

「…でも、シャルロットさんはなんともなくお母さんばいですわ」

「……確かに」……

一夏、鈴、ラウラ、簪は食事の手を止め、一斉に同意の頷きを行う。

黒兎 シャルも目の錯覚か、頷いているように見えなくも無かった。

「酷いよ！ 皆！」

ちよつと涙目になりながら、シャルロットは椅子が倒れるのをお構いなしに握り拳を小さく作りながら勢い良く立ち上がる。

「ふうんだ。いーもーん。どうせ私は老けてますよ」

ぶくと頬を膨らませてかわいく拗ねるシャルロット。

あ、ちよつと苛めすぎたかな。と一夏は感じ、微笑を浮かべながら弁明する。

「いや、そうじゃないんだ。シャルならいいお嫁さんになるかなんて」

シャルロットはほんの少し間の抜けた表情になったが、直ぐにとても嬉しそうな笑みを浮かべる。

「私がいいお嫁さん…へへ」

一人妄想の世界へトリップ。シャルロットは乙女心を総動員し『自分と一夏の結婚生活』を想像し始める。

ぶつちやけ、これは乙女心というよりも唯の妄想である。

『あつ、これはしばらく動かない』、全員が内心で吐露し、シャルロットが妄想から帰ってこないことを悟る。

何故ならシャルロットは頬を朱に染め、身体をくねくね動かせ涎を出し、『えへへへ』とかばやいている。

不意に、一夏はシャルロットから視線を外し、鈴から一つ席を空けたところで箸を手を持ったまま動かない筈に目を向ける。

筈は動かないというよりも、心、此処に在らずといった感じで彫

刻みたく一切動かない。彫刻といっても美しい女武士の方だけどなとか、まこつとどうでもいいことを考えながら箒の法に若干身体を動かして話しかける。

「おい、箒。どうしたんだよ。いつまでもそうしてると飯冷めちゃうぜ」

肩を大きく揺らす。一夏に呼び掛けられたことで箒は箸をテーブルに置き一夏のほうに視線を向ける。その箸をおく動作は何処か覚えぬ、というよりも落ち着きがなくそわそわしている印象が一夏の頭によぎる。

「ど、どうしたんだ、一夏？ 突然呼び掛けるなんて、驚いてしまったぞ」

しどろもどろにポニーテールを揺らして一夏に返事をする箒。

箒の目には若干焦りというか、何かを悟られたくないような雰囲気だ。

やはり、可笑しい。

一夏は直感した。正直に言つて一夏は箒の様子が今日一日可笑しいのは一目瞭然だった。今日の模擬戦のときも青く夏の名残を残す空を何も考えていないようで考えているふうに空を眺めていた。

更に、今度、九月二十八日に行われる『キャノンボール・ファスト』の練習のときでも上の空で何か考え込んでいてそれどころじゃないといったふうだった。

「いや、今日一日中、お前上の空だったからな。大丈夫なつて」

一夏は笑っているが内心は箒が心配で気が気でない。

最近、箒は可笑しいのだ。いや、可笑しいのは紅椿を手に入れて



からだ。

少し前まで一夏が話しかけただけで驚き、顔を真っ赤にして『うあう』言っていた筈なのに、最近はそのようなことは殆ど起こらない。それどころか、箒はときどき自分たちとは全く違う『人』と覚えてしまうほど達観した面影をちらほら見せる。

一夏はそのことが心配：いや、もしかしたら心配ではなく恐怖しているのかもしれない。

急激に変わっていく自分のもう傷つけない幼馴染に。

箒はしばらく一夏の顔を伺い、そして食器を片付け始める。

一夏は小さく『あつ』と声を漏らす。

どうやら箒はちりと一夏のほうに目を向ける。

一夏は箒の目を見る。

その目は一夏の迷いや恐怖、心配を見抜いたらしい。

「大丈夫だ。問題ない。安心しろ。私はお前を決して怖がらせないし、裏切らない。だから、信じる」

凜となるような佇まいで箒は食器を返しに早歩きで歩く。

一夏はしばらく箒の後姿をじっと見ていた。ポニーテールは下に項垂れ、一夏にとってはポニーテールが今の箒の心境を表しているように感じた。

「はあ…」

午後の部の実習が終わり、男専用のロッカールーム いや、実際には一夏専用のロッカールームで一夏は少々落ち込み、ISスーツのまま白式のパラメーターを確認していた。

落ち込んでいる理由は自分が箒に一瞬でも恐怖と畏怖の念を持つ

てしまったことだ。

結局、午後の実習は目を合わせたりはしたものの一言も話せなかった。

それでも、一夏は白式のパラメーターを手を休めずに弄繰り回す。

（後で謝らないとな）

思いつき、自分の胸元部分でぎゅと握り拳を作る。  
そうして、

「ところで、後ろでこそこそ何をやってるんだ」

背後の人間に声を掛ける。

一夏は睨むように眼球を先っぽまで動かして何者かの中指を確認する。中指は眼球を先の方まで動かしたせいかわやけて見える。

一夏は逃がすまいと後ろに振り向く。  
しかし、

「あり？」

後ろには誰も居らず、拳も風を切っただけで終わる。

気のせい……？と一夏は一瞬間抜けな顔になりながら思案していると、不意に自らの視界が完全に遮断される。

「なっ……！？」

驚き、思考も追いつかずに、若干頭の中がごちゃごちゃになった錯覚に陥る。

「だーれだ？」

背後から声が聞こえる。女性の声だ。それも悪戯が成功した子供のような無邪気さがあるが、その奥底には目に見えないまるで霧の如く本心を悟らせないスタンス。かと、思いきや純粹にこの行為を楽しんで笑みを浮かべている声色。

一夏はもう一度思考を整理し動かす。

目を塞いでいるのは恐らく指だ。さらさらしており、それでいて冷たい。その感触は心地良さを感じさせるのだろが、ぶっちゃけ今は関係無い。だから、後ろからなかなか立派なメロンを押し付けているのも関係ない。

煩惱と格闘しつつ、気配を探る。

最初に分かったのは相手が達人：それも一夏の知っている達人たちの領域に入る、『ホントウのバケモノ』。

氷のように冷たく、水のようにしなやか、今迄一夏が体験してきた『戦士（又は剣士）』、というよりも『暗殺者<sup>アサシン</sup>』を連想させる雰囲気だ。

一夏は顔つきを変え、思考を動かす。

（さて、どうする？ 相手は少なくとも千冬姉や師匠級の実力者。戦うだけでも帰って危険。背後を取られているから余計、状況は絶望。『はい、時間切れ。直ぐに思考を切り替えて状況を打破するのは良いけど、時間かかりすぎ。後、私にはあなたが今考えてる。後ろに足払いしてダッシュで逃走。なんて効かないからね』  
「ツツツ！？」

一瞬で自分が考えていた事を打破され、狼狽する。そうこうしている内に、手は離され、視界は戻る。

一夏は後ろを振り向く。

背後にはリボンの色が黄色。つまり、彼女は二年生。を付け、IS学園の制服を着た女性が困惑する一夏を楽しそうな笑顔で見つめ、

口元を扇子で隠している青色の髪の女性が。

（簪そつくりの髪の人だな。てか、いつの間に扇子をとり出したんだ？）

つか、今迄考えてなかったけど、なんでアナタサマは平然と男子ロッカーにいるんですか！？と、心の中で突っ込む。

「えっち」

「なんでその局面で言うんだ！？」

戦々恐々。自分が考えていたことがばれてしまったことを驚く一夏を見て、青い髪の女性はまったくすくすと嬉しそうな笑い声を醸し出す。

不意に青い髪の女性は扇子を壁の方に向ける。

一夏もなんのけなしに扇子が指した先を見ると、そこには時計がある。

時刻は次の授業から一分前を指していた。

キーン、コーン。カーン、コーン。キーン、コーン。カーン、コーン。

授業開始の合図が男子ロッカーに鳴り響く。

「それじゃあね。早くしないと織斑先生に怒られちゃうよ」

楽しそうに笑い、扇子を口元に当てながら男子ロッカーから出て行く青い髪の女性。

とりあえず一夏の遅刻フラグと死亡フラグが立ったことは確かだ。

**第49話 一夏 争奪 宣言 (前書き)**

久々の更新

遅れてすみません。

少しずつ元の早さに戻していきます。

## 第49話 一夏 争奪 宣言

「…遅刻の言い訳は以上か？」

すでに授業開始から十分経過。一夏は冷や汗を全身にくまなく流しながら硬直している。

千冬は自分の胸のあたりで腕を組み、仁王立ちしている。千冬の周りからは圧倒的なオーラが溢れ出ており、周りの生徒達の中には「ヒッ！」という叫び声まで聞こえる。

（や、やべ！ 絶対千冬姉怒ってる！）

周りが千冬のオーラから戦々恐々しているほどの圧倒的なオーラを真正面に受けているのに、冷や汗だけで立っていられるのは、やはり、一夏がそれだけ強い証かもしれない。

「デュノア。『ラピット・スイッチ』の演習しろ。標的は其処の馬鹿でいい」

千冬は一夏を指差してシャルロットに攻撃の指示を出す。

「お、織斑先生…さ、さすがにそれは…」

とかいいつも、すっかりISを部分展開をして手にはマシンガンを持っている。

撃つ気満々だ。

一夏はこの状況を見て絶望的なのを思い知る。

ちなみにまさか本気でISを展開するとは思わなかった千冬も表情に動きがないに見えるが、瞼が上に上がっている。

（あ、やばい。俺死んだ。ていうかシャル。人にISを向けるなんてどうよ...）

まあ、千冬姉が指示したんだけど…と内心どうにもならないこの感情をどうすればいいか弱冠、混乱気味に直立不動になる。

と、そこで白式に『プライベート・チャネル』の通信が入る。

誰だ？と思いつつも一夏は千冬に気づかれないよう、こっそりと『プライベート・チャネル』を開く。

通信相手は…シャルロットだ。

一瞬、一夏は怪訝と疑問の感情が芽生えたが、如何せん、今シャルと自分は『話し合い』が可能だ。

一夏はこの機を逃すわけも無く、直ぐに通信を取る。

『大丈夫だよ。一夏。ちゃんと痛かったらこれで“痛い”って言うてくれれば、止めるからさ』

『本当か！ シャル！ じゃあ頼む！』

『うん！ 任せて！』

一夏は千冬にばれないように通信を切る。

その直後、連続的に銃の発砲音が一組の中で鳴り響き、教室が震える。

……ちなみにシャルロットは一切手加減 　　というか手加減の仕方が分からずに、全力で放ったらしい。

翌日。九月四日。一夏たちは一時間目の授業を潰し、IS学園の中央にある『議論場』と呼ばれる大型の講堂に集められていた。

『議論場』は基本、クラス単位では使わず、年単位でしか使う場所。使用目的は主にISに関しての技術発表、法律の講習などが挙げられる。

簡単に言つと、『大勢の人が集めれる場所。あ、皆が皆席はあるぜ』だという。

補足説明をすると、一年は前。二年は真中。三年は後ろ。

一夏が集めれた理由は今度の学園祭で急な変更があり、それを伝えるために態々集合が掛けられた。大方の生徒も何があつたのかと、様々な憶測を立てながら、喧騒が『議論場』を包み込む。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

メガネを掛け、髪を後ろで三つ編みにした生徒会らしき女性が、マイクを通じて、静かに告げる。

騒がしくしていた生徒たちが水をうつたかのように直ぐに話し声を止め、壇上を凝視する。

「やあ諸君。おはよう」

「!?!」

一夏は生徒会長と呼ばれ、扇子で口元を当てながら教卓の後ろに立っている女性の顔を見て驚愕する。

それもそのはず。何故ならその女性は、昨日男子ロッカー室で出会った人なのだ。

一夏と一瞬、目が合う。

「ふふ」



笑みを浮かべる。それも他人を馬鹿にする笑みや、妖美な笑みでもない。

ただ純粹に笑っている。

女性が浮かべた笑顔を直視してしまった一夏は、頬を赤らめ、ドギマギした風になる。

一夏は今の心境を悟られまいと、女性から視線を逸らし、耳を傾ける。

「さてさて今年は私自身、“本国”に呼ばれていたからね。実質君たち一年に顔を見せるのは始めてね。わたしの名前は更識楯無。あなたたち生徒の長よ。以後、よろしく」

りつこりと笑みを浮かべる楯無。その笑顔は異性問わず魅了するようであちらこちらから『はう…』や『凄い…』などの熱い吐息が聞こえる。中には『結婚してください、お姉さま…!』とか叫んでる人もいる。

けれども一夏としてはその辺りはどうでも良かった。問題は彼女の名字だ。

(更識ってまさか、簪との血縁関係の人?)

一夏が仮説を立てるのも当然だ。例えば、『佐藤』や『田中』などの名前は日本にはごまんといる。けれども『更識』はそうそういない。というか、いるはずもない。ていうかいたらいで、恐ろしい。

一夏が考察している間に生徒会長は、扇子を一旦閉じて、扇子上にかざす。それに従うように空中から近未来的な音を出し、投影ディスプレイが出現する。

今は何も写っていない。

一夏は純粹に何やってんだこの人?と呆れかえる。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ」

一呼吸置く。

「名付けて、『各部對抗織斑一夏爭奪戰』！」

生徒会長、爆弾投下。

同時にディスプレイからは一夏の写真がでかでかと表示される。全員がぽかんと口を開け、思考停止してしまう。

今、この生徒会長はなんて言った？と一夏は啞然としながら考える。一夏としてはこの話は初耳＆未承認だ。それを平然とさも、許可をもらったかのように宣言するのって、おかしくね。

一夏はある意味戦々恐々とし、目の前の生徒会長に常識を問質したいとか、そもそも壇上の人は自分が剣道部に所属しているのを知っているのかとか、もう色々突っ込みたくて身体を震わせる。

そして、周りも震えていた。一夏とは違う意味で。

「え」

誰かが驚きの声を小さく上げた。  
そうして一気に静寂は破られる。

「『『『『『』』』』』』  
ええええええええええ  
〜〜〜〜！！！！  
！！？？？」

圧倒的な声の大きさと量。結果、『議論場』が揺れんばかりの音の波へと変わる。

周りはある程度叫んだら、一斉にバツと一夏に視線を向ける。全

員の目の色が獲物を狩る肉食獣そのものだ。

さすがに一夏も大量の視線&凶暴な目の色に囲まれ、若干、いや大分とたじろく。

「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、其れに対して投票を行って、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。今回は其れがつまらないと思い」

閉じた扇子を猛烈な素早さで一夏を指す生徒会長。

一夏的にはいい迷惑てか迷惑。それに加えて今この生徒会長『つまらない』とか言っちゃいましたよね。呆れと怒りを通り越し、もはや関心の域である。

「織斑一夏を、一位の部活に強制入部させましょう！」

再度、雄たけびが上がり、口々に自分と同じ部員たちとあれやこれやと騒ぎ始める。

「「「「キタ

・（。。）

ッ！」「」「

「

「素晴らしいッッ！！ 非情に素晴らしいッッ！！」

「GJ！」

「こうなったら、やってやる……やあああってやるわー！」

「今日からすぐに準備はじめてやるわよ！ 秋季大会？ ほっとけ、あんなもん！」

しかし、そんな中不平を言う一部の女子が

「ちよつとまって！ 織斑君は私たち剣道部のものよ！」

「「「そうよ！ そうよ！」「」

剣道部の部員だ。というかIS学園では部活を掛け持ちすることが原則的に禁止されている。

にっとう楯無が扇子を広げ、口元に当てながら笑う。まるでその程度のこと予期していたかのように

突然、大きな目の箱を持っているパントムマイムをする。

「それはそれ。これはこれ。あつ、それあつちに置いていて」  
「あつ、はい」

パントムマイムの箱を眼鏡の女性に渡す。  
女性は箱を受け取りあつちに置く。

「「「「うおい!!」」」」

剣道部の女子全員がビシッとつつこむ。

生徒会長は気にせず言葉を続ける。

「まあ、冗談は置いといて、本当のことというと…」

からからと冗談めかした顔で扇子をたたむ。

「生徒会長権限」

「（（（うわあ、このひと職権乱用だよ…」（?）（）（）

げっそりと頂垂れる剣道部女子。

ちなみに生徒会長権限は理事長や千冬などの地下特別区間に入れる教師より下に位置する権限なので、部活問題などの問題なんて一発で曲げれる。さらに、今生徒会長をやっている人はランキング十位以内に入るほどの実力者。そいでもって彼女はロシア代表。

結果、彼女の権限は千冬達と同等、いやそれ以上かもしれない。  
結局剣道部もしぶしぶ承諾。

こうして一夏の意見、何それ美味しいの？ 状態で終わりを告げた。

この後、一夏たちの出し物が、執事&メイド喫茶に決まったりした。

## 第50話 一夏、捕まる

一夏は職員室のドアを背に閉める音を聞きながら、小さく息をつく。

一夏が職員室に来たのは一組の出し物を千冬に知らせに来た。

「…で、何しにきたんですか？ 生徒会長」

「あらあら？ いつの間に気づいてのかな？」

一夏が目の前の人物を見た途端、左足に少しばかり力を入れ、逃走の準備に入る。

一夏は警戒心むき出しで楯無を見つめる。一夏の反応は当然といえば当然である。最近の騒ぎの大半が目の前で睨まれているのに涼しい顔している人だ。

いくら簪の姉かもしれない相手でも若干怒らずにいられない。

「…ドアの前に立ってからです」

しぶしぶといった感じで一夏は答える。楯無はそれだけの返答でも満足したのか「よろしい」と楽しそうに扇子を広げる。楯無は一夏の不機嫌そうな顔など気にせず、楽しそうに笑う。

「ああ、最初の出会いでインパクトないといけないと、忘れないかと思っ」

「あんなにインパクトがあるなら逆に忘れそうですけどね」

「あら、そう？」

一夏は自然な感じで第四アリーナに向けて歩き出す。楯無も自然

にさも当然のように一夏の横を歩き出す。

ちよつと早歩きで楯無を引き剥がそうとする。

楯無も同じ速さで歩く。

また、速度を上げる。

また、同じ速度になる。

また、速度を上げる。

また、同じ速度になる。…… e t c

ついに一夏が全力で走る。

一夏はとにかくこの謎の生徒会長から離れようと全速力で走るとにかく走る。

途中赤い大きな矢印が書かれた白い看板を目にする。

周りの生徒たちはいきなり現れた看板を目にして困惑顔で見つめる。

一夏は生徒たちに当たらないように配慮しながらあえてその方向に従う。

一夏の考えとしてはこうだ。まずあの生徒会長は自分が矢印の罠に気づくするなど承知だろう。というよりも、矢印のままに従う人間なんて早々いない。だからあの人は自分が矢印とは逆方向に行くと踏んでいると予想できる。

そして、行った先には生徒会長がいるに違いない。…理由は無いけれど一夏としてはそのような気がする。

一夏は走る。矢印に従い、右へ、左へ、曲がり角を曲がり、また右へ、そして曲がり角を曲がる。

一夏は突然足を止める。一夏は矢印どおりに進んだ先には、ドアが謎の威圧感を出しながら一夏の前に立っていた。

ドアは周りとは一線外れ、ドアは基本が白で周りには金の装飾が施されており、IS学園特有の近未来的な洋装でなく、中世の貴族の城のようだ。

けれども一夏はそれよりも驚くことがある。

学校の部屋には個々の場所が分かる為にドアの部分に部屋の名前

が書いてある。

で、このドアの名前はというと

「生徒会……」

だ。

（は、嵌められた　　！）

一夏は崩れ落ち、orz状態になる。  
横スライド式のドアが開かれる。

「あら、遅かったわね。ティータイムにしましょ」

中から青い髪の女性がショートケーキを片手に出てくる。もちろん生徒会長更識楯無だ。

一夏は顔を上げて楯無の顔を見る。その顔にはしてやったりと大きく書いてある。

一夏はなんだか反論とかいろいろ抵抗する気が失せたので、とりあえず指摘する。

「……ほっぺたにクリーム付いてますよ」

「あら？ そうなの？ じゃあとって、とって！」

無邪気な子供の笑顔で頬を一夏に近づける。

一夏が手を動かそうとすると

「……舌で」

「やっぱ、取りません！」



ものすごい不穏なことを平然と発言する生徒会長。さらに楯無はくすくすと笑いつつ言葉を続ける。

「えゝそんなにわたしの頼つぺた魅力的じゃない？ あつ、それとも私がそのままディープキスする作戦が割れてるとか！？」

ガガ　んと効果音が出そうな感じで後ろに引く楯無。  
マジで驚くなよ。と心の中でつつこむ一夏。

「とりあえず。諦めて来てくれるかな？　織斑一夏君」

ニコツと笑いながら顔を近づける楯無。そのせいでふわりとした花の匂いが一夏を包み込む。

一夏は楯無の美貌と匂いにドギマギしてしまう。

「とりあえず、中に入ってくれたら嬉しいな」

「は、はい…」

この人には逆らわない方がいいと感じた一夏は楯無にしぶしぶ従うことにした。

### 第3アリーナ

アリーナには一機の蒼いISが浮かんでいた。

ISの周りを囲むように投影ディスプレイの技術を応用したマトが浮かんでいる。

蒼いISの操縦者の名はセシリア・オルコット。セシリアは二m級の大型B-Tライフル『スターライトmk?』を銃特有の音を立てつつ、構える。

セシリアは柔らかい金の髪を揺らして、空を見上げる。そうして、大きく息を吸い込む。

（大丈夫。…大丈夫…わたくしならブルーティアースと通じ合える…）

意識を集中する。イメージは水。水面に落ちる一粒の雫を連想。揺れる水面。

放つ。

『スターライトmk?』は弾丸を撃った反動で若干揺れる。セシリアは先ほどのイメージを頭の中で再現。念じる。

（曲がって…!）

弾丸が僅かに左に曲がる。しかし、それ以上は曲がらず、そのまま斜線を変えず、マトを射る。

セシリアはがっくりと肩を落とす。僅かに曲がったとき、やった！と歓喜はしたが、やはりそう簡単には行かない。それでも当初よりも大分マシにはなっている。

最初、始めたときは全くといっていいほど曲がらなかった。しかし、臨海学校以来、少しずつであるが、確実に弾丸が曲がり始めているのだ。

だからこそ

（もう一度…）

鈴も夏の間に強くなっており、ラウラとシャルロットは元々強い。簪も戦闘にはそれほど参加しないが、後方支援として存分に役立っている。箒も専用機を得て以来強大になっている。恐らく、機体の相性を無視すれば、彼女が自分たちの中で最強だ。

一夏も確実に強くなっている。  
だからこそ

これ以上、足手まといは御免だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4564w/>

---

Is <インフィニット・ストラトス> アナザーストーリー

2011年12月21日16時50分発行